

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(200)

県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書(2)

と か ら あ ま み  
吐噶喇・奄美の遺跡



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(200)

吐噶喇・奄美の遺跡

二〇一九年三月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2019年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

# 序 文

この報告書は文化庁の補助金を受け実施した県内遺跡発掘調査等事業のうち、本県で「河口コレクション整理活用事業」と呼称する事業に伴い、平成29年度から平成30年度にかけて実施した8遺跡の整理作業の記録です。掲載した遺跡は、吐噶喇列島の宝島に所在する浜坂貝塚、奄美群島の奄美大島に所在する宇宿貝塚・朝仁貝塚・嘉徳遺跡、徳之島に所在する面縄貝塚・喜念貝塚、沖永良部島に所在する中甫洞穴・住吉貝塚です。いずれも南島を代表する遺跡であり、縄文時代から弥生時代にかけての標式遺跡も含まれています。

故河口貞徳氏は昭和20年代からの鹿児島県本土はもとより吐噶喇列島及び奄美群島の学術的な調査を行いました。また、長年にわたり鹿児島県考古学会会長や鹿児島県文化財保護審議委員として本県文化財の保護に尽力されました。河口氏が発掘・収集された資料は、御遺族の厚意により鹿児島県立埋蔵文化財センターへ一括寄贈されました。このうち学史的に著名で全国的に知られている遺跡に関する資料は、早急に整理を行い全国に情報発信して活用を図る必要が求められています。そのため、当センターでは寄贈された資料の整理作業を計画的に進めながら、学術的な再評価を行っております。

今回報告する宝島及び奄美群島の8遺跡については、これまで資料化されていない遺物を中心に掲載しました。本報告書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

最後になりますが、本報告書の刊行に当たり御協力をいただきました関係市町村教育委員会・各機関に厚くお礼を申し上げます。

平成31年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 堂 込 秀 人

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	とから あまみの いせき							
書名	吐噶喇・奄美の遺跡							
副書名	県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書(2)							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第200集							
編集者名	倉元良文 松山初音 宗岡克英							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分土野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月	西暦2019年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
はまきのついでか 浜坂貝塚	かごしまけん 鹿児島県 かごしまぐんとしまわら 鹿児島郡十島村 たんのしあはまなか 宝島浜坂	46304	304-21	29° 9' 15"	129° 12' 21"	1961.8.8～ 1961.8.13?	20	学術調査
うしむく(24)20 宇宿貝塚	かごしまけん 鹿児島県 あまみしかかりちゆう 奄美市笠利町 うしむく(24)20 宇宿字大道	46222	222-124	28° 27' 12"	129° 42' 49"	第1次 1954.5.20 第2次 1955.7.20～ 1995.8.10	4 54	#
あきにかい(1)30 朝仁貝塚	かごしまけん 鹿児島県 あまみしかかりちゆう 奄美市名瀬 おおあき(1)30 大字朝仁字前間	46222	222-17	28° 23' 55"	129° 28' 54"	1969.12.6～ 1969.12.11	28	記録保存 調査
かどく(1)せき 嘉徳遺跡	かごしまけんおおしまぐん 鹿児島県大島郡 せとつちらちゆうかどく 瀬戸内町嘉徳	46525	525-1	28° 11' 31"	129° 24' 6"	1974.8.3～ 1974.8.16	594	#
きねん(1)130 喜念貝塚	かごしまけんおおしまぐん 鹿児島県大島郡 いせんちゆうきねん 伊仙町喜念	46532	532-2	27° 41' 6"	128° 59' 46"	1956.8.24	1.25	学術調査
おもな(1)10(1)30 面縄貝塚	かごしまけんおおしまぐん 鹿児島県大島郡 いせんちゆうおもな 伊仙町面縄 かばく 兼久バル	46532	第2貝塚 532-29 第4貝塚 532-31	27° 40' 25"	128° 57' 56"	第2貝塚 1956.8.8～ 1956.8.13 第4貝塚 1956.8.13～ 1956.8.24	53 不明	#
あまよし(1)130 住吉貝塚	かごしまけんおおしまぐん 鹿児島県大島郡 あまよし(1)30 知名町住吉 あまかばく 字兼久	46534	534-1	27° 21' 32"	128° 31' 42"	1957.8.12～ 1957.8.22	14	#
なかな(1)130 中甫洞穴	かごしまけんおおしまぐん 鹿児島県大島郡 あまよし(1)30 知名町久志検 あまかばく 字水窪	64534	534-10	27° 22' 41"	128° 35' 52"	第1次 1982.10.5～ 1982.10.15 第2次 1983.9.1～ 1983.9.14 第3次 1984.8.1～ 1984.8.20	10 66 161	#

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浜坂貝塚	貝塚	縄文時代後期 ～ 弥生時代中期	炉跡	嘉徳Ⅱ式土器・黒川式土器 仲原式土器・入来式土器 石斧・骨角器・貝加工品	
宇宿貝塚	貝塚	縄文時代中期 ～ 縄文時代晩期	住居跡	面縄前庭式土器・面縄東洞式土器 面縄西洞式土器・嘉徳Ⅰ式土器 嘉徳Ⅱ式土器・宇宿上層式土器 喜念Ⅰ式土器・市来式土器 一湊式土器石斧・骨角器	
朝仁貝塚	貝塚	中世～近世	ピット	白磁・青磁・カムイヤキ陶器等	
嘉徳遺跡	散布地	縄文時代中期 ～ 縄文時代晩期	石組み遺構9基 炉跡1基 礎群4基 焼土19箇所 ピット2基	面縄前庭式土器・面縄東洞式土器 面縄西洞式土器・嘉徳Ⅰ式土器 嘉徳Ⅱ式土器・喜念Ⅰ式土器 宇宿上層式土器・市来式土器等 石錘・垂飾・石斧・石のみ 砥石・敲石・磨石・石皿	
喜念貝塚	貝塚	縄文時代晩期 ～ 弥生時代中期		喜念Ⅰ式土器 宇宿上層式a土器 宇宿上層式b土器 山ノ口式土器	試掘調査
面縄貝塚	貝塚	縄文時代中期 ～ 古代		面縄前庭式土器・嘉徳Ⅰ式土器 嘉徳Ⅱ式土器・兼久式土器石斧 砥石・貝匙・貝輪・貝製垂飾品 骨製垂飾品	
住吉貝塚	貝塚	縄文時代後期 ～ 弥生時代初頭	住居跡	宇宿上層式土器 石斧・石皿 骨角器 貝匙・貝斧・貝輪	
中甫洞穴		縄文時代早期 ～ 古墳時代	土坑墓	爪形文土器・連点波状文土器 条痕文土器・スセン當式土器 兼久式土器 人骨・磨石・敲石・石斧 貝製品・牙製品	

遺跡の概要

**浜坂貝塚**

南島文化圏と本土文化圏の接点を解明することを目的に行った発掘調査である。縄文時代後期から弥生時代中期の土器が出土している。赤褐色の無文土器が主体をなす遺跡で、縄文時代晩期の土器が伴うと考えられる。また、多くのウミガメの骨が出土しているが、甲羅が少ないという特徴がある。

**宇宿貝塚**

宇宿上層式土器の標式遺跡である。1954（昭和29）・1955（昭和30）年の調査をとおして、複数の土器の型式を層位的に確認した。また、市来式土器の出土を確認したことで、南島と本土の土器の関係性を比較できるようになり、南島の土器の編年の一つの基準をもたらした。1986（昭和61）年10月に国指定の史跡となった。

**朝仁貝塚**

名瀬市（現奄美市）で初めて土木工事の着手前に実施された発掘調査である。貝塚は3か所で確認され、白磁・青磁等が確認された。調査の結果、遺跡の流出のため、二次堆積した貝塚であることが判明した。

**嘉徳遺跡**

嘉徳Ⅰ式土器、嘉徳Ⅱ式土器の標式遺跡である。砂丘遺跡のため、層位による遺物の新旧関係は困難であったが、同じ遺構内から市来式土器と面縄東洞式土器が出土したことから、南島と本土の土器の時代的關係が明らかになった。また、祭祀を想起させる二重口縁の携帯用土器を確認した。石組みを伴う土坑が検出された。

**喜念貝塚**

喜念Ⅰ式土器の標式遺跡である。1956（昭和31）年、試掘調査を行い、宇宿上層式土器、喜念Ⅰ式土器、山ノ口式土器、器面を研磨した土器、条痕のある土器、細い沈線を粗く施した土器が出土している。

**面縄貝塚**

面縄前庭式・面縄東洞式・面縄西洞式土器の標式遺跡である。1956（昭和31）年、面縄第二貝塚・面縄第四貝塚・兼久貝塚（後に面縄第三貝塚）の調査を行った。その結果、宇宿下層式土器が細分されることを明確にした。2017（平成29）年2月に国指定の史跡となった。

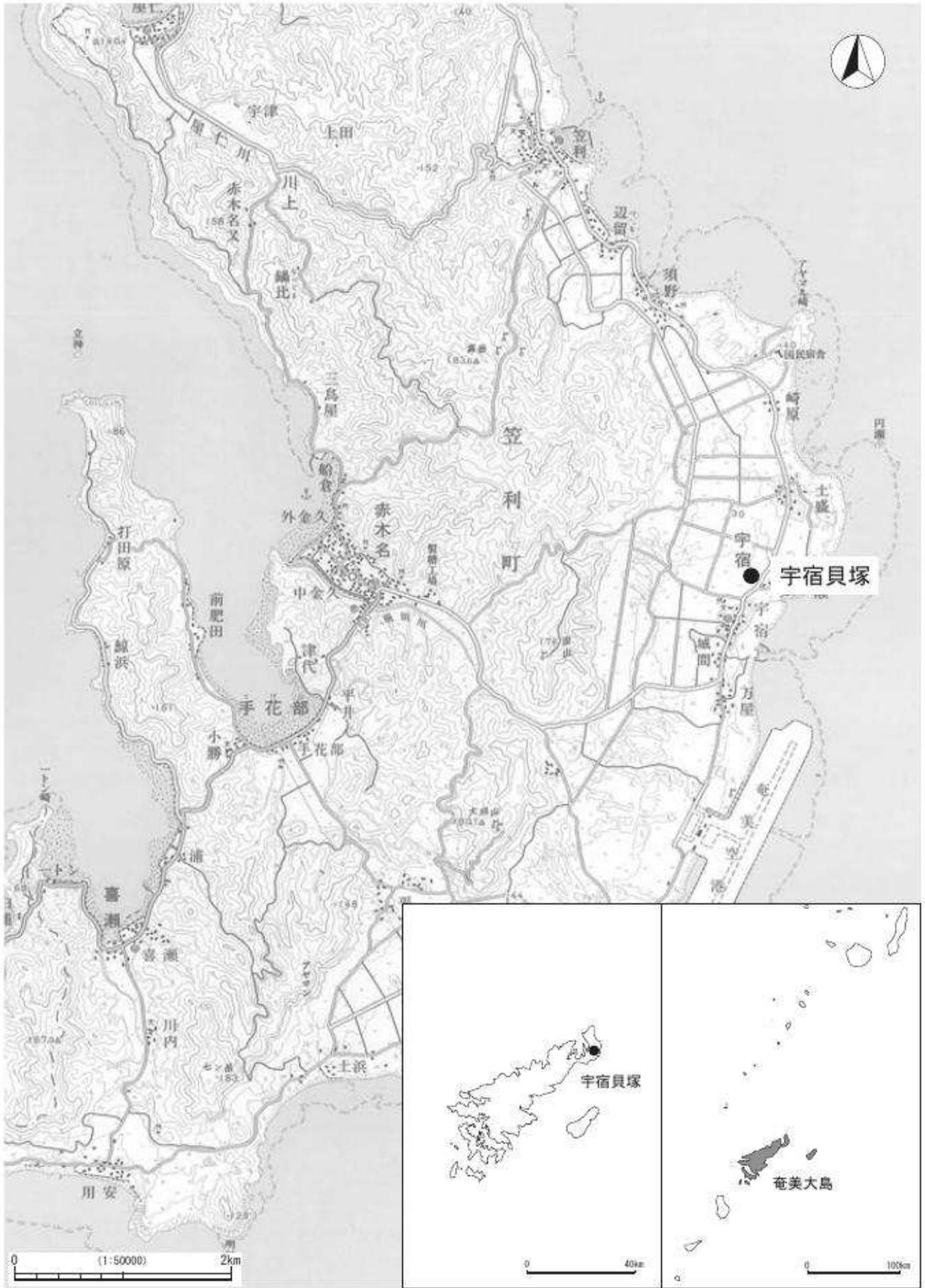
**住吉貝塚**

本貝塚は、知名町内で考古学的研究対象となった初めての遺跡である。1957（昭和32）年の発掘調査で、自然の珊瑚礁の岩石や石組みを壁面に利用した住居跡1基が検出され、宇宿上層式・宇宿下層式土器や石斧、貝・骨製品等が出土した。住居跡は1955（昭和30）年に調査が行われた宇宿貝塚の住居跡と同様に宇宿上層期のもと考えられ、当該期における一般的な住居形態であったことが指摘されている。2007（平成19）年7月に国史跡に指定された。

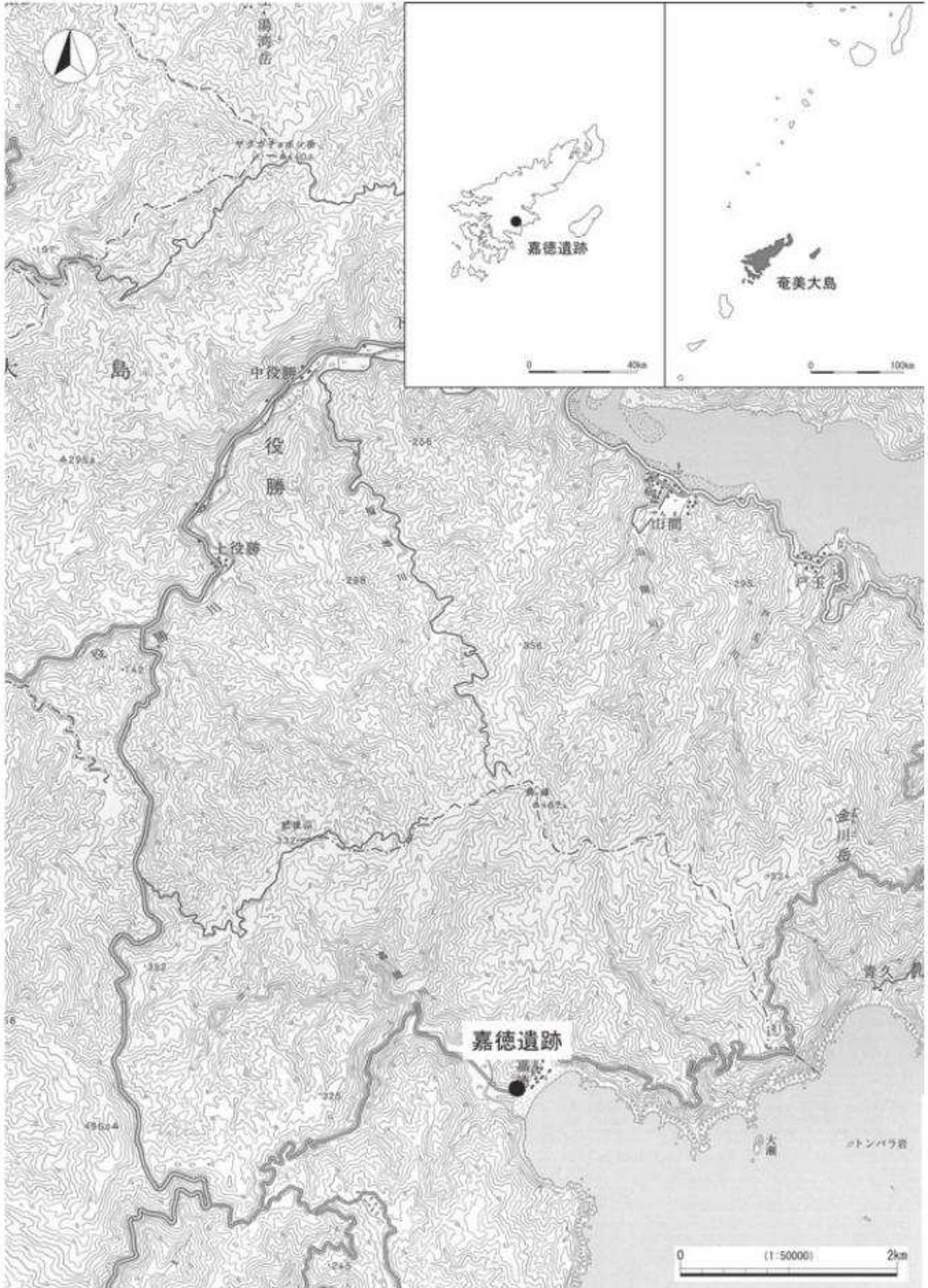
**中甫洞穴**

1982（昭和57）年から3年に亘って発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代早期・前期の新型式の土器、縄文時代の土坑及び人骨、南九州の弥生時代後期の土器等を確認し、沖永良部島の歴史が縄文時代前半に遡ることや南九州との関わりが明らかになった。2018（平成30）年4月、県史跡に指定された。

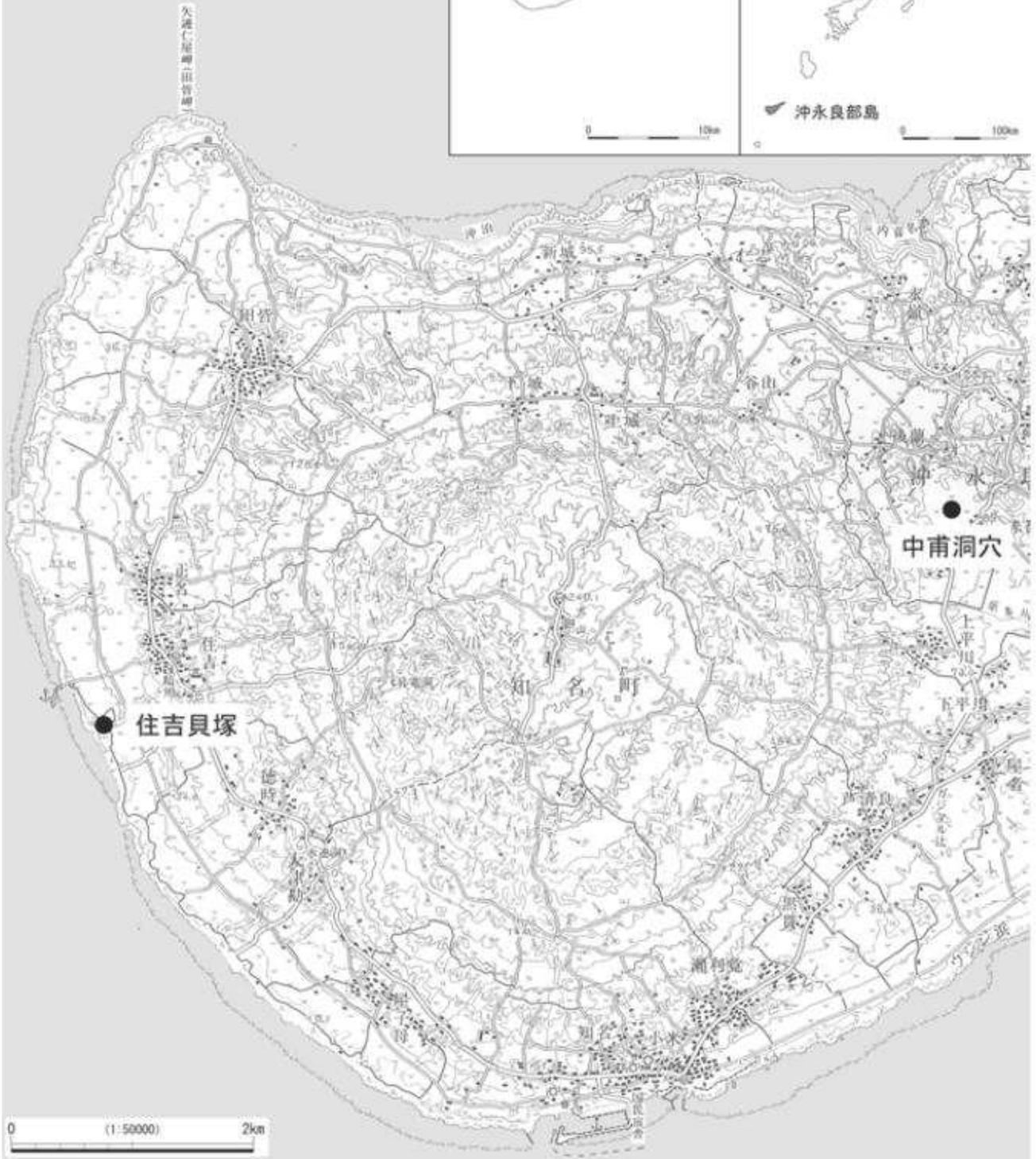
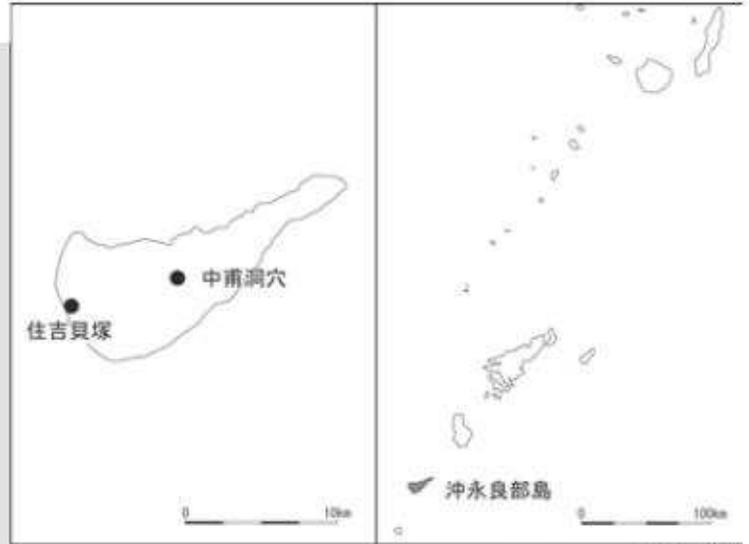












# 例 言

- 1 本書は鹿児島県が文化庁の補助を受け、本県で「河  
口コレクション整理活用事業」と呼称する事業に伴う  
発掘調査報告書である。
- 2 本書に掲載する遺跡及び所在地は、以下のとおりで  
ある。  
浜坂貝塚（鹿児島郡十島村宝島浜坂）  
宇宿貝塚（奄美市笠利町宇宿）  
朝仁貝塚（奄美市名瀬大字朝仁）  
嘉徳遺跡（大島郡瀬戸内町嘉徳）  
喜念貝塚（大島郡伊仙町喜念）  
面縄貝塚（大島郡伊仙町面縄）  
中甫洞穴（大島郡知名町久志検）  
住吉貝塚（大島郡知名町住吉）
- 3 報告書作成（整理作業）は鹿児島県教育委員会が調  
査主体者となり、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以  
下、全章にわたって「埋文センター」という。）が担  
当し実施した。
- 4 本書での敬称は、河口貞徳氏も含め省略する。
- 5 8遺跡の発掘調査は河口貞徳が発掘調査責任者とな  
り、1954（昭和29）年から1984（昭和59）年の間に実  
施した。各遺跡毎の調査期間については、第1章第2  
表に示した。
- 6 整理作業において、新たな遺物注記は行っていない。
- 7 遺物番号・挿図番号・表番号は、本書で報告する遺  
跡毎に付した。
- 8 遺物の観察表の法量において括弧内に記載してある  
数値は、残存長である。
- 9 挿図の縮尺は、挿図毎もしくは遺物毎に示した。
- 10 出土遺物の実測トレースは、各章の担当が埋文セン  
ターの作業員の協力を得て行った。
- 11 出土遺物の写真撮影は、吉岡康弘・西園勝彦が行っ  
た。
- 12 本書の編集は、倉元良文・松山初音が行った。
- 13 本書の執筆分担は、次のとおりである。  
第1章……………倉元  
第2章 第1節～第4節・第6節……倉元  
第5節……………宮崎大和  
第3章～第5章……………倉元  
第6章……………松山  
第7章～第9章……………宗岡
- 14 本書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋  
文センターで保管し、展示活用を図る予定である。
- 15 本書掲載の遺物の縮尺は、以下のとおりである。た  
だし、石器・垂飾品については縮尺が異なる場合もあ

るので、各図に提示してある縮尺を参照していただき  
たい。

- 土 器 : 1/3
- 石 器 : 1/3
- 貝製品等 : 1/3
- 骨角器等 : 1/3

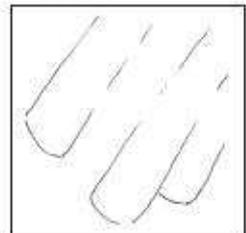
- 16 土器の色調は、日本標準土色帖に拠る。
- 17 遺物の実測図で用いた表現は以下のとおりである。

## 【土器等】

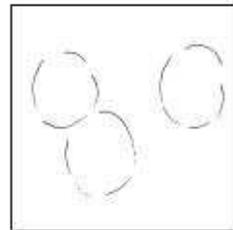
ナデ



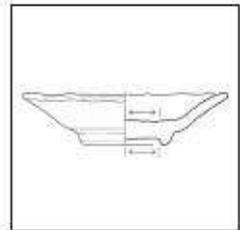
工具ナデ



指おさえ

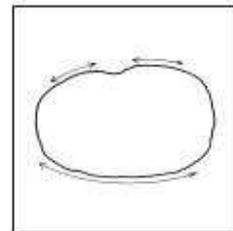


施釉のない部分



## 【石器・貝製品等】

磨面



石灰分で覆われている場所



# 本文目次

序文		
報告書抄録		
遺跡位置図		
例言		
目次		
第I章 事業の経緯と経過	1	
第1節 事業の経緯と内容	1	
第2節 整理・報告書作成業務	1	
第3節 再整理の方法及び報告書の構成	2	
第II章 浜坂貝塚	4	
第1節 調査の経過	4	
第2節 再整理の方法	4	
第3節 遺跡の位置と環境	5	
第4節 追加資料	5	
第5節 脊椎動物遺体	13	
第6節 遺跡等の再検討と再評価	18	
第III章 朝仁貝塚	28	
第1節 調査の経過	28	
第2節 再整理の方法	28	
第3節 遺跡の位置と環境	28	
第4節 追加資料	28	
第5節 再評価	32	
第IV章 嘉徳遺跡	34	
第1節 調査の経過	34	
第2節 再整理の方法	34	
第3節 遺跡の位置と環境	34	
第4節 追加資料	34	
第5節 研究史	49	
第6節 再評価	50	
第V章 喜念貝塚	59	
第1節 調査の経過	59	
第2節 再整理の方法	59	
第3節 遺跡の位置と環境	59	
第4節 追加資料	60	
第5節 再評価	66	
第VI章 中雨洞穴	71	
第1節 調査の経過	71	
第2節 再整理の方法	73	
第3節 遺跡の位置と環境	73	
第4節 追加資料	73	
第5節 再評価	93	
第VII章 宇宿貝塚	99	
第1節 調査の経過	99	
第2節 再整理の方法	99	
第3節 遺跡の位置と環境	99	
第4節 宇宿上層式土器に関する研究史	99	
第VIII章 面縄貝塚	101	
第1節 調査の経過	101	
第2節 再整理の方法	101	
第3節 遺跡の位置と環境	101	
第4節 面縄第二貝塚と面縄第四貝塚の土器福年	102	
第IX章 住吉貝塚	103	
第1節 調査の経過	103	
第2節 再整理の方法	103	
第3節 遺跡の位置と環境	103	
第4節 追加資料	103	
第5節 住吉貝塚の竪穴住居跡について	106	

# 挿図目次

第II章 浜坂貝塚		
第1図 浜坂貝塚出土遺物(1)	6	
第2図 浜坂貝塚出土遺物(2)	8	
第3図 浜坂貝塚出土遺物(3)	9	
第4図 浜坂貝塚出土遺物(4)	10	
第5図 浜坂貝塚出土遺物(5)	11	
第6図 浜坂貝塚出土脊椎動物遺体の組成	14	
第7図 浜坂貝塚出土魚類遺体の組成	14	
第III章 朝仁貝塚		
第1図 朝仁貝塚出土遺物(1)	29	
第2図 朝仁貝塚出土遺物(2)	30	
第IV章 嘉徳遺跡		
第1図 嘉徳遺跡出土遺物(1)	36	
第2図 嘉徳遺跡出土遺物(2)	38	
第3図 嘉徳遺跡出土遺物(3)	39	
第4図 嘉徳遺跡出土遺物(4)	41	
第5図 嘉徳遺跡出土遺物(5)	42	
第6図 嘉徳遺跡出土遺物(6)	43	
第7図 嘉徳遺跡出土遺物(7)	45	
第8図 嘉徳遺跡出土遺物(8)	46	
第V章 喜念貝塚		
第1図 喜念貝塚出土遺物(1)	62	
第2図 喜念貝塚出土遺物(2)	63	
第3図 宇宿貝塚出土の喜念I式土器	64	
第VI章 中雨洞穴		
第1図 中雨洞穴図 トレンチ配置図	72	
第2図 中雨洞穴遺跡周辺地形図	72	
第3図 中雨洞穴土壇墓・人骨	74	
第4図 中雨洞穴出土土器(1)	75	
第5図 中雨洞穴出土土器(2)	77	
第6図 中雨洞穴出土土器(3)	78	
第7図 中雨洞穴出土土器(4)・採集土器	80	
第8図 中雨洞穴出土土器(5)	81	
第9図 中雨洞穴出土土器(1)	84	
第10図 中雨洞穴出土土器(2)	85	
第11図 中雨洞穴出土土器(3)	86	
第12図 中雨洞穴出土土器(4)	87	
第13図 中雨洞穴出土土器・牙製品	88	
第14図 中雨洞穴遺物出土状況	89	
第IX章 住吉貝塚		
第1図 住吉貝塚出土土器	104	
第2図 住吉貝塚出土土器・貝製品・骨製品・牙製品	105	

## 表 目 次

第 I 章			
第 1 表	整理事業状況	2	
第 2 表	遺跡等調査歴	3	
第 II 章			
第 1 表	浜坂貝塚出土土器観察表	12	
第 2 表	浜坂貝塚出土石器観察表	13	
第 3 表	浜坂貝塚出土土製加工品等観察表	13	
第 4 表	浜坂貝塚資料に含まれる 脊椎動物遺体の同定結果 (1)	15	
第 5 表	浜坂貝塚資料に含まれる 脊椎動物遺体の同定結果 (2)	16	
第 6 表	浜坂貝塚資料に含まれる 脊椎動物遺体の同定結果 (3)	17	
第 7 表	浜坂貝塚資料に含まれる 脊椎動物遺体の同定結果 (4)	18	
第 III 章			
第 1 表	朝仁貝塚出土遺物観察表	31	
第 IV 章			
第 1 表	嘉徳遺跡遺構一覧	35	
第 2 表	嘉徳遺跡出土土器観察表 (1)	47	
第 3 表	嘉徳遺跡出土土器観察表 (2)	48	
第 4 表	嘉徳遺跡出土土器観察表 (3)	49	
第 5 表	嘉徳遺跡出土石器観察表	49	
第 V 章			
第 1 表	荷札の表記と遺物内容	60	
第 2 表	喜念貝塚出土土器観察表 (1)	65	
第 3 表	喜念貝塚出土土器観察表 (2)	66	
第 4 表	宇宿貝塚出土の喜念 I 式土器観察表	66	
第 5 表	喜念貝塚出土骨製品観察表	66	
第 6 表	掲載遺物の出土層	67	
第 VI 章			
第 1 表	中甫洞穴出土土器観察表 (1)	90	
第 2 表	中甫洞穴出土土器観察表 (2)	91	
第 3 表	中甫洞穴出土石器観察表 (1)	92	
第 4 表	中甫洞穴出土石器観察表 (2)	92	
第 5 表	中甫洞穴出土土製品観察表	92	
第 6 表	中甫洞穴出土土製品・牙製品観察表	93	
第 IX 章			
第 1 表	住吉貝塚出土土器観察表	106	
第 2 表	住吉貝塚出土石器観察表	106	
第 3 表	住吉貝塚出土土製品・骨製品・牙製品観察表	106	

## 資 料 目 次

第 II 章			
資料 1	発掘日誌 1	21	
資料 2	発掘日誌 2	22	
資料 3	発掘日誌 3	23	
資料 4	発掘日誌 4	24	
資料 5	発掘日誌 5	25	
資料 6	発掘日誌 6・文化圏概念図	26	
資料 7	遺構実測図	27	
第 III 章			
資料	朝仁地区・朝仁貝塚位置図	33	
第 IV 章			
資料 1	遺物分布図	53	
資料 2	出土土器実測図 1	54	
資料 3	出土土器実測図 2	55	
資料 4	出土土器実測図 3	56	
資料 5	出土土器実測図 4	57	
資料 6	出土土器トレース図	58	
第 V 章			
資料 1	発掘日誌等 1	69	
資料 2	発掘日誌等 2	70	
第 VI 章			
資料 1	報告書作成基礎資料 1	95	
資料 2	報告書作成基礎資料 2	96	
資料 3	発掘調査協力要請書	97	
資料 4	発掘日誌	98	
第 VII 章			
資料	面縄第四貝塚遺物出土状況	102	

## 図 版 目 次

図版 1	浜坂貝塚調査記録	107	
図版 2	浜坂貝塚出土遺物 (1)	108	
図版 3	浜坂貝塚出土遺物 (2)	109	
図版 4	浜坂貝塚出土遺物 (3)	110	
図版 5	浜坂貝塚出土遺物 (4)	111	
図版 6	朝仁貝塚調査記録	112	
図版 7	朝仁貝塚出土遺物 (1)	113	
図版 8	朝仁貝塚出土遺物 (2)	114	
図版 9	嘉徳遺跡調査記録	115	
図版 10	嘉徳遺跡出土遺物 (1)	116	
図版 11	嘉徳遺跡出土遺物 (2)	117	
図版 12	嘉徳遺跡出土遺物 (3)	118	
図版 13	嘉徳遺跡出土遺物 (4)	119	
図版 14	嘉徳遺跡出土遺物 (5)	120	
図版 15	嘉徳遺跡出土遺物 (6)	121	
図版 16	喜念貝塚出土遺物 (1)	122	
図版 17	喜念貝塚出土遺物 (2)	123	
図版 18	喜念貝塚出土遺物 (3)	124	
図版 19	中甫洞穴調査記録	125	
図版 20	中甫洞穴出土遺物 (1)	126	
図版 21	中甫洞穴出土遺物 (2)	127	
図版 22	中甫洞穴出土遺物 (3)	128	
図版 23	中甫洞穴出土遺物 (4)	129	
図版 24	中甫洞穴出土遺物 (5)	130	
図版 25	中甫洞穴出土遺物 (6)	131	
図版 26	宇宿貝塚調査記録	132	
図版 27	住吉貝塚出土遺物 (1)	133	
図版 28	住吉貝塚出土遺物 (2)	134	

# 第 I 章 事業の経緯と経過

## 第 1 節 事業の経緯と内容

故河口貞徳は、昭和 46 年から平成 23 年まで長年にわたり鹿児島県考古学会の会長として本県考古学の発展に寄与してきた。さらに、昭和 28 年から平成 7 年まで本県文化財保護審議会委員として本県文化財の保護に尽力された人物である。

河口は、本県の埋蔵文化財保護行政が整備される以前の昭和 20 年代から県内に所在する遺跡の学術的な発掘調査を精力的に行ってきた。その資料は、本県の歴史を語る上で欠かせない貴重なものである。同氏の逝去に伴い所有していた遺物等の資料（以下、「河口コレクション」という。）を埋文センターが寄付受納することとなった。

河口コレクションが埋文センターに寄贈されると決定された後、埋文センターが行った作業内容及び実施年度は第 1 表に示すとおりである。まず、平成 24 年度から 26 年度にかけて緊急雇用創出事業臨時特例基金事業を活用し、河口コレクションとして寄贈された資料の受け入れ、収蔵された資料の整理や基礎データの作成、展示・公開を実施した。さらに、平成 29 年度以降に報告書刊行が予定がされている遺跡の整理作業の一部も併行して行った。

平成 27 年度は国庫補助事業「県内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」を活用し、河口コレクションの台帳整理や関連文献の収集のほか、「かごしま遺跡フォーラム 2015」を実施し、河口コレクションの一部成果を展示した。平成 28 年度から国庫補助事業「県内遺跡事前調査等事業」の中で「河口コレクション整理作業事業」と称して台帳等の基礎整理作業に加え、総合的な整理・報告がなされていない重要遺跡について将来的にわたって保存・活用を図るために、順次今日的視点で整理作業を行っている。平成 29 年度は、昭和 30 年代に発掘調査が行われた「山ノ口遺跡」の報告書を刊行した。

平成 30 年度は河口コレクションの中から浜坂貝塚（鹿児島郡十島村）・宇宿貝塚（奄美市）・朝仁貝塚（奄美市）・嘉徳遺跡（大島郡瀬戸内町）・喜念貝塚（大島郡伊仙町）・面縄貝塚（大島郡伊仙町）・住吉貝塚（大島郡知名町）・中甫洞穴（大島郡知名町）の 8 遺跡の整理作業を行い、「吐噏喇・奄美の遺跡」という名称で報告書を刊行する。

## 第 2 節 整理・報告書作成業務

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、主に平成 30 年 4 月から平成 31 年 3 月にかけて埋文センターで行った。平成 29 年度は「山ノ口遺跡」の報告書作成

業と共に、本年度刊行する「吐噏喇・奄美の遺跡」に関する基礎整理作業として寄贈された資料と既報告分の資料との照合作業等を行った。平成 30 年度は遺物の再実測・トレース・未報告の現場図面のトレースや図版のレイアウト等の編集作業と同時に平成 31 年度に刊行予定の遺跡の基礎整理作業を実施した。

整理・報告書作成業務に関する調査体制は、以下のとおりである。

### 平成 29 年度調査体制（整理作業）

事業主体	鹿児島県		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
	所 長	堂込 秀人	
調査企画	次長兼調査課長	大久保浩二	
	総務課長	高田 浩	
	調査課第二調査係長	宗岡 克英	
調査担当	文化財主事	今村 結記	
事務担当	主 事	丸野 将輝	
調査指導	国立大学法人鹿児島大学 埋蔵文化財調査センター 特任助教	寒川 朋枝	
	鹿児島国際大学 教 授	中園 聡	
	鹿児島考古学会 会 長	本田 道輝	
	会 員	長野 眞一	
	文化庁文化財部記念物課 文化財調査官	水ノ江和同	

### 平成 30 年度調査体制（整理作業）

事業主体	鹿児島県		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
	所 長	堂込 秀人	
調査企画	次長兼調査課長	大久保浩二	
	総務課長	高田 浩	
	調査課第二調査係長	宗岡 克英	
調査担当	文化財主事	倉元 良文	
	文化財研究員	松山 初音	
事務担当	主 査	新徳 秀貴	
調査指導	鹿児島県考古学会 会 長	本田 道輝	
	国立大学法人鹿児島大学 埋蔵文化財調査センター		

助 教 新里 貴之  
文化庁文化財部記念物課  
技 官 森先 一貴  
報告書作成指導委員会 平成30年11月20日  
大久保次長他 7名  
報告書作成検討委員会 平成30年12月20日  
堂込所長他 6名

各遺跡の出土遺物の抽出にあたっては、注記や遺物カード（荷札）の確認をしながら既報告の遺物実測図や掲載写真との照合、現場図面・写真との照合等を行った。遺物の実測等は埋文センターが管理している河口コレクションのみでなく、関係機関所蔵の出土品も必要に応じて対象とした。なお、遺物への注記は、時間的な制約のため行わず整理作業を行った。

次に、各遺跡の性格に関する研究史や出土遺物の研究史について概観し、各遺跡の現代的評価と特徴について述べる。図版は再撮影した遺物写真や当時の発掘調査の状況や雰囲気伝える未報告の現場写真等を抽出して掲載する。

なお、河口の業績や調査歴等をまとめた「河口コレクションの概要」の詳細については、昨年度刊行した『山ノ口遺跡』2018 埋文センターに詳しいので参照頂きたい。本報告書では河口が関わった奄美大島（宝島を含む）関係の発掘調査を取り扱うことから、関連する調査歴を抽出し、第2表に示す。

### 第3節 再整理の方法及び報告書の構成

本報告書では浜坂貝塚ほか7遺跡について再報告を行うが、その包括的な再整理の方法及び報告書の構成に関して説明する。

まずは、本報告書で取り扱う遺跡毎に、現場図面等の発掘調査記録や発掘調査日誌等の所在確認と関係する報告書との内容確認、出土遺物の内容と報告書等で資料化されているか否かの確認を行った。その後、未報告の発掘調査記録や遺物の掲載や資料化を検討し、必要に応じて既報告の遺物も含めて掲載することとした。

第1表 整理作業状況

種別	作業内容等	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	備 考	
書籍資料の受入作業	内容の確認と分類及び埋文センターへの搬入								終了（H24年12月寄贈。その後、数回に分けて搬入作業実施）	
	内容ごとの収蔵・保管									
考古（調査）資料	遺物	水洗								脆弱な遺物が若干残る
		注記・接合・復元								
		実測図作成								
		写真撮影								
	図面類	発掘調査記録（現場図面等）の点検・修復								基礎作業終了
		発掘調査日誌類（調査の基礎情報）の整理								
	写真	クリーニング・修復								写真のデジタル化作業中
		遺跡ごとのファイリング								
		公開用写真のデータベース化								
		フィルム写真のデジタル化								
	書籍	分類・選別								
		河口文庫（重要書籍）設置								図書館に「河口文庫」コーナー設置
		考古関係論文（抜刷）資料の整理								
地形図類	分類・修復・リスト作成								寄贈地形図類の整理ほぼ終了	
発掘調査報告（原稿）作成									平成29年度から報告書刊行 山ノ口遺跡 本報告書	
公開活用	展示公開（調文の森企画展・外部への貸出等）								講演会・シンポ等の開催も含む	
	重要遺物のレプリカ作成								重要遺物の保護	
事業名等	緊急雇用：埋蔵文化財活用整理等事業									
	緊急雇用：重要遺物等選択・公開事業									
	緊急雇用：重要遺跡調査整理事業									
	国庫補助：県内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業									
	国庫補助：県内遺跡事前調査等事業									

第2表 遺跡等調査歴（吐噶喇・奄美関係）

調査年月	遺跡名	現市町村名	掲載報告書	備考
1954年 (S29) 5～6月	宇宿貝塚 宇宿小学校校庭遺跡 湾小学校内貝塚 与路砂丘遺跡 面縄第一貝塚 面縄第二貝塚 面縄小学校校庭遺跡 兼久貝塚 喜念貝塚 畦布ひぞ遺跡 茶花遺跡 古里遺跡	奄美市 喜界町 瀬戸内町 伊仙町 和泊町 与論町	「南島先史時代」 『南方産業科学研究所報告』 第1巻 第2号 1956 鹿児島大学南方産業科学研究所	奄美大島学術調査団として調査を実施  兼久貝塚 ：現「面縄第三貝塚」
1955年 (S30) 7～8月	宇宿貝塚	奄美市	「奄美大島の先史時代」 『奄美 自然と文化』1959 九学会連合奄美大島共同調査委員会	九学会連合奄美大島共同調査委員会として調査を実施
1956年 (S31) 8月	面縄第二貝塚 面縄第四貝塚 兼久貝塚 喜念貝塚 本川貝塚 喜念原始墓	伊仙町	「奄美大島の先史時代」 『奄美 自然と文化』1959 九学会連合奄美大島共同調査委員会	九学会連合奄美大島共同調査委員会として調査を実施
1957年 (S32) 8月	荒木農道遺跡 荒木小学校遺跡 湾天神貝塚 厳島神社貝塚 七戸桶遺跡 小積原遺跡 畦布遺跡 屋小母遺跡 住吉貝塚 朝戸遺跡 友屋遺跡 立長ハキビナ海岸	喜界町 和泊町 知名町 与論町	「奄美大島の先史時代」 『奄美 自然と文化』1959 九学会連合奄美大島共同調査委員会	九学会連合奄美大島共同調査委員会として調査を実施  住吉貝塚 発掘調査 8月12日～22日 (11日間) 立長ハキビナ海岸 ：遺跡認定には至らず
1961年 (S36) 8月	浜坂貝塚	十島村	「宝島浜坂貝塚の調査概要」 『埼玉大学紀要』第11巻 1962 埼玉大学	発掘調査 8月8日～13日 (6日間)
1969年 (S44) 12月	朝仁貝塚	奄美市	「朝仁貝塚調査報告書」 『鹿児島考古』第7号 1973 鹿児島県考古学会	発掘調査 12月6日～11日 (6日間)
1974年 (S49) 1月	嘉徳遺跡 皆津遺跡	瀬戸内町	「奄美における土器文化の編年について」 『鹿児島考古』第9号 1974 鹿児島県考古学会	調査期間 1月22日～25日 瀬戸内町の依頼で調査
1974年 (S49) 8月	嘉徳遺跡	瀬戸内町	「嘉徳遺跡」 『鹿児島考古』第10号 1974 鹿児島県考古学会	発掘調査 8月3日～16日 (14日間)
1977年 (S52) 8月	サウチ遺跡	奄美市	「サウチ遺跡」1978 笠利町教育委員会	発掘調査 8月3日～22日 (20日間)
1978年 (S53) 8月	宇宿貝塚	奄美市	「宇宿貝塚」 『笠利町文化財調査報告書』1979 笠利町教育委員会	発掘調査 8月3日～23日 (21日間)
1982年 (S57) 10月	中甫洞穴	知名町	「中甫洞穴」 『鹿児島考古』第17号 1983 鹿児島県考古学会	発掘調査 10月5日～15日 (11日間)
1983年 (S58) 9月	中甫洞穴	知名町	「中甫洞穴」 『知名町埋蔵文化財発掘調査報告書』1984 知名町教育委員会	発掘調査 9月1日～14日 (14日間)
1984年 (S59) 8月	中甫洞穴	知名町	「中甫洞穴」 『知名町埋蔵文化財発掘調査報告書2』1985 知名町教育委員会	発掘調査 8月1日～20日 (20日間)

## 第Ⅱ章 浜坂貝塚

### 第1節 調査の経過

1961（昭和36）年に実施した発掘調査の経過等の概要を河口の野帳から転記する。

8月 6日	午後6時鹿児島発（十島丸）
8月 7日	口之島停泊 ・ ・ ・ ・ 宝島発掘の土器を被見 計画を変更して宝島を掘ることにする。
8月 8日	悪石島停泊 小宝島停泊、上陸 午後3時宝島停泊 上陸
8月 9日～13日	発掘
8月14日～18日	休 祭
8月19日	トレンチを埋め、同時に西南側Ⅰ・Ⅱ 区を少し調査す。

以上のことから、発掘調査は当初計画を変更して、急遽宝島で実施されたようである。また、野帳の別の記述からは、当初臥蛇島で調査を実施する計画であったようにも伺える。発掘調査成果を記載した「宝島浜坂貝塚の調査概要」<sup>24</sup>（以下、「浜坂調査概要」という。）によると1961（昭和36）年8月5日に鹿児島を出航、7日夕刻宝島に上陸、8日に調査を開始し、13日まで調査を行ったとの記載がある。しかし、上記の河口の記した野帳では発掘調査開始日が1日ずれた9日であり、調査終了日も異なる。8月14日～18日の間は旧暦の島の祭りであり、この祭りの様子もイラスト入りで野帳に記録していることから、野帳の期日が正しいと考えられる。さらに、河口の記した発掘日誌でも調査開始は9日となっている。浜坂調査概要には、何らかの理由で調査期間をずらして記載したと思われる。なお、河口に記した発掘日誌は、資料1～7に転載した。資料6にある略図は南島文化圏と本土文化圏の範囲や接点を示した概念図で、発掘日誌の中の1ページにあった。

また、「浜坂調査概要」の「2 発掘日記」にある「鹿児島大学農学部教授林田重幸」は1952（昭和27）年、宝島において日本在来種であるトカラ馬を確認した人物である。河口の発掘調査の直前に、宝島浜坂貝塚の試掘を行った記録が野帳に残る。

発掘調査は「トカラ馬の碑」を起点とし、東西方向に2×10mのトレンチを設定し、調査区域を西からⅠ～Ⅴ区に区画して進めた。地層は6つに分層され、第1層は攪乱層、第2層と第3層が1つの文化層、第4層が貝層で第2の文化層、第5層と第6層が第3の文化層とした。第6層の下が基盤層となり、深い所で地表から120cm、

浅い所で65cmを測る。なお、後に河口は文化層を上層（第2～4層）と下層（第5～6層）に分けている。

調査の結果、第6層から礫を並べた炉跡を囲むようなピットと大きな石が3個配置された遺構が検出された。「浜坂調査概要」では住居址を想定している。出土した遺物は地表からの深度毎に20cm単位で一括して取り上げている。例えば、Ⅲ区で地表から50cmの位置で出土した遺物には「Ⅲ3」の注記がある。土器は第1類、第2類とその他の土器の3つに分類され、その内20点の実測図が「浜坂調査概要」に掲載されている。石斧と貝器・骨角器、自然遺物は文章だけでの紹介であった。

### 第2節 再整理の方法

「浜坂調査概要」によると発掘調査において幅60cm長さ70cmの範囲で珊瑚礁で囲んだ炉を検出し、さらに炉を囲むようにピットが検出されている。これらの状況から石囲いの炉をもった住居址が想定されている。しかし、実測図等の掲載がないことから、当時の調査記録を確認することから始めた。また、個々の遺物については、注記してあるものは少なく、袋に入った遺物と一緒に出土区と地表からの深さを記入した荷札が添えてあるものがほとんどであった。さらに、出土位置に関する情報が全くないものや解説不明な記号がついたものもあった。このことから、個々の遺物に新たに注記することは行わず、今回の整理作業を行う前の状態で保管できるように留意しながら整理作業を進めた。

「浜坂調査概要」には20点の浜坂貝塚出土の土器が掲載されているが、掲載遺物番号がない。また、前述のとおり遺物に注記もないものもあることから、掲載遺物を特定できない。そこで、「浜坂調査概要」に掲載された土器を推定し、再実測・掲載することとした。さらに、「浜坂調査概要」で記述のみで紹介されている遺物、これまで紹介されていない遺物も実測し、掲載することとした。

土器の分類については「浜坂調査概要」に従うが、その表記に統一性がないため、内容を違えない範囲で統一を図った。また、「浜坂調査概要」に紹介されていない土器が、「サモト遺跡」（住用村教育委員会 1993）、「鹿児島県下の弥生土器」（鹿児島県考古学会 1992）、「鹿児島県下の縄文時代晩期遺跡」（鹿児島県考古学会 1988）と「先史・古代の鹿児島 資料編」（鹿児島県教育委員会 2005）に掲載されているが、これらの土器についても必要に応じて再掲載した。

一括で保管されていた獣骨・魚骨等については今回初めて分類を行い、その結果を掲載する。

なお、「宝島浜坂貝塚」という遺跡名は、現在鹿児島県教育委員会の示す遺跡分布地図に従い、書名以外は「浜坂貝塚」という名称を使用する。

### 第3節 遺跡の位置と環境

浜坂貝塚は、鹿児島郡十島村宝島に所在する。十島村は、種子島・屋久島と奄美大島の間の約160kmにわたって12の島が連なる吐噶喇列島を村域とする。12の島のうち7島が有人島である。口之島から悪石島までの5島は火山特有の地形であり、周囲は断崖絶壁に覆われ起伏が激しく平坦地が少ない地形である。これに対して小宝島・宝島は珊瑚礁が隆起した島であり、山も低く比較的平坦地も多く見られる。

宝島は有人島としては吐噶喇列島の南端に位置し、鹿児島市からは約330km離れた海上にある。島の平面形は三角形を呈する。山地は北西から南東にかけて稜線が伸び、標高291mのイマキラ岳を中心に200m前後の山が連なる。山の稜線が海と接する北西と南東の海岸は30～40mの切り立った崖となるが、それ以外は珊瑚礁が発達した平坦面となる。島の周囲13.77km、面積7.07km<sup>2</sup>を測り、2018（平成30）年3月末時点では68世帯131人の島民が生活を営んでいる。

浜坂貝塚は、標高約20mの海岸段丘上に立地する。宝島集落の北、前籠港からイギリス坂を上った道路脇に建てられた「トカラ馬の碑」の隣接地が調査地点であるが、現在では記念碑はなく、その調査地点を特定できない状況である。なお、発掘地点と考えられる当時の写真は図版1に掲載した。

### 第4節 追加資料

#### 1 遺構

保管している資料の中に5枚の図面がある。内訳は、土層断面図が2枚、遺物や礫の出土状況を示す平面図が3枚であった。2枚の土層断面図に標高及び区境を示す注記はないが、1枚は約10m分の図面であることと野帳の記述から調査区の南側土層断面と推定される。もう1枚は土層の実測場所を特定できない。3枚の平面図のうち1枚は、第1・2区の地表から85cm下がった面の遺物出土状況図と考えられる。「浜坂調査概要」によると炉跡を取り囲むようにピット等が検出され、河口は住居址を想定している。その炉跡の実測図と考えられる図面と住居址の一部と想定した大きな石を実測したと考えられる図面を資料7に示した。ただ、図面には明確な注記等がなく、さらに、「浜坂調査概要」に記述してある炉跡を取り囲むピットを明確に示した図面がないことから想定されている住居址の詳細は不明である。しかし、当時の調査を窺い知ることのできる資料として掲載した。なお、炉跡の実測図は当時河口がトレースしたものと思

われる。資料7のスケールについては、今回挿入した。

#### 2 遺物（第1図～第5図）

埋文センターが保管している遺物は、バンケースに換算して51箱あった。その内容は、土器・石器・貝加工品・骨角器・骨類である。以下、抽出・実測した遺物について記述する。

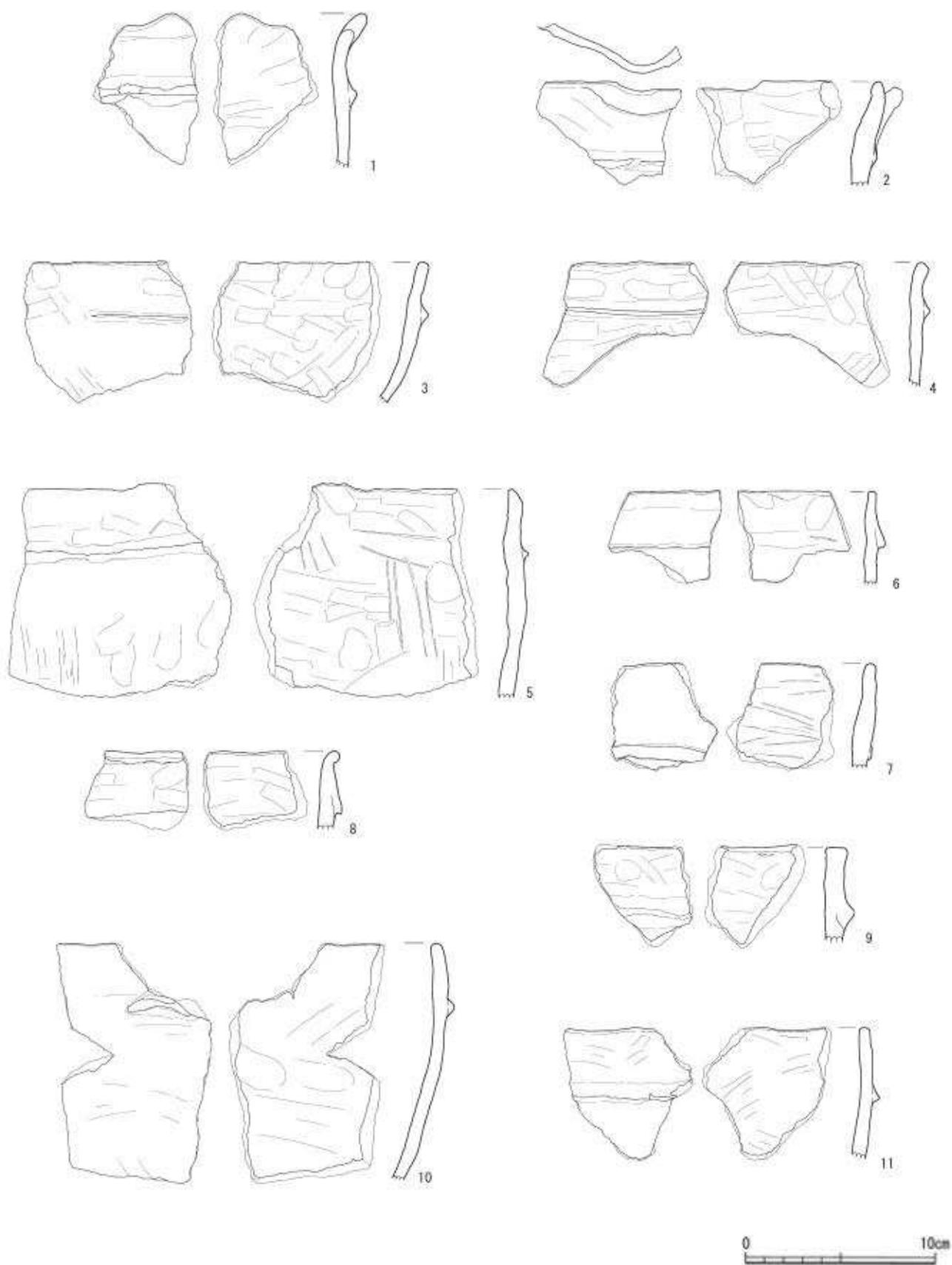
##### （1）土器（第1図～第3図1～52）

浜坂貝塚の出土土器は、ほとんどが赤褐色を呈する無文土器が占める。器種は深鉢・壺・碗があるが、その名称・分類は基本的に「浜坂調査概要」に従う。

深鉢形土器は、幅広い口縁部の下端に主に断面三角形の突帯を貼り付けるものを主体とする。幅広い口縁部が突帯下位の器壁より肥厚するものもある。口縁部形状は直行するものと外反するものを主体とするが、若干内湾するものもある。また、粘土を折り返し口縁部下端を肥厚させることにより段をもつ胴部に続くもの、口縁部肥厚帯の下端が僅かに盛り上がりをもつものもあるが、いずれも点数は少ない。さらに、口縁部から胴部まで残存するものが少ないため明確には判断できないが、肥厚帯をもたないものもあると考えられる。口縁部には平口縁と波状口縁がある。なお、口縁部上端が肥厚するものも2点確認した。

壺形土器には無文と有文がある。また、外耳土器も数点含まれ、碗形土器も確認した。これ以外に、黒色磨研土器、須玖系と記されている土器、凸帯文土器と分類された土器がある。なお、赤褐色を呈する無文土器と同伴すると「浜坂調査概要」に記されている皿形土器は確認されなかった。以下、個々の土器について記述する。

1～13は赤褐色の無文土器で、深鉢と壺がある。粘土を折り返して口縁部を肥厚させるもの、口縁部の下端に断面三角形の凸帯をもつもの、口縁部下端がかすかに盛り上がるものがある。河口の分類では第1類に該当すると考えられ、3・5・10・13は「浜坂調査概要」に掲載されている。1～11は深鉢である。1～3の口縁部は外反もしくは外開き、4～9は直口、10・11は内湾するものである。1は山形の突起をもつ口縁部である。2は注ぎ口状に口縁部が湾曲する。3・10は口縁部下端の凸帯が部分的に貼り付けられているものである。4の外表面調整は他の土器と比べ丁寧である。5は2の口縁部ほどではないが、注ぎ口状に口縁部が湾曲し、その部分だけ器壁が薄くなる。6は粘土を折り返し、口縁部下端を肥厚させる。7は低い突帯を貼り付ける。8の口縁部は玉縁状となる。9の断面は方形を呈す。11は波打ったような口縁部である。12・13は無文の壺である。12は粘土を折り返して口縁部下端を肥厚させる。13の器面は風化し、口縁部を多少欠損している。胎土の粒子が細かく、他の土器とは一線を画す。



第1図 浜坂貝塚出土遺物(1)

14～23は薄手の有文土器で、頸部のくびれから口縁部までが長く、口縁部は外開きとなる。頸部付近の器壁が厚くなる。河口の分類では第2類bに該当するものと考えられ、16は「浜坂調査概要」に掲載されている。14～18は沈線で文様を構成するものである。14の器面は摩耗し判然としないが、口縁部と考え実測した。波状を呈す口縁部で、口縁端部から縦位の沈線を施す。口唇部に刺突を施しているようにも見える。15は頸部付近に縦位と横位の沈線を施す。16の器面は摩耗し、文様が部分的に欠ける。4本一組の沈線を施すが、部分的に重ねて施文する。「浜坂調査概要」に掲載されている実測図には口縁部が示してあるが、保管してある土器の中に口縁部は確認できなかった。実測図は口縁部を推定したことも考えられる。17は口縁部が欠損するが、16と同じ器形と考えられる。文様は、直線と曲線及びけば状の沈線で構成される。また、17と同じような文様構成で口縁部まで残存する土器が「浜坂調査概要」には紹介されている。しかし、管理している資料の中にはなく、その所在が確認できない。ただ、保管している資料の中に河口が撮影した写真が残されていたことから、図版Iに示した。18は波状を呈する口縁部片で、口縁端部から沈線を2本垂下させ、その両脇にけば状の沈線を斜位に施す。焼成は良好で、器壁に薄さはない。19は胴部片で、けば状の沈線だけで文様を施す。20～23は微隆突帯を横位もしくは縦位に貼り付け、その両側にけば状の細沈線を施すものである。文様は口縁部から胴上部まで施文される。20は口縁部付近、21は頸部から胴部付近、22・23は胴部片である。

24は無文であるが、その形状は14と類似している。口縁端部が部分的に欠損しているが、波状口縁になると考えられる。

25は碗形土器で、口径は10.6cmを測る。内外面の器面調整は粗い。

26～29は外耳土器である。26・27は直線的、28・29は湾曲した外耳を貼り付ける。河口は第1類cに分類し、27・28が「浜坂調査概要」で掲載された土器である。

30・31は黒色磨研土器である。30は部分的に赤色顔料が残るが、当初は全面に塗られていたと考えられる。31は器壁が幾分厚く、器面は摩耗している。河口が、その他のa土器（黒川式土器）に分類した土器と考えられる。

32～35は口縁部に突帯をもつものである。32は突帯に刻目を施す。「浜坂調査概要」でその他のc土器（原山系統土器）に分類された土器と考えられる。33～35は口縁端部に突帯をもつが、刻みは施されない。33は器面調整の条痕が残る。

36～40は、肥厚した口縁端部が内外へ張り出すものである。河口が、その他のd土器（須玖系統の土器）に

分類したものである。口縁の内側に張り出した形状や全体的に厚ぼったくシャープさに欠けるという特徴をもつ。入来I式もしくはII式土器に比定できると考える。

41は縦位・斜位の沈線で文様を構成するものである。この土器片以外に3点確認したが、1点掲載した。小片のため部位や傾きは不明であるが、嘉徳II式と考えられる。

42～52は、底部を一括して掲載した。42～44、47～51は「浜坂調査概要」に掲載された土器である。42・43は尖底となる。44・45は底部の先端に粘土を貼り付け、2段底状に仕上げる。47は丸底である。48～51は、底辺付近が張り出す平底である。52は2条の沈線を巡らす平底である。河口が、その他b土器（X字状文土器）に分類したものと考えられる。「底部と口縁部で、赤塗の沈線を施した平底の土器」と記されているが、52に赤塗の沈線は確認できなかった。また、口縁部も確認できなかった。

## （2）石器（第4図53～62）

「浜坂調査概要」には、「石斧10個出土」の記述がある。「石斧10個」は推定できたが、実測図は掲載されていない。そこで、そのうち残存度の大きい7点を実測し、掲載する。

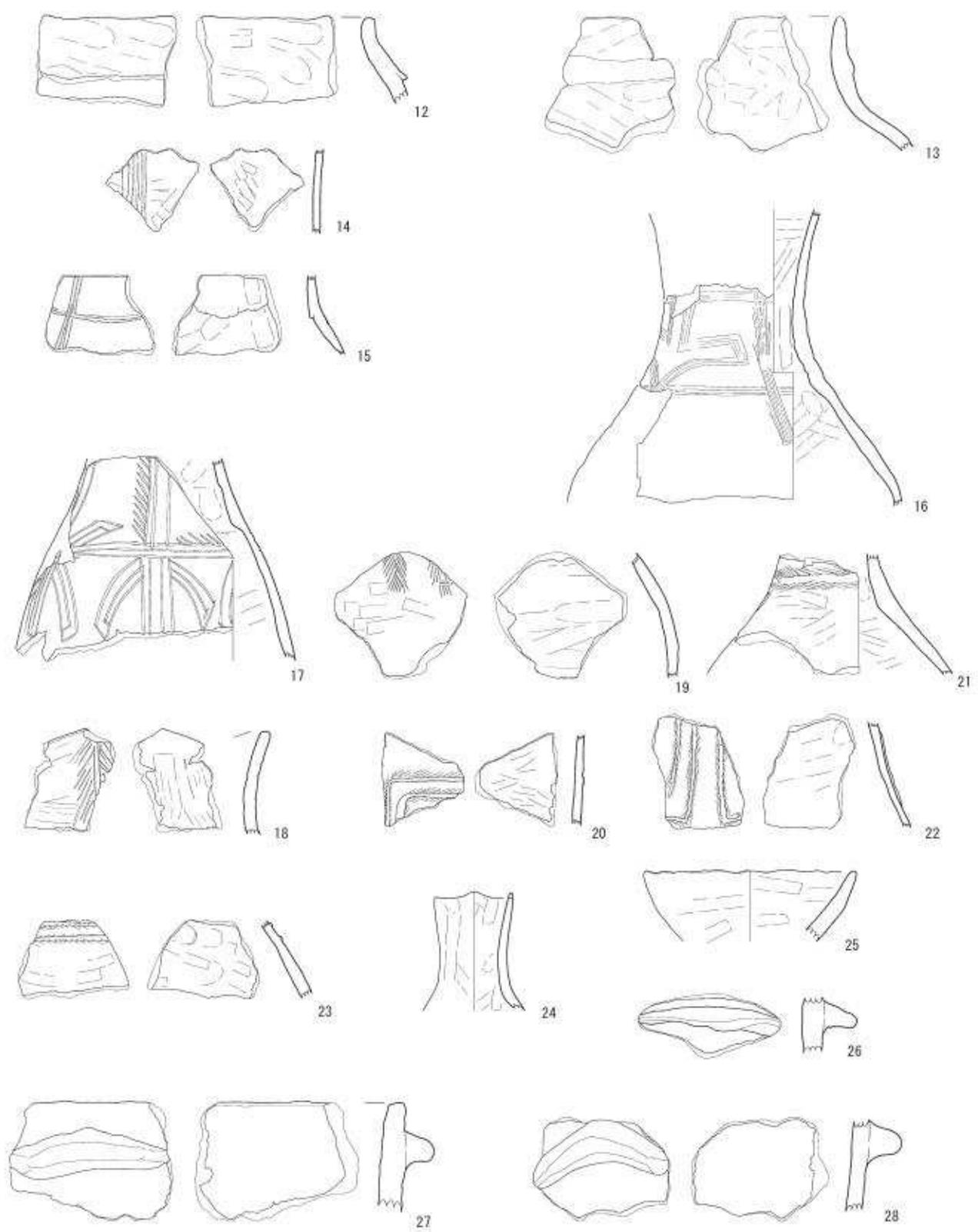
53～59は磨製石斧である。砂岩及び斑れい岩を素材とする。全て欠損品であるため、平面形については不明である。53は残存する横幅が8.4cmで、出土した石斧の中では最も大きい。全面よく研磨されており、両側面とも幅5mm程度の面を形成している。54は53と比べると小振りだが、同じような形状を呈し、両側面も面取りが行われる。55は残存する横幅が4.75cmで、出土した中では最も小さい。片刃で刃部は丁寧な研磨が施される。56の研磨は全面には及ばないが、裏面が表面より丁寧である。側面は面取りされているが、左右でその幅に違いがある。刃部は一部潰れている。57は残存している部分は丁寧な研磨が施され、側面は幅広く面取りされる。58は使用中に裏面が剥離し、再度刃部を加工したものと考えられる。59は丁寧な研磨がなされるが、一部及ばない部分もある。両側面ともかすかではあるが面が形成される。

60は刃部のみが研磨されているものである。頭部や左辺部は使用しやすさを考え、加工されている可能性もある。本遺跡からは加工痕のある骨が出土していることから、手に馴染む大きさと打割具として使用した可能性も考えられる。

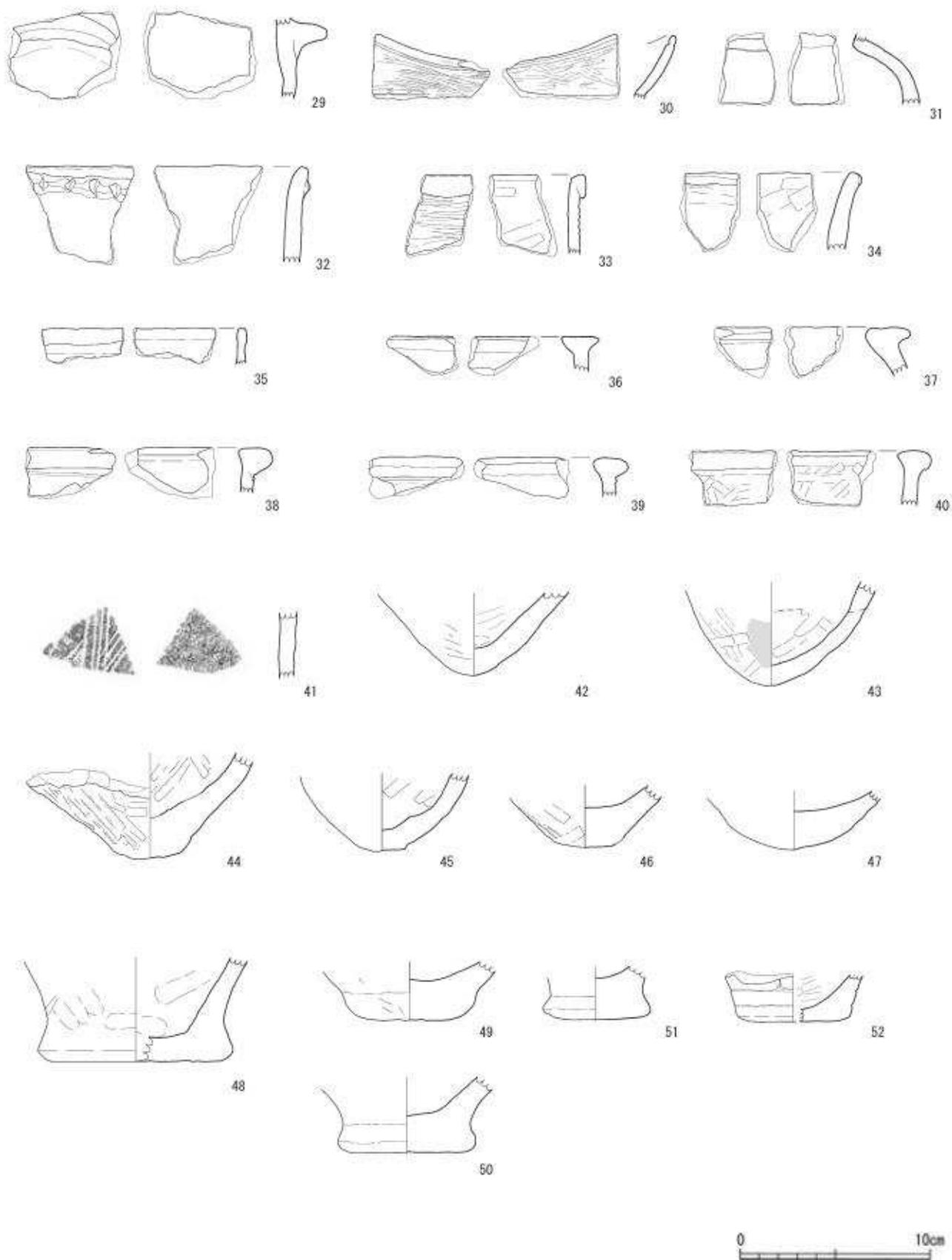
61・62は磨・敲石で、よく使い込まれている。61は上下端に、62は各面に敲打痕が残る。

## （3）貝製加工品・骨角器（第5図63～68）

「浜坂調査概要」には「夜光貝を用いたさじ、いのししの牙の垂飾、骨製のかんざし、垂飾等が貝層から出土



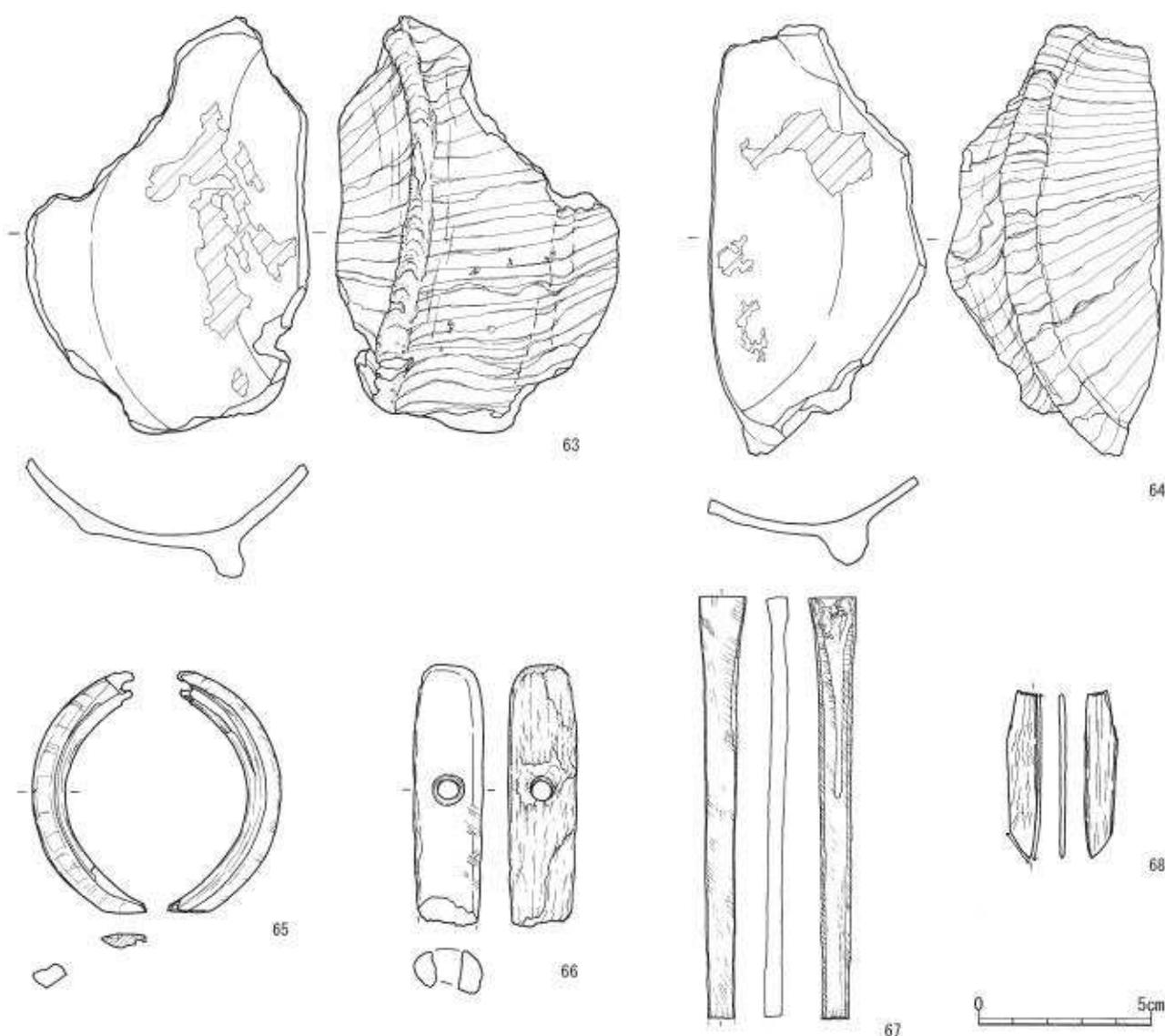
第2図 浜坂貝塚出土遺物(2)



第3図 浜坂貝塚出土遺物(3)



第4図 浜坂貝塚出土遺物(4)



第5図 浜坂貝塚出土遺物（5）

している。」との記述があるが、実測図等は示されていない。そこで、埋文センターが管理している浜坂貝塚の遺物の中から、記述内容に近いものを抽出し、実測を行い、掲載した。

63・64は夜光貝製の加工品と考えられる。63は打ち欠いて成形しようとしている未製品である。64は擦り切りにより切断されており、断面がシャープである。65は河口が「いのししの牙の垂飾」としたと考えられる遺物である。先端は研いで角度を作り出すが、最先端部分はさらに鋭く加工を施す。また、裏面は1～2mm程度の厚さで全面削いでいる。66は鯨骨製の加工品である。頂部はやや丸く調整する。先端部は欠損するが、先端部に向かって細くなる形状と考えられる。頭部には径9mmの孔が穿たれているが、裏面の径は7mm程度とやや小さ

くなる。全体的に研磨されていたと思われるが、裏面は風化のためか剥落している部分がある。詳細については不明であるが、大型針の可能性が考えられる。遺物に記された注記が「Ⅱ<sub>1</sub>-20」であることから表層出土の可能性が高い。67は先端部が欠損する鹿骨製のかんざしと考えられる。裏面及び両側面は平坦に成形されている。66と同様に注記が「Ⅰ<sub>1</sub>-20」であることから、表層出土の可能性が高い。68は鳥骨製の筥状工具と考えられる。先端と両側縁部分に加工が施され、先端部は加工の角度を変え、鋭く仕上げる。

第1表 浜坂貝塚出土土器観察表

神田 番号	掲載 番号	出土 区等	出土 深度 等	器種	分類	部位	文様・調整		胎土					色調		備 考		
							外面		内面		石英	長石	鉄石	燧石	砂礫		外面	内面
							外面	内面	外面	内面								
第1図	1	—	—	深鉢	1a	口縁	貼付突帯文, 指圧, ナデ	指圧痕, ナデ					○	○	にぶい赤褐	にぶい黄褐		
	2	—	下層	深鉢	1a	口縁	指圧痕, ナデ, 貼付突帯文	指圧痕, ナデ					○	○	にぶい赤褐	灰褐		
	3	—	—	深鉢	1a	口縁	貼付突帯文, 指圧痕, ナデ	指圧痕, ナデ	○				○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐		
	4	—	—	深鉢	1a	口縁	貼付突帯文, 丁寧なナデ	指圧痕, ナデ	○				○	○	橙	にぶい橙		
	5	—	—	深鉢	1a	口縁	貼付突帯文, ナデ, 指圧痕	指圧痕, ナデ	○				○	○	にぶい赤褐	明赤褐		
	6	—	—	深鉢	1a	口縁	突帯文, ナデ	指圧痕, ナデ	○				○	○	にぶい赤褐	にぶい橙		
	7	—	—	深鉢	1a	口縁	貼付突帯文, ナデ	ナデ	○	○			○	○	にぶい橙	にぶい橙		
	8	—	—	深鉢	1a	口縁	突帯文, 指圧痕, ナデ	ナデ	○				○	○	にぶい赤褐	黒褐		
	9	I	7-100	—	深鉢	1a	口縁	突帯文, 指圧痕, ナデ	指圧痕, ナデ	○				○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
	10	—	—	深鉢	1a	口縁～胴部	突帯文, ナデ	指圧痕, ナデ	○				○	○	灰褐	にぶい赤褐		
	11	II	4	—	深鉢	1a	口縁	突帯文, ナデ	ナデ	○				○	○	明赤褐	灰黄褐	
第2図	12	II	3	壺	1a	口縁	突帯文, ナデ	ナデ	○				○	○	明赤褐	明赤褐		
	13	IV	2	壺	1a	口縁	突帯文, ナデ	ナデ	○				○	○	橙	橙		
	14	—	下層	壺	2b	胴部	沈線文, ナデ	ナデ	○	○			○	○	にぶい橙	にぶい橙		
	15	II	2	壺	2b	口縁	沈線文, ナデ	指圧痕, ナデ	○	○			○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐		
	16	—	—	壺	2b	頸部～胴部	沈線文, 刷毛目, ナデ	ナデ, 工具ナデ	○						にぶい黄	にぶい黄橙		
	17	I	6	壺	2b	胴部	沈線文, ナデ	指圧痕, ナデ					○	○	灰黄褐	にぶい黄橙		
	18	—	下層	壺	2b	口縁	沈線文, ナデ	ナデ	○	○				○	明赤褐	にぶい赤褐		
	19	—	下層	壺	2b	胴部	沈線文, ナデ	ナデ	○	○				○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		
	20	—	下層	壺	2b	胴部	微隆突帯, 細沈線, ナデ	ナデ	○	○				○	明赤褐	明赤褐		
	21	—	下層	壺	2b	頸部～胴部	細沈線, ナデ	ナデ	○	○				○	明赤褐	にぶい赤褐		
	22	IV	1-4	壺	2b	胴部	微隆突帯, 細沈線, ナデ	指圧痕, ナデ	○	○				○	明赤褐	橙		
	23	IV	1-4	壺	2b	肩部	微隆突帯, 細沈線, ナデ	指頭圧痕, ナデ	○	○				○	橙	にぶい橙		
	24	I	6	壺	2b	口縁～胴部	ナデ	ナデ	○	○				○	にぶい黄褐	にぶい橙	口径 3.8cm	
	25	I	6	碗	—	口縁	ナデ	ナデ	○					○	橙	橙	口径 10.6cm	
第3図	26	I	2-40	深鉢	1c	胴部	ナデ, 外耳貼付	ナデ	○	○				○	明赤褐	にぶい黄	外耳	
	27	II	3	深鉢	1c	口縁	ナデ, 外耳貼付	ナデ	○	○				○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	外耳	
	28	II	1	深鉢	1c	胴部	外耳貼付, ナデ	ナデ	○					○	明赤褐	にぶい橙	外耳	
	29	II	1	深鉢	1c	胴部	外耳貼付, 指圧痕, ナデ	指圧痕, ナデ	○					○	橙	赤褐	外耳	
	30	I	2(貝層)	浅鉢	その他a	口縁	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	○					○	黒	黒	赤色顔料塗付	
	31	II	4	浅鉢	その他a	胴部	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	○	○				○	黄灰	暗灰黄	赤色顔料塗付	
	32	III	2	浅鉢	その他c	口縁	斜目突帯, ナデ	指ナデ	○	○				○	にぶい橙	にぶい黄褐		
	33	II	3	浅鉢	—	口縁	突帯文, 条痕文, ナデ	ナデ	○	○				○	にぶい黄褐	にぶい黄橙		
	34	III	2	浅鉢	—	口縁	突帯文, ナデ	ナデ	○					○	にぶい赤褐	橙		
	35	V	2	浅鉢	—	口縁	突帯文, ナデ	ナデ	○	○				○	橙	橙		
	36	—	—	甕	その他d	口縁	ナデ	ナデ	○	○				○	橙	にぶい橙		
	37	IV	2	甕	その他d	口縁	ナデ	ナデ	○	○				○	にぶい赤褐	赤褐		
	38	IV	2	甕	その他d	口縁	沈線文, ナデ	指頭圧痕, ナデ	○					○	赤褐	にぶい赤褐		
	39	IV	2	甕	その他d	口縁	沈線文, ナデ	ナデ	○					○	明赤褐	にぶい黄橙		
	40	IV	2	甕	その他d	口縁	ナデ	ナデ	○					○	にぶい赤褐	にぶい赤褐		
	41	I	6	深鉢	—	胴部	沈線文, ナデ	ナデ	○	○	○			○	にぶい赤褐	明赤褐		
	42	II	4	—	—	底部	ナデ	指頭圧痕, ナデ			○			○	明赤褐	にぶい橙		
	43	—	—	—	—	底部	刷毛目後ナデ	ナデ	○					○	黒褐	明赤褐	スス付着	
44	—	—	—	—	底部	刷毛目後ナデ	ナデ	○					○	明赤褐	にぶい赤褐			
45	III	4	—	—	底部	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	○					○	橙	にぶい赤褐			
46	—	—	—	—	底部	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	○					○	にぶい黄褐	明赤褐	底径 4.2 cm		
47	II	5	—	—	底部	ナデ	ナデ	○					○	橙	明赤褐			
48	I	3	—	—	底部	刷毛目, ナデ	ナデ, 指頭圧痕	○					○	にぶい黄	にぶい黄橙	底径 8.8 cm		
49	II	3	—	—	底部	ナデ	ナデ	○					○	にぶい赤褐	明赤褐	底径 3.0 cm		
50	II	3	—	—	底部	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	○					○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	底径 5.8 cm		
51	I	2	—	—	底部	ナデ	ナデ	○					○	にぶい赤褐	にぶい黄	底径 5.7 cm		
52	IV	2	—	その他	底部	沈線文, ナデ	ナデ	○						にぶい黄橙	にぶい黄橙	底径 4.6 cm		

第2表 浜坂貝塚出土石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器 種	出土深度等		法量 (cm)			重量 (g)	石材	備 考
			出土区	出土層	長さ	幅	厚さ			
第4図	53	石斧	断面	-	(6.50)	8.40	2.65	191.30	砂岩	刃部
	54	石斧	I	3(-60)	(5.65)	(5.35)	2.10	66.60	砂岩	刃部
	55	石斧	II	2	(4.25)	4.75	1.55	42.90	砂岩	刃部
	56	石斧	-	-	(4.05)	5.75	1.70	61.70	砂岩	刃部
	57	石斧	-	-	(4.20)	(3.85)	2.35	38.20	斑れい岩	刃部
	58	石斧	I	5	7.55	5.70	1.85	122.70	砂岩	基部
	59	石斧	II	2(-40)	(6.75)	5.10	3.55	210.00	砂岩	基部
	60	刃部磨製石器	断面	-	7.25	7.85	5.15	380.00	安山岩	
	61	磨・礫石	-	-	16.15	5.95	4.50	760.00	安山岩	
	62	磨・礫石	V	2	12.00	9.80	5.45	1010.00	安山岩	

第3表 浜坂貝塚出土貝製加工品等観察表

挿図 番号	掲載 番号	器 種	出土深度等		法量 (cm)			重量 (g)	備 考
			出土区	出土層	長さ	幅	厚さ		
第5図	63	貝製加工品	断面	-	12.15	8.25	3.40	94.60	
	64	貝製加工品	断面	-	12.70	6.35	-	91.40	
	65	垂飾	-	-	7.10	3.25	0.75	6.40	猪牙
	66	大型針	II	(-20)	(7.65)	2.05	1.25	20.90	鯨骨
	67	かんざし	I	1(-20)	(12.30)	1.40	0.60	7.40	鹿骨
	68	筒状骨器	IV	2	4.90	0.90	0.15	0.80	鳥骨

## 第5節 脊椎動物遺体

### 1. はじめに

浜坂貝塚からは複数種の脊椎動物遺体が出土している。出土位置や層位などは不明である。ここでは動物種及び骨種の同定結果を報告し、遺跡の特徴について述べる。なお、同定及び分析は早稲田大学樋泉岳二講師の指導の下に行った。第6～7図及び第4～7表は、樋泉作成のものに加筆修正を行ったものである。

### 2. 分析結果

同定結果の詳細を第4～7表に示した。同定対象となった骨の数 (NISP) は243点で、総重量は4778.5 gである。以下はその詳細である。

#### 哺乳綱

イノシシ：39点を確認された。現在のリュウキュウイノシシに類する小型の個体のものとみられる。幼獣の下顎骨のほか、研磨穿孔していると思われる成獣下顎大歯も確認された。四肢骨には典型的なスパイラル・フラクチャーがみられ、人為的に打ち割られたことが明らかである。

大型哺乳類：1点を確認された。骨髄がなく密度が高く非常に重いため、ジエゴンまたはクジラ下顎骨の可能性がある。カットマーク（解体痕）があるため、解体または製品に利用していることが分かる。

鳥類：アホウドリの中足骨4点と同定不可の四肢骨が

確認された。他の部位の骨が無いため、アホウドリの中足骨を意図的に集めたか、あるいは製品に利用していた可能性がある。

#### 爬虫綱

ウミガメ科：124点を確認された。浜坂貝塚出土の動物遺体の中で最も多い点数となっている。骨種は四肢骨が主であり甲羅の骨の割合が少ない。また、剣状腹板は形状からアオウミガメと同定された。下顎骨はアカウミガメとみられるものが多い。四肢骨にはイヌなどが噛んだ痕跡（トゥースマーク）や切断の痕跡が多くみられる。

#### 軟骨魚綱（板鰐亜綱）

サメ類：椎骨12点を確認された。いずれもメジロザメ科に類するタイプとみられる。

#### 硬骨魚綱（真骨類）

ウツボ科：歯骨2点、舌顎骨1点を確認された。歯骨のひとつは大型のものである。

イトウダイ亜科：前鰓蓋骨2点を確認された。

ハタ科：11点を確認された。歯骨にはスジアラに類するタイプとマハタに類するタイプがあり、複数種が混在しているとみられる。

フエフキダイ科：歯骨1点と前上顎骨1点を確認された。前上顎骨はハマフエフキに類するタイプである。

イシダイ属：前上顎骨1点を確認された。

ブダイ科：30点を確認された。咽頭骨・歯骨はすべ

てアオブダイ属に同定された。

ニザダイ科：尾椎1点が確認された。

モンガラカワハギ科：4点が確認された。

ハリセンボン科：8点が確認された。歯骨・前上顎骨と比較して棘が少ない。

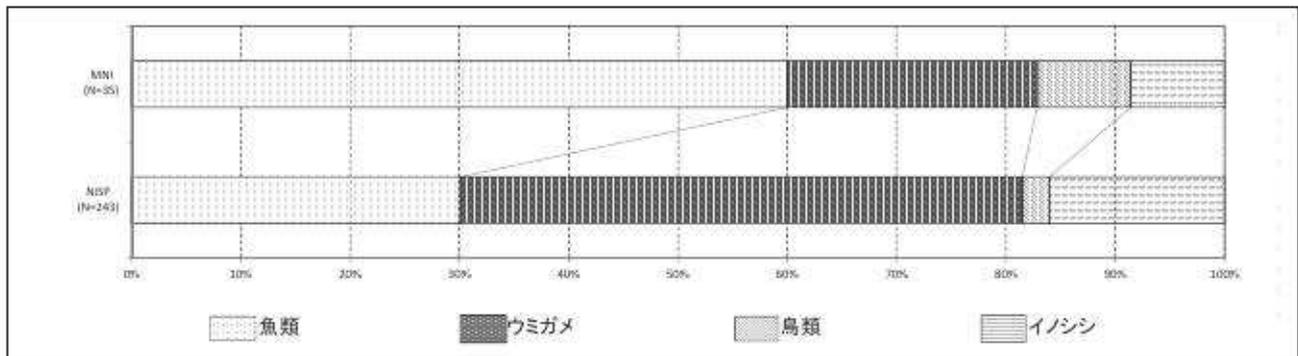
### 3. 考察

遺跡から出土する動物遺体や貝類遺体などの自然遺物は、当時の人々の狩猟・漁労活動および食生活を解明する手掛かりとなるものである。今回分析に利用した浜坂貝塚の動物遺体は、出土位置や層位が不明のため正確な時代の考察はできないが、貝塚時代の宝島の人々の生活の一端を復元する上でとても重要な資料である。

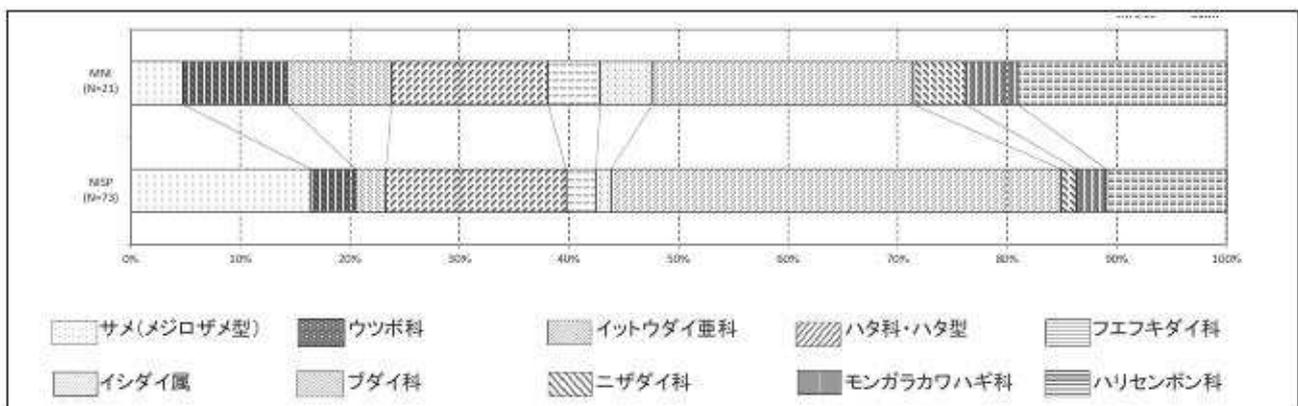
浜坂貝塚から出土した脊椎動物遺体全体の組成をみると、最小個体数 (MINI) では魚類が一番多く、次にウミガメ、鳥類、イノシシと続く。重量でみるとウミガメが 3,845.4 g で全体の 80.5% を占め、続いて魚類が 473.0 g、イノシシが 414.1 g と続く。種泉によれば、奄美・沖縄諸島の貝塚時代遺跡では魚類が主体 (MINI 比で 60

～90%前後) をなし、それにイノシシ・ウミガメ類が加わる点で一貫している。<sup>112)</sup> これに対して浜坂貝塚の魚類は MINI 比で 60% であり、やや少ない印象を受ける。また、魚類の中での MINI 比を見るとブダイ科・ハタ科・ハリセンボン科といったサンゴ礁に生息する魚が多くっており、奄美特有の組成を示している。特徴的なのはサメ類が目立つ点であり、遠洋に生息するサメを獲りにいていた可能性がある。

次にウミガメ科についてみる。ウミガメは体全体を甲羅で覆われているため、通常の遺跡では甲羅の骨 (甲板) が多数出土することとなる。しかし、浜坂貝塚では甲羅の骨 (甲板) が他の部位に比べてきわめて少ない。その理由として考えられるのが解体場に廃棄している可能性である。サンゴ礁で捕獲したウミガメを浜辺などで解体し、甲羅は廃棄し中身の部分だけを遺跡に持ち帰っていることが考えられる。また、四肢骨には人為的に割った痕跡のあるものやイヌなどが噛んだ痕跡 (トゥースマーク) があるものが多いため、ウミガメの肉だけではなく骨の内部の油や骨そのものも利用してい



第6図 浜坂貝塚出土脊椎動物遺体の組成。MINI：最小個体数、NISP：同定標本数



第7図 浜坂貝塚出土魚類遺体の組成。MINI：最小個体数、NISP：同定標本数

たとみられる。

イノシシについては、全体で見ると少数の出土にとどまっている。すべて小型であり、奄美・沖縄諸島に生息するリュウキュウイノシシのものともみられる。野生のものか飼育されていたものかは不明である。

また、浜坂貝塚からは骨製品が3点出土している。素材はシカの中手足骨・クジラ骨・鳥類の中手足骨である。シカとクジラに関しては、当遺跡から動物遺体としての出土が他にないことから、素材または製品として他地域から持ち込まれたものとみられる。シカの自然分布の南限は種子島であるため、それ以北から持ち込まれている

可能性が高い。鳥類の中手足骨は、動物遺体としても出土しており、当遺跡で加工していた可能性も考えられる。

上記のように浜坂貝塚に暮らしていた人々は、陸ではイノシシを狩猟し、海辺ではサンゴ礁に生息している魚やウミガメを捕り、時には遠洋まで漁へ出る生活をしてきたことが予想される。また、今回分析に利用した動物遺体は、取り上げ時の状況が不明のため、河口が取捨選択して持ち帰った可能性も考えられる。そのため、分析結果の動物種や骨種の割合が必ずしも遺跡の性格を表しているとは言えないが、現時点での考察を今回の報告では述べた。

#### 第4表 浜坂貝塚資料に含まれる脊椎動物遺体の同定結果(1)

\*1 残存位置略号凡例：w 完存、p 近位端、m 骨幹、d 遠位端、fr 破片、(p)・(d) は未癒合の骨端のみ、(p-)・(d-) は骨端未癒合脱落、<p->・<d-> は骨端のみ欠損。  
\*2 <>を付したものはNISF算定対象外 \*3 損傷略号凡例：CM カットマーク、SF スパイラルフラクチャー、TM イヌ?の咬み跡

番号	種類	部位	残存位置*1	左右	数*2	加工/損傷*3	計測	備考
1	イノシシ	下顎犬歯		R	1	研磨穿孔品?		オス
2	イノシシ	臼歯	fr		1			
3	イノシシ	下顎骨	[m1m2m3M1x]	R	1			
4	イノシシ	下顎角			?			小型
5	イノシシ	肩甲骨	関節部	L	1			小型
6	イノシシ	上腕骨	m-<d->	L	1			SD11.1
7	イノシシ	上腕骨	m-d	R	1	SF		小型
8	イノシシ	上腕骨	d	R	1			小型
9	イノシシ	上腕骨	<d->	L	1	SF		
10	イノシシ	橈骨	mfr		1			
11	イノシシ	橈骨	m	R	1			小型
12	イノシシ	尺骨	p-m	R	1			小型
13	イノシシ	尺骨	p	R	1			
14	イノシシ	尺骨	滑車切痕	R	1			小型
15	イノシシ	胸椎			2			小型
16	イノシシ	腰椎			3			小型
17	イノシシ	腰椎			1			
18	イノシシ	腰椎	椎弓		1			
19	イノシシ	椎骨	棘突起		1			
20	イノシシ	肋骨	m		4			
21	イノシシ	肋骨	m		1			
22	イノシシ	寛骨(腸骨+恥骨+座骨)	臼		1			
23	イノシシ	寛骨(腸骨+恥骨)	臼	L	1			
24	イノシシ	大腿骨	<p->	R	1	SF		小型
25	イノシシ	大腿骨	<p->	L	1	SF		小型
26	イノシシ	大腿骨	<p->	R	1			小型
27	イノシシ	大腿骨	d	L	1	SF		Bd44.2
28	イノシシ	大腿骨	d	L	1			Bd36.1
29	イノシシ	大腿骨	d	R	1	SF		小型
30	イノシシ	脛骨	m-d	L	1	SF		SD18.7, Bd27±
31	イノシシ	脛骨	dfr	L	1	SF		小型
32	イノシシ	踵骨		L	1			小型
33	イノシシ	第5中足骨	w	R	1			小型
34	イノシシ	四肢骨	mfr		<2>			
35	ジュゴン(クジラ)?	不明	fr		1	CM(フリップ)		大型クジラ下顎骨の可能性もある
36	アホウドリ	中足骨	w	L	1			
37	アホウドリ	中足骨	p-m	R	1			
38	アホウドリ	中足骨	p-<d->	L	1			
39	アホウドリ	中足骨	w	L	1			
40	鳥類同定不可	四肢骨	mfr		<1>	骨製品		
40	鳥類同定不可	四肢骨	mfr		<1>			やや大型、加工なし
41	鳥類同定不可	四肢骨	m		1			比較的大型
42	鳥類同定不可	四肢骨	m	?	1			やや大型、アホウドリ?
43	鳥類同定不可	四肢骨	mfr	?	<1>			やや大型、アホウドリ?
44	鳥類同定不可	四肢骨	mfr		<1>	加工品?		
45	鳥類同定不可	四肢骨	mfr		<1>			

第5表 浜貝塚資料に含まれる脊椎動物遺体の同定結果(2)

\*1 残存位置略号凡例: w 完存, p 近位端, m 骨幹, d 遠位端, fr 破片, (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p-)・(d-)は骨端未癒合脱落, <p->・<d->は骨端のみ欠損。  
\*2 <>を付したものはNISP算定対象外。 \*3 損傷略号凡例: CM カットマーク, SF スパイラルフラクチャー, TM イヌ?の咬み跡

番号	種類	部位	残存位置*1	左右	数*2	加工/損傷*3	計測	備考
46	鳥類同定不可	四肢骨	mfr		<1>		大型	
47	アオウミガメ	刺状腹板		L	1			
48	ウミガメ	頭骨	fr		1			
49	ウミガメ	頭骨/甲板	fr		<5>			
50	ウミガメ	頭骨/甲板			1			
51	ウミガメ	頭骨?	m		2			
52	ウミガメ	頭骨?	p		1			
53	ウミガメ	下顎骨		*	1			側後頭骨?
54	ウミガメ	下顎骨		R	1			アカウミガメ?
55	ウミガメ	下顎骨?	m	L	1	割断(+CM?)	SD33.1	
56	ウミガメ	下顎骨?	m(1・3)	L	1		-	
57	ウミガメ	鳥口-肩甲骨	m(2・3)	L	1		-	
58	ウミガメ	鳥口-肩甲骨	m(2・3)	L	1		-	59と接合
59	ウミガメ	鳥口-肩甲骨	d	R	1		SD35.6	58と接合
60	ウミガメ	鳥口-肩甲骨	m(2)	L	1	割断	-	61と接合
61	ウミガメ	鳥口-肩甲骨	p-m	R	1		-	60と接合
62	ウミガメ	鳥口-肩甲骨	p-m	R	1	割断	-	
63	ウミガメ	前鳥口骨		R	1		大型	アカウミガメ?
64	ウミガメ	前鳥口骨	fr	?	1			
65	ウミガメ	前鳥口骨	m	L	1	CM・割断		チョップマーク
66	ウミガメ	前鳥口骨			5			
67	ウミガメ	前鳥口骨	p		9			
68	ウミガメ	上腕骨	p-m	L	1	割断		
69	ウミガメ	上腕骨	m	L	1		SD25.7	
70	ウミガメ	上腕骨	m		1			鳥口-肩甲骨?
71	ウミガメ	上腕骨			1			恥骨?
72	ウミガメ	上腕骨	fr		<1>			
73	ウミガメ	上腕骨	fr		<7>			
74	ウミガメ	上腕骨			1			
75	ウミガメ	上腕骨			1			
76	ウミガメ	上腕骨			<1>			
77	ウミガメ	上腕骨	fr		<1>			
78	ウミガメ	上腕骨	d		1			
79	ウミガメ	上腕骨			2			
80	ウミガメ	上腕骨	fr		<5>			
81	ウミガメ	上腕骨	fr		<1>			
82	ウミガメ	上腕骨	fr		<1>			
83	ウミガメ	上腕骨	fr		<1>			
84	ウミガメ	上腕骨			1			
85	ウミガメ	上腕骨			1			
86	ウミガメ	橈骨			1			
87	ウミガメ	橈骨	椎体		1			
88	ウミガメ	橈骨	椎弓		4			
89	ウミガメ	橈骨			3			
90	ウミガメ	橈骨	fr		5			
91	ウミガメ	尺骨	m-<d->	L	1			
92	ウミガメ	尺骨	m-<d->	L	1			
93	ウミガメ	尺骨	m-<d->	R	1			
94	ウミガメ	座骨	p-<d->	R	1			
95	ウミガメ	恥骨/座骨	m	R	1	割断?	SD24.1	
96	ウミガメ	恥骨	m	L	1	TM	SD24.2	イヌ?咬痕
97	ウミガメ	恥骨	m	R	1	割断?・TM?	SD22.1	
98	ウミガメ	大腿骨	d	L	1	割断		107と接合
99	ウミガメ	大腿骨	w	L	1			
100	ウミガメ	大腿骨	w	L	1			
101	ウミガメ	大腿骨		R	1			
102	ウミガメ	大腿骨	関節部	L	1			
103	ウミガメ	大腿骨	関節部	R	1			
104	ウミガメ	大腿骨		R	1			
105	ウミガメ	大腿骨	p-m	L	1	割断	SD19.3	
106	ウミガメ	大腿骨	p-m	L	1	割断	SD22.6	
107	ウミガメ	大腿骨	<p->-m	L	1	割断	SD21.1	98と接合
108	ウミガメ	大腿骨	m	L	1	TM	SD25.6	イヌ?咬痕
109	ウミガメ	脛骨	m	R	1	割断・TM	-	

第6表 浜貝塚資料に含まれる脊椎動物遺体の同定結果(3)

\*1 残存位置略号凡例: w 完存, p 近位端, m 骨幹, d 遠位端, fr 破片, (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p-)・(d-)は骨端未癒合脱落, <p->・<d->は骨端のみ欠損。  
\*2 <>を付したものはNISP算定対象外 \*3 損傷略号凡例: DM カットマーク, SF スパイラルフラクチャー, TM イヌ?の咬み跡

番号	種類	部位	残存位置*1	左右	数*2	加工/損傷*3	計測	備考
110	ウミガメ	股骨	d	R	1	割断	-	
111	ウミガメ	膝骨			<7>			
112	ウミガメ	指骨			<1>			
113	ウミガメ	指骨			<1>			
114	ウミガメ	指骨	fr		<51>			
115	ウミガメ	指骨	fr		<52>			
116	ウミガメ	末節骨	d		2			
117	ウミガメ	末節骨			8			
118	ウミガメ	四肢骨		L	1		大型	アカウミガメ?
119	ウミガメ	四肢骨			1			上後頭骨?
120	ウミガメ	四肢骨			1		大型	
121	ウミガメ	四肢骨	fr		<3>			
122	ウミガメ	四肢骨	fr		<4>			
123	ウミガメ	四肢骨	fr		<4>			
124	ウミガメ	頂骨板	m-<d->	R	1			
125	ウミガメ	緑骨板	p-m	L	1	割断	SD39.8	126と接合
126	ウミガメ	緑骨板	d	L	1	割断		125と接合
127	ウミガメ	緑骨板	p-m	L	1	割断	-	
128	ウミガメ	緑骨板	p	L	1			
129	ウミガメ	緑骨板	p	L	1			
130	ウミガメ	緑骨板	m(fr)	L	1			計数対象外
131	ウミガメ	椎骨板	m-d	R	1			
132	ウミガメ	椎骨板	m	R	1			
133	ウミガメ	椎骨板			3			
134	ウミガメ	椎骨板	fr		<11>			
135	ウミガメ	肋骨板	fr		<1>			
136	ウミガメ	肋骨板	fr		<1>			
137	ウミガメ	肋骨板	fr		<1>			
138	ウミガメ	肋骨板	m		1			
139	ウミガメ	背甲板	fr		<1>			
140	ウミガメ	背甲板	fr		1			
141	ウミガメ	腹甲板			1			
142	ウミガメ	腹甲板	fr		<1>			
143	ウミガメ	腹甲板	fr		<4>			
144	ウミガメ	甲板/頤骨?	p-<d->	L	1			
145	ウミガメ	甲板	m	L	1		SD10.1	若齢
146	ウミガメ	甲板	w	R	1			
147	ウミガメ	甲板	m	R	1		SD21.1	
148	ウミガメ	甲板	m	R	1		-	
149	ウミガメ	甲板		R	1			
150	ウミガメ	甲板			1			
151	ウミガメ	甲板	mfr		<3>			
152	ウミガメ	甲板	fr		1			
153	ウミガメ	甲板	fr		2			
154	ウミガメ	不明	関節部	L	1			
155	ウミガメ	不明	関節部-分岐部	L	1	割断?		
156	ウミガメ	不明	関節部-分岐部	L	1	割断?		
157	ウミガメ	不明	分岐部	R	1	割断?		
158	ウミガメ	不明	分岐部	R	1	割断?		
159	ウミガメ	不明	分岐部	R	1			
160	ウミガメ	不明	p-m	L	1			
161	ウミガメ	不明	m	R	1			
162	ウミガメ	不明	m	R	1			
163	サメ(メジロザメ型)	椎骨			1		D20.5, L15.4	
164	サメ(メジロザメ型)	椎骨			1		D18.0, L10.4	
165	サメ(メジロザメ型)	椎骨			1		D12.9, L8.1	
166	サメ(メジロザメ型)	椎骨			1		D35.7, L16.5	無隔壁タイプ
167	サメ(メジロザメ型)	椎骨			1		D32±, L21.2	無隔壁タイプ
168	サメ(メジロザメ型)	椎骨			1		D32±, L18±	無隔壁タイプ
169	サメ(メジロザメ型)	椎骨			1		D29.5, L16.4	無隔壁タイプ
170	サメ(メジロザメ型)	椎骨			1		D27±, L14.6	無隔壁タイプ
171	サメ(メジロザメ型)	椎骨			1		D18.7, L8.6	無隔壁タイプ
172	サメ(メジロザメ型)	椎骨			1		D19.4, L11.2	無隔壁タイプ
173	サメ(メジロザメ型)	椎骨			1		D20.3, L14.6	無隔壁タイプ
174	サメ(メジロザメ型)	椎骨			1		D18.7, L11.4	無隔壁タイプ

第7表 浜坂貝塚資料に含まれる脊椎動物遺体の同定結果(4)

\*1 残存位置略号凡例: m 完存, p 近位端, m 骨幹, d 遠位端, fr 破片, (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p-)・(d-)は骨端未癒合脱落, <p>・<d>は骨端のみ欠損。  
\*2 <>を付したものはNISF算定対象外 \*3 損傷略号凡例: CM カットマーク, SF スパイラルフラクチャー, TM イヌ?の咬み跡

番号	種類	部位	残存位置*1	左右	数*2	加工/損傷*3	計測	備考
175	ウツボ科	歯骨		R	1		大型	
176	ウツボ科	歯骨		R	1		M	
177	ウツボ科	舌顎骨			1			
178	イットウダイ亜科	前鋤蓋骨		R	2			
179	ハタ科(スジアラ型)	歯骨		L	1		L	
180	ハタ科(スジアラ型)	歯骨		R	1		LL	
181	ハタ科(マハタ型)	歯骨		L	1		LL	
182	ハタ科(マハタ型)	歯骨		L	1		ML	
183	ハタ科(マハタ型)	前鋤蓋骨		R	1			
184	ハタ科	前鋤蓋骨		L	1			バラハタ型
185	ハタ科	主上顎骨		L	1		L	
186	ハタ科	擬鎖骨			1		L	
187	ハタ科	角骨		R	1			
188	ハタ科	第1椎骨			1			
189	ハタ型	腹椎			1			
190	ハタ科	尾椎			1			
191	フェフキダイ科	歯骨		R	1		ML	
192	フェフキダイ属(ハマフェフキ型)	前上顎骨		R	1		ML	
193	インダイ属	前上顎骨		L	1		L	
194	ブダイ科	主上顎骨		R	1			
195	ブダイ科	主上顎骨		L	2			
196	ブダイ科	方骨		R	1			
197	ブダイ科	方骨		R	1			
198	アオブダイ属	前上顎骨		L	2		L	
199	アオブダイ属	前上顎骨		R	1		L	
200	アオブダイ属	前上顎骨		L	1		L	
201	アオブダイ属	前上顎骨		R	2		L	
202	アオブダイ属	前上顎骨		L	1		L	
203	アオブダイ属	上咽頭骨		R	2		L	
204	アオブダイ属	上咽頭骨		L	5		ML-L	
205	アオブダイ属	上咽頭骨		R	2		ML-L	
206	アオブダイ属	下咽頭骨			4		ML-L	
207	アオブダイ属	下咽頭骨			1		L	
208	アオブダイ属	歯骨		L	1		M	
209	アオブダイ属	歯骨		R	1		L	
210	アオブダイ属	歯骨		R	1		L	
211	アオブダイ属	歯骨		L	1		L	
212	ニザダイ科	尾椎			1		L	
213	モンガラカワハギ科	歯		<I>			LL	
214	モンガラカワハギ科	歯		<I>			LL	
215	モンガラカワハギ科	方骨		R	1			
216	モンガラカワハギ科	接帯			1		M	
217	ハリセンボン科	前上顎骨			2		L-LL	
218	ハリセンボン科	前上顎骨/歯骨			2		ML-L	
219	ハリセンボン科	歯骨			3		L	
220	ハリセンボン科	歯骨			1		M	
221	ハリセンボン科	棘		<I>				
222	ハリセンボン科	棘		<I>				

## 第6節 遺跡等の再検討と再評価

### 1 浜坂貝塚出土の「第1類a土器」について

浜坂貝塚出土の土器は赤褐色を呈する無文土器が主体をなし、「浜坂調査概要」で第1類aに分類されている。今回の整理作業をとおしてまとめた特徴については、次のとおりである。

口縁部形態は幅広と幅狭がある。前者が多く、後者は2点のみであった。幅広の口縁部のものは、その下端に断面三角形の突帯をもつもの、同じく下端にかすかな盛り上がりをもつもの、粘土を折り返し胴部との境に段差をもつものがある。口縁部下端に突帯を持つものは、全体の約85

パーセントを占める。また、口縁部が明確に肥厚するものは少く、その形状は外反もしくは直口するものがほとんどである。さらに、第1類aに伴うと考えられる底部は丸底と尖底があり、前者がわずかに多い。これらの特徴から第1類aは、仲原式土器の比定できると考えられる。

なお、現在では、「浜坂調査概要」の第1類aと第2類bは仲原式土器とそれに伴う壺形土器として扱われているが、河口は別型式の土器として扱った。

次に、河口は第1類aをどのように捉えていたかを報告書等で追ってみる。「浜坂調査概要」も含め、以下のように記述している。

## 「浜坂調査概要」 1962

第1類aは、「紅褐色粗造の無文土器で、器形は口縁部が肥厚し又は凸帯をつけたもの」としている。そして、考察のなかで第1文化層（第2層・第3層）から「第1類土器と称した赤褐色無文土器のうち、口縁部の断面が三角形に肥厚した土器を主とする一群・・・」が出土し、第2文化層（貝層及び貝層に該当する層）からは「第1類土器と称した赤褐色無文土器のうち、頸部に凸帯を付けた土器」が主として出土したと述べている。しかし、口縁部の断面が三角形に肥厚した土器と頸部に凸帯を付けた土器が具体的にどの土器を指しているかについては、挿図に掲載遺物番号が付していないことから不明である。

また、「宇宿上層の無文土器とこの遺跡の第1類土器の無文土器とは三角形の断面を有する口縁部の存在や、口の小さな壺形に近い土器の存在等類縁関係が深い。」とした。さらに挿図に「喜念上下」とキャプションを付けた喜念貝塚出土の宇宿上層式と思われる土器を掲載して宇宿上層式との関係性を強調している。なお、「喜念上下」というキャプションは、埋文センターが保管している喜念貝塚出土の土器の注記と同じであることから、河口が喜念貝塚で採取したものと考えられる。

## 「犬田布貝塚」 1993<sup>33</sup>

犬田布貝塚出土土器の編年を示す中で、浜坂貝塚の第1類に分類した無文土器を「・・・焼成がよく、宇宿上層式に比べて硬質である。・・・口縁部は幅が広く断面が三角形に肥厚するもの、頸部に凸帯を巡らすもの・・・」とし、第1類の無文土器と宇宿上層の無文土器とは幾分区別しているかのような記述がみられる。

## 「浜坂貝塚」 2005<sup>34</sup>

浜坂貝塚の無文土器について「上層からは紅褐色粗造の無文土器（宇宿上層式土器）を主とし・・・」と述べ、明確に浜坂貝塚出土の第1類aの無文土器を宇宿上層式と示した。

このように、河口は浜坂貝塚の無文土器を論ずる際には宇宿上層式土器を対比させてきた。浜坂貝塚の8月9日の発掘日誌（資料1）には仲原式と思われる断面図に続いて「宇宿上層式に該当する様に思われる。」との記述があり、調査当初から宇宿上層式との関連性を意識していたようである。そして、最終的には浜坂貝塚の紅褐色粗造の無文土器（第1類a）を宇宿上層式土器とした。浜坂調査概要では第1類aは「頸部に凸帯を付けた土器」から「口縁部の断面が三角形に肥厚した土器」への移行を想定しているが、この移行は宇宿上層式内での移行であると考えていたこととなる。沖縄の土器にも造詣が深かった河口が浜坂貝塚の第1類aの無文土器については、仲原式土器との関連を述べていない理由もここにあると思われる。

## 2 浜坂貝塚の時期について

浜坂貝塚の主体となるのは仲原式土器であり、この土

器との共伴性から時期を特定しようとする試みや研究が以下のようになされてきた。

河口は「浜坂調査概要」の中で、第1類の赤褐色無文土器のうち、口縁部の断面が三角形に肥厚した土器については共伴する土器を根拠に「縄文文化の晩期から弥生に至る相当長い間にわたる時期のものであると推定」とし、頸部に凸帯を付けた土器を共伴する土器をもって「縄文晩期の初頭頃」としている。

1984（昭和59）年、上原・当真は「仲原式土器の提唱について」<sup>35</sup>において浜坂貝塚出土の外耳土器が黒川式土器と共伴していることを根拠の一つとして、「仲原式土器が縄文晩期に属する黒川式土器に並行する。」と結論付けた。

1992（平成4）年、大島郡住用村に所在するサモト遺跡で発掘調査が行われ、浜坂貝塚出土の赤褐色無文土器と同タイプの「無文系土器」が出土している。報告書<sup>36</sup>では、その時期について弥生中期相当の土器が出土していないこと、黒色研磨土器が出土していること等を理由に「サモト遺跡の無文系の土器は縄文期で、晩期の時期に相当」と記している。なお、報告書では、浜坂貝塚出土の土器16点が掲載されている。

1993（平成5）年、河口は「犬田布貝塚」<sup>37</sup>で同遺跡出土土器の編年を示す中で、「浜坂調査概要」の第2類bを大島郡与論町上城遺跡出土の壺形土器と同類の土器として取り上げた。それまで喜念I式と考えられてきた第2類b土器が喜念I式と共伴せず、下層から単純に出土していることを理由に浜坂下層式（上城式）と型式設定を行い、「縄文晩期初頭かそれ以前の時期に該当」とした。また、同時に第1類aに分類した無文土器をその共伴関係から「縄文時代晩期中頃から弥生時代中頃に該当する時期」とした。さらに、外耳土器や須玖式土器との関係で無文土器の終末期を弥生時代中期とした。

同年、堂込は「奄美諸島の縄文時代晩期から弥生時代相当期の土器編年」<sup>38</sup>で、それまでの奄美諸島での発掘調査成果を見直し、問題点を整理する中で土器編年を行った。そして、「浜坂調査概要」の第1類aの中の口縁部下部断面が三角形となる土器と第2類b土器を弥生時代前期に位置付けた。

1994（平成6）年、甲元は「トカラ列島の文化」<sup>39</sup>で「喜念式土器から宇宿上層式土器の流れの中に、黒川式とか須玖系といった九州系土器が新たに加わってゆく姿を認めることができる。」とし、大まかな時代観を示した。

1998（平成10）年、堂込は「南西諸島中部圏の弥生時代相当期の土器文化」<sup>40</sup>の中でウフタⅢ遺跡出土の壺形土器をその出土状況から弥生時代前期に位置付け、この壺形土器は浜坂貝塚出土の第2類bと近似しているとし、型式変化から弥生前期の中頃とした。

2015（平成27）年、新里は「各地の弥生土器及び並行期土器群の研究 沖縄・奄美」<sup>註10</sup>で浜坂貝塚を含めた仲原式土器の時間幅を「南部九州地域の黒川式新段階（無刻目突帯文土器段階）～弥生時代前期の間に並行すると考えられる。」とした。

なお、浜坂下層式土器と設定した第2類bについて河口は「下層から単純に出土しており、」と記述している点を検証した。前述したが、遺物の取り上げは層位毎ではなく地表からの深さ毎である。第2類bはトレンチ西端のⅠ区の下層にあたる地表から100～120cmの深さで出土しているが、同区・同深度で同時に嘉徳Ⅱ式と考えられる土器が出土していたことを今回の整理作業で確認した。さらに、第2類bはⅡ区・Ⅲ区では地表から20～40cmの深さで出土している。しかし、埋文センターが保管している調査当時の土層断面図を確認してもトレンチの西端から東端まで連続した地層はなく、細かく分層された各層がどのように対応するかについての注記等は残されていなかった。さらに、Ⅳ区では地表から80cmの深さまで一括で取り上げている中に第2類bが含まれる。これらのことから「下層から単純に出土」したことについては、十分な検証はできなかった。

改めて、浜坂貝塚出土で仲原式土器以外の土器を列記すれば、嘉徳Ⅱ式土器、黒川式土器新様式（干河原段階）、刻目突帯文土器、入来ⅠもしくはⅡ式土器となり、縄文時代後期から弥生時代中期に至る時期に該当する。また、浜坂貝塚の主体をなす仲原式土器に先行する宇宿上層式土器・喜念Ⅰ式土器や後出する阿波速浦下層式土器も確認されていないことから、浜坂貝塚出土の仲原式土器は極めて限られた時期に限定されると考えられる。これまでの研究を踏まえると浜坂貝塚の主体となる時期は、黒川式土器新様式（干河原段階）～弥生時代前期が妥当と考えられる。さらに、浜坂貝塚の仲原式は幅広い口縁部形態のものを主とすることから、時間幅が狭まることも考えられる。<sup>註11</sup>

### 3 再評価

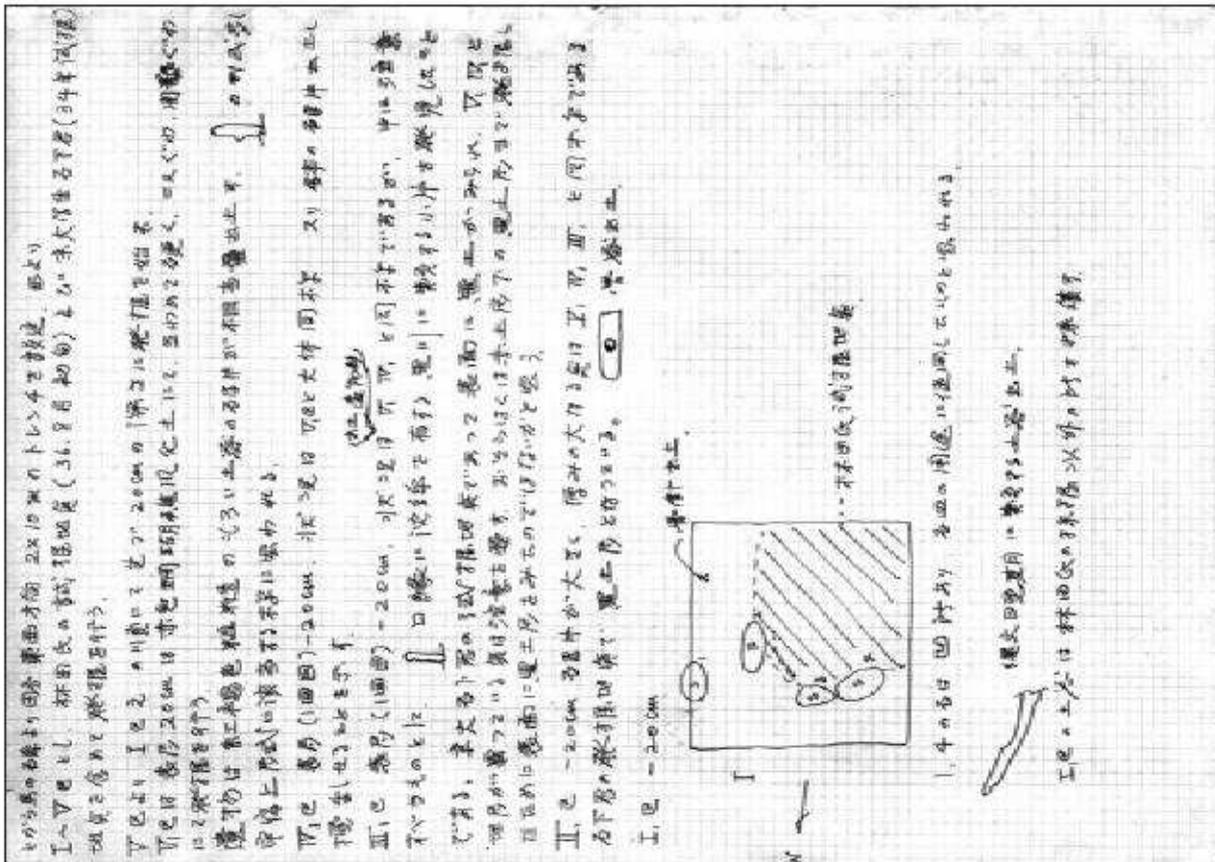
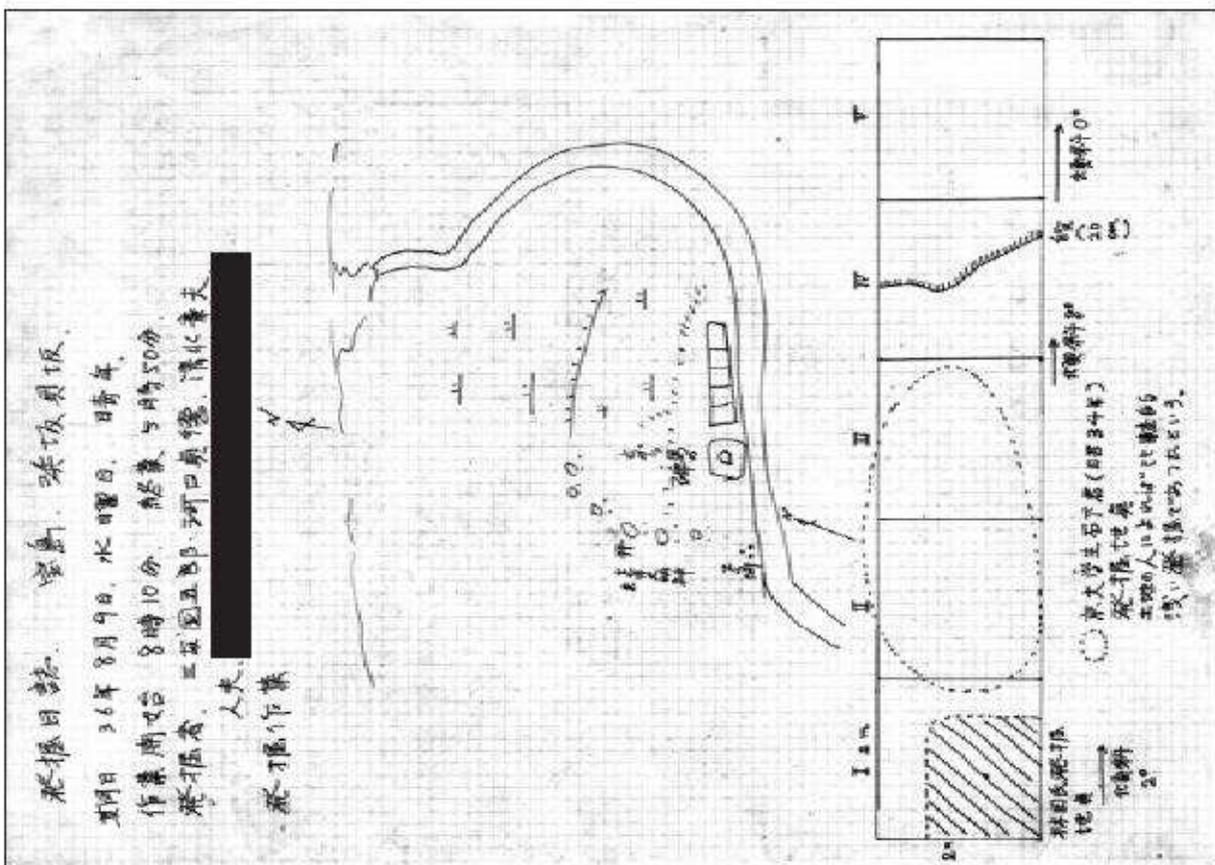
1961（昭和36）年に実施した調査は、十島村において本格的な学術調査として第一歩を記したものである。これを契機に宝島では1964（昭和39）年に大池遺跡が発見され、1973（昭和48）年には熊日「海上の道」学術調査団の調査を経て、1993（平成5）年からの国立歴史民俗博物館の調査へと繋がっていく。河口も「浜坂調査概要」で「恐らく宝島は南島文化圏の北端で本土文化圏との接触線上に位置するものではなかろうか。」と記しているように、昭和30年代において南島文化と本土文化の交流という視点で発掘調査を行ったことは特筆すべきことである。

### 一注一

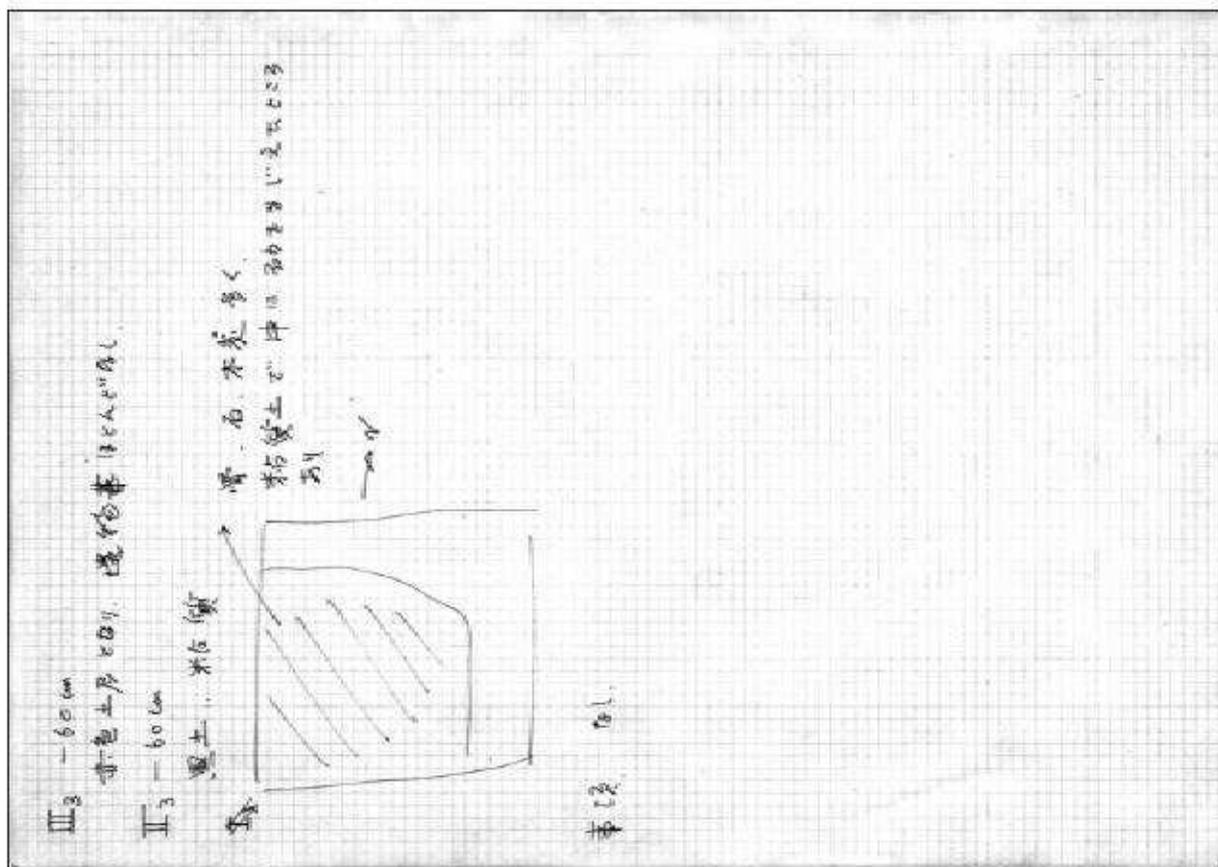
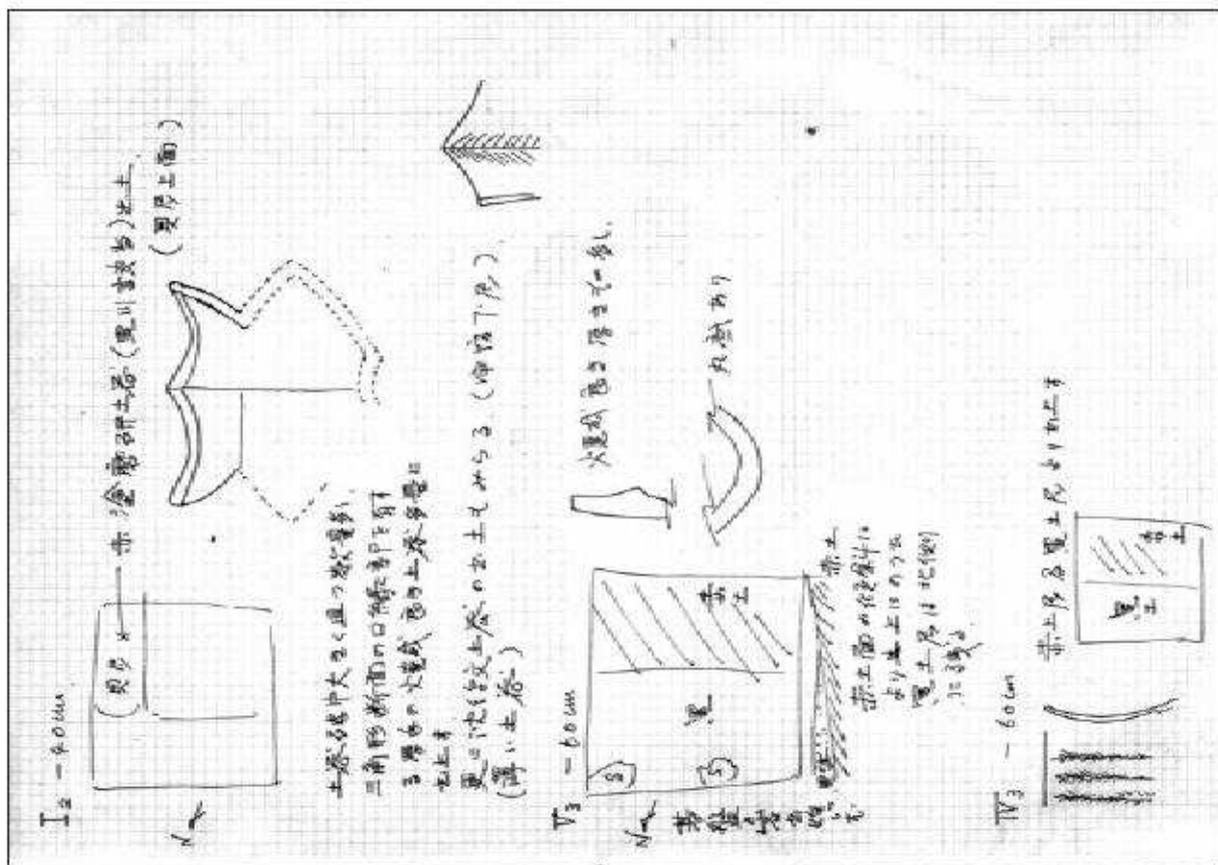
- 注1 三友国五郎・河口貞徳 1962 「宝島浜坂貝塚の調査概要」『埼玉大学紀要』社会学編第11巻 埼玉大学
- 注2 樋泉岳二 2002 「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」『先史琉球の生業と交易』
- 注3 河口貞徳 1993 「大田布貝塚」『鹿児島県文化財調査報告書』第39集 鹿児島県教育委員会
- 注4 河口貞徳 2005 「浜坂貝塚」『先史・古代の鹿児島 資料編』 鹿児島県教育委員会
- 注5 上原静・当真嗣一 1984 「仲原式土器の提唱について」『紀要』沖縄県教育委員会文化課
- 注6 住用村教育委員会 1993 「サモト遺跡」住用村埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 注7 堂込秀人 1993 「奄美諸島の縄文時代晩期から弥生時代相当期の土器編年」『潮見浩先生退官記念論文集』
- 注8 甲元真之 1994 「トカラ列島の文化」『縄文文化の研究 6 続縄文・南島文化』
- 注9 堂込秀人 1998 「南西諸島中部圏の弥生時代相当期の土器文化」『環東中国海沿岸地域の先史文化』熊本大学文学部考古学研究室
- 注10 新里貴之 2015 「各地の弥生土器及び並行期土器群の研究 沖縄・奄美」『考古調査ハンドブック12 弥生土器』佐藤由紀男編 ニューサイエンス社
- 注11 新里貴之は注10の中で、仲原式は口縁部形態による細分の可能性を言及している。

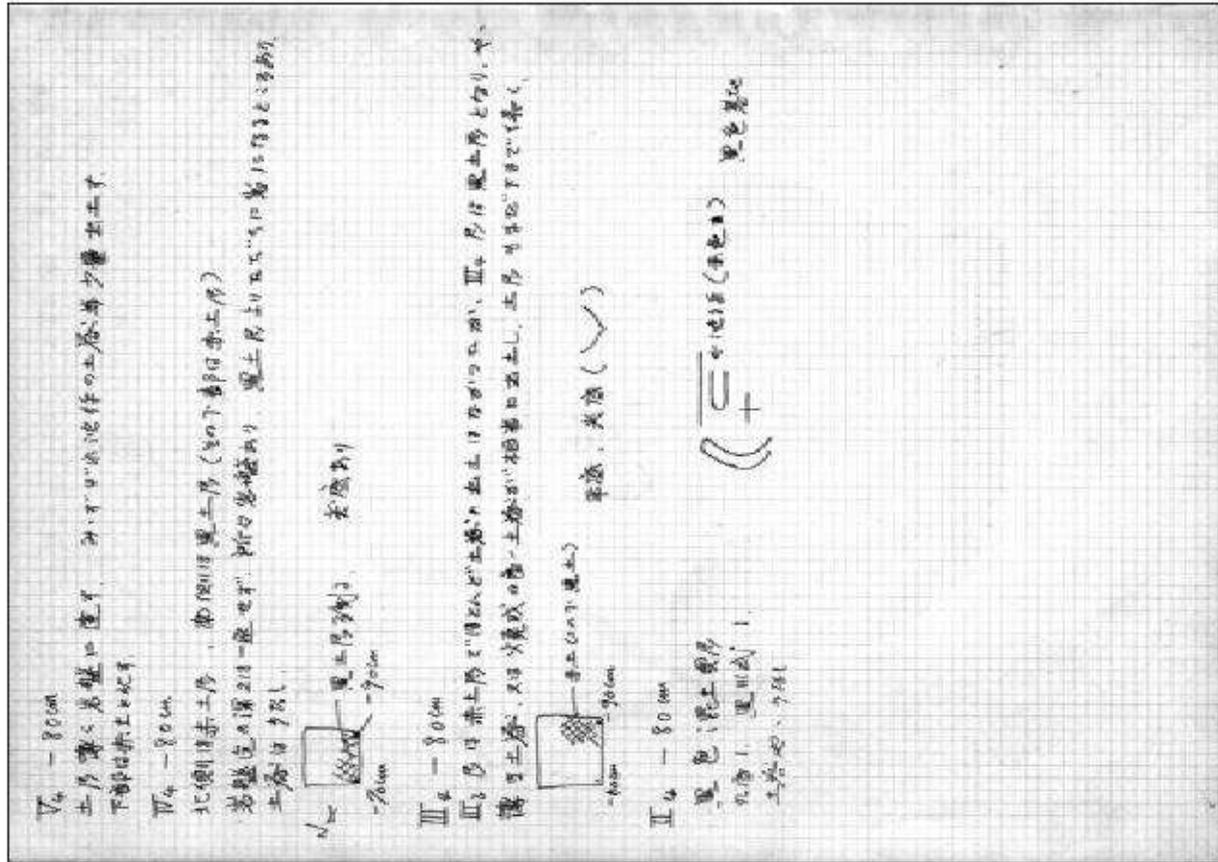
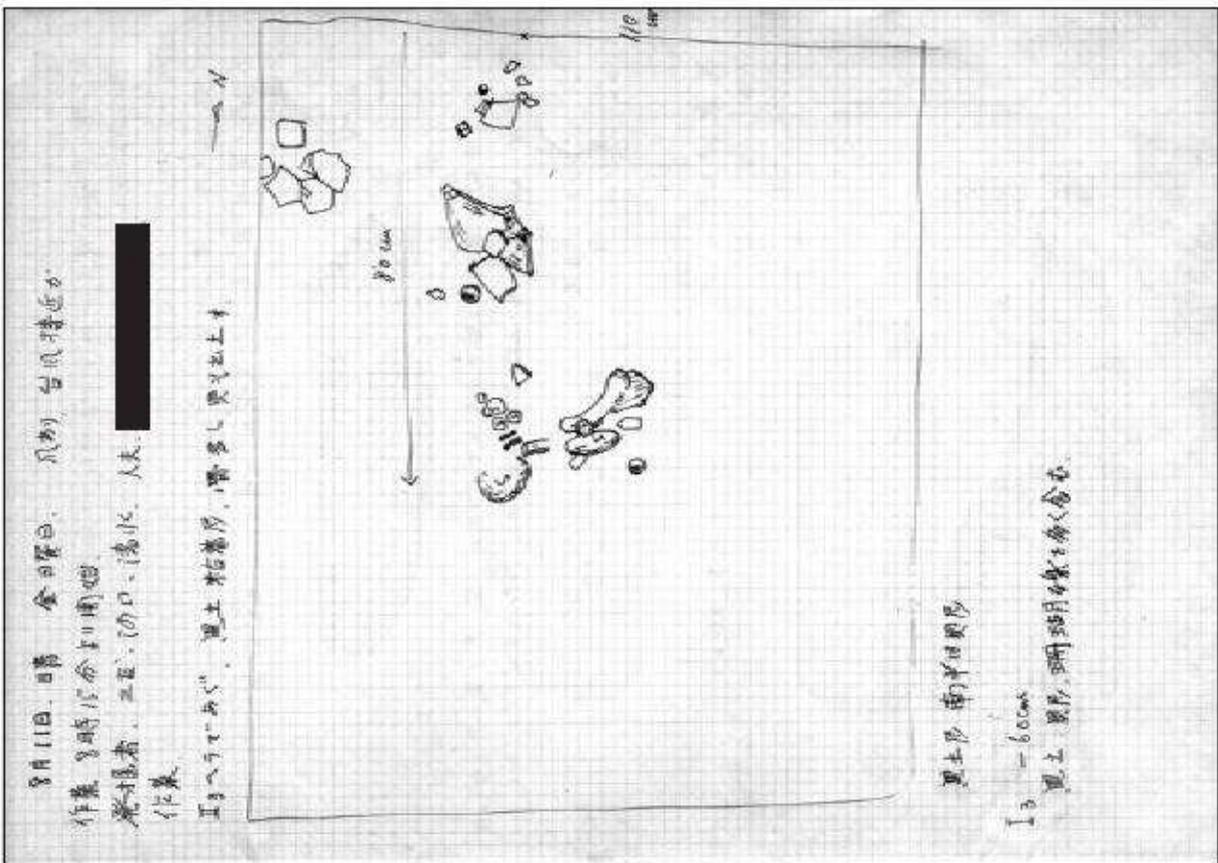
### 一参考文献一

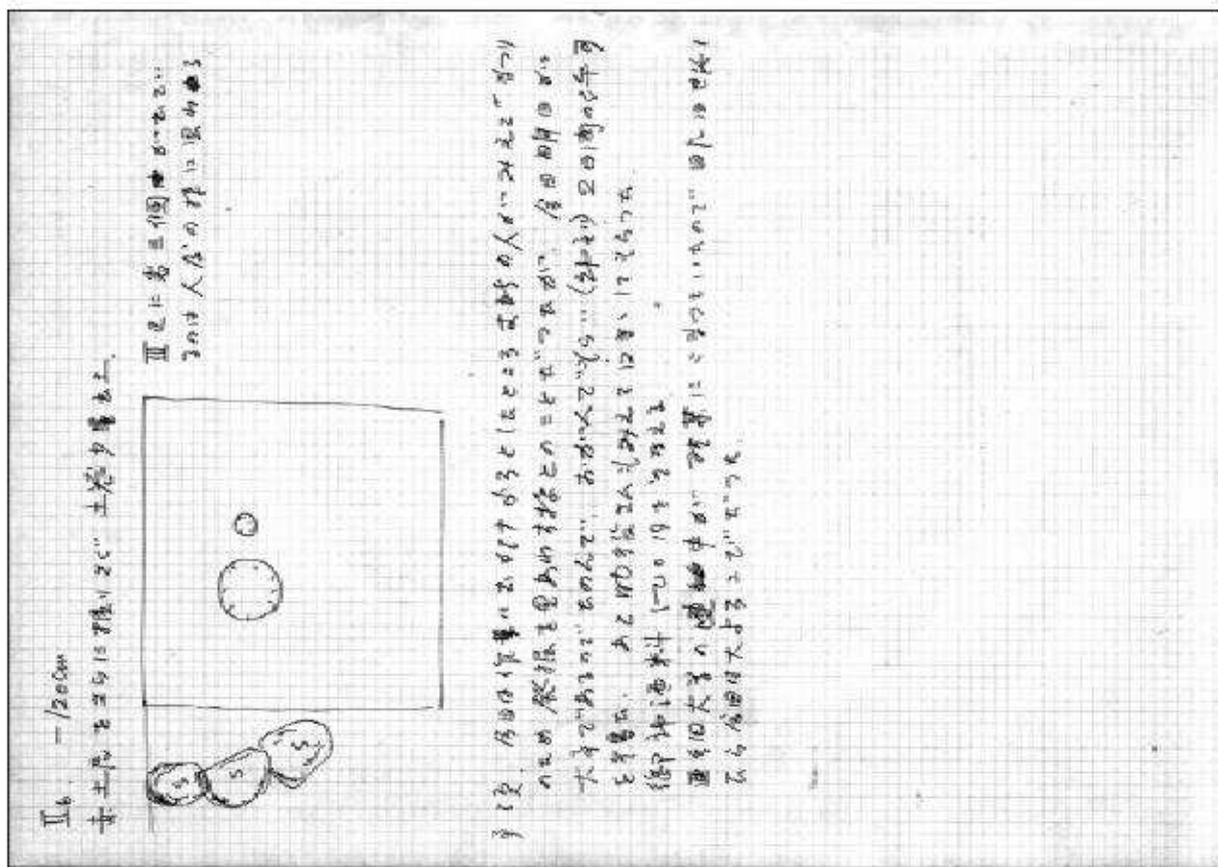
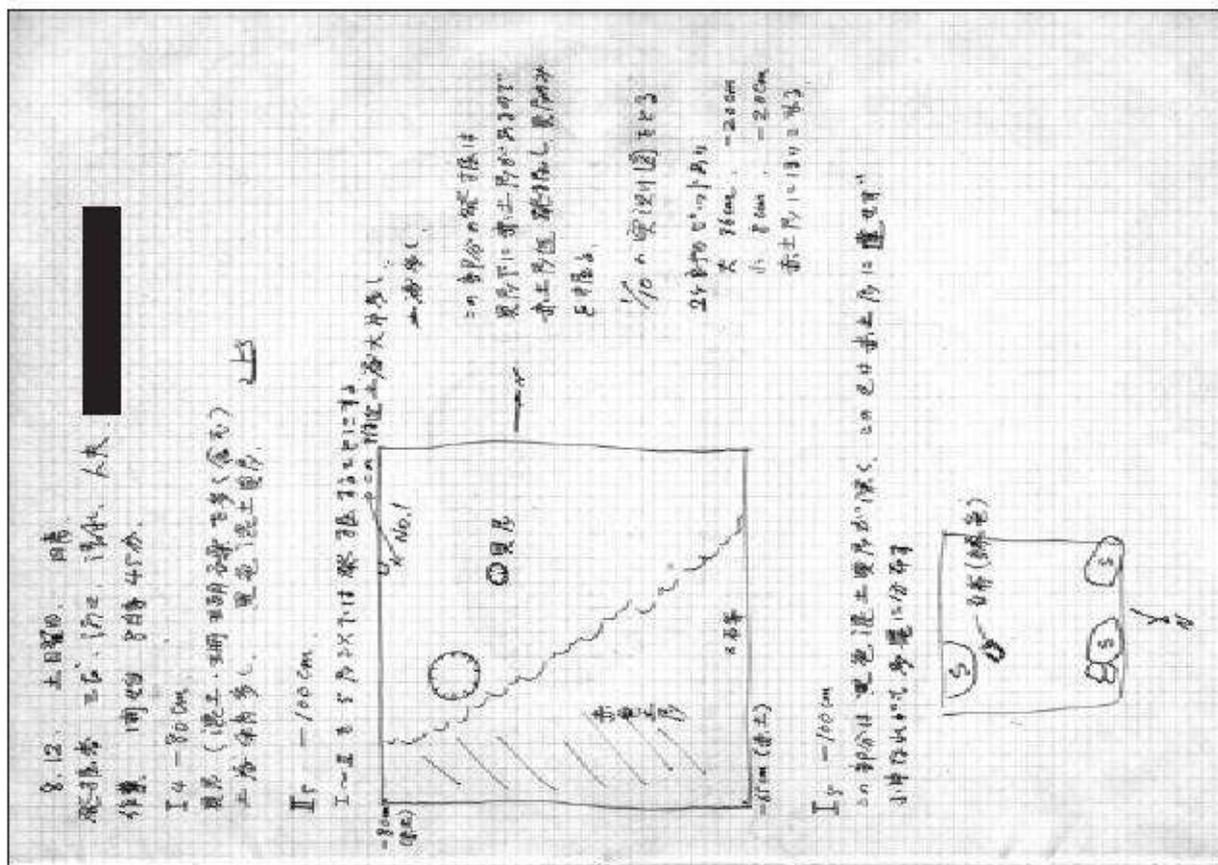
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002 『計志加里遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（38）
- 河口貞徳 1988 「浜坂貝塚」『日本の古代遺跡 38 鹿児島』保育社
- 新里貴之 2015 「大隅諸島・トカラ列島・奄美諸島の弥生土器・弥生系土器について」『鹿児島考古』第45号 鹿児島県考古学会
- 宝島大池遺跡発掘調査班 1997 『トカラ列島宝島大池遺跡』国立歴史民俗博物館研究報告第70集
- 龍郷町教育委員会 2002 『ウフタⅢ遺跡』龍郷町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書
- 十島村教育委員会 1994 『トカラ列島の考古学的調査』十島村埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 十島村誌編集委員会 1995 「十島村誌」十島村
- 堂込秀人 1997 「南九州縄文晩期土器の再検討」『鹿児島考古』第31号 鹿児島県考古学会

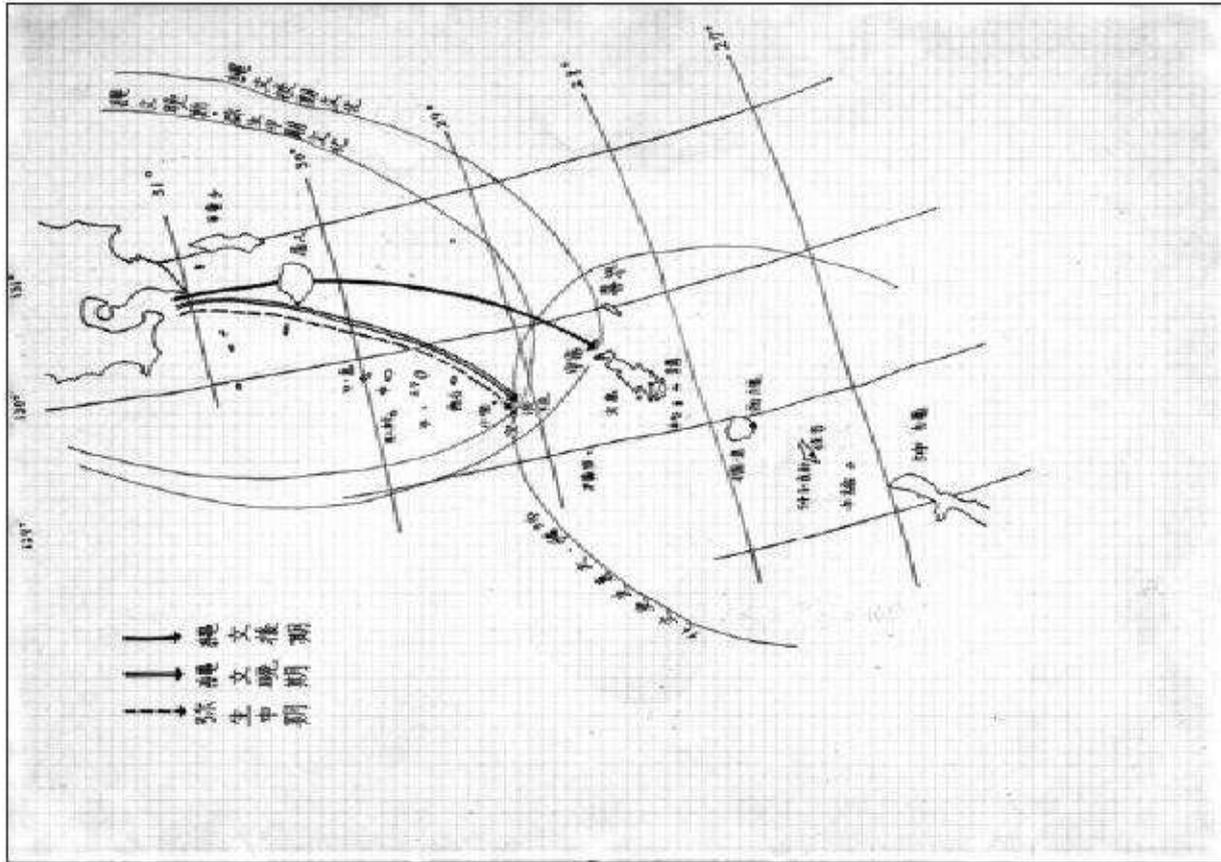












8月13日 日曜 日新  
 寒村 五五、河口、清水、入夫、  
 飛雁、作事、8時作業開始

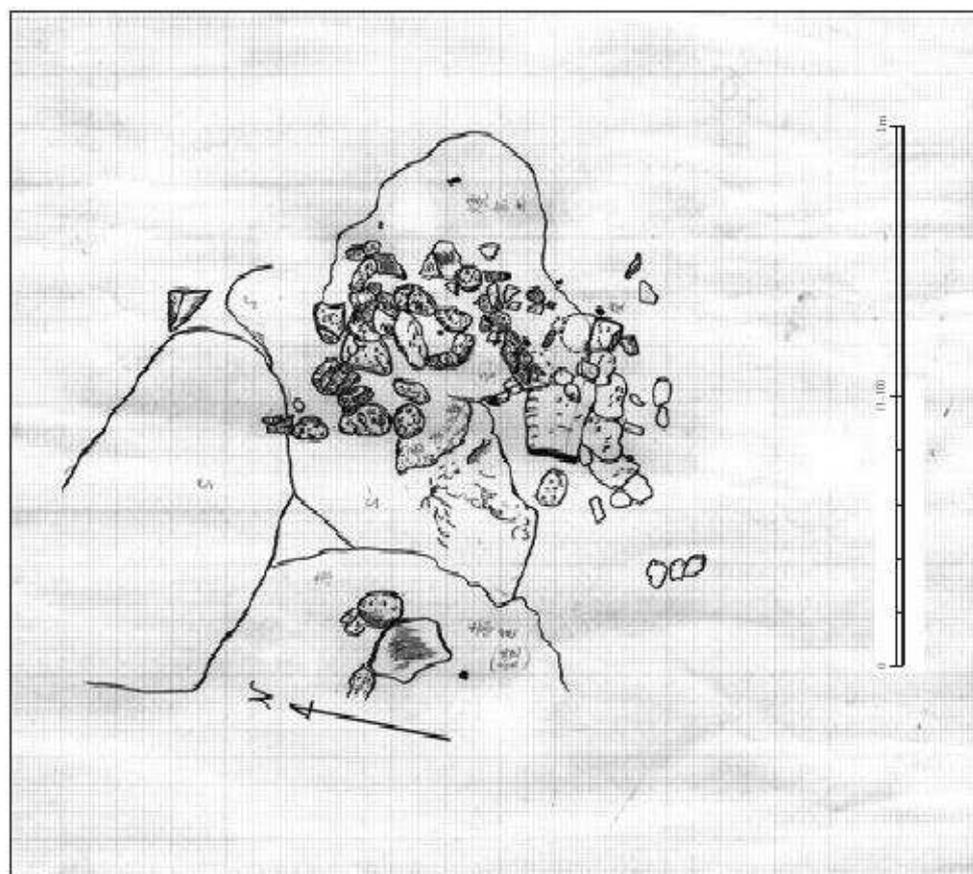
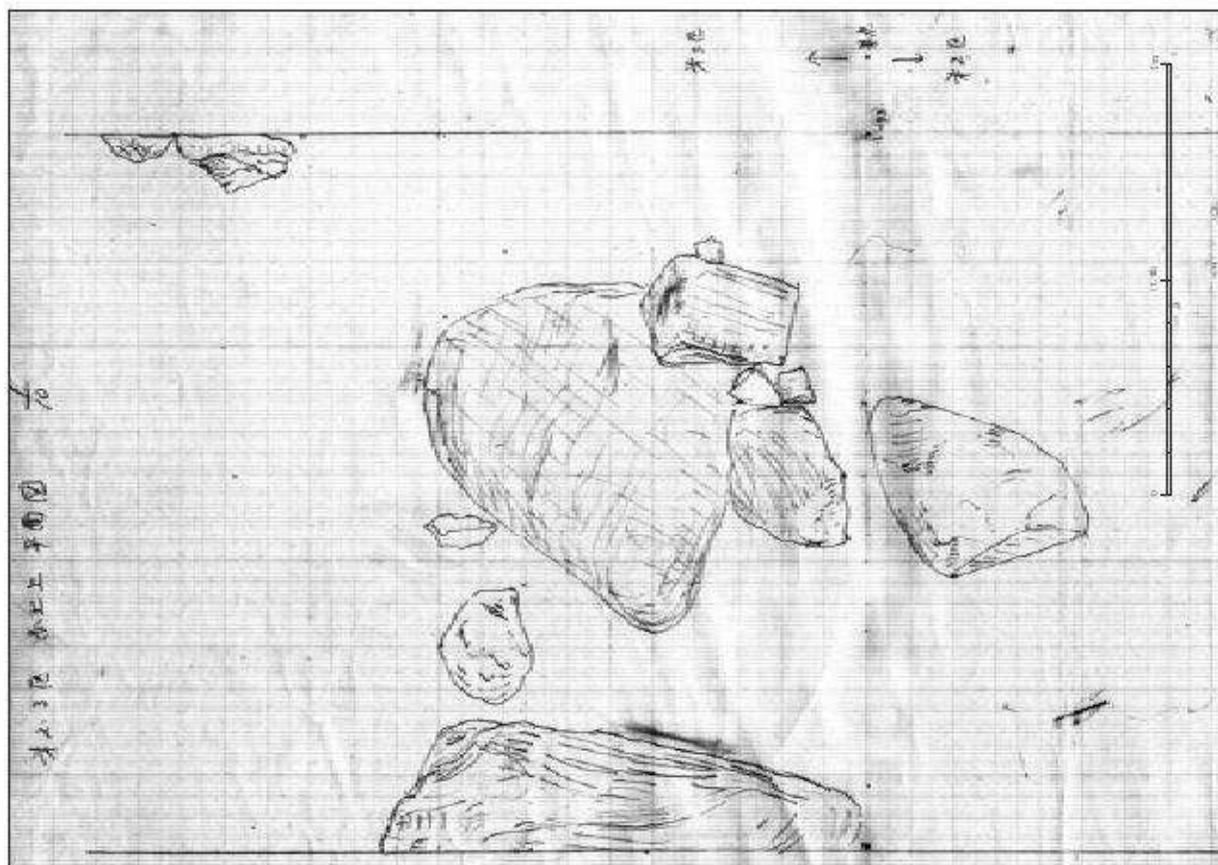
I 6 - 120cm  
 黒色泥土焼房。(赤土層中にて一處見す)  
 中根部は火口跡、細研石の基を阻み、初一丁を埋居るが、火土工で、灰の多  
 かり、灰土が流れて、奥は、道をふさぐ。土は、七土と、墨の如  
 色、毎日燻草で、二斗水の水を、(七土)等、而は、熱を、覆つた云々の云々云々

南側、田口、あり  
 赤土、利用、(在、信、展、と  
 器、あり)

南側、田口、新、面、石、(田、園、等)  
 五色の、器、作、作、り、に、て、一、等、五、五、(一、) あり

III 6 自然の、岩、石、を、石、割、面、に、三、個、の、器、に、置、て  
 西側、新、面、1/10  
 奥、中、に、研、石、の、基、を、(七、土、) 等、置、て、居、る。  
 一、能、に、圓、形、日、冊、互、用、の、器、を、多、く、居、る。

発掘日誌6・文化圏概念図



遺構実測図

## 第三章 朝仁貝塚

### 第1節 調査の経過

朝仁貝塚の発掘調査は、都市計画による道路建設及び埋め立てを起因として実施された。当時の名瀬市教育委員会は発掘調査を河口に依頼し、1969（昭和44）年12月6日から11日までの6日間にわたって実施した。貝塚は隣接して3か所に所在することから、北側からA貝塚・B貝塚・C貝塚とした。調査は各貝塚を横断するように、A貝塚には2×8m、B貝塚には2×3m、C貝塚には2×3mのトレンチを設定して調査を進めた。

A貝塚は6層からなり、2層から大形巻貝とともに石器・須恵器・青磁・白磁・現代陶器・ガラス器が出土している。B貝塚はA貝塚の南東60mに位置し、4層からなる。1層が遺物包含層で、出土遺物はA貝塚と同じであるが、須恵器が比較的多い。C貝塚はA貝塚の南南東93mに位置し、5層からなる。1・2・3層が遺物包含層で、出土遺物はA貝塚と同じである。また、B貝塚の南側35mの位置を調査し、炉跡2基と2個の石を配した凹所を検出した。石鍋片が出土したという記録もあるが、埋文センターが管理している遺物の中では確認できなかった。また、野帳にはピットが4基検出されたと推測される略図が記され、平安時代の住居跡と推測している。

報告書では朝仁A・B・C貝塚はいずれも遺物の出土状況から、周辺の遺跡が破壊され、露呈された遺物が現地表面に堆積された貝塚であると結論付けている。

### 第2節 再整理の方法

朝仁貝塚に関する報告は、日本考古学年報21・22・23と鹿児島考古第7号に掲載された「朝仁貝塚調査報告書」だけである。前者には調査概要が10行程度記載されている。後者には3ページにわたって報告がなされているが、調査箇所や出土遺物の実測図等は示されていない。そこで、調査箇所の特異と出土遺物の分類及び遺物実測を行い、その結果を掲載することとした。

また、埋文センターが管理しているパンケース3箱の遺物の他に奄美市立奄美博物館がパンケース4箱分の遺物を管理している。どのような経緯で河口と奄美博物館の両方で遺物の管理を行うようになったかは不明である。本報告書では埋文センターが管理している遺物について実測し、掲載する。

なお、奄美市立奄美博物館が管理している遺物の概略は次のとおりである。

- パンケース1 青磁（13～16世紀）  
南蛮陶器（15～16世紀）  
須恵器 近世陶器

- パンケース2 近世陶器
- パンケース3 近世・近代陶器
- パンケース4 貝（サラサバティール・シャコガイ等）  
獣骨

### 第3節 遺跡の位置と環境

朝仁貝塚の位置する奄美大島は、薩南諸島の一部をなす奄美群島の北部にある。その面積は、約720㎢を測る。奄美大島は湯湾岳を最高峰として南部は急峻な山々で形成され、海岸の多くはリアス式海岸となる。また、島内を覆う深い森林は、面積の85パーセントに及ぶ。反対に北部の笠利半島は平坦な地形となる。

朝仁貝塚は名瀬市朝仁前間及び伊間に所在するが、2006（平成18）年3月に名瀬市、住用村、笠利町が合併し、現在は奄美市名瀬朝仁町となっている。旧名瀬市は奄美大島の中部に位置し、東は大島郡龍郷町、西は大島郡大和村、旧住用村に接し、北は東シナ海、南は太平洋に面し、中央部は山林・原野で占められている。奄美市の人口は平成29年現在で、約42,000人である。

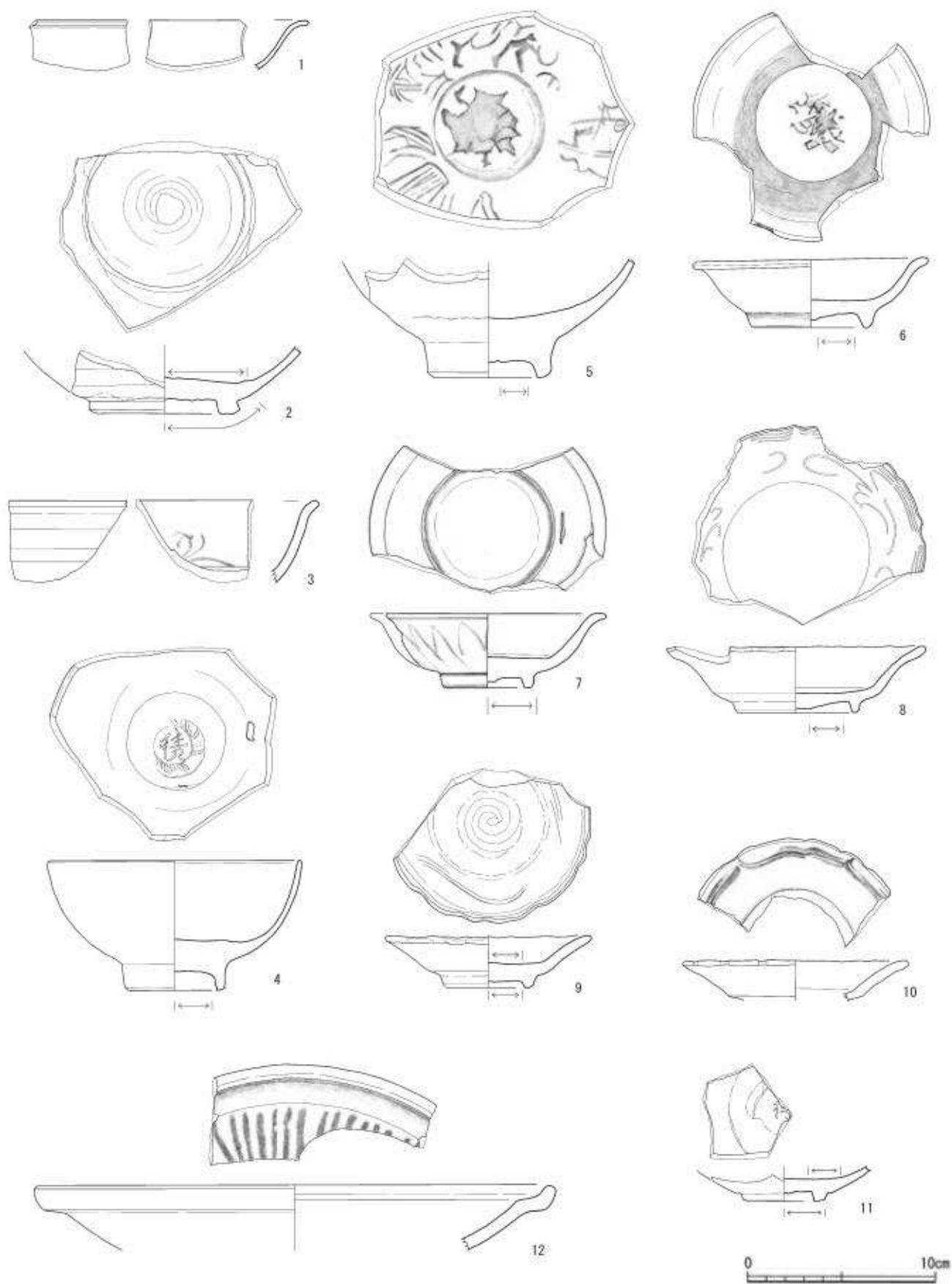
朝仁貝塚は、発掘調査時の県道湯湾思勝名瀬線の南側、現在の県道79号名瀬瀬戸内線の北側に位置する。奄美市役所から直線距離で北西へ約2.5kmを測る。三方を山に囲まれ、北側だけが海に面した狭小な沖積地に遺跡は位置する。1969（昭和44）年の調査当時、朝仁貝塚の周辺は県道より低い畑地で、県道から南側へ緩やかに下がる地形であったが、現在、朝仁貝塚周辺は住宅地となっており、その一角に奄美市指定史跡を示す看板が立てられている。

旧名瀬市内にも様々な遺跡が所在するが、中でも著名な遺跡が小湊フワガネク遺跡である。1996（平成8）年に発見されて以来、数次に亘って確認調査が実施されてきた。その結果、おおよそ6～8世紀（約1,500～1,300年前）に位置づけられる土器や貝器などの多数の遺物が出土した。特に、大量の加工されたヤコウガイ貝殻破片から、貝匙の製作過程が解る資料が提供された。2010（平成22）年8月、小湊フワガネク遺跡は、国史跡として指定された。

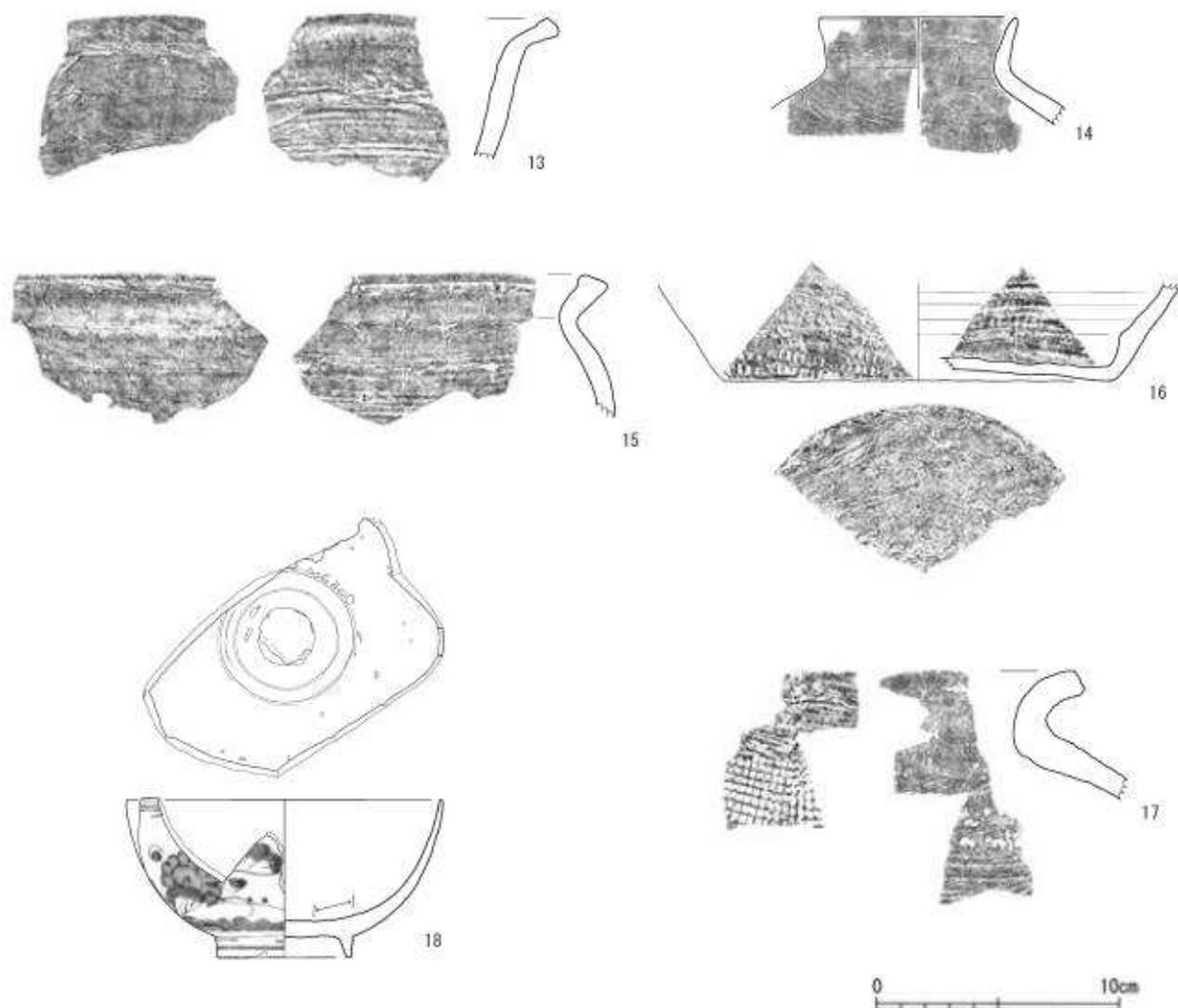
### 第4節 追加資料

#### 1 遺構等

前述のとおり既報告には図面等は掲載されていないが、奄美市立奄美博物館が保管している資料の中に「朝仁貝塚調査報告書」（1973『鹿児島考古』第7号）の原稿と推察されるものがあつた。手書きの原稿で、鹿児島考古第7号に掲載された内容と全く同じである。さらに、位



第1図 朝仁貝塚出土遺物(1)



第2図 朝仁貝塚出土遺物(2)

位置図等も添付してあった。位置図は何らかの理由で鹿児島考古への掲載が割愛されたものと考えられる。河口の作成した考えられる「朝仁集落」と「朝仁貝塚」の位置図を資料として掲載した。

また、発掘調査中に記した野帳には住居址と推定した遺構の存在を窺わせる記述及び略図があるが、遺構の実測図等は確認できなかった。

## 2 遺物(第1図～第2図1～18)

埋文センターが管理している朝仁A・B・C貝塚の出土遺物点数は、次のとおりである。龍泉窯の青磁は31点で、碗・皿・盤がある。色調はオリーブ色を基調としたものが多い。内、碗の底部4点は、焼成が極めて悪い。

他に白磁2点、カムイヤキ8点、中世須恵器1点、近

世陶磁器30点、現代陶器1点であった。河口の記した調査時の野帳には石鍋片も数点出土したとの記録があるが、埋文センターが保管している遺物の中では確認できなかった。ここでは、抽出した18点の遺物を実測し、掲載する。

白磁は2点掲載した。1は器壁が薄く、口縁端部が外反する皿と考えられる。16世紀頃に比定できる。2は口縁部と体部のほとんどが欠損する碗である。高台と体部下位、内面見込みは露胎し、部分的に赤く発色する。底径7.2cmを測る。14世紀頃に位置づけられる。

3～5は龍泉窯青磁碗である。3は口縁部で、草花文が内面に施される。4は口径13.3cm、底径5.0cmを測る。

底部は分厚く、体部は緩やかに丸味をもって立ち上がる。外面は無文で、内面には「積」と考えられる文字が型押

しされている。また、厚く掛けられた釉薬が一部及ばない所もある。5は底径5.8cmを測る。体部は緩やかに湾曲しながら立ち上がるが、口縁部は欠損する。内面には印花文が施され、外面には粘土の接合痕が残る。高台内面は露胎する。体部や底は分厚く、全体的に重量感がある。

6～11は龍泉窯青磁皿で、8・9・10は稜花皿である。6・7は腰部が丸味をもちながら立ち上がり、口縁部は外反する。6は口径12.1cm、底径6.2cm、器高3.9cmを測る。見込みには不明瞭な印花文が施される。高台まで釉薬がかかるが、体部外側には釉薬がかからない所もある。7は口径12.2cm、底径4.6cm、器高4.1cmを測る。体部外側には鎗連弁が見られるが、内側は無文である。高台畳付と内面には釉薬がかからない。体部内側には釉薬が十分にかからず、一部くぼむ箇所がある。8は口径13.8cm、底径6.4cm、器高3.6cmを測り、内面には草花文が施される。他の皿はオリーブ色系の色調であるが、8は暗灰黄色を呈する。腰部に段をもち、口縁部は外反する。高台内面には釉薬がかからない。9は口径10.6cm、底径4.4cm、器高2.9cmを測る。腰部に段をもち、口縁部まで直線的に伸びる器形である。体部内側と口縁部内側に口唇に沿って篋描きによる文様が施される。見込みに轆轤による調整痕が残り、高台内面とともに釉薬がかからない。10は高台を欠損し、口径は11.6cmである。口縁部内側には口唇に沿って篋描きによる弧状の文様を施す。腰部に段をもち、直線的の伸びるが、口縁部は若干外反する。

11は体部下位と高台が残存する。底径は4.4cmを測

る。体部は丸味をもって伸びると考えられる。6～11は、いずれも15～16世紀頃に位置づけられる。

12は龍泉窯青磁の鏝縁盤である。鏝の先端をつまみ上げ、体部はさほど膨らまず高台へ向かう器形と考えられる。内側に連弁文を施し、外側は無文である。15～16世紀のものと考えられる。

13～16はカムイヤキである。13は胴部から口縁部に向かって直線的に開き、口縁部は外反する。口唇部は平坦に仕上げるが、やや外側に広がる。内外面ともナデ調整を施すが、外面は丁寧である。器形から盤と考えられる。14の口縁部はやや外反し、屈曲部から口唇部にかけては器壁が細くなる壺である。内外面とも丁寧な器面調整である。口径は8.0cmを測る。15の口縁部は断面方形を呈し、外反する。口唇部の平坦部は両側へ広がる。内面の屈曲部には稜をもつ。口径と胴部最大はさほど差がないことから鉢と考えられる。内外面ともナデ調整である。16は底部で、その底径は16cmを測る。胴部下位には格子目状の当て具痕が残ることから、タタキ後にナデ調整が行われたことがわかる。

17は壺である。断面が方形となる口縁部は強く外反する。外面には格子目状の当て具痕を残す。色調・胎土が13～16のカムイヤキとは異なることから中世須恵器と考えられる。

18は近世陶磁器である。口径12.8cm、底径5.4cm、器高6.6cmを測る。見込みは中心部分の径約2cm程度釉薬がかかる。部分的に内外面とも釉薬が及ばない箇所もあり、仕上がりは雑である。

第1表 朝仁貝塚出土遺物観察表

種別 図番号	掲載 番号	種別	器種	出土貝塚	部位	法量 (cm)			文様・調整		胎土の色調	備考
						口径	底径	器高	外面	内面		
第1図	1	白磁	碗	C	口縁	-	-	-	-	-	灰白	
	2	白磁	碗	A	底部	-	7.2	-	外底無釉	内底無釉	灰白	
	3	龍泉窯青磁	碗	A	口縁	-	-	-	-	草花文	緑灰	
	4	龍泉窯青磁	碗	A	完形	13.3	5.0	7.0	外底無釉	「魏」の型押し	オリーブ灰	
	5	龍泉窯青磁	碗	C	底部	-	5.8	-	外底無釉	印花文	オリーブ灰	
	6	龍泉窯青磁	皿	A	完形	12.1	6.2	3.9	外底無釉	印花文	灰オリーブ	
	7	龍泉窯青磁	皿	A	完形	12.2	4.6	4.1	鎗連弁・外底無釉	-	オリーブ灰	
	8	龍泉窯青磁	稜花皿	A	完形	13.8	6.4	3.6	外底無釉	草花文	暗灰黄	
	9	龍泉窯青磁	稜花皿	C	完形	10.6	4.4	2.9	外底無釉	篋描文	明オリーブ灰	
	10	龍泉窯青磁	稜花皿	C	口縁・胴部	11.6	-	-	-	篋描文	灰白	
	11	龍泉窯青磁	皿	A	底部	-	4.4	-	外底無釉	内底輪状釉剥ぎ	灰白	
第2図	12	龍泉窯青磁	鏝縁盤	-	口縁	28.0	-	-	-	連弁文	オリーブ灰	
	13	カムイヤキ	盤	C	口縁	-	-	-	ナデ	丁寧なナデ	灰	
	14	カムイヤキ	壺	C	口縁	8.0	-	-	丁寧な器面	丁寧な器面	灰	
	15	カムイヤキ	鉢	-	口縁	-	-	-	ナデ	ナデ	灰	
	16	カムイヤキ	甕	B	底部	-	16.0	-	タタキ後ナデ	ナデ	灰	
	17	須恵器	壺	B	口縁	-	-	-	格子目状の当て具痕	ナデ	灰	
	18	近世陶磁器	碗	A	完形	12.8	5.4	6.6	肥前の染付	-	灰白	

## 第5節 再評価

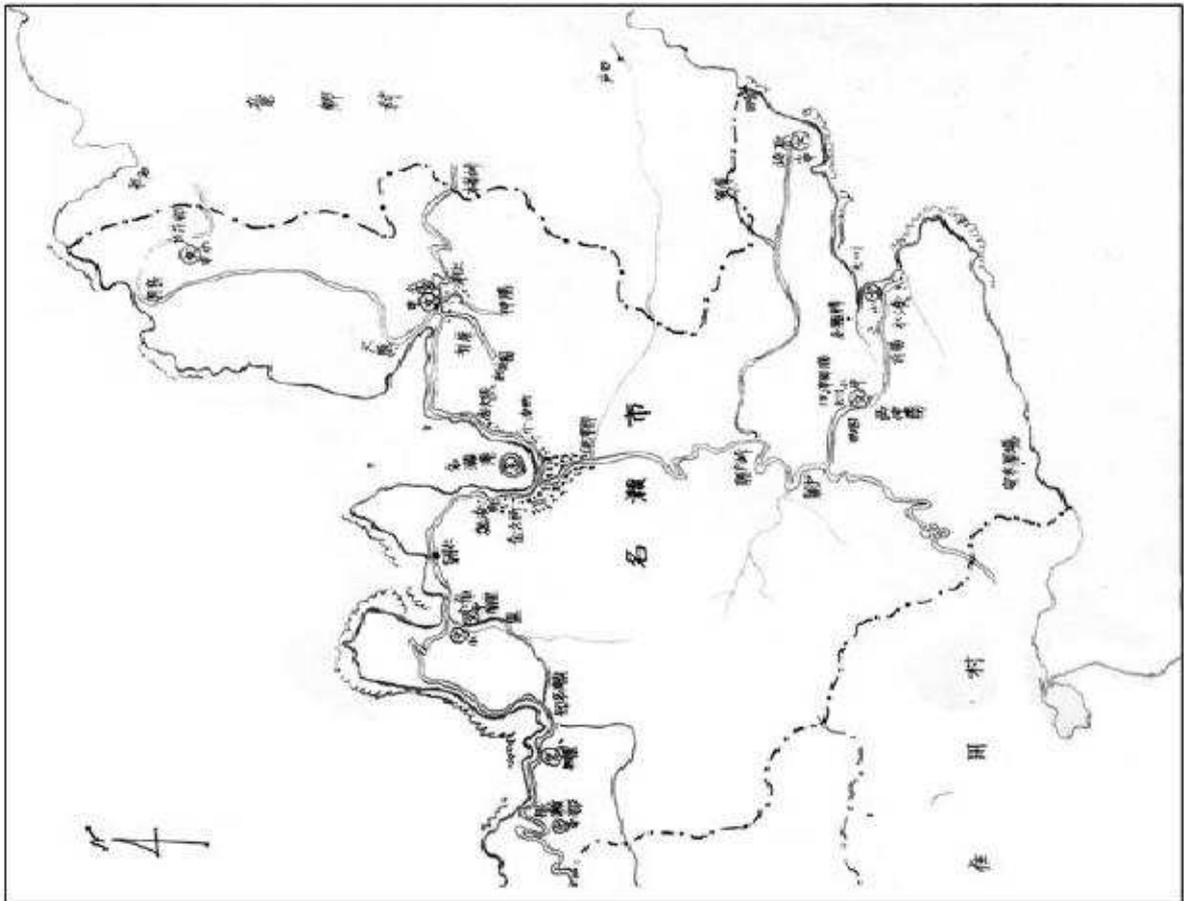
旧名瀬市において、本格的な発掘調査は朝仁貝塚が初めてであった。調査の結果、朝仁貝塚は周辺の遺跡が破壊され、二次堆積した貝塚であることが判明した。しかし、この発掘調査で出土した様々な遺物をもって発掘調査の翌年の1970（昭和45）年に旧名瀬市は、「前史時代における奄美と中国、本土との交流を実証する遺跡であり、中国系の白磁・青磁等の陶磁器や本土系の須恵質の陶器などが出土している。これは奄美の歴史や文化を解明するうえで重要な貝塚である。」として第1号の史跡に指定した。

また、市民が土器を採集したことを契機として、同じ朝仁地区の県道改良工事に伴う朝仁天川遺跡の発掘調査が行われたのは1983（昭和58）年のことである。この調査は、県教育委員会文化課の協力を得て旧名瀬市教育委員会が調査主体となり実施された。報告書によると嘉徳Ⅰ式B、嘉徳Ⅱ式、面縄西洞式、宇宿上層式等の土器と石斧等の石器が出土している。

このように旧名瀬市において、朝仁貝塚の発掘調査は市史跡の指定や遺跡内における開発工事着手前の調査の実施等、文化財保護法を基盤とした埋蔵文化財保護行政のあるべき姿を内外に示す契機になった。小湊フワガネク遺跡が国史跡に指定されたことは、40年以上前の河口の実施した朝仁貝塚の調査が出発点であったと言っても過言ではない。

### —参考文献—

- 河口貞徳 1981 「朝仁貝塚」  
『日本考古学年報』21・22・23  
河口貞徳 1973 「朝仁貝塚」『鹿児島考古』第7号  
鹿児島県考古学会  
伊仙町教育委員 2005 「カムイヤキ古窯跡群Ⅳ」



朝仁地区・朝仁貝塚位置図

## 第IV章 嘉徳遺跡

### 第1節 調査の経過

嘉徳遺跡の発掘調査は砂利採取業者による砂丘の採掘を起因とし、瀬戸内町教育委員会が調査主体となり国庫補助事業として実施された。発掘調査の実施に当たっては河口が調査担当者として参加した。発掘調査は1974（昭和49）年1月の現地調査に引き続き、同年8月3日から16日までの14日間で実施された。

遺跡の立地する砂丘は南北50m、東西75mの大きさで、面積は約2500㎡ほどあったが、調査開始時点で1000㎡近くがすでに消滅していた。調査は、砂丘上及び西側斜面に5mを基本とした区画を設定し行われた。調査面積は、最終的に594㎡であった。調査の結果、石組み遺構や炉跡などが検出されている。土器・石器が大量に出土し、獣骨や魚骨も出土している。土器は嘉徳式土器・面縄東洞式・嘉徳Ⅰ式A・嘉徳Ⅰ式B・凹線文土器・嘉徳Ⅱ式・面縄西洞式・面縄前庭式・喜念Ⅰ式・宇宿上層式等が出土している。石器は叩石が多く、石斧・石皿・砥石等が出土している。

その後、瀬戸内町内の埋蔵文化財分布調査を鹿児島県教育委員会が1989（平成元）年に、瀬戸内町教育委員会が瀬戸内町遺跡詳細分布調査を2003（平成15）年度から2005（平成17）年度と2014（平成26）年度から2016（平成28）年度に実施している。

なお、発掘調査の成果については、鹿児島考古<sup>11</sup>及び瀬戸内町教育委員会が刊行した「嘉徳遺跡」<sup>12</sup>に掲載されているが、その内容は同じである。

### 第2節 再整理の方法

1974（昭和49）年に瀬戸内町教育委員会が刊行した嘉徳遺跡の報告書によると、石組み遺構・炉跡・礫群・ビット・焼土の遺構が検出されている。このうち、報告書に掲載されている遺構の実測図は石組み遺構1基とビット2基のみで、他の遺構図や遺構配置図は掲載されていない。そこで、埋文センターが保管している発掘調査時の図面を確認し、可能な限り遺構に関する記録を掲載することとした。なお、遺構名については、嘉徳遺跡報告書の名称に従うこととする。その他、当時の発掘調査に関する日誌・写真等についても確認を行った。

遺物については、次のような整理を行った。嘉徳遺跡報告書で石器については、実測図は約100点、写真は約80点掲載されている。土器については実測図は7点、写真のみの掲載が約180点である。また、河口が1974（昭和49）年に発表した「奄美における土器文化の編年について」<sup>13</sup>（以下、「奄美編年」という。）で嘉徳遺跡出土の土器が18点掲載されている。これらの遺物の所在

を確認し、必要に応じて実測・掲載した。さらに、埋文センターが保管している遺物も可能な範囲で資料化した。なお、土器の分類は、基本的に河口に従って掲載した。

### 第3節 遺跡の位置と環境

嘉徳遺跡は、大島郡瀬戸内町嘉徳に所在する。瀬戸内町の属する奄美大島は、奄美群島の北部に位置する。奄美大島は面積の85%が深い森林で覆われる。南部は急峻な山々が連なり、急斜面となって海岸まで続く。海岸の多くはリアス式海岸となり、平坦地は少なく、ほとんどの集落が海を望む位置にある。北部の笠利半島付近は山地が発達せず、平坦地が多い。奄美大島の地質は笠利半島に一部石灰岩が見られる以外は、ほとんどが古生層である。古生層は主に粘板岩、頁岩、砂岩、チャートで構成される。また、気候は亜熱帯海洋性で温暖多雨となる。このような自然環境の中で多数の貴重な動植物が生息しており、アマミノクロウサギ、ルリカケス、ケナガネズミ等が国指定の天然記念物となっている。

瀬戸内町は1956（昭和31）年、西方村・古仁屋町・実久村・鎮西村が合併して発足し、奄美大島の南西部と加計呂麻島・諸島・与路島からなる。町の北東部は奄美市、北西部は宇検村と接している。町の面積は239㎢、2018（平成30）年8月現在で5,174世帯、8,845人が生活を営んでいる。

嘉徳集落は町内でも最も東に位置する。太平洋に面する入江には砂丘が形成され、この砂丘上に集落があり、集落の範囲とほぼ重なる嘉徳集落遺跡が知られている。嘉徳遺跡は嘉徳集落の北西に位置し、集落の後方に振り出す山尾根の先端で、ほぼ東流する嘉徳川と嘉徳集落の背後をほぼ南流する小川の合流地点に形成された砂丘上に立地する。

### 第4節 追加資料

#### 1 遺構

嘉徳遺跡報告書には遺構配置図の掲載がないことから、埋文センターが保管している発掘調査時の記録等から遺構配置図の作成を試みた。しかし、一部の遺構実測図が残っていることは確認できたが、それは報告書に掲載されている遺構の実測図であった。遺跡全体の遺構配置図を再現するために必要な調査時の実測図は確認できなかった。また、報告書は数人の調査担当者が調査区域毎に執筆していることから遺構に関する記述もまちまちである。そこで、報告書の記述から検出した遺構の一覧を作成したのが第1表である。なお、遺構名は報告書に従い、遺構の基数について記載していない場合は1基と

第1表 嘉徳遺跡遺構一覧

地区	グリッド	遺構	遺構数	内容等
第1地区	B-2	石組み	1	・竈 14個 周辺は焼土 木炭混じり ・遺構内から土器片・獣骨
		石組み	1	・竈は被熱、骨等出土
	C-2	焼土	2	・いのししの骨出土
第2地区	B-3	石組み	1	・竈約60個 竈は赤く焼け、スス付着
	B-4	石組み	1	・西側に66×42cmの楕円形 深さ52cmの掘り込みの中に36個の竈を積み上げ
		石組み	1	・20×20cmの円形に5個の竈を配置 ・竈にはスス付着 ・石組みの下にピット
		炉跡	1	・南隅、最下部 70×40cmの長方形に9個の竈を配置
		竈群	1	・東南部、80×60cmの長方形に赤化した角竈約60個
		竈群	1	・上記竈群の西側、60×50cmの楕円形に赤化した角竈約40個
	焼土	2	・ブロック状	
C-3	竈群	1	・西隅下部、60×40cmの範囲に竈約20個、中に焼けた獣骨片	
	焼土	3	・ブロック状	
第3地区	B-5	石組み	1	・角竈14個、不規則な形
		焼土	5	・形小さく、厚さも薄い
	C-5	ピット	1	・長径70.7cm、短径41.6cm、深さ8.6cm ・ピットの中央から二重口線の壺が出土 ・西側には炭化物が集中
焼土		1	・長径1.17mのだるま形 深さ0.11m	
第4地区	A-1・2	石組み	1	・グリッドの北側で検出
	A-3	石組み	1	・60×80cmの範囲に約30個の角竈と円竈を半円形に配置 ・竈は一部被熱、厚さ20cmの炭化物 ・竈の大きさはこぶし大から径15cm程度
		焼土	1	・幅1～2mの帯状
第5地区	B-7・8	石組み	1	・焼土・ピットは伴わず
	B-8	焼土	2	
	C-7	焼土	1	・2層上部 径60cm前後
	C-8	竈群	1	・竈群の下に185×85cm不整形のピット ・竈は被熱、木炭付着 ・遺構内から市来式と面縄東洞式が共存
		ピット	1	・推定2m強の隅丸、深さ約30cm ・下面に皿状の落ち込み(48×46cm、深さ20cm) ・住居址の可能性

\*遺構名等の表記は「嘉徳遺跡」報告書に拠る。

して数えた。発掘調査で検出した遺構をまとめると、石組み遺構9基(内、ピットを伴うもの1基)・炉跡1基・竈群4基(内、ピットを伴うもの1基)・焼土17か所・ピット2基(住居址の可能性)となる。

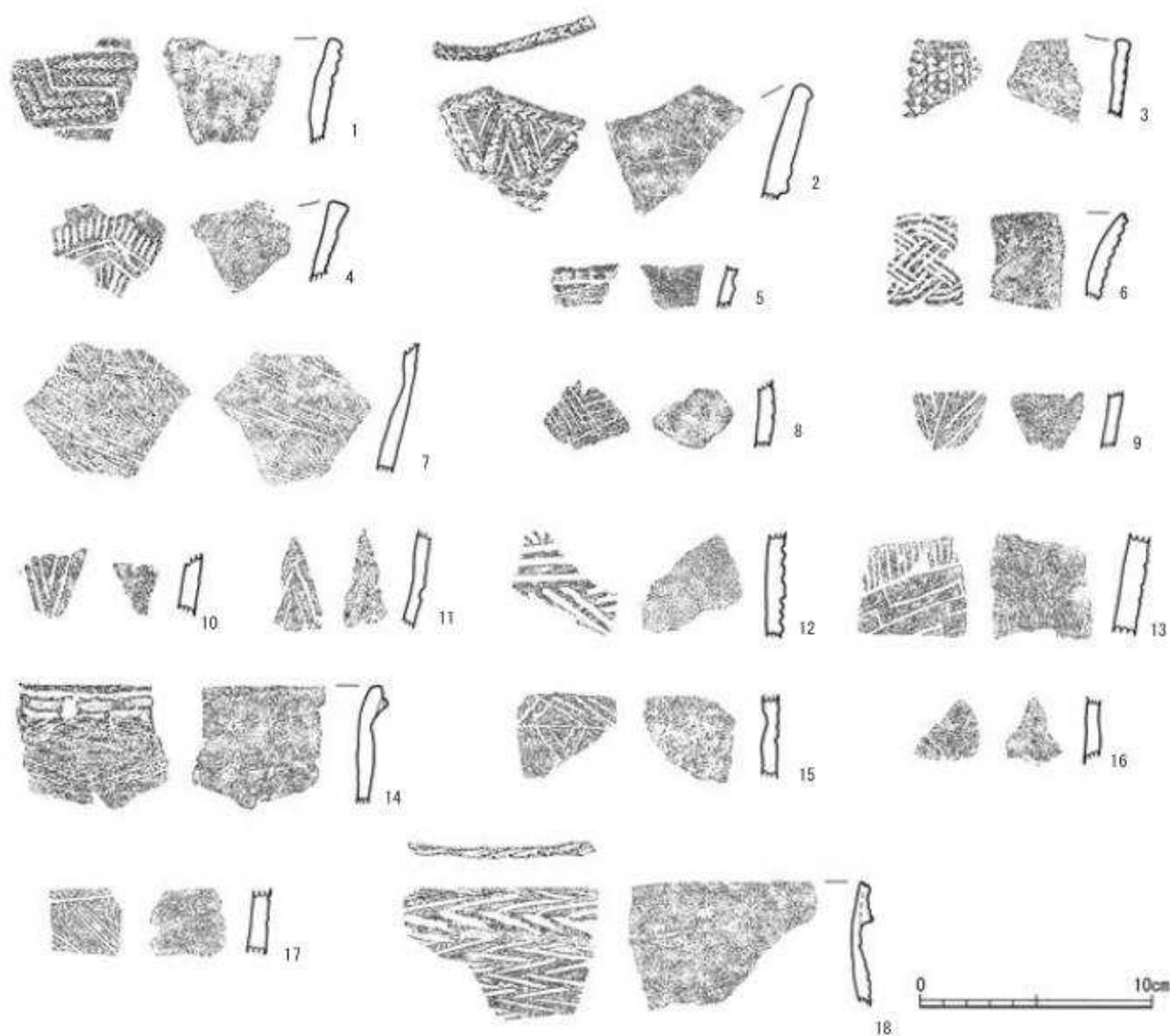
また、残された図面の中には、遺物分布図が数点あった。その中から、残存状態が良好で、多少縮小しても文字が判読しやすい図面を資料1に示した。当時の発掘調査方法が垣間見える図面である。また、河口の実測図及びトレース図を資料2～6に掲載した。

## 2 遺物(第1図～第8図)

河口コレクションとして埋文センターが管理している嘉徳遺跡出土の遺物は、バンケースで14箱である。その内訳は、1974(昭和49)年1月に現地調査を行った際に採取した約130点の土器片と同年8月に発掘調査で

出土した約400点の土器片である。河口は嘉徳遺跡の発掘調査終了後に遺物の全てを持ち帰り、後日瀬戸内町教育委員会に約2万点の遺物を送り返したとのことであるが、手元に約400点の土器は残したと考えられる。瀬戸内町教育委員会に返却した遺物には嘉徳遺跡の報告書に掲載されている遺物も含まれ、現在瀬戸内町教育委員会が管理している。

河口は1974(昭和49)年1月の現地調査で採取した土器の中から抽出した18点を「奄美編年」の中に写真で掲載した。この18点については、今回実測し掲載した。掲載しなかった土器のほとんどが無文土器で、1点だけ「上下層」のラベルと共に面縄西洞式と考えられる土器があった。埋文センターが保管している発掘調査の出土遺物は、1点の石器以外は全て土器である。1974(昭和49)年8月に実施した発掘調査で出土した土器の



第1図 嘉徳遺跡出土遺物(1)

うち、河口が手元に残した土器については口縁部を中心に抽出し、実測・掲載した。1点の石器も実測・掲載を行う。以下、遺物について記述するが、土器の分類については、基本的に河口の分類に従う。

(1) 土器(第1図1~18)

1~18は「奄美編年」において写真で紹介されている土器で、1974(昭和49)年1月、河口が瀬戸内町教育委員会の依頼で嘉徳遺跡の現地調査を行った際に採取したものである。以下、「奄美編年」の記述をまとめる。

1~4は嘉徳I式(爪形沈線文土器)としたものである。文様は爪形文・連点文を沈線文で囲うことを特徴とする。5は先端の平坦な筥で押し引きして施文したもので嘉徳I式に先行する。6~13・15~17は嘉徳II

式(沈線文土器)とした。文様の特徴として嘉徳I式から押し引き文あるいは爪形文が失われたものとした。また、嘉徳遺跡の調査から層位的に嘉徳I式と嘉徳II式の前後関係が明確に証明されたとする。14・18については、嘉徳II式に後続するものとした。

その後、河口は、嘉徳遺跡報告書で嘉徳I式をAとBに2分する。それに従えば4の土器は、嘉徳I式Bとなる。14・18は口縁部上端から幾分下がった所に突帯を巡らせ全面を沈線で施文する。いずれも、やや薄手で焼成も良く、胎土も似る。14は突帯上に幅広い工具で横位に施文し、突帯の下位には斜位の細い沈線で文様を構成する。18は口唇部に斜位の刻みを施し、外面は沈線で横位の羽状文を施す。これらの特徴から仲泊式との関

連が考えられる。なお、土器の分類・文様の名称については「奄美編年」を踏襲し、土器観察表を作成した。

19～121は、今回の整理作業で埋文センターが保管している土器から抽出したものである。鉢形(19～105)・壺形(106～108)・皿(109～117)の器種がある。118～120は底部である。なお、61と121は1974(昭和49)年1月に採集した土器で、これ以外は同年8月の発掘調査で出土した土器である。

鉢形土器については、便宜的に下記の1～4類に分けた。特に、嘉徳遺跡は嘉徳Ⅰ式・Ⅱ式の標式遺跡であり、河口は「奄美編年」で面縄第Ⅳ貝塚の調査成果から面縄東洞式と嘉徳Ⅰ式の文様構成における系統性を指摘した。このことから、ここでは主として面縄東洞式、嘉徳Ⅰ式A・B、嘉徳Ⅱ式の文様を中心に扱う。

### 1類土器

編目文をモチーフとした一群である。施文により、二つに分けた。

- 1-1類 編目文を押し引きの凹線で施すものである。「面縄東洞式土器」を念頭に置き、分類した。
- 1-2類 編目文を凹線で施すものである。1-1類の押し引きが見られないものである。中には、押し引き状の凹線がかすかに残るものもある。「凹線土器」を念頭に分類した。

### 2類土器

1類に沈線を加えて文様を構成する一群である。施文により二分した。

- 2-1類 1-1類の押し引きの凹線を縁取りするように沈線を施すもので、「嘉徳Ⅰ式A土器」を念頭に置き、分類した。沈線で縁取りした中に刺突を施すものも含む。
- 2-2類 沈線で縁取りした中に縦位の沈線を細かに施すものである。「嘉徳Ⅰ式B土器」を念頭に置き、分類した。

### 3類土器

沈線で文様を構成する一群である。「嘉徳Ⅱ式土器」を念頭に置き、分類した。篋状工具により器面を深く切るように施文するものも含む。

### 4類土器

1～3類以外の土器である。

以上の分類に従って土器の説明を行う。

#### 1-1類(第2図19～29)

押し引きにより文様を施す一群である。19～22は口縁部文様帯とその下位の胴部が一部でも残存するものである。その胴部に文様は見られない。23～28は口縁部文様帯のみが残存する。この中でも、19～21・23・24は編目をモチーフとする。19は口径18.6cmを測る。肥厚した口縁部は外反し、口唇部は平坦に仕上げる。頸部

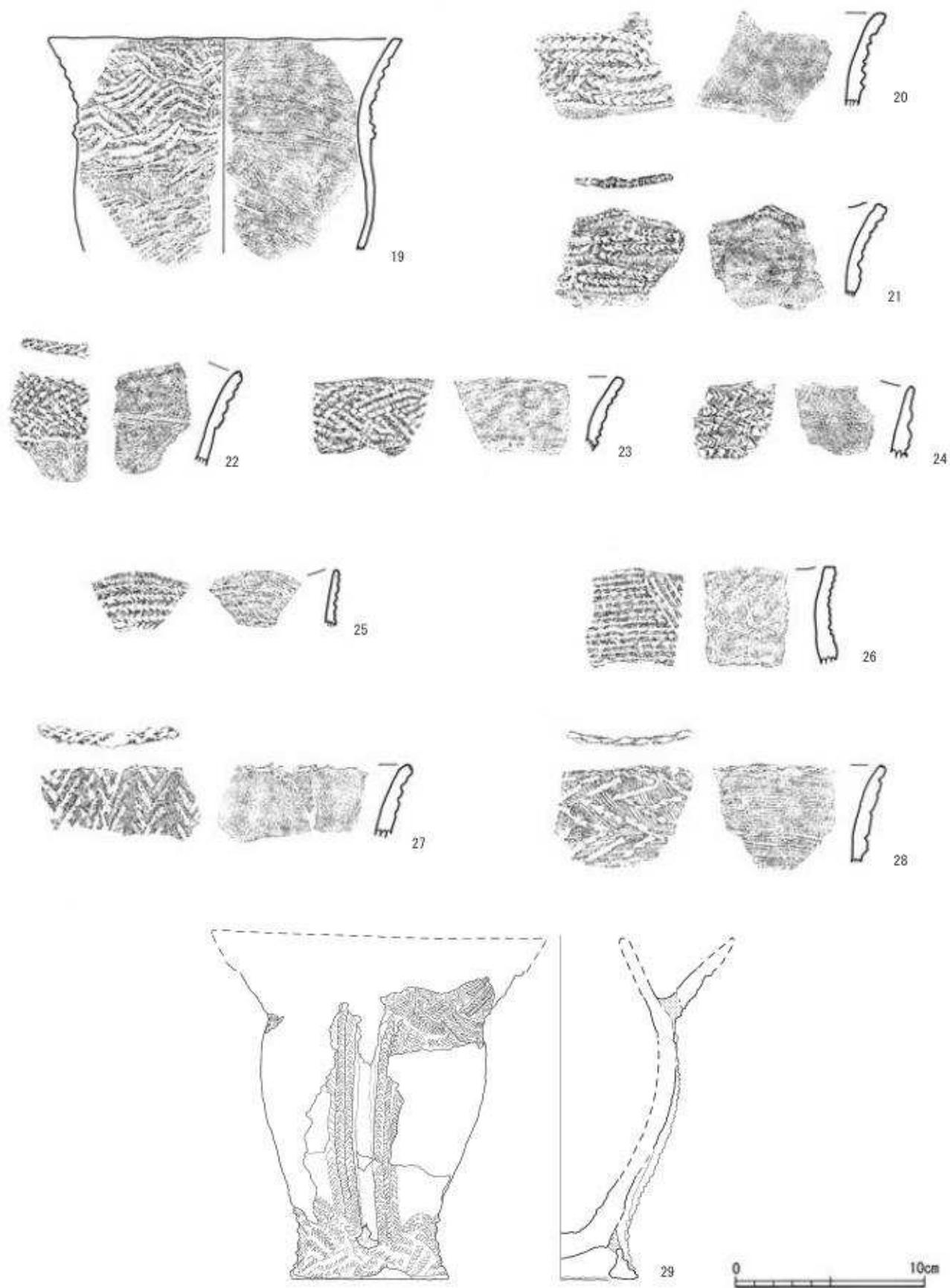
から胴部にかけて緩やかに膨らむ器形となる。口縁部文様帯の下端には突帯状に粘土を貼り付け、胴部との境に段差をもつ。内面とともに器面調整の条痕が残る。20・21は口縁部に突起をもつ。20は文様が施される幅の狭い口縁部と胴部の境には幾分の段差がある。21は口唇部及び内面の口縁部上端にも押し引きが施される。24の口縁部は波状を呈し、上端に向かって器壁がかなり薄くなる。

22・27・28は、押し引きで横位もしくは縦位の羽状文を施す。22の口縁部は波状を呈し、外反する。胴部との境には段差をもつ口縁部文様帯は肥厚し、押し引きにより横位の羽状文が構成される。口唇部には篋状工具による刻みが施される。27の口唇部は欠損部分が多く、明確ではないが、格子目状の刻みが施される。28の口縁部は肥厚する。口唇部には先の尖った工具による刺突が施される。内外面とも器面調整の条痕が残る。

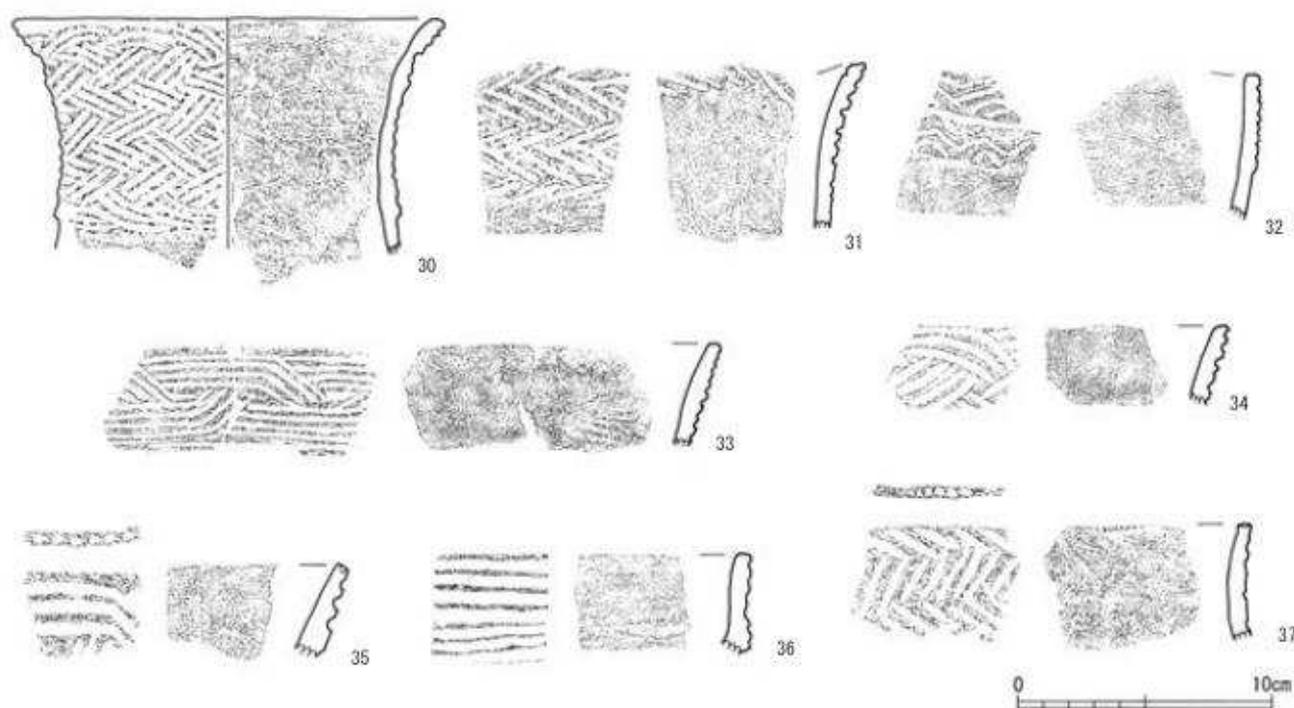
25は横位に、26は横位と斜位に押し引きによる文様を構成する。小片のため全体的な文様構成は不明である。

29は二重口縁をもつ土器である。これまで、様々な文献で紹介され、嘉徳遺跡を代表する遺構内出土の面縄東洞式の土器とは別に、C2グリッドの1層下部からもう1点出土している。口縁部は欠損するが、内面が二股状になっていることから、二重口縁と推察できる。頸部がしまり、胴部はやや膨らみながら上げ底の底部に至る。頸部から胴部下端まで2本の突帯が貼り付けられるが、その突帯間に上げ底の内面と外面を結ぶ孔が穿たれる。また、頸部にも底部と同じような穿孔が施される。垂下する2本1組の突帯と底部・頸部の突帯間に施される2か所の穿孔も1対と考えられる。文様構成は残存部分が少なく判然としないが、口縁部から胴上部までと胴下部から底部接地面まで押し引きによる編目文が施される。縦位に貼り付けられた突帯上にも押し引きによる文様が複数本施される。

29の土器については、嘉徳遺跡報告書の執筆者の一人である上村俊雄は「C2グリッド1層下部 かごを編んだような形の文様をもつ土器等が出土している。」と記述しているが、報告書には実測図は示されていない。河口も「嘉徳遺跡」(1988)で「携帯用土器は二個あって、遺跡の西と東の端に、西は方形の石囲いに、東は土壙におさめられていた。」と解説している。そこで、河口の当時記された発掘日誌を確認したところ、次のような記述が残っていた。「C. 2. 1. 下の南側崖端に石斧3本が密集して発見され、はじめの石斧にともなう土器片は嘉徳Ⅱ式であり、後のものは面縄東洞式であった。その間わずかの層位の差しかみられないが上下関係はあった。石に2方を囲まれた様な形で出土した土器は上げ底で、底部付近に押し引き文があり、それより上方に複線の押し引き文を施した凸帯が縦に2本付けられ、



第2圖 嘉德遺跡出土遺物(2)



第3図 嘉徳遺跡出土遺物(3)

口縁部付近にまた文様がある(押し引き)特殊なもので、器形は胴張りの細長い甕形土器であり、口縁部付近で2重になった不思議なものであった。」なお、この土器については、埋文センターが管理を始めた段階では口縁部まで石膏で復元してあった。河口の手によるものと考えられることから、これを実測の参考とした。29の実測図で示した網かけの部分は、穿たれた孔である。なお、河口も「壺形土器の器形と深鉢形の器形が融合したもの」<sup>[1]</sup>と述べた特殊な土器で、外面の深鉢形の器形に着目し、分類上ここに含めた。

#### 1-2類(第3図30~37)

凹線で文様を構成するものである。30~32は口縁部文様帯と胴部の一部が残存し、33~37は口縁部文様帯のみ残存するものである。この中でも30・33・34は、編目をモチーフとする。30は復元口径16.4cmを測る。頸部で幾分縮まり、口縁部は外反する。肥厚した文様帯は口縁部上端から胴部上位まで広く、文様帯下位との境には明確な段差をもつ。文様帯下位に施文が及ぶか否かは不明である。内外面とも器面調整の条痕が残る。33・34とも口縁部断面は方形に近く、内面調整は丁寧である。

31・37は、凹線で横位の羽状文を施す。31は波状口縁となり、口唇部から内面にかけても刻みを施す。外面文様は、工具を斜めにして施文したと考えられる。狭い

文様帯は、胴部との境に段差をもたない。37は口唇部に押し引き状の刺突を部分的に施す。

32は口唇部に平坦面をもつ。幅の狭い文様帯は、胴部との境に段差がある。文様は文様帯を2分する横位の凹線の下上に鋸歯文を施す。鋸歯文を構成する凹線の内部には押し引き状の痕跡が観察できる。

35・36は小片で全体的な文様構成等は不明であるが、胎土・焼成・色調とも他の凹線で文様を構成する土器と似る。

#### 2-1類(第4図・第5図38~60)

押し引き文もしくは刺突文に沈線で縁取りを行うものである。38~44は文様帯の下位の胴部が残存するものだが、そこに文様は見られない。ただし、残存しない胴部に文様が施されている可能性はある。45~48は文様帯の下位の胴部に文様を施すものである。49~60は口縁部のみの破片で、胴部に施文されるか否かが不明のものである。

38は階段状の突起をもつ。幅広い口唇部には2列の押し引き状の刺突が施される。口縁部文様帯は肥厚するが、階段状の突起波頂部の下位はさらに肥厚する。文様帯には押し引き文を2本1組の沈線が縁取る。内外面とも器面調整の条痕が残る。39は先端の尖った工具で施した押し引き状の刺突を1本の沈線が縁取る。口唇部に

も同じ工具で押し引き文が施される。口縁部文様帯と胴部の境には段差を作る。40の上面観は方形を呈すと考えられる。口縁部は屈曲部の口唇部が頂点となり、頂点と頂点の間の最も低い部分に方形の突起をもつ。文様構成及び胴部との境の段差をもつ点は39と同じであるが、屈曲部には波頂部から縦位に沈線だけで構成する文様を施す。41は口縁部が外に開く器形となる。口唇部に刻みを入れ、口縁部文様帯には押し引き文を深く施し、部分的に沈線で縁取る。42は薄手の土器で、口唇部に刻みを施す。押し引き文の施文方向に関係なく、横位や斜位の沈線が施される。口縁部文様帯と胴部には段差をもつ。43の口縁部は外反し、口唇部は平坦に仕上げる。文様帯には全体的に粘土を貼り付けて肥厚させ、下端は突帯状となり、胴部とは大きな段差を作る。文様帯には沈線で格子目状の区画を配した後、その中に先端の尖った工具で押し引き文を方向を変え施す。44は文様帯の下端を幾分肥厚させ、口唇部には刺突を施す。文様は沈線で区画を設け、その中に刺突を2列ずつ配する。文様帯の下端には横位の刺突が施される。45の器壁は、4～5mm程度と薄い。屈曲部は残存しないが、口縁部の形状から上面観は方形を呈すと考えられる。口唇部には平坦面をもち、丁寧な成形や器面調整が行われる。口縁部文様帯の上位に2本、下位に1本の押し引き文を右から左へ、中位にはカギ形の押し引き文を左から右へ、そしてそれぞれの押し引き文に沿うように沈線が配置されている。また、胴部にも鋸歯状の沈線が施される。46・47・48は口縁部と胴部に同じようなモチーフが施される。口縁部文様帯にはカギ形の押し引き文を施し、それぞれの押し引き文に深めの沈線に沿わせる。胴部には斜位の沈線で鋸歯文と考えられる文様が施される。46は口唇部を平坦に仕上げ、口縁部文様帯の下部が膨らみをもつ。47の幅広い口唇部は平坦面をもつ。48は波状口縁で、口縁部文様帯下部が肥厚する。

49の口縁部は波状を呈す。口縁部文様帯の上下端に横位の押し引き文を巡らせ、その間に押し引きと沈線で鋸歯文を施す。口唇部にも押し引きが施される。50は横位の刺突と沈線で文様を構成するが、刺突はまばらである。51の上面観は方形と考えられる。カギ形の押し引きとそれに沿う沈線が施される。屈曲部の器壁は厚くなるが、全体的には薄手の土器である。52は40と同様の器形・文様をもつと考えられる。53の口縁部は波状を呈し、口唇部は平坦に仕上げる。文様は、カギ形状の押し引き文に部分的に沈線に沿わせる。54の上面観は方形を呈する。横位の押し引き文の間に2本の沈線でカギ形状の文様を施す。55～59は、押し引き文や刺突文に沈線に沿わせるという規格性に欠ける。55は口縁部に階段状の突起をもち、口唇部には横位の沈線を施す。56の口縁は波状となり、低い部分には方形の突起をも

つ。口唇部には押し引き状の刺突が施される。また、口縁部形状から上面観が方形を呈す器形と考えられる。57の口縁部は波状を呈し、屈曲部にはイカのエンペラ状の突起をもつ。口唇部には刺突を施す。58は屈曲部をもつ土器片で、口唇部には押し引き状の刺突を施す。文様は刺突と沈線で構成されるが、沈線が曲線を描く。59は屈曲部をもち、突起の付く口唇部には刺突が施される。60は沈線をもたないが、刺突による施文方法が他の土器と同じであることから、ここに含めた。

## 2-2類 (第5図61～63)

沈線で縁取りした中に短沈線を細かに施すものである。61の口縁部は波状を呈し、波頂部にリボン状の突起をもつ。口唇部は平坦に仕上げる。口縁部文様帯の上下には横位の沈線と縦位で密な短沈線を、中位には沈線でカギ形状に区画した中に密な短沈線を施す。胴部文様帯には3本1組の沈線で鋸歯状の文様を描く。62は61と同様の形状と文様を構成することから、同一個体と考えられる。63は波状口縁となり、口唇部は平坦面を持つ。文様は横位の沈線を巡らせ、沈線間に縦位で密な短沈線と斜位で間隔をおいて施される沈線を交互に繰り返す。

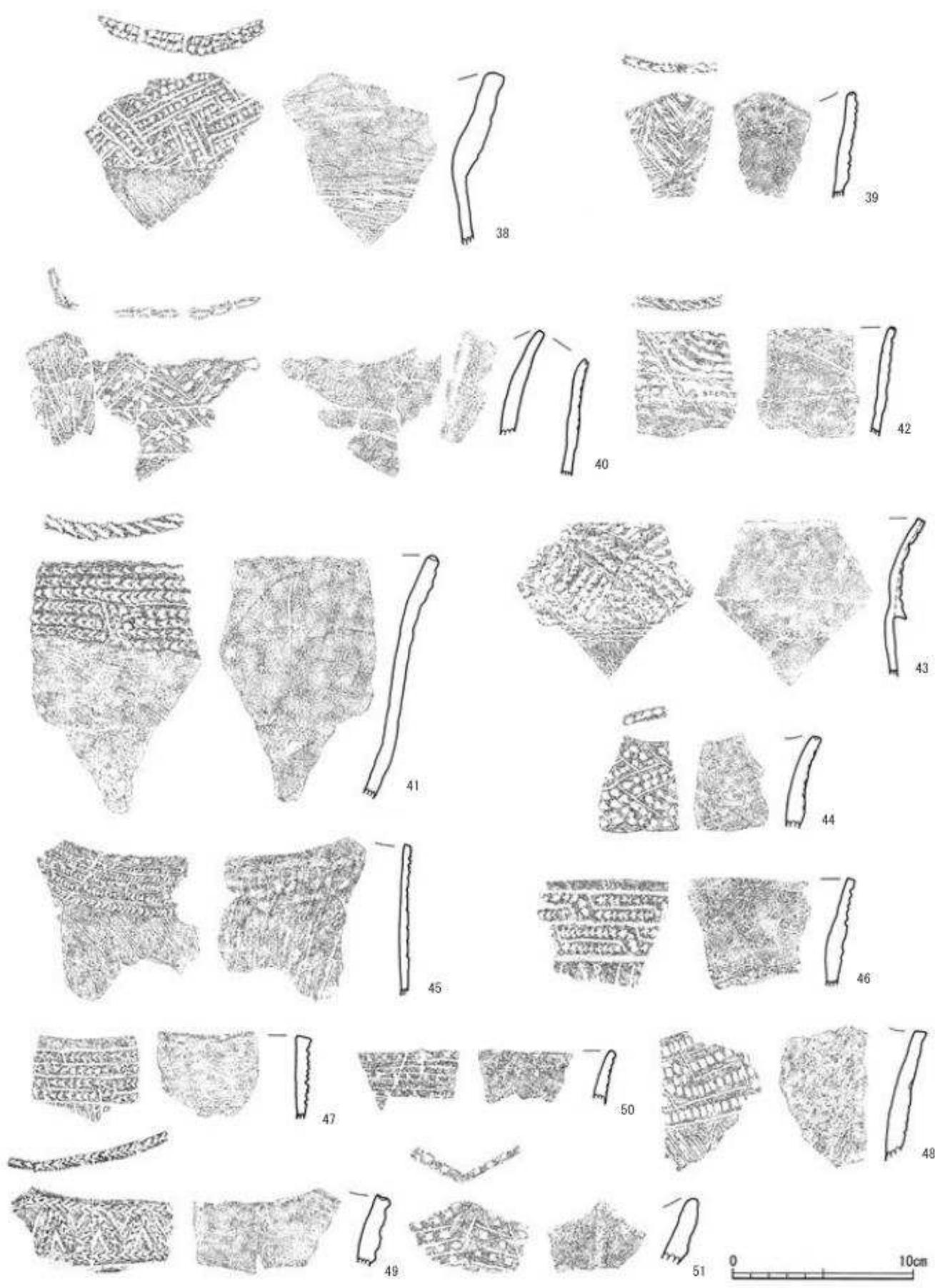
## 3類 (第6図・第7図64～87)

基本的に沈線のみで文様を構成するものである。64～70は口縁部から胴上半部の残存するもので、68～70は、胴部にも施文が及ぶ。71～87は、口縁部のみが残存する。65・71・76・77・80・83は平口縁、これ以外は波状口縁となる。

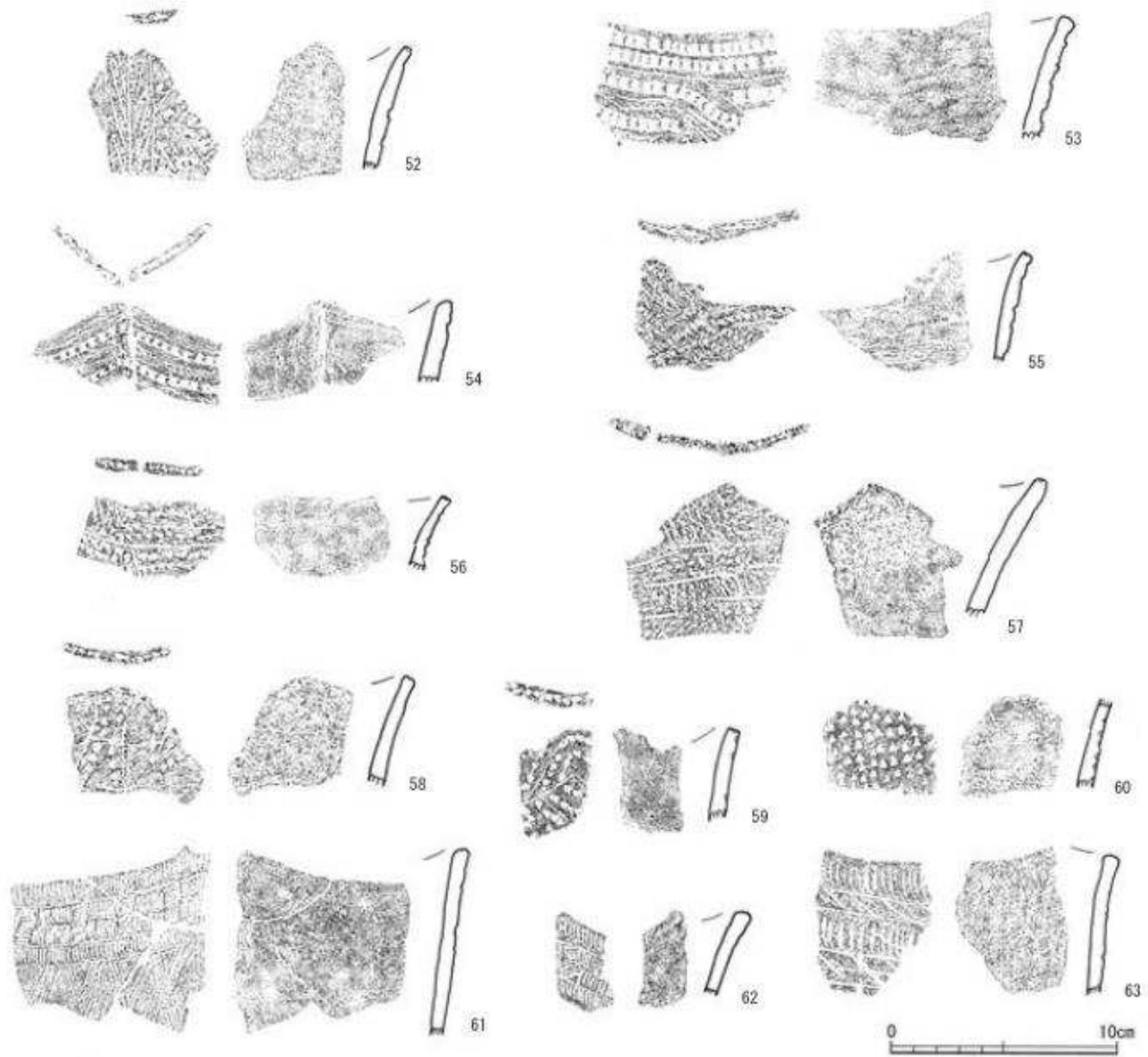
64は口縁部文様帯と胴部境の器壁が肥厚する。一部しか残存しないが、屈曲部を有し、その外面は瘤状に膨らむ。複数本1組の沈線で編目状の文様を描く。65の口縁部は肥厚し、胴部の境に段差をもつ。文様は間隔を開けた2本の沈線を横位に配し、その間に方向を変えた斜位の沈線を施文する。66は口唇部外端に刺突、口縁部外面には沈線で鋸歯状の文様を施す。67の口縁部上端は外反し、口唇部には刺突が施される。口縁部文様帯の下部に胴部と区画する押し引き状の刺突が横位に巡り、斜位の沈線で文様が描かれる。

68は波状となる口縁部には幅の狭い文様帯をもつ。その文様帯にはカギ形状と思われる編目文を沈線で描く。胴部との境には段差があり、胴部には沈線で菱形の文様が施される。69は口唇部に押し引き状の刺突を施し、口縁部と胴部の文様帯には段差をもつ。口縁部文様帯にはカギ形状と考えられるモチーフを描き、僅かに残る胴部には縦位の沈線が残る。70は幅広い平坦な口唇部をもち、口縁部と胴部の境には粘土を貼り付け段差を作り、横位に巡る刺突で区画する。口縁部の上下には横位の沈線を1本ずつ、その間にカギ形状の編目文を沈線で施す。胴部文様帯には沈線で鋸歯状の文様を施す。

71～74は、3～5本の沈線で編目状のモチーフを描



第4图 嘉德遗址出土遗物(4)



第5図 嘉徳遺跡出土遺物（5）

くものである。72は口縁部文様帯と胴部の境に段差をもつ。73は口唇部に刺突を、74は突起の口唇部に刻みを施す。75～81は、沈線で横位の羽状文を施す。75・76は、口縁部文様帯と胴部の境に段差がある。79の口縁部文様帯の下部には刺突が施されるが、沈線の文様構成からここに含めた。80・81は横位の沈線で区画し、その中に斜位の沈線を施す。81は波状口縁となり、波頂部下位の口縁部は器壁が厚くなり、この部分だけ文様の方向が縦となる。口唇部には刺突が施される。82・83は沈線で鋸歯状の文様を描く。82は口径が7～8cmと想定される小型の土器で、内面にも沈線が施される。

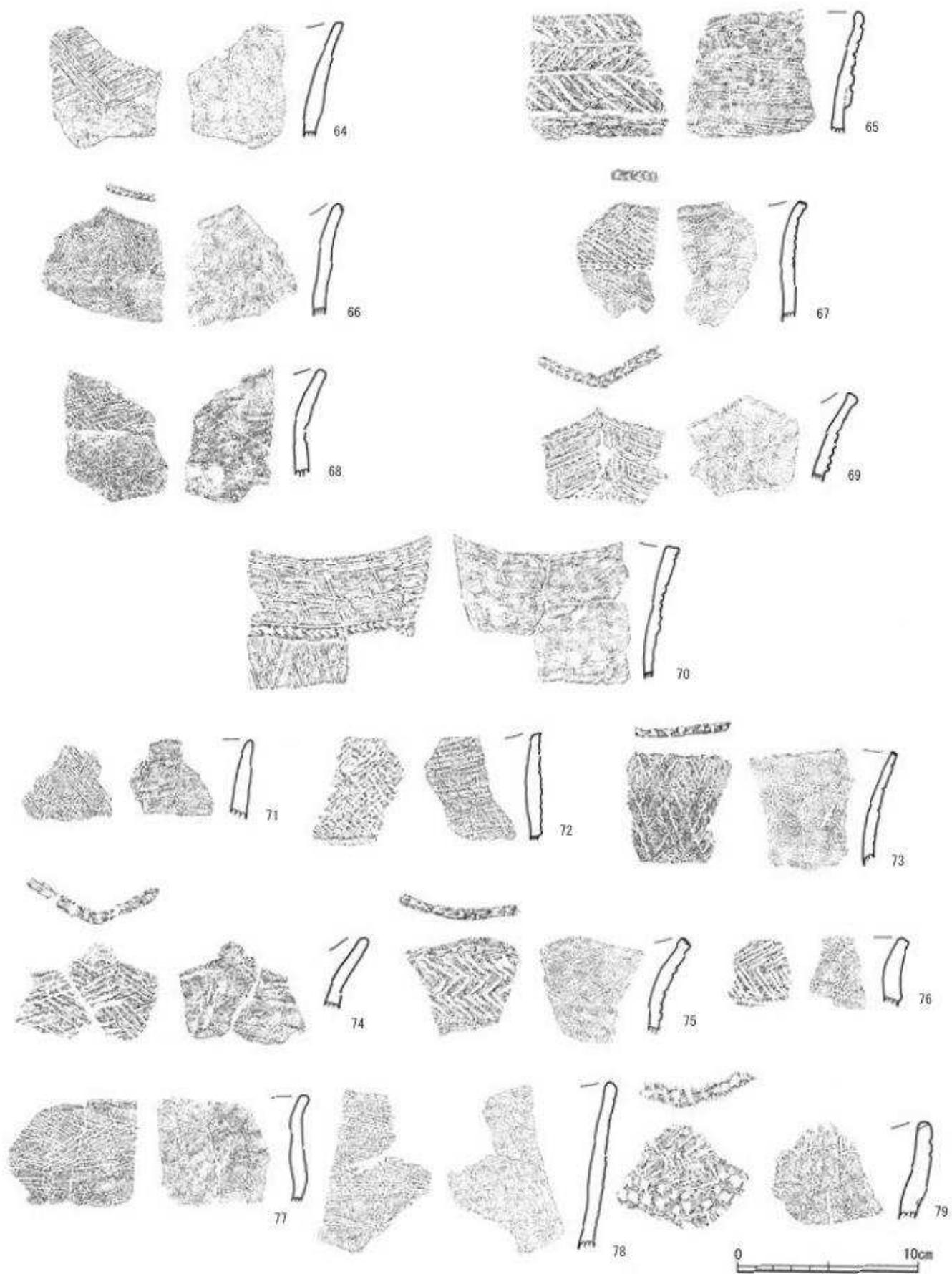
84・85は縦位の羽状文が施される。84は口唇部に刺突が施される。86・87は編目状の文様が沈線で描かれる。86の口唇部には押し引きが凹線状に深く施される。87の口唇部には沈線が巡る。

#### 4類（第7図・第8図88～121）

1～3類以外の土器である。

88は口縁部片と考えられ、横位の平行沈線の上下に鋸歯状の平行沈線を施す。伊波式、荻堂式との関連が考えられる。

89～91は、深い条痕文を施すものである。89は器壁が幾分厚く、平口縁で口唇部は舌状に仕上げる。口縁部



第6圖 嘉德遺跡出土遺物(6)

外面に横位の条痕文を間隔を空けて配し、その間を斜位の条痕文で埋める文様構成となる。内面にも横位の条痕文の下には斜位の条痕文が施される。口縁上部には焼成前に穿たれた孔が約3cmの間隔で2か所設けられている。90は波状口縁となり、舌状の口唇部には刻みが施される。文様は縦位や横位の条痕文で構成される。91は幾分肥厚した口縁部外面に文様が施される。横位の凹線を巡らせ、その間を斜位の凹線を施す。平坦に仕上げた口唇部には押し引き文を施す。条痕文ではなく凹線で施文するが、89及び90と胎土・焼成・色調や文様構成が似ることからここに含めた。90・91の内面はナデ調整が行われる。条痕文系の土器と考えられる。

92～97は、突帯や沈線で文様を構成する。92は完形に復元したものが保管されていたことから、河口が行ったと思われる。復元口径は6.2cmを測る。肩部に1条の刻みを施す突帯を巡らせるが、縦位の突帯も部分的に残る。器面調整のための篋状の工具痕が観察できる。93の頸部はやや縮まり、口縁部は外反する。胴部はやや膨らむ器形と考えられる。口縁上端と肩部に刺突を施す突帯を巡らせ、その間にも同様な2条の突帯を曲線状に交差させる。口縁部上端の突帯上に施される刺突は、口唇部まで及ぶ。94は外反する口縁部の上端からやや下がった位置に1条の細い突帯を貼り付け、その両側に小さな刺突を密に施す。また、部分的には同じような突帯を縦位にも貼り付ける。口唇部にも小さな刺突が密に施される。さらに、横位の細い突帯の下位には10本程度の深い沈線が描かれる。95は94と同じような器形・文様構成と考えられる。96は胴部片で、肩部に密に刺突を施した1条の突帯を配し、その下には沈線文が施される。92～96の土器は、面縄前庭式に比定される。97は肥厚した口縁部の上端が欠損する。口縁部は外反し、縮まった頸部から強く張り出す胴部へと続く。頸部屈曲部から少し上に貼り付けた突帯を巡らせ、突帯上には二叉状の工具で刺突を施す。胴部には沈線で菱形状の文様が描かれる。仲泊式との関連が考えられる。

98～100は口縁部の上下に突帯を巡らせ、その間を沈線を施し、文様を構成するものである。面縄西洞式に比定できる。98は波状を呈す口縁部の上下に横位の、頂部から縦位に突帯を貼り付け、その上には刺突を施す。突帯間には沈線で横位と斜位の沈線で文様を構成する。器壁は薄く、内面の器面調整は極めて丁寧である。99は口縁部外面のやや下に突帯を貼り付け、突帯に沿って短い凹線を施す。その下位には、横位や斜位の沈線で文様が構成される。100は波状口縁の波頂部付近である。口縁部外端に沿った突帯と頂部から縦位に突帯を貼り付け、その上には刺突を施す。縦位の突帯の両側には、縦位の沈線が施される。

101～103は口唇部を文様帯とすることにより口唇部

が膨らんだり断面が三角形となるもので、松山式に比定される。101は口縁部が外反し、幅広い口唇部文様帯に縦位の太い凹線を連続して施すものである。内外面とも器面調整の条痕が観察できる。102は口縁部断面が三角形を呈し、口唇部に沿って押し引き状の刺突を2列施す。外面には器面調整の条痕が残る。103は口唇部に設けた突起を境に段差を作り、平坦な口唇部と中央部がくぼむ口唇部に形状が変化する。その両方の口唇部には凹線が施される。口唇部以下の外面には細かい刺突が横位に描かれる。

104は断面三角形状の口縁肥厚部に凹線や爪形連点などの文様を施す。市来式に比定される。

105は無文土器で、口縁部断面が三角形となり、内外面とも丁寧なナデ調整が行われている。

#### 壺形土器（第8図106～108）

106～108は壺形土器で、いずれも無文である。106の肥厚した口縁端部の断面は三角形を呈し、頸部にかけて器壁が薄くなる。107の口縁端部は外反する。108の口縁端部は直立し、頸部にかけてなだらかに膨らむ器形と考えられる。胎土は粉っぽく、土師質である。

#### 皿形土器（第8図109～117）

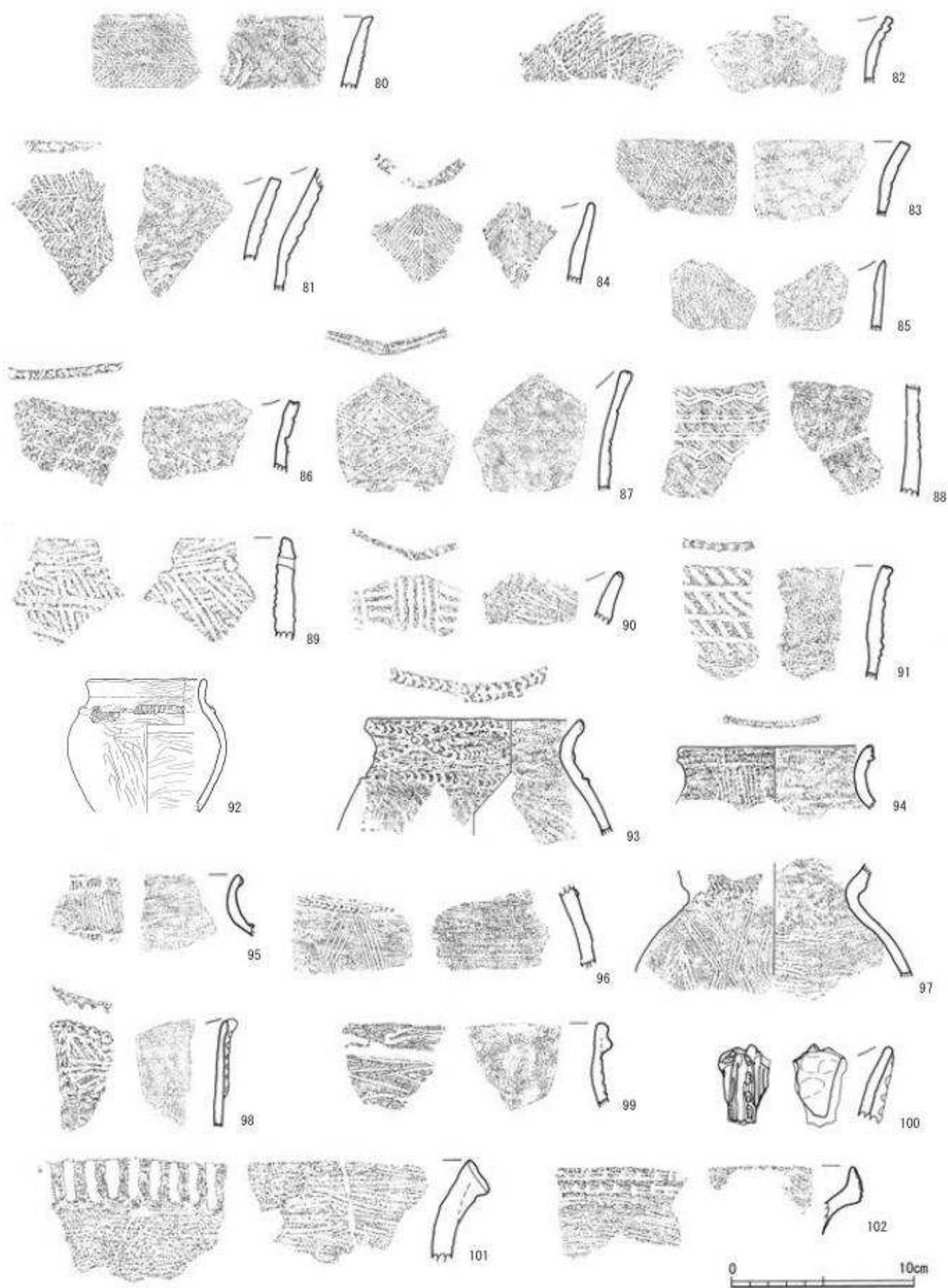
109～117は皿形土器である。109は押し引きでカギ形状の編目文を構成する。口縁部が幾分肥厚する。110は幅広い口唇部作りで、その口唇部に縦位の凹線を施す。さらに口縁部内面には押し引き文を巡らすものである。111の口縁部上端は欠損するが、断面は三角形状と考えられる肥厚部に横位の沈線が施される。部分的には縦位の沈線も観察できることから、カギ形状の文様が施された可能性もある。肥厚部に屈曲する部分があることから、上面観は方形を呈すると考えられる。112～117は4～5mm程度の薄い器壁をもち、無文である。いずれの胎土も緻密である。内外面との丁寧な器面調整が施される。112・115～117は口縁部に特徴的な突起をもつ。113は波状口縁となり、114の口縁端部は肥厚する。112～117は浅鉢の可能性もある。

#### 底部（第8図118～121）

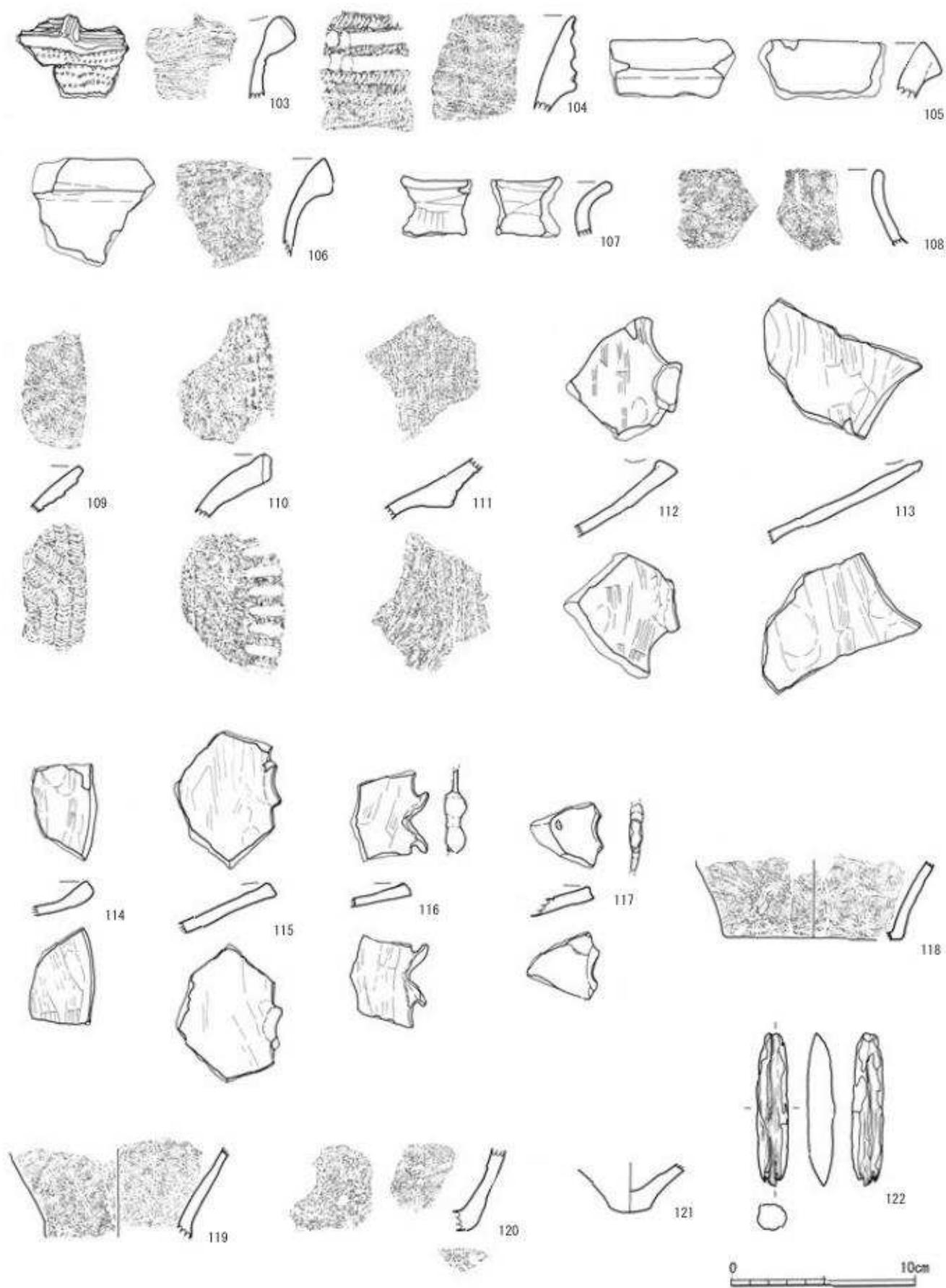
底部は一括して扱う。118は底径9.4cmを測る。底部接地面が幾分張り出す平底である。内外面ともナデ調整が行われる。119は118と同じ形状を示すが、接地面の張出がより強くなる。120は平底で、内外面の器面調整は粗い。121は尖底状の底部で、丁寧な器面調整が行われる。

#### （2）石器（第8図122）

122は埋文センターが管理している嘉徳遺跡出土遺物の中で、唯一の石器である。長さ8.4cm、幅1.7cm、厚さ1.5cm、重さ24.4グラムを測る石のみと考えられる。石材は粘板岩と考えられるが、風化が著しく詳細は不明である。



第7图 嘉德遗址出土遗物(7)



第8图 嘉德遗址出土遗物(8)

第2表 嘉徳遺跡出土土器観察表(1)

\*1~18の分類・文様等は「奄美編年」による。

挿図 番号	掲載 番号	出土 区等	層位	器種	分類	部位	文様・調整		胎土					色調		備考	
							外面	内面	石英	長石	鉛	錫	砂礫	外面	内面		
第1図	1	A	上下	鉢形	嘉徳Ⅰ	口縁	爪形文、沈線文	ナデ	○		○	○	○	橙	にぶい赤褐		
	2	A	上下	鉢形	嘉徳Ⅰ	口縁	爪形文、沈線文	ナデ	○				○	灰黄褐	にぶい赤褐		
	3	A	上下	鉢形	嘉徳Ⅰ	口縁	爪形文、沈線文	ナデ	○			○	○	黒褐	にぶい黄褐		
	4	A	-	鉢形	嘉徳Ⅰ	口縁	爪形文、沈線文	ナデ	○			○	○	黒褐	にぶい褐		
	5	B	下	鉢形	-	胴部	爪形文	ナデ	○		○	○	○	黒褐	にぶい赤褐	嘉徳Ⅰに先行	
	6	-	-	鉢形	嘉徳Ⅱ	口縁	沈線文	ナデ	○		○	○	○	灰褐	赤褐		
	7	A	-	鉢形	嘉徳Ⅱ	胴部	沈線文	刷毛目、指頭痕、ナデ	○		○	○	○	にぶい褐	黒褐		
	8	A	-	鉢形	嘉徳Ⅱ	胴部	沈線文	ナデ	○			○	○	明赤褐	赤褐		
	9	A	-	鉢形	嘉徳Ⅱ	胴部	沈線文	ナデ	○			○	○	明赤褐	明赤褐		
	10	A	-	鉢形	嘉徳Ⅱ	胴部	沈線文	ナデ	○				○	にぶい褐	明赤褐		
	11	A	-	鉢形	嘉徳Ⅱ	胴部	沈線文	ナデ	○			○	○	暗灰黄	にぶい褐		
	12	A	-	鉢形	嘉徳Ⅱ	胴部	沈線文	ナデ	○			○	○	明赤褐	明赤褐		
	13	A	上	鉢形	嘉徳Ⅱ	胴部	沈線文	ナデ	○			○	○	褐灰	にぶい黄褐		
	14	A	上	鉢形	-	口縁	突帯、沈線文	指頭痕、ナデ	○			○	○	にぶい赤褐	明赤褐	嘉徳Ⅱに後続	
	15	A	上下	鉢形	嘉徳Ⅱ	胴部	沈線文	指頭痕、ナデ	○				○	灰褐	橙		
	16	A	-	鉢形	嘉徳Ⅱ	胴部	沈線文、ナデ	ナデ	○			○	○	褐灰	明赤褐		
	17	A	上	鉢形	嘉徳Ⅱ	胴部	沈線文	ナデ	○			○	○	黒褐	にぶい赤褐		
	18	A	上	鉢形	-	口縁	突帯、沈線文	ナデ	○		○	○	○	にぶい赤褐	橙	嘉徳Ⅱに後続	
第2図	19	C8	Ⅱ上	鉢形	1-1	口縁	押し引きの編目文	工具ナデ、ナデ	○	○			○	暗灰黄	にぶい黄	口径 18.6cm	
	20	A3	1	鉢形	1-1	口縁	押し引きの編目文	ナデ	○			○		にぶい黄褐	明赤褐		
	21	B4	1下	鉢形	1-1	口縁	押し引きの編目文	押し引、ナデ	○					灰黄褐	灰黄褐		
	22	C6	1上	鉢形	1-1	口縁	押し引きの羽状文	沈線、ナデ	○				○	暗灰黄	暗灰黄		
	23	C2.1	Ⅱ上	鉢形	1-1	口縁	押し引きの編目文	工具ナデ、ナデ	○					灰黄褐	にぶい赤褐		
	24	B3	2下	鉢形	1-1	口縁	押し引きの編目文	ナデ	○				○	にぶい褐	にぶい黄褐		
	25	C6	1	鉢形	1-1	口縁	横位の押し引き	工具ナデ、ナデ					○	にぶい黄褐	にぶい黄褐		
	26	C8	2下	鉢形	1-1	口縁	横・斜位の押し引き	ナデ	○					にぶい黄褐	橙		
	27	C3	1下	鉢形	1-1	口縁	押し引きの羽状文	ナデ	○				○	橙	橙		
	28	C11	1	鉢形	1-1	口縁	押し引きの羽状文	工具ナデ、ナデ	○				○	褐灰	にぶい赤褐		
	29	C2	下	鉢形	1-1	口縁	押し引きの編目文	ナデ					○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	底径 8.0cm
第3図	30	C8	2上	鉢形	1-2	口縁	凹線の編目文	工具ナデ、ナデ	○			○	○	灰黄	にぶい赤褐	口径 16.4cm	
	31	A2	1下	鉢形	1-2	口縁	凹線の羽状文	刷毛、ナデ	○	○		○	○	にぶい黄褐	明赤褐		
	32	C4	1上	鉢形	1-2	口縁	凹線の刷毛目、刷毛目	刷毛目					○	明赤褐	明赤褐		
	33	A3	1下	鉢形	1-2	口縁	凹線の編目文	ナデ	○					にぶい黄橙	にぶい黄橙		
	34	C2	1下	鉢形	1-2	口縁	凹線の編目文	ナデ					○	○	灰黄褐	灰黄褐	
	35	C2	1下	鉢形	1-2	口縁	凹線	ナデ	○				○	○	にぶい赤褐	赤褐	
	36	C2	1下	鉢形	1-2	口縁	凹線	ナデ					○	○	灰黄褐	にぶい赤褐	
	37	C7	Ⅱ上	鉢形	1-2	口縁	凹線の羽状文	ナデ	○				○	○	黒褐	暗灰黄	
第4図	38	-	-	鉢形	2-1	口縁	刺突+沈線、刷毛目	工具ナデ、ナデ	○			○	○	にぶい赤褐	にぶい橙		
	39	B2	1下	鉢形	2-1	口縁	刺突+沈線	指オサエ、ナデ	○	○			○	灰褐	にぶい黄褐		
	40	A1	1下	鉢形	2-1	口縁	刺突+沈線	ナデ	○				○	灰黄褐	赤褐		
	41	C5	1下	鉢形	2-1	口縁	押し引き+沈線、工具ナデ	工具ナデ、ナデ	○			○	○	灰褐	にぶい褐		
	42	B6	Ⅱ下	鉢形	2-1	口縁	押し引き+沈線、ナデ	刷毛、ナデ	○	○	○		○	橙	にぶい黄橙		
	43	-	表採	鉢形	2-1	口縁	押し引き+沈線	ナデ	○				○	にぶい黄褐	にぶい赤褐		
	44	B4	1下	鉢形	2-1	口縁	刺突+沈線	ナデ					○	灰黄褐	黒褐		
	45	B2	1下	鉢形	2-1	口縁	押し引き+沈線、ナデ	ヘラ削り、ナデ					○	○	黒褐	灰黄褐	
	46	-	-	鉢形	2-1	口縁	押し引き+沈線	指オサエ、ナデ	○				○	○	褐灰	にぶい赤褐	
	47	B2	1上	鉢形	2-1	口縁	押し引き+沈線	ナデ	○			○	○	にぶい赤褐	橙		
	48	A.2.1	下	鉢形	2-1	口縁	押し引き+沈線	ナデ	○		○		○	灰褐	明赤褐		
	49	A2	1下	鉢形	2-1	口縁	押し引き+沈線	ナデ					○	○	にぶい褐	にぶい橙	
	50	B4	1	鉢形	2-1	口縁	刺突+沈線	ナデ	○	○	○	○	○	にぶい赤褐	にぶい黄褐		

第3表 嘉徳遺跡出土土器観察表(2)

神宮 番号	掲載 番号	出土 区等	層位	器種	分類	部位	文様・調整		胎土					色調		備考
							外面	内面	石英	長石	燧石	鱗石	砂礫	外面	内面	
第5図	51	C3	1上	鉢形	2-1	口縁	押し引き+沈線	指頭痕, ナデ	○			○	○	暗灰黄	にぶい赤褐	
	52	A1	1下	鉢形	2-1	口縁	刺突+沈線	ナデ	○			○	○	灰黄褐	にぶい赤褐	
	53	-	-	鉢形	2-1	口縁	押し引き+沈線	指頭痕, ナデ	○			○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
	54	B2	1下	鉢形	2-1	口縁	押し引き+沈線	ヘラ削り, ナデ	○			○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
	55	C4	1下	鉢形	2-1	口縁	押し引き+沈線	ヘラ削り, ナデ	○			○	○	にぶい橙	黄褐	
	56	C2-1	断面C	鉢形	2-1	口縁	押し引き+沈線	ナデ	○					灰黄褐	にぶい黄褐	
	57	B3	1下	鉢形	2-1	口縁	刺突+沈線	ナデ				○	○	にぶい赤褐	にぶい橙	
	58	A3	1上	鉢形	2-1	口縁	刺突+沈線	ナデ				○	○	褐	灰褐	
	59	C4	1上	鉢形	2-1	口縁	押し引き+沈線	ナデ	○	○		○	○	黒褐	にぶい赤褐	
	60	C3	1上	鉢形	2-1	胴部	刺突	ヘラ削り, ナデ	○	○		○	○	褐灰	にぶい赤褐	
	61	-	表採	鉢形	2-2	口縁	沈線+短沈線	ナデ	○			○	○	黄褐	橙	1974: 1採集
	62	O6	1上	鉢形	2-2	口縁	沈線+短沈線	ナデ	○			○	○	黒褐	にぶい黄褐	
	63	C7	Ⅱ上	鉢形	2-2	口縁	沈線+短沈線	ナデ	○		○	○	○	明赤褐	にぶい黄褐	
第6図	64	B3	1下	鉢形	3	口縁	沈線の編目文, ナデ	ナデ				○	○	にぶい黄褐	橙	
	65	C5	下	鉢形	3	口縁	沈線の羽状文	工具ナデ, ナデ	○			○	○	灰褐	にぶい赤褐	
	66	C2	1上	鉢形	3	口縁	沈線の鋸歯文, ナデ	工具ナデ, ナデ				○	○	にぶい黄褐	にぶい橙	
	67	B5	1下	鉢形	3	口縁	沈線の編目文, 刺突, ナデ	ナデ	○				○	灰黄褐	にぶい黄褐	
	68	-	-	鉢形	3	口縁	沈線の編目文, 刺突, ナデ	ヘラ削り, 指オサエ, ナデ	○				○	灰黄褐	黄褐	
	69	A3	1上	鉢形	3	口縁	沈線の編目文	ナデ	○			○	○	褐	明赤褐	
	70	B2	1上	鉢形	3	口縁	沈線の編目文, 刺突文	ナデ	○			○	○	灰黄褐	にぶい赤褐	
	71	C2	1下	鉢形	3	口縁	沈線の編目文	ナデ	○				○	灰黄褐	橙	
	72	-	-	鉢形	3	口縁	沈線の編目文	ヘラ削り, ナデ	○			○	○	にぶい黄褐	にぶい赤褐	
	73	B4	1上	鉢形	3	口縁	沈線の編目文	ナデ	○			○	○	にぶい橙	にぶい赤褐	
	74	B3	1下	鉢形	3	口縁	沈線の編目文	ヘラ削り, ナデ	○			○	○	灰黄褐	にぶい黄褐	
	75	C5	1下	鉢形	3	口縁	沈線の羽状文	ナデ					○	暗灰黄	暗灰黄	
	76	B5	1下	鉢形	3	口縁	沈線の羽状文	指頭痕, ナデ				○	○	灰黄褐	にぶい橙	
	77	C3	1上	鉢形	3	口縁	沈線の羽状文, ナデ	指頭痕, ナデ	○				○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
	78	C3	1上	鉢形	3	口縁	沈線の羽状文	ナデ					○	暗灰黄	にぶい橙	
	79	O6	-	鉢形	3	口縁	沈線の羽状文, 刺突文	沈線, 刻線, ナデ				○	○	にぶい橙	褐灰	
	第7図	80	B2	1下	鉢形	3	口縁	沈線	ナデ				○		灰黄褐	にぶい赤褐
81		-	-	鉢形	3	口縁	沈線	工具ナデ, ナデ	○				○	にぶい黄褐	明赤褐	
82		C4	1下	鉢形	3	口縁	沈線の鋸歯文	沈線, ナデ	○					灰黄褐	赤褐	
83		B2	1下	鉢形	3	口縁	沈線の鋸歯文	ナデ	○	○		○	○	にぶい橙	橙	
84		B4	1上	鉢形	3	口縁	沈線の羽状文	ナデ	○				○	にぶい黄褐	にぶい赤褐	
85		B2	1下	鉢形	3	口縁	沈線の羽状文	ナデ	○				○	灰黄褐	橙	
86		C3.3	臨鉢	鉢形	3	口縁	沈線の編目文	指頭痕, ナデ	○				○	灰黄褐	にぶい橙	
87		C3	1上	鉢形	3	口縁	沈線の編目文	ナデ	○					にぶい黄褐	暗灰黄	
88		B3	上	鉢形	4	口縁	沈線の鋸歯文, 沈線	工具ナデ, ナデ	○	○			○	灰黄褐	にぶい赤褐	
89		B1	Ⅰ?Ⅱ	鉢形	4	口縁	条痕文	条痕文	○	○		○	○	黒褐	にぶい赤褐	
90		B2	1下	鉢形	4	口縁	条痕文	工具ケズリ, ナデ, 刻線	○	○		○	○	にぶい黄褐	灰黄褐	
91		C3	1下	鉢形	4	口縁	凹線	ナデ					○	灰黄褐	明赤褐	
92		O6	表採	鉢形	4	口縁+胴	突帯文, 工具ケズリ, ミガキ	沈線, 工具ナデ	○				○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	口径 6.2cm
93		-	-	鉢形	4	口縁	突帯文, 刺突文, ナデ	工具ナデ, ナデ	○	○	○		○	灰褐	にぶい赤褐	口径 11.5cm
94		C3	1下	鉢形	4	口縁	突帯+沈線	工具ナデ, ナデ					○	明赤褐	にぶい黄褐	口径 10.7cm
95		B4	1上	鉢形	4	口縁	突帯+沈線	工具ナデ, ナデ	○					にぶい赤褐	にぶい赤褐	
96		-	-	鉢形	4	胴部	突帯+沈線	工具ナデ, ナデ	○	○	○		○	にぶい赤褐	明赤褐	
97		-	表採	鉢形	4	胴+胴	突帯+沈線	工具ケズリ, ナデ			○		○	黄褐	にぶい黄	

第4表 嘉徳遺跡出土土器観察表(3)

神図 番号	掲載 番号	出土 区等	層位	器種	分類	部位	文様・調整		胎土					色調		備考	
							外面	内面	石英	長石	細砂	粗砂	砂礫	外面	内面		
第7図	98	A2	1	鉢形	4	口縁	刺突突帯+沈線、ナデ	ナデ	○		○				橙	にぶい褐	
	99	-	-	鉢形	4	口縁	刺突突帯+沈線	ナデ	○		○		○		にぶい赤褐	橙	
	100	A3	1	鉢形	4	口縁	刺突突帯+沈線	ナデ					○		暗灰黄	にぶい黄褐	
	101	-	-	鉢形	4	口縁	凹線、条痕文	条痕文	○			○	○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	
	102	西	VI, 1	鉢形	4	口縁	押し引き文、条痕文	ナデ	○				○		灰褐	灰褐	
第8図	103	B8	2下	鉢形	-	口縁	凹線+刺突	工具ナデ	○			○	○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	
	104	-	-	鉢形	-	口縁	凹線+刺突、ナデ	工具ナデ、ナデ	○			○	○		暗灰黄	暗灰黄	
	105	-	-	鉢形	-	口縁	無文、ナデ	ナデ	○				○		褐	にぶい橙	
	106	B4	1下	壺形	-	口縁	無文、ナデ	ナデ					○		橙	橙	
	107	B2	1	壺形	-	口縁	無文、ナデ	ナデ					○		にぶい黄褐	橙	
	108	C5	1上	壺形	-	口縁	無文、ナデ	ナデ					○		橙	橙	
	109	C3	-	皿	-	口縁	押し引きの編目文	ナデ	○						にぶい赤褐	にぶい赤褐	
	110	B5	1上	皿	-	口縁	凹線	押し引文、ナデ					○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	
	111	C5	1上	皿	-	口縁	沈線	ナデ					○		橙	橙	
	112	B4	1下	皿	-	口縁	無文、工具ナデ、割線、ナデ	工具ナデ、ナデ、指頭痕	○						にぶい黄褐	暗灰黄	
	113	B4	1下	皿	-	口縁	無文、工具ナデ、割線、ナデ	工具ナデ、ナデ、指頭痕	○						にぶい赤褐	にぶい赤褐	
	114	-	IV上層	皿	-	口縁付近	無文、工具ナデ、割線、ナデ	工具ナデ、ナデ、指頭痕	○						橙	橙	
	115	C5	1上	皿	-	口縁	無文、工具ナデ、割線、ナデ	ナデ	○						橙	橙	
	116	B5	-	皿	-	口縁	無文、工具ナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ	○						橙	橙	
	117	B2	1下	皿	-	口縁	無文、ナデ	ナデ	○						にぶい黄褐	にぶい黄褐	
	118	A3	1上	-	-	底部	無文、ヘラ削り、ナデ	ナデ					○		暗灰黄	にぶい赤褐	底径 9.4cm
	119	A3	1上	-	-	底部付近	無文、ナデ	ナデ					○		褐	明赤褐	
120	東側A	-	-	-	底部	無文、ナデ	ヘラ削り、ナデ	○				○		褐灰	にぶい褐		
121	A4	表採	-	-	底部	無文		○				○	○	にぶい赤褐	暗灰黄	1974. 1採集	

第5表 嘉徳遺跡出土石器観察表

神図 番号	掲載 番号	器種	出土層	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考
				長さ	幅	厚さ			
8	122	石のみ	C21下	8.4	1.7	1.5	24.4	粘板岩	

第5節 研究史

河口は「奄美編年」(1974)において、嘉徳遺跡とそれまでの発掘調査成果を基に9型式を設定し、8型式について次のような型式組列を示した。

面縄東洞式→嘉徳Ⅰ式→嘉徳Ⅱ式→面縄西洞式→  
面縄前庭式→喜念Ⅰ式→宇宿上層式b→宇宿上層式a

同年の嘉徳遺跡発掘調査報告書では、嘉徳Ⅰ式を嘉徳Ⅰ式Aと嘉徳Ⅰ式Bに分け、凹線文土器を嘉徳Ⅱ式から分離して1型式とした。さらに第3層最下部から出土した土器を奄美において最も古い型式で、嘉徳Ⅰ式・嘉徳Ⅱ式に先だつものとして嘉徳式とした。上記の編年と併せると

嘉徳式→面縄東洞→嘉徳Ⅰ式A→嘉徳Ⅰ式B→  
嘉徳Ⅱ式→面縄西洞式→面縄前庭式→喜念Ⅰ式→  
宇宿上層式b→宇宿上層式a

という型式組列を示したこととなる。これにより、以後の南島を舞台とした考古学的な議論が可能となり、その功績は計り知れない。ただ、嘉徳Ⅱ式から分離して1型式とした凹線文土器の時間的な位置については示していない。

その後、1984(昭和59)年、「南島の先史文化」<sup>24)</sup>で河口は面縄前庭式を型式組列から外すこととなる。

1988(昭和63)年、「日本の古代遺跡 38 鹿児島」<sup>25)</sup>において、河口は面縄東洞式以降の土器編年を表中で次のように示すが、先に設定した嘉徳式・凹線文土器については言及していない。

面縄東洞式→嘉徳Ⅰ式→嘉徳Ⅱ式→面縄西洞式→  
大田布式→喜念Ⅰ式→宇宿上層式b→宇宿上層式a

ただ、本文中の面縄第四貝塚の項では、先に型式組成

から外した面縄前庭式を面縄東洞式の前に置いた型式組列を再度示している。

1996（平成8）年、河口は日本土器辞典<sup>11</sup>で嘉徳式、嘉徳Ⅰ式A・B、嘉徳Ⅱ式等の解説を行った。その中で嘉徳式と嘉徳Ⅰ式Bとの違いについて、沈刻線で囲まれた枠内を爪形文で埋める手法と文様構成は籠の編目に基づく点は共通し、嘉徳Ⅰ式Bには鋸歯文が付加され、枠内に爪形を欠く部分があることが相違点と述べた。また、嘉徳式は嘉徳Ⅰ式Bに先行するとしたが、面縄東洞式から嘉徳Ⅱ式にいたる型式の変遷に嘉徳式の占める位置については言及していない。

1998（平成10）年、大西は「鹿児島県大島郡瀬戸内町嘉徳遺跡出土土器の再検討」<sup>12</sup>において、河口の示した型式組列の問題点を指摘した。嘉徳遺跡出土土器の文様をもとに分類し、それぞれの出土層を検討した。その結果、

面縄東洞式・凹線文あるいは嘉徳Ⅱ式の一部→  
嘉徳Ⅰ式及び嘉徳式→嘉徳Ⅱ式→面縄西洞式・  
喜念Ⅰ式

という型式の変遷を示した。大まかには河口の示した編年観と重複するが、凹線文と面縄東洞式を同じ型式とし、嘉徳Ⅰ式Aと嘉徳Ⅰ式Bを同じ型式とすると同時に嘉徳式もここに含めた点が異なる。

2000（平成12）年、伊藤は「琉球縄文文化の基礎的研究」<sup>13</sup>で面縄東洞式・嘉徳Ⅰ～Ⅱ式の沖縄県内の出土状況と型式設定の経緯から、型式概念と変遷過程については、大幅な見直しの必要性を指摘した。

2004（平成16）年、堂達は「琉球列島の縄文時代後期土器の系譜—古我知原式土器の認定と細分から—」<sup>14</sup>において出水式の影響で嘉徳Ⅱ式が成立したこと、面縄東洞式・嘉徳Ⅰ式・嘉徳Ⅱ式・面縄西洞式等の土器型式の再評価・見直しの必要性を指摘した。

2008（平成20）年「琉球縄文土器（前期）」<sup>15</sup>において伊藤は北琉球全域の各土器型式を新たに土器様式概念に基づき再整理した。河口によって細分された面縄東洞式・嘉徳Ⅰ式A・嘉徳Ⅰ式B・嘉徳Ⅱ式を知名町神野貝塚における層位的出土傾向と単純様相の遺跡出土資料を基準に古1・古2・新1・新2の4段階に再編した。大まかには、面縄東洞式の範囲を狭め、嘉徳Ⅰ式Aの一部類を古2段階と新1段階に、嘉徳Ⅰ式Bを新2段階に、嘉徳Ⅱ式の一部類を古2段階と新2段階に再編した。

2014（平成26）年、新里は「前4期における奄美諸島の土器様相」<sup>16</sup>において、貝塚時代第4期の奄美を代表する面縄東洞式・嘉徳Ⅰ式A・嘉徳Ⅰ式B・嘉徳Ⅱ式について、面縄第2貝塚の調査（2002年度）結果を基に検討を行った。その結果、面縄第2貝塚は嘉徳Ⅱ式のうち、第1文様帯に施文による区画をもたず、沈線の

みで施文する沈線文土器が主体をなし、時代が新しくなるにつれ第1文様帯に区画が施され、最終的に第2文様帯に施文が及ぶと結論づけた。さらに、面縄第4貝塚と面縄第2貝塚での土器の出土状況を検討し、嘉徳Ⅰ式A・B、嘉徳Ⅱ式、神野D式、神野E式は出土層や遺構により明確に分離できず、出現時期を違えながら一定期間は同時性があったことを指摘した。

さらに新里は2017（平成29）年、「貝塚時代前4期奄美諸島の土器様相」<sup>17</sup>で嘉徳Ⅱ式の系譜について凹線文土器と仲泊式双方の文様要素を引き継ぎながら嘉徳Ⅱ式は成立したという考えを示した。

以上のとおり、1974年に河口の示した編年に対して2000年前後から型式の再評価と見直しが指摘され、現在も様々な検討が行われている。

## 第6節 再評価

今回の整理作業では、将来行われる嘉徳遺跡の再評価に有用と考えられる遺物の資料化に努めた。しかし、埋文センターが保管している遺物は、1974（昭和49）年1月に現地調査を行った際に採取した約130点の土器片と同年8月に発掘調査で出土した土器片の一部に過ぎない約400点である。さらに、遺構の実測図等も確認できなかったことから、今回の整理作業を通じて遺跡の再評価ができる状況にはない。そこで、今回整理作業を行った土器のうち、1～3類の特徴等をまとめて、再評価としたい。

### （1）1～3類の特徴

今回、1-1類11点、1-2類8点、2-1類23点、2-2類3点、3類24点の土器を掲載した。そこで、口縁部形状・形態等の特徴を観点毎にまとめた。ただし、2-2類の掲載点数は3点と特に少ないことから留意する必要がある。

#### ア 口縁部形状

2-2類は波状口縁のみで、他類は平口縁、波状口縁がある。

#### イ 山形突起等の有無

1-2類・2-2類以外は、口縁部に突起部をもつ。

#### ウ 上面観

上面観が方形、もしくは口縁部に屈曲部をもつものが、2-1類、2-2類、3類にある。

#### エ 口縁部文様帯の区画

口縁部文様帯を肥厚させたり、突帯状に粘土を貼り付け、胴部との境に段差を持つものが、2-2類以外にはある。3類には横位の刺突で区画するものが1点ある。

#### オ 口唇部の施文

2-2類以外は、押し引き文や刺突文等が施されるものがある。

## カ 胴部の施文

胴部に沈線で文様を施すものが、2-1類、2-2類、3類にはある。

以上が1~3類の特徴である。

また、埋文センターが保管している嘉徳遺跡の土器の内、器種及び掲載・非掲載に関わらず1~3類に分類できた土器約150点についての分類毎の比率は以下のとおりであった。

1-1類	17%	1-2類	10%
2-1類	27%	2-2類	3%
3類	43%		

### (2) 嘉徳I式・II式の出土層の確認

河口は「奄美編年」で1974(昭和49)年1月の現地調査で採取した土器をもって嘉徳I式及び嘉徳II式の型式設定を行った。その際、下層出土の嘉徳I式と上層出土の嘉徳II式が同層を挟んで分離できたことを根拠として型式設定を行った。そこで、現地調査した際に採取した約130点の土器の注記を手がかりに出土層の確認を行った。なお、前述したが、河口は約130点のうち、18点を写真で「奄美編年」に掲載している。本報告書では、その18点を実測し、第1図に示した。

1~5は「奄美編年」で「嘉徳I式(下層出土・爪形沈線文)」、6~13・15~17は、「嘉徳II式(上層出土・沈線文)」とされたものである。詳細は土器観察表を参照していただきたいが、土器の注記から下層出土を確認できるものは5の1点、上層出土を確認できるものは13・14の2点だけであった。これ以外の土器には注記がなかったり、「上下」という注記で出土層位が判断できなかつたりするものであった。しかも、5について河口は嘉徳I式に先行するものとして扱っていることから、嘉徳I式が下層から出土したという事実は確認できない状況である。

また、「奄美編年」の掲載遺物以外の土器についても出土層の確認を行った。土器に注記はなかったものの、ラベルが添えてあり、これにより出土層の確認をすることができた。ただ、「奄美編年」に掲載されなかった下層出土の土器は、全て無文土器であった。さらに、上層出土の土器には面縄西洞式1点含まれるが、これ以外は無文土器であった。つまり、注記及び土器に添えてあったラベルからは明確に下層から嘉徳I式が出土し、上層から嘉徳II式が出土したという状況は確認できなかった。

### (3) 2-1類の施文の先後関係について

河口<sup>16)</sup>は、嘉徳I式Aの文様について編目状の文様の束を沈刻線で縁取りするものとした。つまり、編目状の文様を施した後に沈刻線で縁取りすると説明しているが、これは面縄東洞式から嘉徳I式への流れの中では当然の考えと思われる。今回の整理作業で埋文センター

が保管している1974(昭和49)年8月の発掘調査で出土した土器の中から2-1類(嘉徳I式A)については23点を抽出し、第4・5図に掲載した。そこで、この23点について刺突も含む編目状の文様と沈刻線の縁取りの先後関係を施文の切り合い関係から検討した。その結果、23点中7点が編目状の文様を、9点が沈刻線で区画を先に施している。残りの7点については不明であった。編目状の文様を施した後に沈刻線で縁取りするという施文の先後関係は成り立たないか、2-1類内での施文方法の変化が考えられる。つまり、2-1類(嘉徳I式A)の施文の先後関係に有意的な結果は見いだせなかった。

また、口縁部の形態にも器壁が肥厚するもの、胴部との境に明瞭な段差をもつもの、口縁部下端が肥厚するものがあるが、文様と明確な関係性は見いだせなかった。具体的には、施文の先後関係と肥厚する口縁部との関係、さらに施文の先後関係と胴部文様帯との関係、編目状の束の施文方法(押し引きか刺突)と口縁部形態・胴部文様帯の関係についても確認したが、施文の先後関係と同じように有意的な関係性を見いだすことはなかった。2-1類については口縁部形態に関係なく様々な文様が施されるが、このことは2-1類の再検討の必要性を示唆していることも考えられる。ただ、土器片が多く部分的に施文の先後関係が逆転する可能性もあり、口縁部も部分的な形態を示している可能性もあることから、今後数多い個体で検証する必要がある。なお、2-2類(嘉徳I式B)については、掲載点数が3点と少ないことから検討は行っていない。

本書で扱った1類~3類(面縄東洞式・嘉徳I式・嘉徳II式)に関しては、これまで様々な問題点が指摘されている。今回の整理作業をとおして嘉徳I式とII式の出土層についても確認を行ったが、明確な追証はできなかった。また、口縁部の形状・形態や文様帯についても型式毎に明確な相違を見出すことは難しい状況である。今後、1974(昭和49)年8月に実施された発掘調査で出土した遺物の再検討と新たな調査事例の増加により、層位的な検討と型式学的な検討がなされることに期待したい。

現在では様々な問題点や矛盾点が指摘されている河口が示した南島土器の編年ではある。しかし、河口がこの編年を1974年に示したことにより、これ以降南島を舞台とした考古学的な議論の礎ができあがり、考古学的研究が飛躍的に進んだことに異議を差し挟む余地はない。このことは、当時も現在も変わらず評価される点である。今後も奄美の編年に新たな知見と視点で検討が加えられると思われるが、その基礎となるのは河口が行った編年である。このことこそが、彼の業績の大きさを示すもの

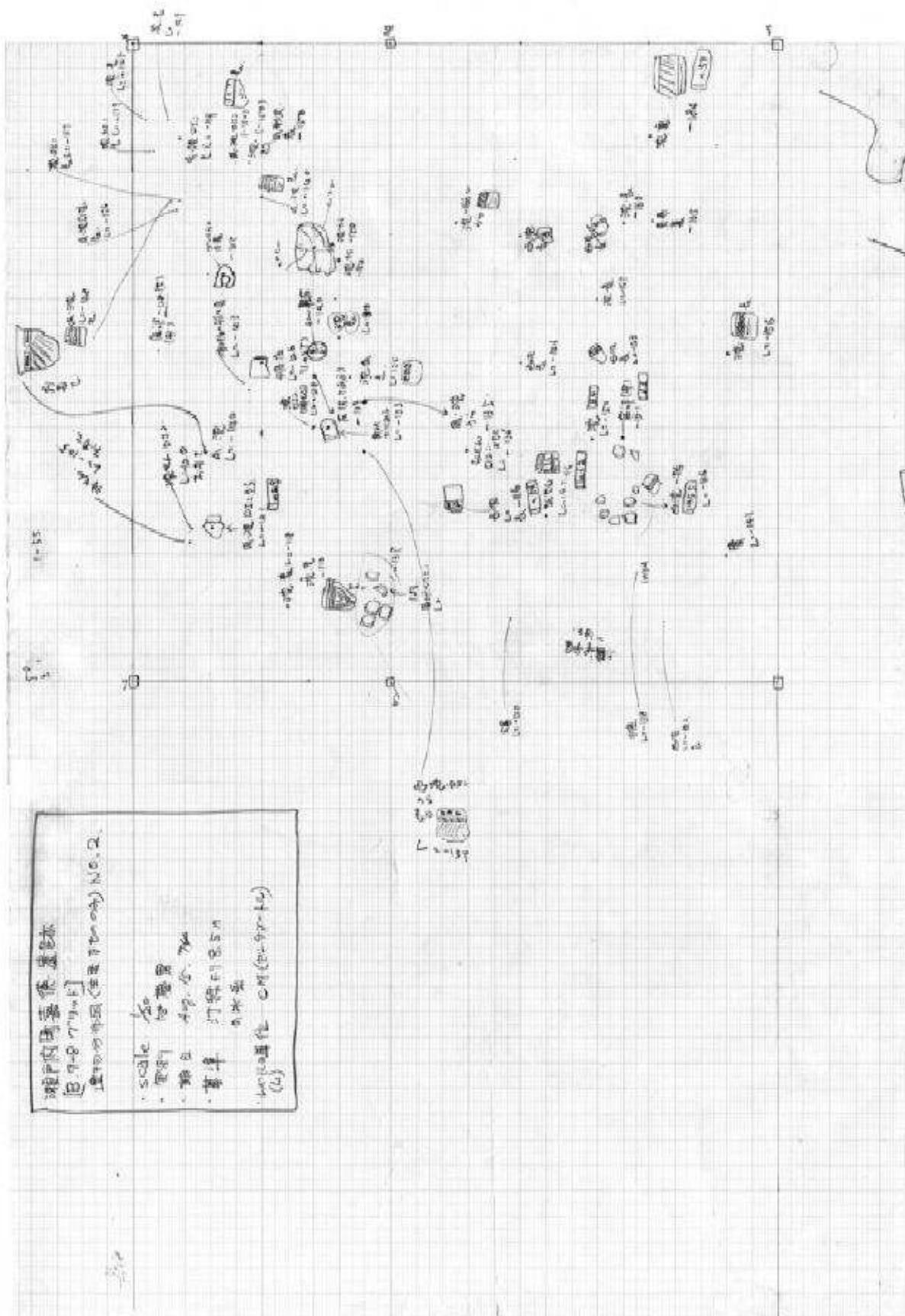
である。

—注—

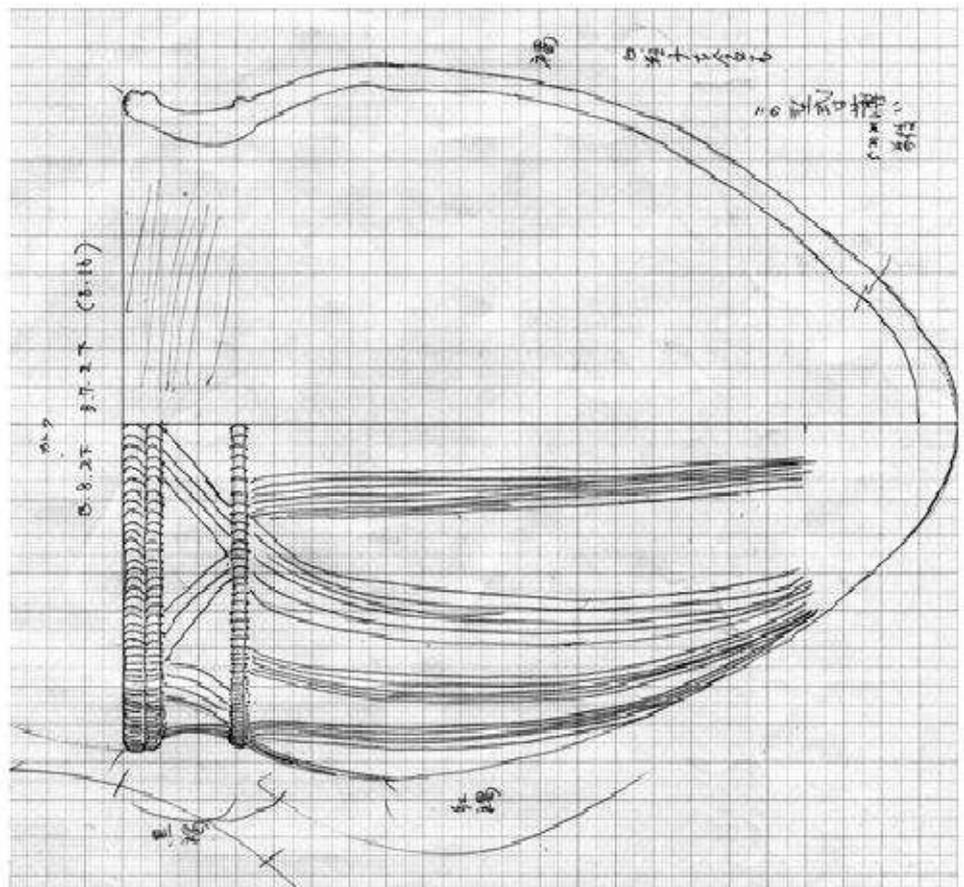
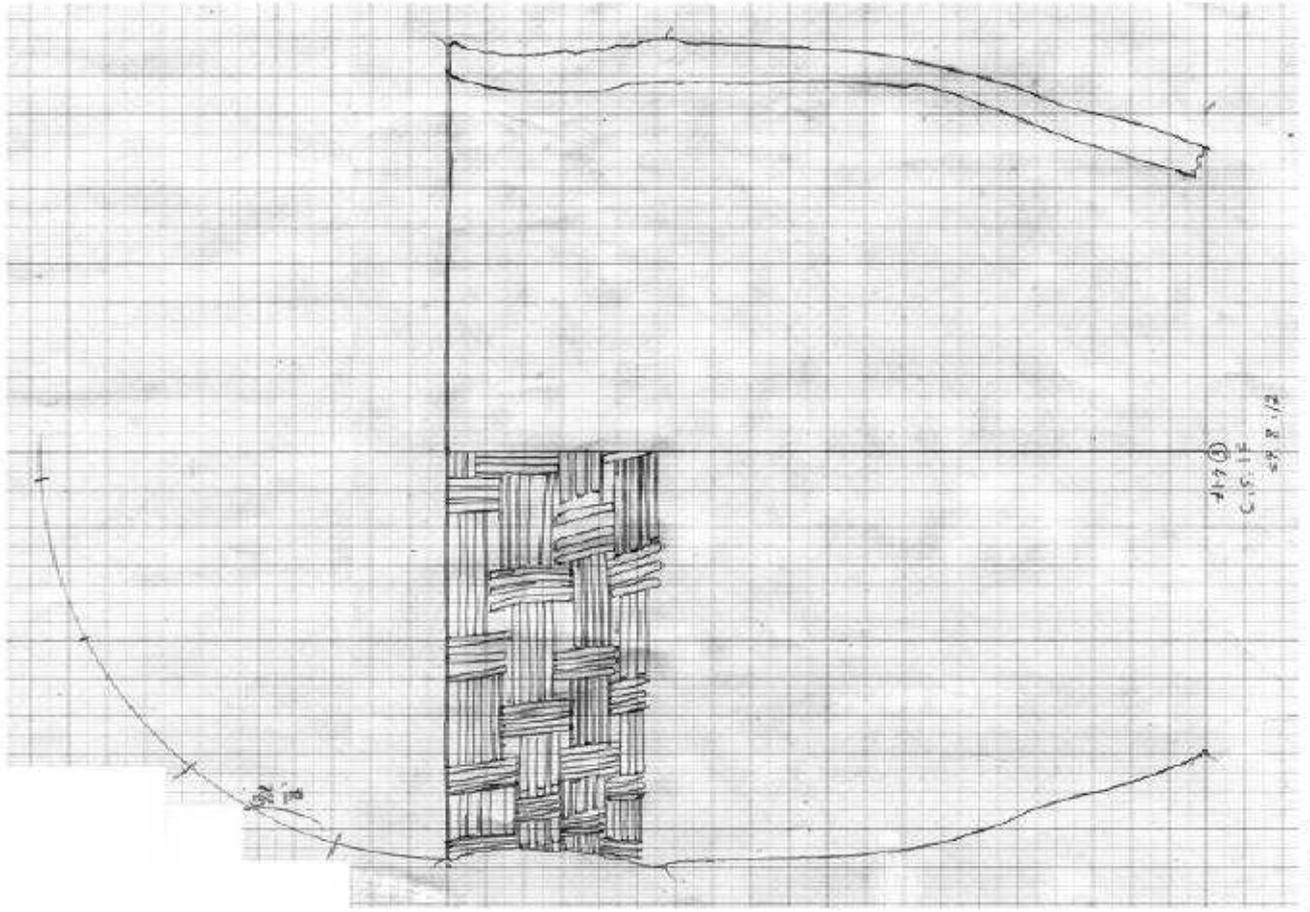
- 注1 河口貞徳 上村俊雄 多々良友博 平島勇夫  
肘岡隆夫 1974 「嘉徳遺跡」『鹿児島考古』第  
10号
- 注2 河口貞徳 上村俊雄 多々良友博 平島勇夫  
肘岡隆夫 1974 「嘉徳遺跡」瀬戸内町教育委員  
会
- 注3 河口貞徳 1974 「奄美における土器文化の編年  
について」『鹿児島考古』第9号
- 注4 河口貞徳 1984 「南島の先史文化」『鹿大考  
古』第2号
- 注5 河口貞徳 1988 「日本の古代遺跡 38 鹿児  
島」 保育社
- 注6 河口貞徳 1996 「嘉徳式土器」ほか 大川清  
鈴木公雄 工楽善通編『日本土器事典』
- 注7 大西智和 1998 「鹿児島県大島郡瀬戸内町嘉徳  
遺跡出土土器の再検討」『南日本文化』第31号
- 注8 伊藤慎二 2000 「琉球縄文文化の基礎的研究」  
『未完成考古学叢書』2
- 注9 堂込秀人「琉球列島の縄文時代後期土器の系譜—  
古我知原式土器の認定と細分から—」
- 注10 伊藤慎二 2008 「琉球縄文土器（前期）」  
『総覧 縄文土器』
- 注11 新里亮人 2014 「前4期における奄美諸島の土  
器様相」新里貴之・高宮広土編『琉球列島先  
史・原史時代における環境と文化の変遷に関する  
実証的研究 研究論文集 第1集』
- 注12 新里亮人 2017 「貝塚時代前4期奄美諸島の土  
器様相」『鹿児島考古』第47号

—参考文献—

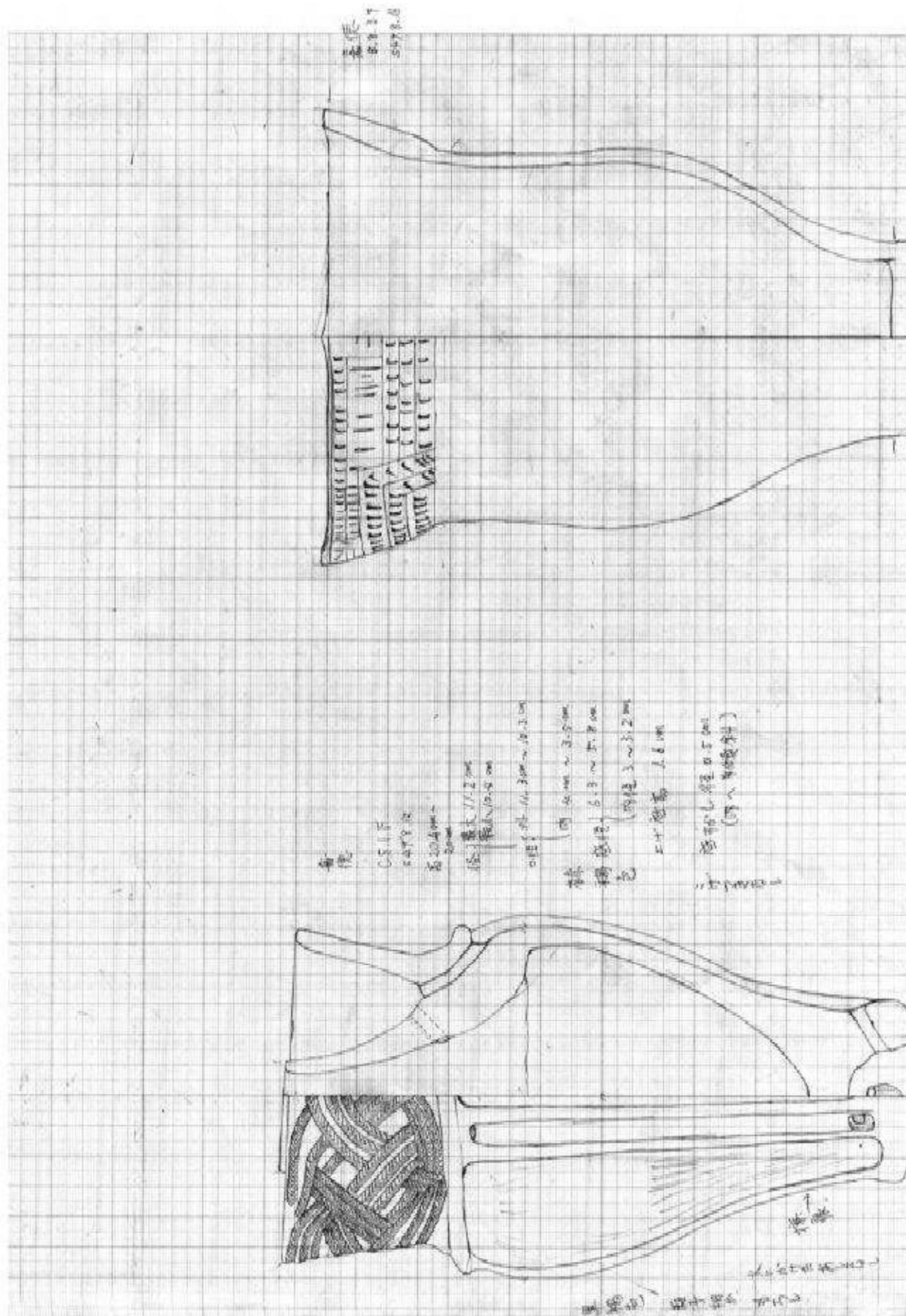
- 伊仙町教育委員会 1984 『犬田布遺跡』伊仙町埋蔵文  
化財発掘調査報告書（2）
- 伊仙町教育委員会 2016 『面縄貝塚 総括報告書』  
伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（16）
- 宇検村誌編集委員会 2017 「宇検村誌」
- 鹿児島県教育委員会 1990 『奄美地区埋蔵文化財分布  
調査報告書Ⅱ』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（54）
- 亀島慎吾 2017 「貝塚時代前4期沖繩諸島の土器様相」  
『鹿児島考古』第47号
- 河口貞徳 2005 「嘉徳遺跡」『先史・古代の鹿児島』  
鹿児島県教育委員会
- 瀬戸内町教育委員会 2005 『瀬戸内町遺跡詳細分布調  
査報告書』瀬戸内町文化財調査報告書第1集
- 瀬戸内町教育委員会 2017 『瀬戸内町内の遺跡1』  
瀬戸内町文化財調査報告書第5集



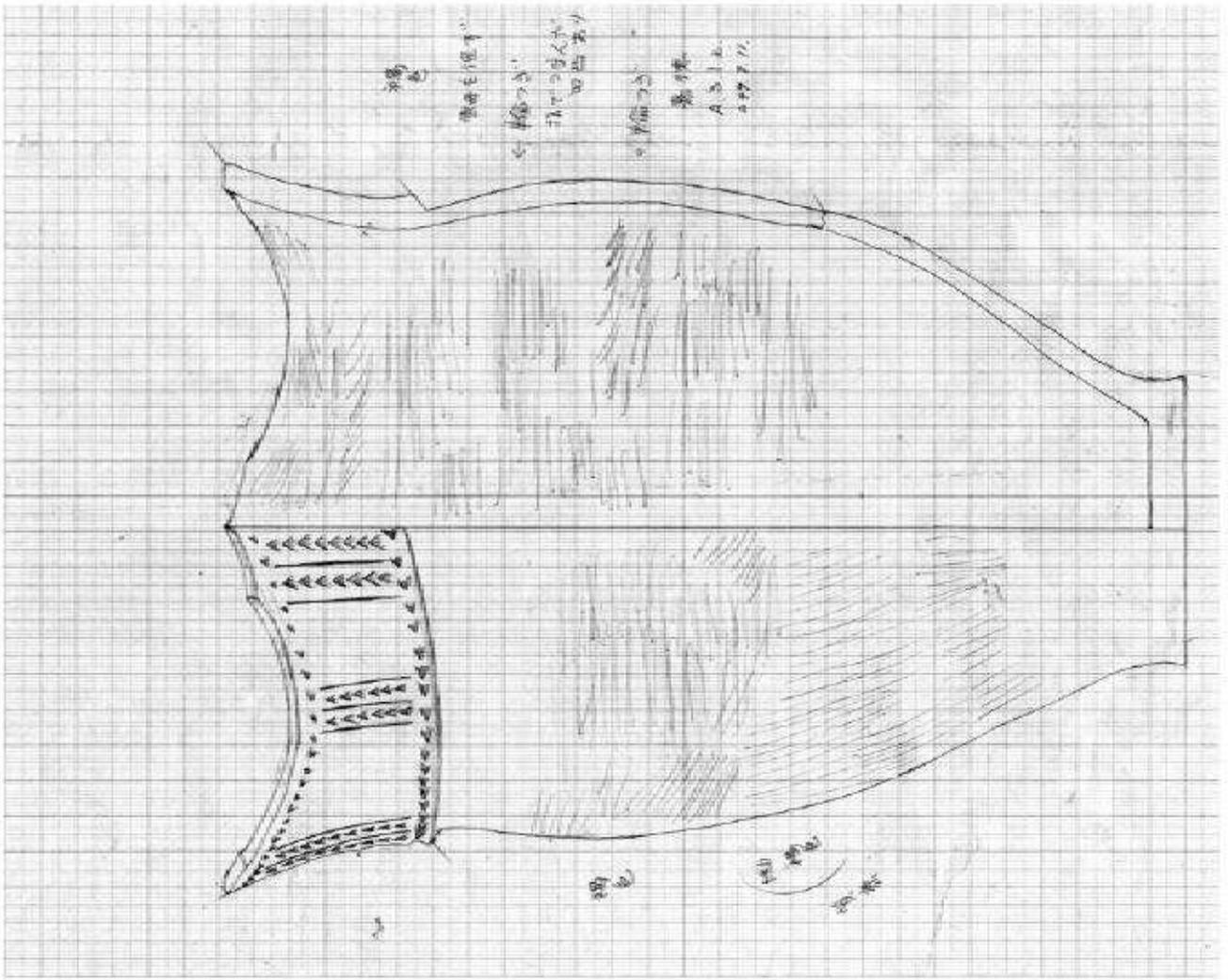
遺物分布圖



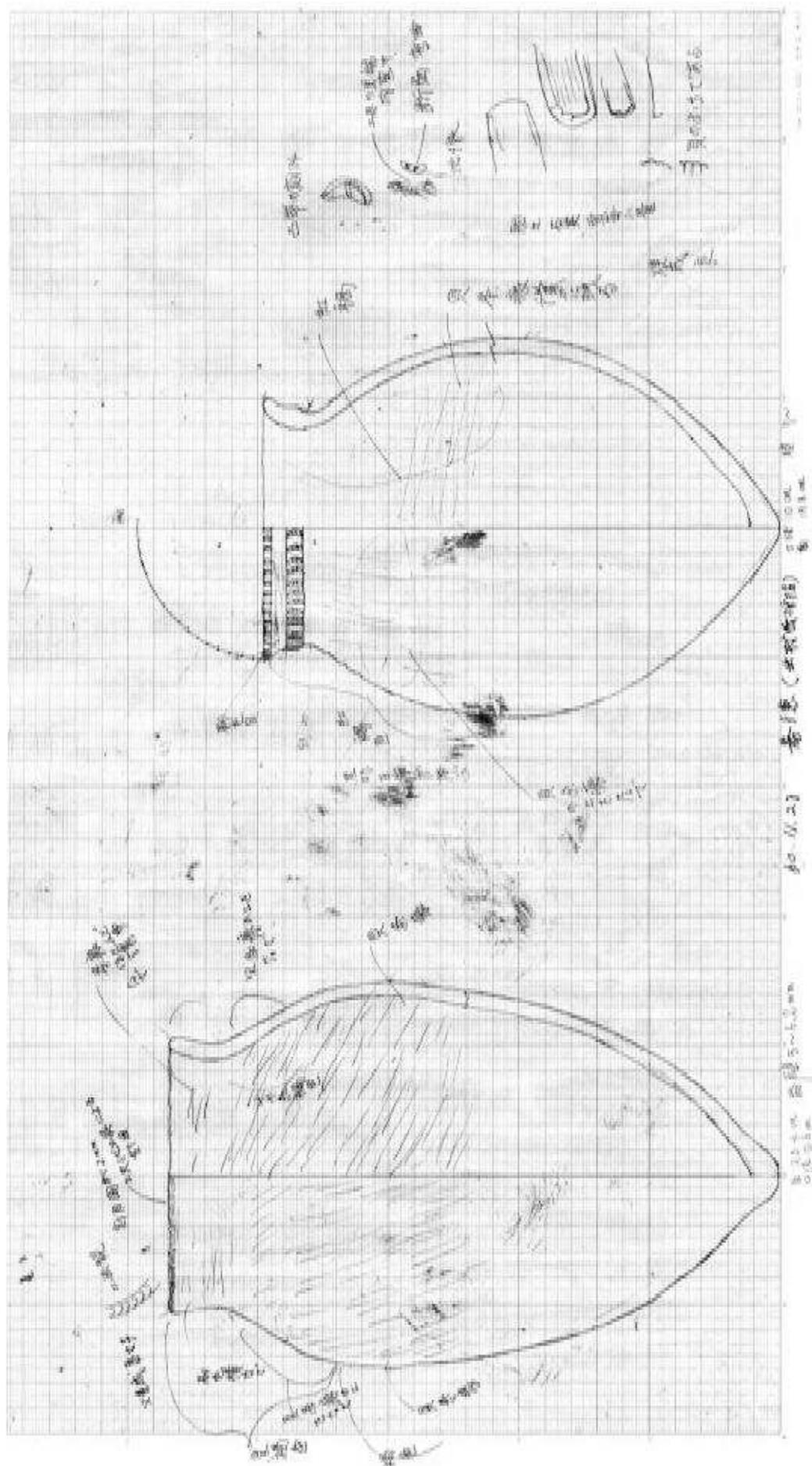
出土器実測図 1



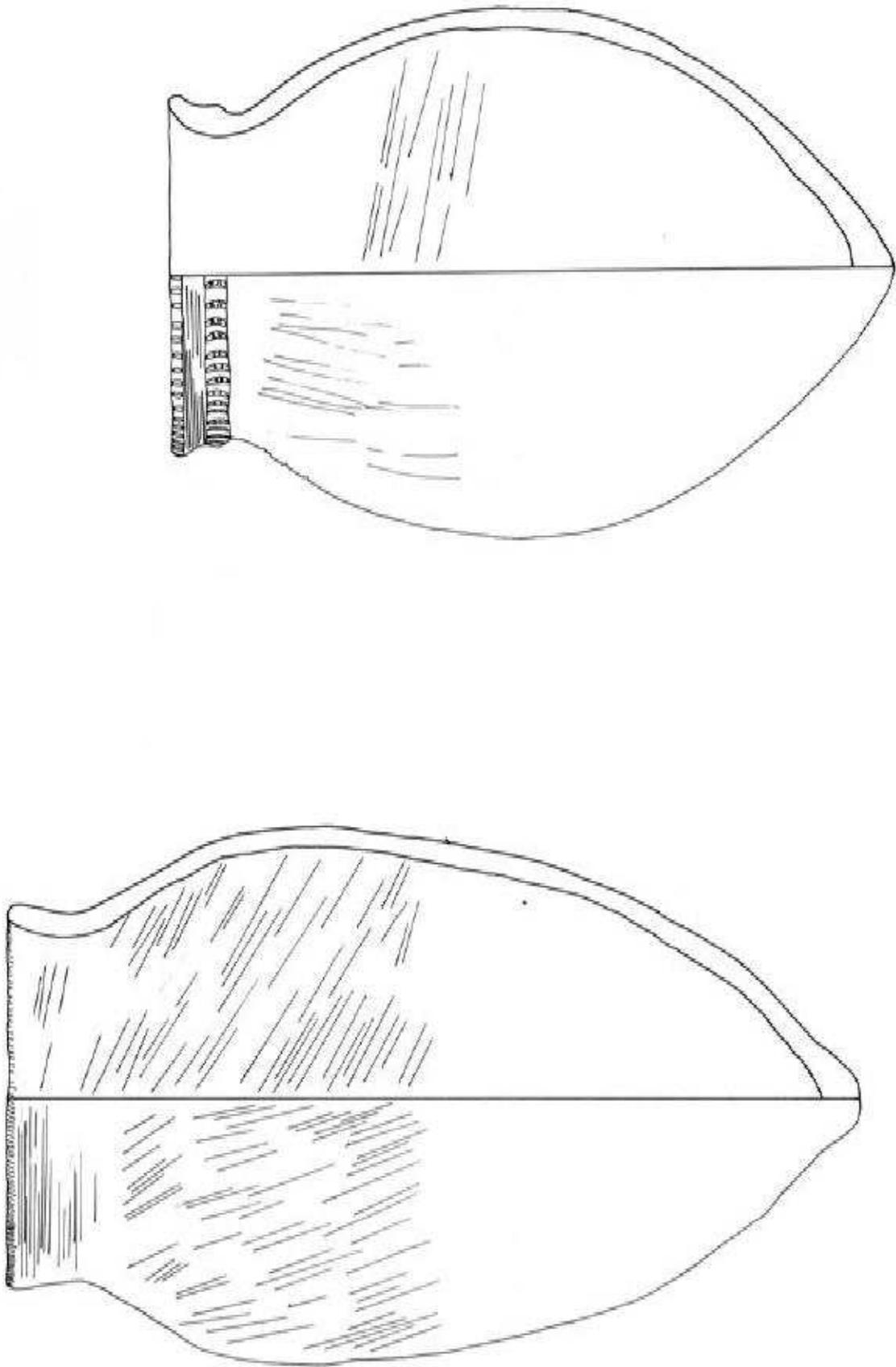
出土器実測図 2



出土器実測図 3



出土器实测图4



出土土器トレス図

## 第V章 喜念貝塚

### 第1節 調査の経過

喜念貝塚は戦前の1932（昭和7）年、廣瀬祐良が発見した。1933（昭和8）年に廣瀬祐良、1935（昭和10）年に三宅宗悦により発掘調査が行われている。

戦後、1954（昭和29）年5月17日から6月1日の間、河口は奄美大島学術調査団の一員として喜界町、奄美大島本島、与路島、徳之島、沖永良部島、与論島を訪れている。この時、喜念貝塚の現地調査も行い、無文の尖底土器が見られるとの記述が報告書<sup>11</sup>にある。

河口の記した当時の野帳から転記すれば、彼の調査日程は以下のとおりである。

昭和29年

- |       |                  |
|-------|------------------|
| 5月18日 | 奄美博物館にて遺物調査      |
| 5月19日 | 喜界島にて調査          |
| 5月20日 | 宇宿貝塚発掘調査         |
| 5月21日 | 古仁屋にて調査          |
| 5月22日 | 与論島にて調査          |
| 5月23日 | 同上               |
| 5月24日 | 和泊にて唾布ひぞ遺跡調査     |
| 5月25日 | 知名にて調査           |
| 5月26日 | 面縄貝塚・喜念貝塚・兼久貝塚調査 |
| 5月29日 | 請島・与路島にて調査       |

河口が喜念貝塚を調査したのは、1954（昭和29）年5月26日であることが確認できる。同日には、面縄第一貝塚・面縄第二貝塚・兼久貝塚などの現地調査も行われている。喜念貝塚の調査は現地確認と50点程度の土器を採取したものであった。

さらに、1955（昭和30）年から1957（昭和32）年の3年に亘り、九学会連合奄美大島共同調査委員会<sup>12</sup>による共同調査が実施された。この委員会は1953（昭和28）年12月の奄美大島本土復帰を機に組織され、奄美大島の自然・地理・歴史・社会・経済等広い分野をその研究対象とした。考古班は1955（昭和30）年に宇宿貝塚、1956（昭和31）年には徳之島を対象地域とし、主に面縄貝塚の発掘調査、他に兼久貝塚・本川貝塚・喜念貝塚の調査を行った。喜念貝塚については貝塚露出部地点の試掘調査を実施している。1957（昭和32）年には沖永良部島の住吉貝塚の発掘調査を主とし、住吉貝塚の周辺遺跡と喜界島での調査を行った。河口は、この共同調査に調査委員として3年間参加している。

喜念貝塚の調査は、1956（昭和31）年8月24日に実施された。報告書<sup>13</sup>には、以下のような内容が記されている。砂丘の斜面を幅2.5 m、奥行き0.5 m、深さ1 m

程度の範囲で試掘調査を行っている。表層は厚さ20 cm程度の砂層、その下位に40 cmの混土貝層、20 cmの砂層をはさんで下位には20 cm程度の混土貝層があり、いずれの混土貝層も遺物包含層である。出土遺物は宇宿上層式が最も多く、同様の器形で口縁部から胴部にかけて一部に縦線を施すもの、また、同様の器形で縦または横にみみずばれ状の隆起線を施し、その両側または片側に刺突した列点を並べたものも少量出土したとある。

その後、1975（昭和50）年の伊仙町大水害の際、喜念貝塚の一部が露出し、通報を受けた河口は現地調査を行った。その結果、宇宿下層式の遺物包含層が最下部にもう一層あることが判明し、多数の宇宿下層式の土器・貝製品が発見された。この時に採集された土器と貝製品の一部は「伊仙町誌」<sup>14</sup>に写真で掲載されている。現地調査の際、採集した遺物は、「伊仙町誌」で紹介された遺物も含め伊仙町郷土資料館で保管されている。

また、同時に現地調査を行った白木原和美は「大島郡伊仙町の先史的所見」<sup>15</sup>で採集した遺物を紹介している。一部の遺物は、河口が紹介した遺物と重複する。

### 第2節 再整理の方法

1954（昭和29）年5月に奄美大島学術調査団が調査を行った際の報告書には、調査をした遺跡名を列挙した中に喜念貝塚があり、具体的な調査内容や遺物紹介についての記述は特にない。また、1956（昭和31）年に実施された九学会連合奄美大島共同調査委員会による調査の報告書にも遺物の紹介はない。そこで、埋文センターが保管しているパンケース11箱の遺物が、いつ実施された調査のものかを特定することから始めた。さらに、両調査が行われた際の野帳からどのような調査が行われ、どのような遺物が出土したかを確認し、必要に応じて実測・掲載することとした。

河口は1974（昭和49）年に「奄美における土器文化の編年について」（以下、「奄美編年」という。）を発表し、喜念I式土器を設定した。<sup>16</sup>その際に、23点の喜念貝塚出土土器（内喜念I式土器3点）と宇宿貝塚出土の喜念I式土器22点を紹介している。これらの土器の実測図はなく、写真での紹介であることから全て実測・掲載することとした。また、埋文センターが管理している上記以外の喜念貝塚出土土器も抽出し、必要に応じて資料化したい。さらに、当時の発掘調査の様子を窺い知ることのできる記録等を確認し、可能な範囲で掲載することとした。

### 第3節 遺跡の位置と環境

喜念貝塚は、大島郡伊仙町喜念兼久に所在する。伊仙

町は徳之島にある行政区の一つで、他に徳之島町、天城町がある。

徳之島は琉球列島の一地域をなす奄美諸島の中央部に位置し、北に加計呂麻島、南に沖永良部島を望む。周囲が約84 km、面積約248 km<sup>2</sup>、日本で14番目に大きい島である。島の平面形は北から南に広がるフラスコ状をなす。標高500 m前後の山地が島を縦断するようにそびえ立ち、ほぼ中央部の井之川岳は標高645 mを測る。山地は砂岩、泥岩、花崗岩、粘板岩等で構成され、隆起石灰岩や砂礫層で構成される段丘がそれらを取り囲んでいる。沿岸部には砂丘、岩礁、断崖が観察される。また、亜熱帯海洋性気候と石灰岩土壌という稀有な環境の中、絶滅危惧種を含む多種多様な動植物たちが生息している。奄美大島と徳之島だけに生息する「アマミノクロウサギ」をはじめ、徳之島だけの固有種「トクノシマオビトカゲモドキ」や「イボイモリ」など、数多くの固有種や絶滅危惧種が確認されている。

伊仙町は徳之島の南西部に位置する。町の北部にある標高417 mの犬田布岳から南の海岸線に向かってゆるやかに傾斜していることから、徳之島3町の中で耕地面積率が最も高い。海岸線は珊瑚礁の奇岩が多く変化に富み、隆起性珊瑚礁が沖合へ伸び、遠浅を形成する。また、石灰岩地域である事で鍾乳洞が多数存在する。町の面積は62.7 km<sup>2</sup>、世帯数3505戸、人口6753人（平成30年6月現在）を数える。

喜念貝塚は伊仙町の東南部に位置し、太平洋に面した海岸部にある。喜念小学校の南から南西へかけて海岸砂丘上に形成された遺跡である。遺跡の前面には広い珊瑚礁、背後には低湿地、さらにその背後は台地状の地形となる。同貝塚は、喜念Ⅰ式土器の標式遺跡となっている。

喜念貝塚以外に、伊仙町内には考古学史上重要な遺跡が所在する。犬田布貝塚は伊仙町大字犬田布字連木竿に所在し、1983（昭和58）年に伊仙町教育委員会による確認調査が実施された。面縄西洞式土器等の土器・石器・貝器・骨器・貝製や骨製の装身具が出土している。特に、面縄西洞式土器と喜念Ⅰ式土器の中間に位置する土器が出土し、河口により犬田布式土器の名称が与えられている。

カムイヤキ古窯跡群は伊仙町南部のヒラスク山の山中に立地する中世の陶器窯跡である。1983（昭和58）年に発見され、これまで24の地点で生産跡が確認され、7つの支群によって構成されていたことが明らかになっている。2007（平成19）年、国指定史跡として登録された。

面縄貝塚は伊仙町面縄に所在し、面縄川が兼久浦の浅い小湾に注ぐ袋状地形の隆起珊瑚礁の崖下に形成された貝塚で、現在第1～第4貝塚までが周辺に所在し、2017（平成29）年国指定史跡となっている。面縄貝塚の概要については、第Ⅷ章を参照していただきたい。

## 第4節 追加資料

### 1 調査記録等について

喜念貝塚については、試掘調査や貝層が露出した際の調査であることから、埋文センターが保管しているのはパンケース11箱分の遺物のみである。調査において遺構等は検出されていないことから実測図等の記録も残されていない。唯一記録として残されたものが野帳である。奄美大島学術調査団として、1954（昭和29）年5月26日調査を行った時の野帳には、「喜念貝塚 小学校海岸側砂丘に少量の貝と土器の出る層あり」との記述が残る。九学会連合奄美大島共同調査委員会による1956（昭和31）年8月24日の調査時の野帳には、鹿児島港を出港して27時間以上かけて徳之島に着いたこと、喜念貝塚の層序、喜念貝塚出土の遺物の覚え書き等が記されている。これについては、資料1・2に示した。

### 2 調査年毎の遺物の特定

河口コレクションの中に喜念貝塚に関係すると思われる遺物がパンケース換算で11箱ある。河口は数回喜念貝塚を訪れていることから、遺物の採集された時期を特定することから始めた。そこで遺物と共に保管されていた荷札の表記を転記し、その内容の概略を第1表に示す。「喜念 北側 上層」の荷札は「喜念 北側 上下層」の荷札と同じ袋に入っているものがあることから、「喜念 北側 下層」の荷札も含めて「喜念 北側 上下層」にまとめて集計した。

第1表 荷札の表記と遺物内容

No.	荷札の表記	遺物の内容
1	喜念 29.5.26	土器約50点
2	喜念 表面 8.24	土器5点
3	喜念 北側 上層 8.24	土器約220点 骨片1点
4	喜念 北側 下層 8.24	
5	喜念 上下層 北側 8.24	土器約100点 骨片1点
6	喜念 南側 上下層 8.24	
7	喜念貝塚 崖下貝層 8.7	土器10点
8	喜念貝塚 56.10.11	土器1点
9	喜念上原遺跡 56.10.11	土器約40点

No.1は1954（昭和29）年5月に奄美大島学術調査団として調査を行った時の遺物で、河口の記した野帳の内容とも合致する。この時の表採遺物のほとんどは赤褐色を呈し、焼成のよい胴部片である。このほかに断面がかまぼこ状に肥厚する口縁部小片2点と底部2点を確認し、底部については実測・掲載した。

No.2～6には年号の記載はないが、河口の野帳の記録から1956（昭和31）年8月24日と考えられる。この時の土器29点は実測・掲載した。これ以外に口縁部を5点確認している。4点は無文の口縁部の断面が三角形もしくはかまぼこ状に肥厚するものである。1点は口縁部

が幾分肥厚し、口縁部から垂下する沈線の両側に刺突を施すものである。

№7には「8.7」という日付のみが記され、年号の記載がない。河口の野帳の記録から1956（昭和31）年8月7日の午後4時から6時まで喜念貝塚を訪れていることから、この時に採集した遺物であると考えられる。1点実測・掲載した他に、赤褐色を呈し、口縁部が肥厚する小片を確認した。

№8・9は1981（昭和56）年10月11日、徳之島に何らかの調査のため滞在したことが野帳から確認できるが、調査目的は不明である。保管している土器の中に喜念上原遺跡の土器も含まれている。喜念上原遺跡は喜念貝塚から北北西へ約3kmに位置し、同遺跡の表採と思われる土器の中から2点資料化した。

### 3 喜念貝塚出土の土器（第1図・第2図1～35）

前述のとおり、遺物は写真での紹介であることから、本報告書では遺物を実測し掲載する。なお、河口コレクションとして保管している喜念貝塚出土の土器は、そのほとんどが無文土器である。全体的に薄手の土器片が多く、器面調整も丁寧である。小片のため詳細は不明であるが、壺形土器が多く含まれる。以下、喜念貝塚出土の土器について、具体的に述べる。

1～30は、1956（昭和31）年に調査した際の土器である。1～23は、河口が1974（昭和49）年に発表した「奄美編年」に写真で紹介されている土器である。1～21は上記論文の中で「第20図 喜念貝塚出土々器」として掲載されている土器で、本報告書の遺物掲載順は比較しやすいように同図を踏襲してある。同じく22は「第21図 喜念貝塚出土・山ノ口式土器」、23は「第24図 奄美土器 下左 宇宿上層式b・喜念貝塚出土」のキャプションがある土器である。24～30は今回の整理作業で新たに紹介する資料である。

31～34も今回新たに資料化した土器である。31・32は1954（昭和29）年の調査時の土器、33・34は1981（昭和56）年喜念上原遺跡で採集した土器である。35は「喜念表面」と注記があるが、調査年については不明である。

1～8・13・16～19は河口が宇宿上層式aと分類したものである。1・3・6・18・19は口縁部断面が三角形となる。1は口径15.8cm、最大胴径17.3cmを測り、胴下半から底部は欠損する。胴部がやや外反する口縁部よりわずかに張り出す器形となる。器面調整は内外面とも丁寧である。2は粘土を折り返して口縁部を幅広く肥厚させ、胴部との境には段差をもつ。3は1と同じような形状・形態と考えられる。4・7の口縁部はかまぼこ状に肥厚する。5・8は口縁部がほぼ同じ幅で肥厚する。13・16・17の口縁部は丸みをもって肥厚する。

9～11は河口が宇宿上層式bとしたものである。9

は口縁部を肥厚させ、その下端をさらに断面三角形に成形する。また、注ぎ口状に口縁部が湾曲し、その湾曲した口唇外端から縦位に粘土を貼り付けて肥厚させる。10の口縁部は波状を呈すと考えられる。残存する口縁部の中央部分は上端が欠損し、右側部分は口縁部上端を抉るように成形していることから、なんらかの突起があったことも考えられる。11はかまぼこ状に肥厚する口縁部は波状を呈し、斜位の沈線を施す。

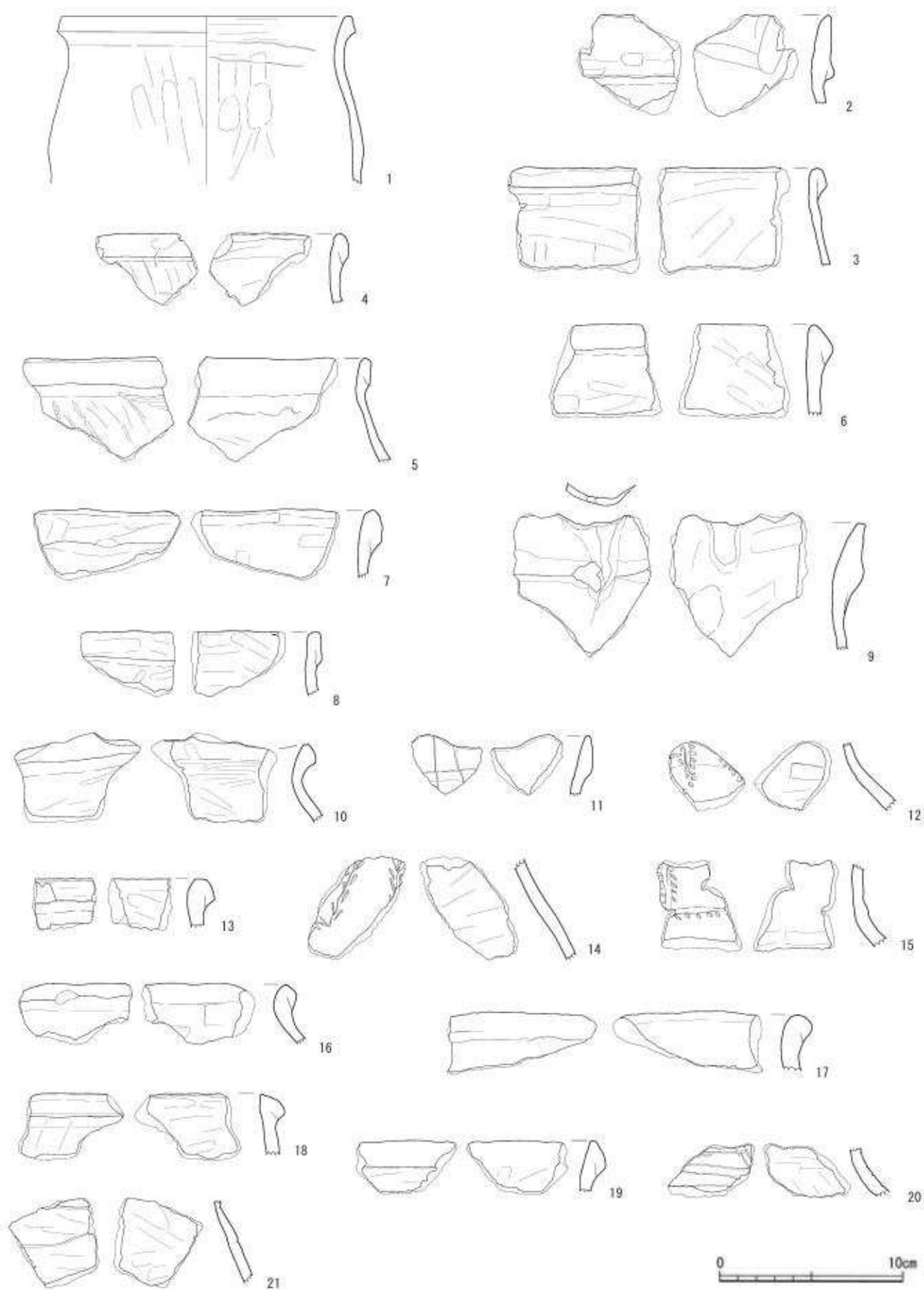
12・14・15は河口が喜念I式としたものである。いずれも壺の頸部から胴部付近の土器片と考えられる。12と15は先端が尖らない棒状の工具で沈線を施し、その回みの中に細い粘土ひもを貼り付けて、みみずばれ状の突帯を縦位・横位に配する。そして、突帯の両側に刺突を斜めに施している。14は筧状の工具で沈線を施し、その両側に刺突を行うもので、みみずばれ状の突帯はない。また、12・15と比べ焼成がよく堅固なつくりとなっている。なお、河口コレクションとして保管している喜念貝塚出土土器を確認したが、喜念I式土器としているのは、この3点のみである。つまり、この3点の土器をもって喜念I式土器という名称を与えたことになる。

20・21は河口がその他の土器と分類したものである。壺の頸部から胴部付近の土器片である。いずれも横位の沈線を施すが、20は横位の沈線の上に斜位の沈線を施している。

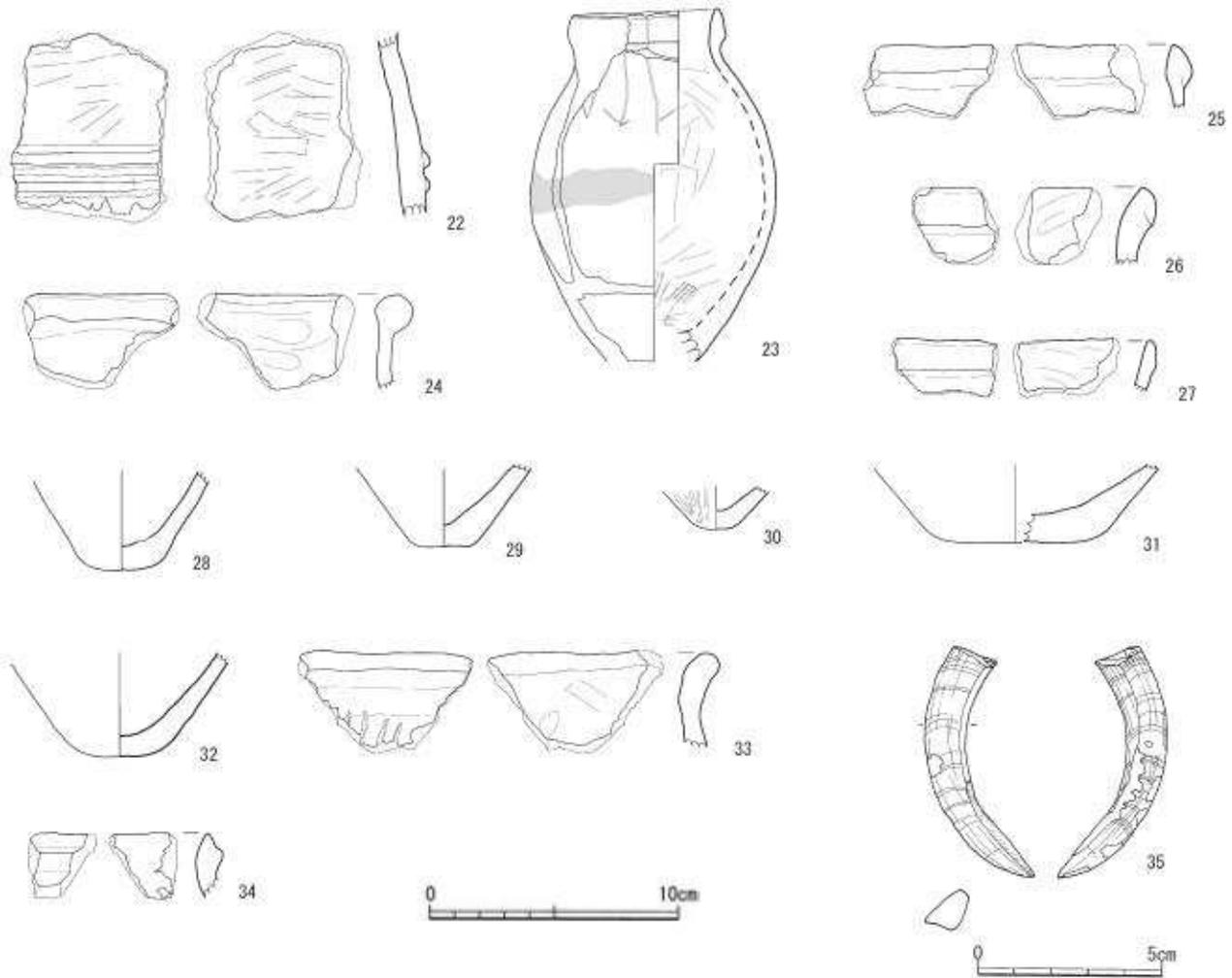
22は河口が喜念I式を弥生時代中期に位置づける根拠となった山ノ口式で、1点のみの出土である。河口（1974）は甕形土器の口縁部付近とした。この土器については、河口の記述を尊重して実測した。

23について河口（1974）は、「完形に近いが、底部を欠失している。」と記述している。埋文センターが保管している同土器と考えられるものは平底で、底部片も接合してある。しかし、底部外面は削ったように土器の内部が露出した雰囲気があることから底部形状は断定できない。また、掲載されている土器の写真とも幾分雰囲気が異なるようにも感じるが、ある時点で接合し直したことも考えられる。口径6.0cm、底径3.6cm、器高14.3cmを測る。平口縁の口縁部は、断面が三角形に肥厚する。口縁部下はややしまり、胴部中央付近まで緩やかに膨らみ、同じように湾曲しながら底部に至る器形である。底部形状は不明である。調整は、全体的にナデが施される。文様は口唇部外端から3本1組の沈線を胴上部まで垂下させ、右の沈線の先端は右側に、左の沈線の先端は左に、中央の沈線は両側に折れるように施文する。同じ文様は、反対側にも施される。

24～27は形態は異なるが、口縁端部が肥厚する土器片である。24は肥厚部には指頭痕が残り、場所により肥厚する度合いが異なる。27の器壁は薄く、口縁部は一定の厚さで成形されている。



第1図 喜念貝塚出土遺物(1)



第2図 喜念貝塚出土遺物(2)

28～32は底部である。実測図の断面で見ると平底であるが、胴部と底部の境が丸味を帯びるという特徴がある。河口は喜念貝塚出土の宇宿上層式b土器を説明する中で、土器を製作する際、丸底を基本としながらも底部を下にすることからやや平坦面をもった底部ができたと述べている。

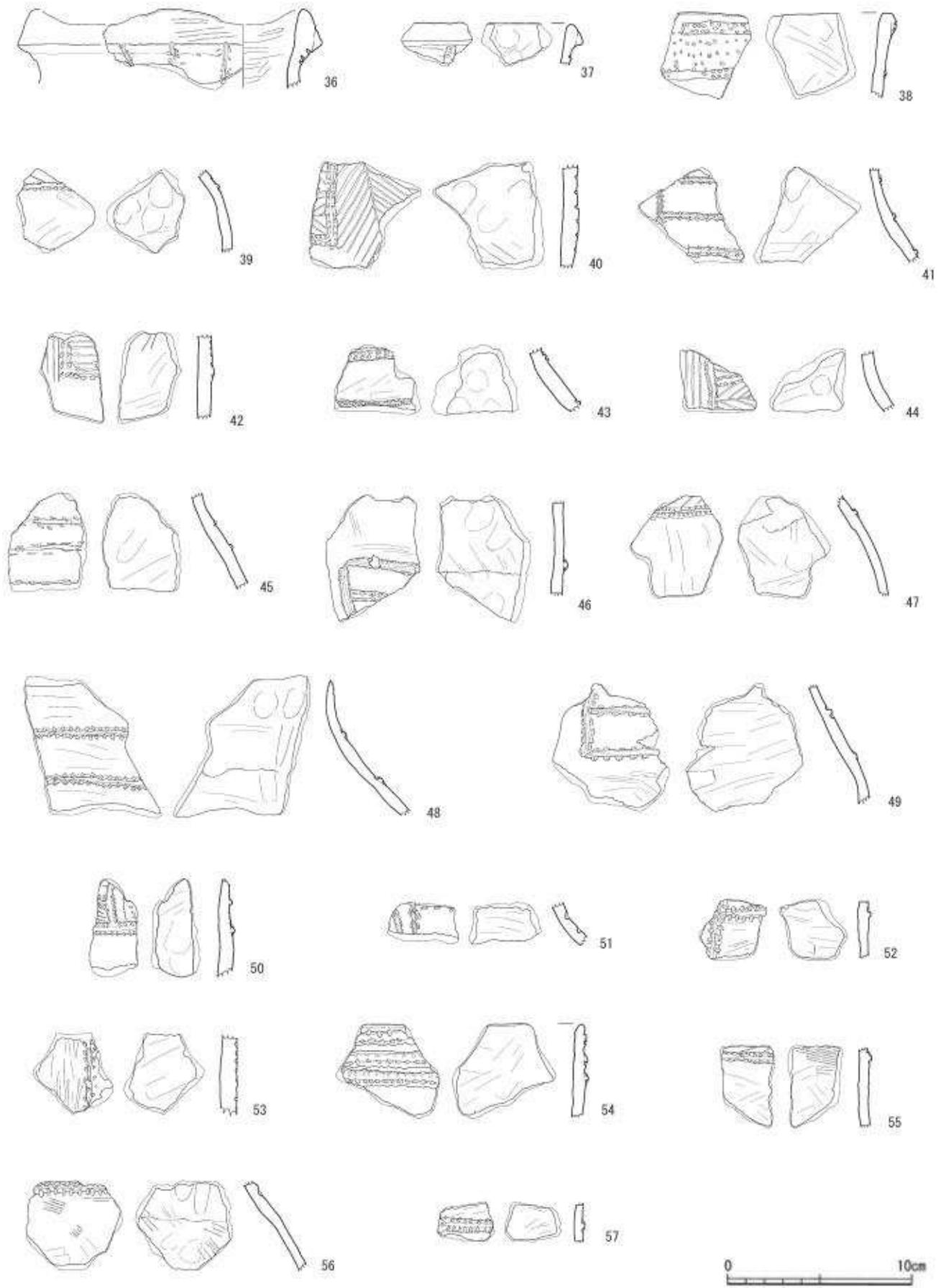
33・34は喜念土原遺跡で採集した土器である。喜念貝塚出土の土器とすると胎土が粗く、色調は黄褐色に近く、焼成も劣る。33は外反する口縁部が幾分肥厚し、頸部付近に沈線を縦位に施す。34は口縁上端から幾分下がった位置に突帯を貼り付ける。

35は猪牙製品である。右側面を研磨し、先端を鋭く仕上げている。

### 3 宇宿貝塚出土の喜念I式土器(第3図36～57)

36～57は河口が「奄美編年」の中で「第17図 宇宿貝塚出土々器 喜念I式土器」として写真で紹介したもので、比較し易いように本報告書も同じ掲載順とした。

36は復元口径14.6cmを測る。波状を呈す口縁部は、断面三角形に肥厚する。断面三角形の頂点部から棒状の工具で縦位に沈線を施し、その沈線の中に幅2mm程度の細い粘土紐を埋め込んで微隆突帯をつくる。その後、微隆突帯の両側に刺突を施すが、左右対称とはならない。成形は幾分粗く、器面調整はナデである。37は口縁部で断面を三角形に肥厚させる。口縁部の下から縦位・斜位に微隆突帯を貼り付け、縦位の微隆突帯上に2列の刺突を施すが、斜位の微隆突帯上に刺突は確認できない。38は肥厚させた口縁端部と口縁部下位に粘土紐を押しつぶすように横位の微隆突帯を貼り付ける。その微隆突帯上か器面との境に刺突を施すが、一部刺突がない箇所もある。そして2本の微隆突帯間にも刺突がまばらに施される。39は横位の微隆突帯の両側に刺突が施され、その上位には斜位の沈線が1本確認できる。40は縦位の微隆突帯とこれを起点とした横位の微隆突帯を3本貼り付け、その両側に刺突を施す。横位の微隆突帯間には横位の有軸羽状文、微隆突帯を貼り付けない部分



第3図 宇宿貝塚出土の喜念I式土器

には縦位の有軸羽状文が施される。41は両側に刺突を施した微隆突帯を縦位・横位に貼り付けて文様を構成する。幅2mm程度の粘土紐を貼り付けるが、36のように事前に施した沈線の中に粘土紐を埋め込む手法は確認できない。42は幅5～6mm程度の突帯を縦位・横位に配し、突帯上もしくは両側に刺突を施す。さらに、突帯で区画された中には横位の沈線、区画されない部分には縦位の沈線を施す。43の上位には幅5～6mm程度の突帯を横位に貼り付け、突帯上に2又状の工具による刺突を施す。下位には幅2mm程度の微隆突帯を横位に貼り付け、その両側に刺突が施される。44は両側に刺突をもつ横位と縦位の微隆突帯、有軸羽状文と縦位の沈線文で文様を構成するものである。45は横位の微隆突帯と両側の刺突で文様を構成する。いずれの刺突も片側ずつ施している。46は微隆突帯と刺突の組み合わせで文様を構成するが、刺突は微隆突帯上と両側に施すものがある。47は両側

に刺突をもつ微隆突帯と斜位の沈線で文様を構成するものである。刺突は片側ずつ施される。48は2本の横位の微隆突帯を巡らし、その両側に刺突を施すが、刺突は片側ずつ行われる。49は縦位・横位の微隆突帯と両側に施される刺突で文様を構成する。微隆突帯は沈線の中に押し込むように貼り付け、刺突は片側ずつ施される。内外面とも器面調整は丁寧である。50は両側に刺突を施した縦位・横位の微隆突帯と縦位・斜位の沈線で文様を構成する。51は2本の縦位に貼り付ける微隆突帯と1本の横位に貼り付ける微隆突帯及び刺突で文様を構成するものである。微隆突帯は事前に施した沈線内に貼り付けられる。刺突は微隆突帯の両側に施されるが、1本の縦位の微隆突帯はその上に1列施される。52は縦位・横位の微隆突帯と両側に施される刺突で文様を構成する。刺突は片側ずつ施される。53の器壁は8～9mmと他の土器に比べ厚い。縦位に微隆突帯を貼り付け、片側ずつ

第2表 喜念貝塚出土土器観察表(1)

\*層位・分類は河口による。

挿図 番号	掲載 番号	層位	分類	部位	文様・調整		胎土					色調		備考
					外面	内面	石英	長石	絹石	緑石	砂礫	外面	内面	
第1図	1	南上下	宇a	口縁	ナデ	ナデ・指頭痕	○			○	○	明赤褐	明赤褐	口径 15.8cm
	2	表	宇a	口縁	ナデ・指頭痕	ナデ	○	○		○	○	明赤褐	明赤褐	
	3	南上	宇a	口縁	ナデ	ナデ	○			○	○	明赤褐	明赤褐	
	4	南上下	宇a	口縁	ナデ	ナデ	○			○	○	明赤褐	にぶい赤褐	
	5	表	宇a	口縁	ナデ	ナデ	○	○			○	明赤褐	明赤褐	
	6	南上下	宇a	口縁	ナデ	ナデ	○	○		○	○	明赤褐	明赤褐	
	7	北上	宇a	口縁	ナデ	ナデ	○	○		○	○	明赤褐	明赤褐	
	8	南上	宇a	口縁	ナデ	ナデ	○	○		○	○	橙	明赤褐	
	9	-	宇b	口縁	ナデ	ナデ・指頭痕	○	○		○	○	橙	にぶい赤褐	
	10	北下	宇b	口縁	ナデ	ナデ	○	○		○		明赤褐	明赤褐	
	11	南上	宇b	口縁	沈線文・ナデ	ナデ	○	○			○	橙	にぶい赤褐	
	12	南	喜I	胴部	細隆帯文・刺突文・ナデ	ナデ	○	○	○	○	○	明赤褐	赤褐	
	13	南上	宇a	口縁	ナデ	ナデ	○	○		○	○	にぶい赤褐	明赤褐	
	14	北上下	喜I	胴部	沈線文・刺突文・ナデ	ナデ	○				○	明赤褐	明赤褐	
	15	南上	喜I	胴部	細隆帯文・刺突文・ナデ	ナデ	○	○		○	○	明赤褐	赤褐	
	16	南上下	宇a	口縁	ナデ	ナデ	○	○	○		○	明赤褐	明赤褐	
	17	南上	宇a	口縁	ナデ	ナデ	○				○	橙	橙	
	18	南上下	宇a	口縁	ナデ	ナデ	○	○		○	○	明赤褐	明赤褐	
	19	南上	宇a	口縁	ナデ	ナデ	○		○		○	明赤褐	明赤褐	
	20	-	その他	胴部	沈線文・ナデ	ナデ	○				○	明赤褐	明赤褐	
	21	-	その他	胴部	沈線文・ナデ	ナデ	○	○				明赤褐	赤褐	
第2図	22	-	山ノ口	胴部	凸帯文・ナデ	刷毛目・ナデ	○				○	橙	にぶい黄褐	
	23	南上	宇b	底形	沈線文・ナデ	ナデ				○		橙	橙	口径 6cm・底径 3.6cm
	24	北上下	-	口縁	指頭痕・ナデ	ナデ	○					にぶい赤褐	明赤褐	
	25	-	-	口縁	ナデ	ナデ	○				○	赤褐	明赤褐	
	26	-	-	口縁	ナデ	ナデ	○				○	灰褐	明赤褐	
	27	上下	-	口縁	ナデ	ナデ	○				○	にぶい黄褐	にぶい赤褐	
	28	南上	-	底部	ナデ	ナデ				○	○	にぶい赤褐	明赤褐	
	29	南上	-	底部	ナデ	ナデ	○			○		橙	にぶい橙	
	30	-	-	底部	ミガキ	ナデ	○				○	明赤褐	明赤褐	

第3表 喜念貝塚出土土器観察表(2)

\*層位・分類は河口による。

挿入番号	掲載番号	層位	分類	部位	文様・調整		胎土					色調		備考	
					外面	内面	石英	長石	絹石	蛭石	砂礫	外面	内面		
第2図	31	-	-	底部	ナデ	ナデ					○		橙	橙	底径 5.0cm
	32	-	-	底部	ナデ	ナデ					○		灰黄褐	橙	
	33	表採	-	口縁	沈線文・ナデ	ナデ	○					○	にぶい黄褐	にぶい褐	喜念上原遺跡
	34	表採	-	口縁	貼付突帯文・ナデ	ナデ						○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	喜念上原遺跡

第4表 宇宿貝塚出土の喜念I式土器観察表

\*層位・分類は河口による。

挿入番号	掲載番号	出土区等	層位	分類	部位	文様・調整		胎土					色調		備考	
						外面	内面	石英	長石	絹石	蛭石	砂礫	外面	内面		
第3図	36	-	中層	喜I	口縁	細降帯文・刺突文・ナデ	ナデ	○				○	○	灰褐	灰褐	口径 14.6cm
	37	-	"	喜I	口縁	突帯文・刺突文・ナデ	ナデ	○						明赤褐	明褐	
	38	L8	"	喜I	口縁	突帯文・刺突文・ナデ	ナデ	○		○				暗灰黄	にぶい黄褐	
	39	L7-6	"	喜I	胴部	細降帯文・刺突文・沈線文・ナデ	ナデ	○						橙	明黄褐	
	40	-	"	喜I	胴部	細降帯文・刺突文・沈線文・ナデ	ナデ	○		○				にぶい褐	橙	宇宿小校庭
	41	F8	"	喜I	胴部	細降帯文・刺突文・ナデ	ナデ	○				○		にぶい赤褐	明赤褐	
	42	F8	"	喜I	胴部	突帯文・刺突文・沈線文・ナデ	ナデ	○						橙	橙	
	43	L8	"	喜I	胴部	突帯文・細降帯文・刺突文・ナデ	ナデ	○						橙	橙	
	44	L8	"	喜I	胴部	細降帯文・刺突文・沈線文・ナデ	ナデ・指頭痕	○						にぶい黄褐	暗灰黄	
	45	F8	"	喜I	胴部	細降帯文・刺突文・ナデ	ナデ	○				○	○	にぶい赤褐	赤褐	
	46	E8	"	喜I	胴部	細降帯文・刺突文・ナデ	ナデ	○		○				明赤褐	橙	
	47	F8	"	喜I	胴部	細降帯文・刺突文・ナデ	ナデ	○		○				橙	橙	
	48	F9	"	喜I	胴部	突帯文・刺突文・ナデ	ナデ・指頭痕	○						橙	橙	
	49	L10	"	喜I	胴部	細降帯文・刺突文・ナデ	ナデ	○						にぶい赤褐	橙	
	50	L6	"	喜I	胴部	突帯文・刺突文・沈線文・ナデ	ナデ	○						橙	橙	
	51	C5	"	喜I	胴部	細降帯文・刺突文・ナデ	ナデ	○						明赤褐	明赤褐	
	52	F8	"	喜I	胴部	細降帯文・刺突文・ナデ	ナデ	○						橙	にぶい赤褐	
	53	-	"	喜I	胴部	細降帯文・刺突文	ナデ					○		にぶい赤褐	にぶい褐	
	54	C5	"	喜I	口縁	突帯文・刺突文	ナデ	○						橙	橙	
	55	-	"	喜I	胴部	細降帯文・刺突文・沈線文	ナデ	○						橙	暗灰黄	
56	F8	"	喜I	胴部	突帯文・刺突文	ナデ・指頭痕	○						橙	橙		
57	L6	"	喜I	胴部	細降帯文・刺突文	ナデ	○						橙	橙		

第5表 喜念貝塚出土骨製品観察表

挿入番号	掲載番号	器種	出土層	法量 (cm)			重量 (g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
2	35	猪牙製品	表採	6.3	1.1	1.1	6.4	

刺突が施される。54は口縁部に3本の突帯を巡らせる。そして、突帯上の両側に刺突を施すが、刺突は片側ずつ行われている。55は横位の微隆突帯を巡らせ、その両側に刺突を施す。さらに突帯の上位には斜位の沈線が2本観察できる。56・57は微隆突帯の両側に刺突をもつ。56の調整は丁寧に刷毛目状の工具痕が残る。

## 第5節 再評価

### 1 喜念I式土器の時期について

河口は1974(昭和49)年に調査を行った喜念遺跡とそれまでの調査成果を踏まえ、「奄美編年」を発表した。その中で9型式を設定し、8型式について、

面縄東洞式→喜念I式→喜念II式→面縄西洞式→面縄前庭式→喜念I式→宇宿上層式b→宇宿上層式a

という編年を行った。喜念I式もこの中で型式設定を行い、「みみずばれ状の細降帯文と側点を特徴する土器である。」「器形は、口縁部は外反し、頸部はしまり、胴部が張り、底部は丸底と推定される甕形土器である。」と述べている。時期については山ノロ式が出土したことから「喜念貝塚出土の山ノロ式土器が、宇宿上層式a、宇宿上層式b、喜念I式のいずれかに共伴するか不明であるが、これらの3形式のうち、いずれかと共伴するものであることは疑われない。」とし、喜念I式が弥生時代中

期に位置づけられる可能性を示した。

そこで今回、宇宿上層式a、宇宿上層式b、喜念I式の層位的な関係と山ノロ式との共伴関係について、土器の注記から出土層の再確認を行った。「奄美編年」では喜念貝塚出土土器が23点掲載されている。うち、2点は「その他の土器」として掲載されていることから、残りの21点の土器について確認を行った。その結果をまとめたものが第6表である。なお、表中の掲載番号は本章第1・2図の掲載番号と一致し、分類は河口に従った。

喜念貝塚の層位は、1956（昭和31）年の調査時には20cmの間層を挟んで上下に包含層があるとされている。各土器の出土層は、土器片に記されている注記を転記した。例えば、「南上」の「南」はトレンチの南側を表し、「上」は間層を挟んだ上位の包含層を表すと考えられる。また、「上下」という注記は、いずれの層か判断できなかったと考えられる。

21点の土器のうち、出土層位が確認できたものは10点であった。上層からの出土が宇宿上層式a 6点、宇宿上層式b 2点、喜念I式1点で、下層からの出土が宇宿上層式b 1点であった。「奄美編年」で河口の示した「喜念I式-宇宿上層式b-宇宿上層式a」という編年組列を層位的に確認できなかった。また、山ノロ式には出土層に関する注記がないため、現在では、その共伴関係を確認することはできなかった。

なお、14について「奄美編年」では下層出土との記述があるが、土器の注記は「上下」であった。

第6表 掲載遺物の出土層

掲載番号	分類	層位	掲載番号	分類	層位
1	宇a	南上下	12	喜I	南
2	宇a	表	13	宇a	南上
3	宇a	南上	14	喜I	北上下
4	宇a	南上下	15	喜I	南上
5	宇a	表	16	宇a	南上下
6	宇a	南上下	17	宇a	南上
7	宇a	北上	18	宇a	南上下
8	宇a	南上	19	宇a	南上
9	宇b	—	22	山ノロ	—
10	宇b	北下	23	宇b	南上
11	宇b	南上			

「宇a」：宇宿上層式a土器 「宇b」：宇宿上層式b土器  
「喜I」：喜念I式土器 「山ノロ」：山ノロ式土器 「—」：注記なし

1982（昭和57）年、甲元は「トカラ列島の文化」<sup>17</sup>で、タチバナ遺跡の調査成果から喜念I式の段階には一湊式と黒川・入佐式が伴い、西洞式に近接するものもあり、さらに古くなる可能性も指摘した。

1983（昭和58）年、河口は「南島式土器文化の発生」<sup>18</sup>において奄美諸島の編年を示し、喜念I式を入来式と並行する弥生時代中期に位置づけ、

面縄前庭式→喜念I式→宇宿上層式b→  
宇宿上層式a

という流れを示した。

さらに、河口は翌年の1984（昭和59）年、「南島の先史文化」<sup>19</sup>において喜念I式土器を再度入来式と並行する弥生時代中期に位置づけるとともに、黒川式と並行する縄文時代晩期に犬田布式を位置づけ、さらに面縄前庭式を編年表から外し、

面縄西洞式→犬田布式→喜念I式→宇宿上層式a  
という流れとした。

1987（昭和62）年、上村は「喜念I式土器の編年の位置について」<sup>20</sup>で、鹿児島・沖縄の遺跡の層位的な出土例から「喜念I式土器は縄文時代晩期の黒川式土器並行もしくは黒川式土器に近い時期に位置づけよと思われる。」と問題点を指摘した。

1993（平成5）年、堂込は「奄美諸島の縄文時代晩期から弥生時代相当期の土器編年」<sup>21</sup>において奄美諸島の縄文時代晩期から弥生時代相当期にあるとされている遺跡の発掘調査の再検討を通して土器の編年を行った。この中で堂込は上村の考えを追認し、喜念I式を縄文晩期相当期として位置づけた。さらに、「喜念I式は壺形土器の型式であって、宇宿上層式の一部とセットをなす。」という認識を示した。

同年、西谷は「縄文晩期併行期の奄美」<sup>22</sup>で新たな編年案を示した。縄文晩期併行期をⅠ～Ⅲ期に分期し、喜念I式はⅡ期の前半で、犬田布式と共伴し、後半まで変容しながら持続するとした。また、Ⅱ期前半は小型丸底壺形土器主体の器種構成になることも示した。

2000（平成12）年、伊藤は「琉球縄文文化の基礎的研究」<sup>23</sup>において、犬田布式と喜念I式は単独で一時期を占める状況にないことから、各土器群の型式組成中の一部の系統と見なした。また、時期についてはおおむね縄文晩期頃で大方の見解が一致しているとした。

さらに伊藤は、2008（平成20）年、「琉球縄文時代（前期）」<sup>24</sup>で沖縄の室川式・室川上層式・宇佐浜式、奄美の面縄西洞式・犬田布式・喜念I式・宇宿上層式を肥厚口縁系土器とし、古1段階、古2段階、新段階の3段階に区別した。そして、新段階では別名同内容の宇宿上層式=宇佐浜式が展開し、奄美ではしばしば犬田布式・喜念I式を共伴するとした。

2014（平成26）年、「室川式・室川上層式および関連土器群の再検討」<sup>25</sup>で瀬戸哲也は室川式を古段階と新段階に分け、新段階の時に、宇宿上層式と喜念I式が沖縄に搬入され、その影響で宇佐浜式が登場し、奄美との共通性が強まることを指摘した。

以上のように、河口が喜念I式土器を設定して以来、様々な議論が行われ、その時期については縄文時代晩期に落ち着いてきている。沖縄との関係については、宇佐浜式土器との関係が指摘されているが、今後検討がなされていくものと考えられる。

## 2 喜念貝塚、宇宿貝塚出土の喜念Ⅰ式土器について

河口は「奄美編年」において喜念Ⅰ式として喜念貝塚出土のものを3点、宇宿貝塚出土のものを22点紹介している。「みみずばれ状の細隆帯文と側点を特徴とする土器である。喜念貝塚から出土している該形式の土器を標式として、喜念Ⅰ式と呼びたい。」と記述している。上記の喜念貝塚出土の喜念Ⅰ式土器3点のうち、みみずばれ状の細隆帯文を貼り付けるものが12・15の2点、14はみみずばれ状の細隆帯文を貼り付けずに沈線の両側に刺突を施すものである。河口は14を喜念Ⅰ式としながら、12・15より「多少古い時期に属するかもしれない。」と述べている。しかし、河口の型式設定に従うならば、14については喜念Ⅰ式土器との関係性は窺われるが、一線を画すべき資料と考えられる。

「奄美編年」で写真で紹介した宇宿貝塚出土の喜念Ⅰ式22点は、文様構成で大まかに3つに分類できる。1番目は両側に刺突を有する突帯だけで文様を構成するもので、15点と多い。その中でも径2～3mmの粘土紐をその形状を残したまま貼り付けるものが9点ある。さらに、9点のなかでも事前に施した溝状の沈線に粘土紐を埋め込むように貼り付けるものが4点あった。2番目は、両側に刺突を有する低平化した突帯と沈線で文様を構成するものが6点ある。この中でも、有軸羽状文となるものが2点ある。沈線が部分的しか残存しないものの中にも有軸羽状文の一部である可能性はある。3番目は両側に刺突を有する低平化した突帯と突帯間に施される刺突で文様を構成するもので、1点あった。

1番目に分類した土器は、河口が喜念Ⅰ式と設定したものである。2番目に分類した土器に関して河口は、「上にあげた凸帯文の他に、嘉徳Ⅱ式の文様の系統の有軸羽状文・平行線文を、細隆帯文に加えたものもみられ・・・」と当初設定した喜念Ⅰ式の概念を広げている。3番目に分類した土器については、河口は特に言及していない。河口の「喜念貝塚から出土している該形式の土器を標式として喜念Ⅰ式と呼びたい。」に従うならば、2番目及び3番目に分類した土器の再検討は必要となる。

また、36については、宇宿上層式と喜念Ⅰ式との関係を示す資料である。つまり、宇宿上層式の特徴である断面三角形に肥厚した口縁部に喜念Ⅰ式の特徴である両側に刺突を有する細隆帯文が組み合わせられた土器である。宇宿上層式と喜念Ⅰ式との関係性の近さを表す土器と考えられる。

### —注—

注1 河口貞徳 1956 「南島先史時代」『南方産業科学研究所報告』第1巻第2号

鹿児島大学南方産業科学研究所

注2 九学会連合

日本民俗学を支えた渋谷敬三（実業家・民俗学者）の提唱により、1947（昭和22）年に人間科学に関係の深い六学会の組織から発足し、1950（昭和25）年に日本民族学会・日本民俗学会・日本人類学会・日本社会学会・日本言語学会・日本地理学会・日本宗教学会・日本考古学会の八学会連合になり、1951（昭和26）年に日本心理学会が加わって九学会連合となった。その後、東洋音楽学会などの学会の追加や脱退があったが、名称としては「九学会連合」が使われた。共同研究を行う使命を終えたとして、1989（平成元）年に最終大会を開き解散した。

注3 国分直一 河口貞徳ほか 1959 「奄美大島の先史時代」『奄美 自然と文化 論文編』

九学会連合奄美大島共同調査委員会

注4 河口貞徳 1978 「喜念貝塚」

『伊仙町誌』伊仙町

注5 白木原和美 1976 「大島郡伊仙町の先史学的所見」『南日本文化』第9号

注6 河口貞徳 1974 「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』第9号

注7 甲元真之 「トカラ列島の文化」1982 『縄文文化の研究』

注8 河口貞徳 1983 「南島式土器文化の発生」『沖縄歴史地図 考古編』

注9 河口貞徳 1984 「南島の先史文化」『鹿児島考古』第2号

注10 上村俊雄 1987 「喜念Ⅰ式土器の編年的位置について」『東アジアの考古と歴史 中』

注11 堂込秀人 1993 「奄美諸島の縄文時代晩期から弥生時代相当期の土器編年」『潮見浩先生退官記念論文集』

注12 西谷大 1993 『縄文晩期併行期の奄美』国立歴史民俗博物館研究報告48集

注13 伊藤慎二 2000 「琉球縄文文化の基礎的研究」

注14 伊藤慎二 2008 「琉球縄文時代（前期）」『総覧 縄文土器』

注15 瀬戸哲也 2014 「室川式・室川上層式および関連土器群の再検討」

『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品』

### —参考・引用文献—

伊仙町教育委員会 2016 『面縄貝塚 総括報告書』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（16）

河口貞徳 2005 「喜念貝塚」『先史・古代の鹿児島』鹿児島県教育委員会

31.8.5 (日)

午後3時 照田 12 津見島港 本祭  
船客 16名 人妻 石古 菊実 宮崎  
漸生 松本 純川 北川 松本 其他

31.8.6 (月)

名瀬 8.30 10時 出港

古仁屋 1層着 船34 本港

電徳 6時 30分 入港

伊仙村役場 伊集田実氏

島津役場 史島重成氏 ) の 2 階 2 室

685 号 109 号 盛行合氏 4 伊仙村 2 室

Jel 西端 1. 盛行合 西端 (の  
2-70 102  
西端 1275

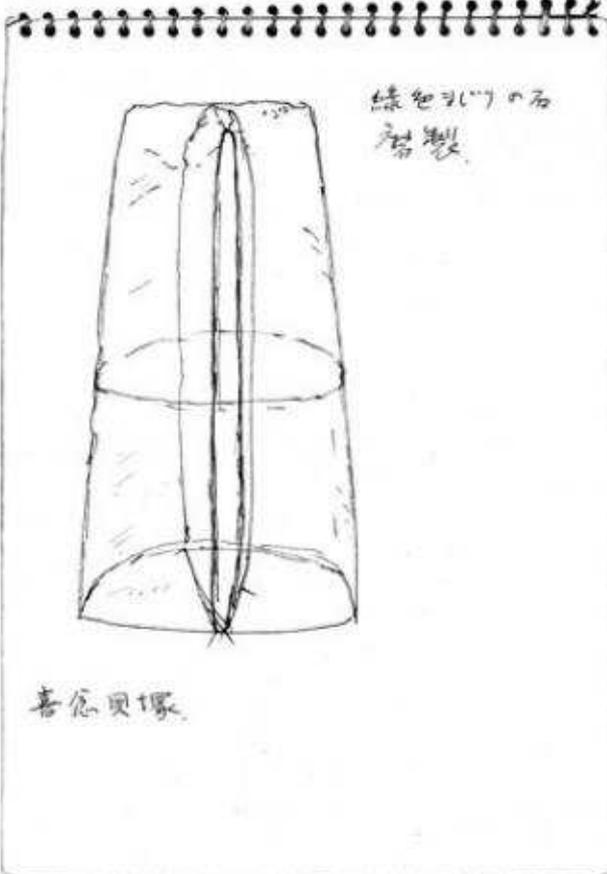
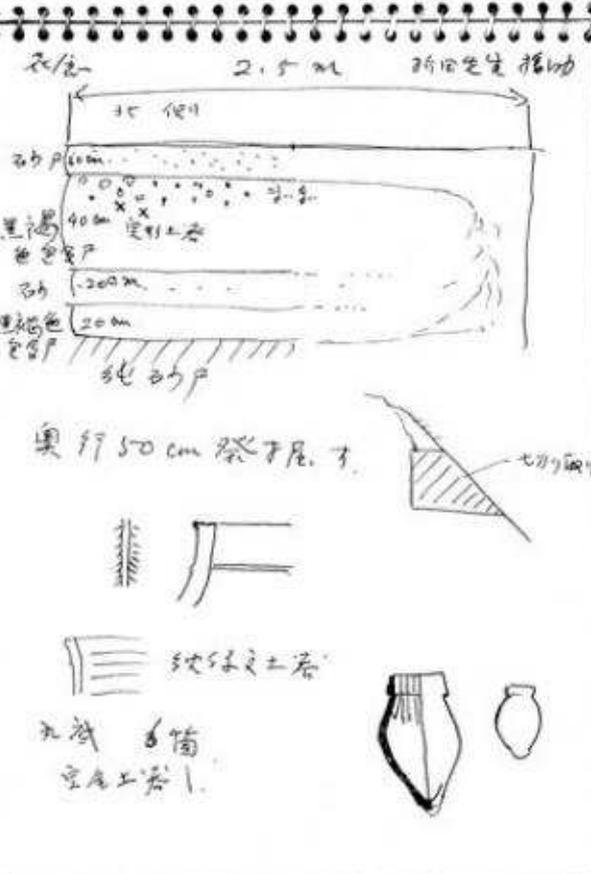
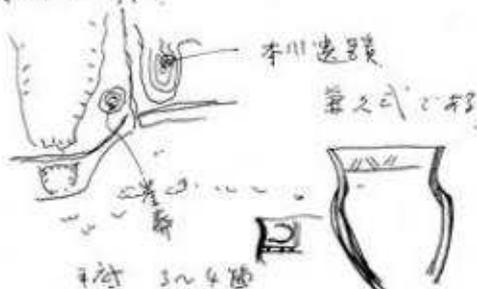
婦人会長 泉 2 人の 申 末 訪 び 屋

8.24. 金 晴

電津 7.20 本

喜念杖 10時 頃着。 佐口 重 0 氏 奉  
新田先生 10 時 頃。 本 姓 墓 台 案 内 12 時 頃  
1 時 頃。 喜念 貝塚 上 同 一 ヶ 所 下 3-4 所 明  
明。 人 皆 及 半 分 石 (?) 等 2 枚 場 所 計  
7 所。 工 定 字 量。 石 津 氏 實 現 心 配  
也。 現在 水 位 淺 水 位 甚 低 時 同 地 所 存  
存 在 也。 一部 砂 丘 面 10 0 枚 存 在  
て いる 所 計 である。

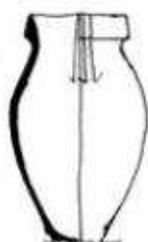
10時 半 本 港 12 時 頃 0. 喜 念 氏 奉  
本 姓 墓 台 案 内 本 川 邊 渡 新 田 先生  
の 案 内 12 時 頃



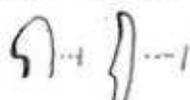
8.25. 土. 晴.  
荷ついで.  
午が中国の氏と伊仙牧場及び農業高校  
に挨拶に行く。

8.26. 日. 晴.  
9.30. トラックをかり尾徳港へ向う  
途中本川遺蹟附近にてトラック故障  
ついでに修理。代りのトラックに乗  
りかえ港につく。3時頃である。  
早くに中餐を取り、夕方、高十郎入  
港。須田先生、沼川氏等と共に乗船。

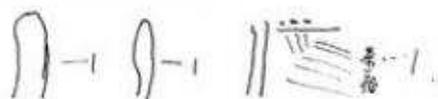
喜念貝塚  
南側 上下F (8.24日)



喜念小石塚裏花壇



喜念 表面 8.24



喜念南側 貝塚



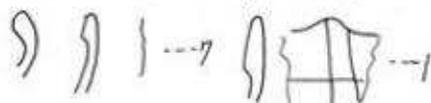
喜念北側 8.24 7F



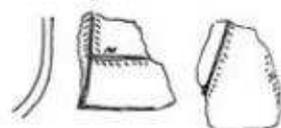
喜念北側 上下F 8.24



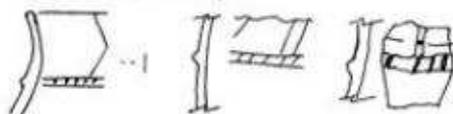
喜念 北側 上下F, 8.24.



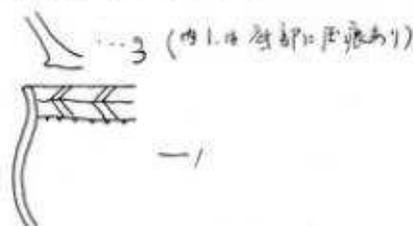
丸底...3  
V...1



本川遺蹟 8.24.



灰土(200g)の多し。



## 第Ⅵ章 中甫洞穴

### 第1節 調査の経過

1982(昭和57)年8月、河口貞徳は和泊町誌先史時代執筆の依頼を受け、沖永良部島和泊町の先史時代遺跡の分布調査と資料蒐集のため町内を巡回した。その際、町内の住民が1972(昭和47)年頃に採集したという遺物を見る機会があり、採集地である中甫洞穴遺跡の存在を知らされた。採集遺物の中には弥生中期や縄文前期に該当すると思われる土器片のほか、爪形文土器の存在を確認した。このため、中甫洞穴遺跡は南島の縄文時代後期以前の様相の解明に寄与する極めて重要な遺跡であるとし、河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望が、同年10月5日～15日までの11日間に自主発掘を行った(第一次調査)。知名町教育委員会が中甫洞穴遺跡の重要性から国及び県の補助を得て、翌年の1983(昭和58)年9月1日～14日まで第二次の発掘調査を、1984(昭和59)年8月1日～20日には第三次の発掘調査を実施した。いずれも、河口を調査の総括として本田・瀬戸口が調査に参加した。以下、各調査の概要を記す。なお、トレンチ配置図は第1～2図に示す。

#### 1 第一次調査

1982(昭和57)年の第一次調査では、中甫洞穴入口の西壁に平行して幅2mの第Ⅰトレンチを設け、南区より1区(長さ3m)、2区(長さ2m)、3区(長さ2m)、4区(長さ0.3m)に区分し、トレンチ北端より東方向へ直角に5区(1m×1m)を設定し調査された。また、トレンチ北端に接する岩盤下の空洞の堆積を約1㎡の範囲で試掘しており、下部洞穴入口としている。石灰岩層を多量に含んだ珊瑚礁風化土のため、粘質が著しく強い。層位は第1層～第5層に区分され、地下約2.2mで無遺物層の第5層に達する。第1層から第4層までは遺物包含層であり、第4層は「土層の3区分に従って、出土する土器を比較すると、出土層の区分に対応する型式分類の可能性が考えられる」(河口ほか1983b)として、出土遺物を上部層・中部層・下部層出土に分けて報告している。また、試掘した下部洞穴入口の堆積出土の遺物も第4層の分類に従って記述している。ほか、打製石斧や叩石、貝製品、牙製品などが出土している。

#### 2 第二次調査

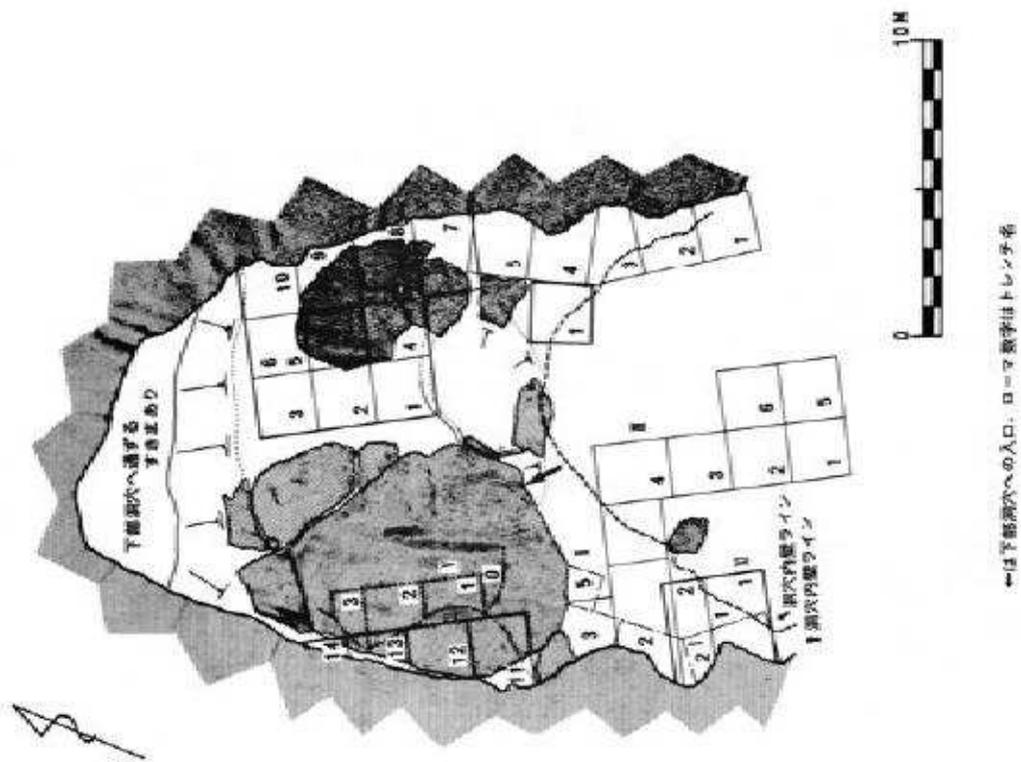
翌年、第一次調査の結果から遺跡の性格とその内容を把握するための継続した調査が必要であるとして、知名町教育委員会が主体となり、国と県の補助を得て第二次調査が実施された。設定されたトレンチは、第一次調査でのトレンチ名に続けて、洞穴入口の中央部に

第Ⅲトレンチ、その第Ⅲトレンチと直行し前年度トレンチを含む洞穴入口西壁まで延びる第Ⅱトレンチ、洞穴入口東壁に沿う第Ⅳトレンチ、下部洞穴入口の土砂の堆積部に設けた第Ⅴトレンチの計4か所である。各トレンチ、各区ごとに層の堆積状況は異なるが、1984年の報告では、土器は第一次調査の4層より上部層時期にあたる上層出土土器、第一次調査の4層時期にあたる下層出土土器に分けられている(河口ほか1984)。また、1985年の報告では、第一次調査の4層出土土器の分類および下部洞穴入口の堆積出土土器の分類に当てはめている(河口・本田1985)。第Ⅱトレンチ4層最下部で爪形文土器の微細片1点が出土したほか、磨製石斧、磨石、砥石あるいは石皿片と思われるものなどが出土している。

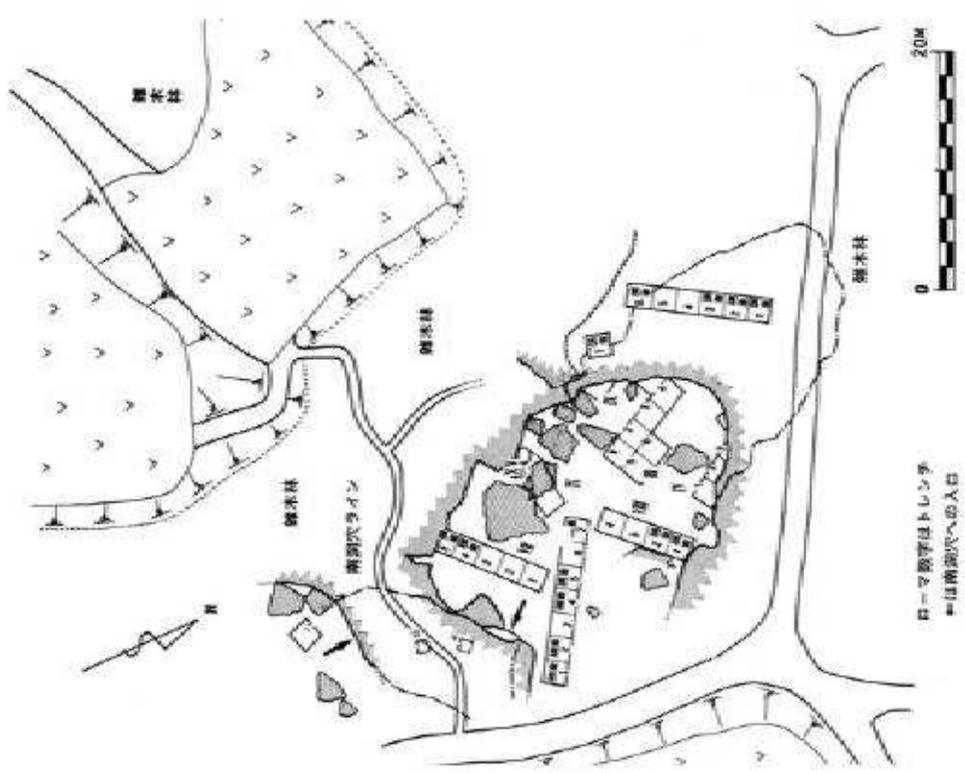
#### 3 第三次調査

1984(昭和59)年、前年度と同様に知名町教育委員会が主体となり第三次調査が行われた。第二次調査のトレンチ名に続き、農道から中甫洞穴へ向かう空地に設定した第Ⅵトレンチ、洞穴前面のくぼ地を形成する石灰岩壁の東南部側に直行する第Ⅶトレンチ、反対の北西壁に直行する第Ⅷトレンチ、中甫洞穴と南洞穴の間に位置する小洞穴とその前庭部に設定した第Ⅸトレンチ、南洞穴内部および入口付近の試掘坑3か所の総称である第Ⅹトレンチ、中甫洞穴入口西側壁に沿う第ⅩⅠトレンチ、中甫洞穴上部の平坦地の第ⅩⅡトレンチ、第二次調査の第Ⅳトレンチ西側に隣接した第ⅩⅢトレンチ、中甫洞穴上部洞床面の第ⅩⅣトレンチ、第Ⅸトレンチ小洞穴上部の第ⅩⅤトレンチの計10か所が調査された。出土土器は、第一次調査の第2・3層出土土器に該当すると思われる上層の土器、第一次調査の第4層出土の土器に該当する下層の土器に分類している(河口・本田1985)。ただし、層の薄さから、下層出土土器は第一次調査・第二次調査のように上部層・中部層・下部層出土に分類ができず、主として文様による分類を行っている。貝輪、貝玉、三角形有孔貝製品、牙製品などを出土しているほか、局部磨製石斧や磨石などの石器も第一次調査・第二次調査に比べて比較的多く出土している。

中甫洞穴の発掘調査成果については、第一次調査は『月刊考古学ジャーナル2』No.214・『鹿児島考古』第17号、第二次調査は『鹿児島考古』第18号・1984年の知名町埋蔵文化財報告書『中甫洞穴』、第三次調査まで含めた全ての調査の概要は1985年の知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)『中甫洞穴』(河口・本田1985)で主に報告されている。



第1図 中甫洞穴図 トレンチ配置図 (河口・本田 1985 より転載)



第2図 中甫洞穴遺跡周辺地形図 (河口・本田 1985 より転載)

## 第2節 再整理の方法

埋文センターに保管されている中甫洞穴出土遺物は、第一次調査の出土遺物と第二次調査・第三次調査での土壌サンプルであった。

これまでの報告では、土器の実測図は掲載しているが、石器及び貝製品・牙製品は実測図がなく、写真のみの掲載である。ただし、土器は実測図がすべて掲載されているわけではなく、写真のみで報告されているものもある。そこで、これまでの報告で写真のみで紹介されている土器については、埋文センターが保管している遺物から抽出を行い実測した。実測図が既に掲載されているものも再実測し掲載することにする。石器・貝製品・牙製品については、埋文センターが所蔵している第一次調査時出土の遺物に加え、知名町教育委員会所蔵の第二次・第三次調査時出土遺物を借用し、実測を行った。掲載した遺物については、第一次調査の出土遺物は『鹿児島考古』第17号の報告（河口ほか1983b）の分類に従って記述する。第二次調査以降の出土遺物については、第一次調査との相対的な比較と分類がなされている1985年の知名町教育委員会による発掘調査報告書（河口・本田1985）をもとに記述する。

## 第3節 遺跡の位置と環境

沖永良部島は奄美諸島の南部にあり、徳之島と与論島の間位置する。面積93.7km<sup>2</sup>の隆起珊瑚礁の島で、和泊町と知名町の2町からなる。

島の西部には標高240mの大山があり、島の最高地点をなす。大山を囲む形でカルスト地形が発達しており、ドリーネが数多く分布し、昇竜洞などの鍾乳洞も多数存在する。

中甫洞穴は知名町東部の久志検字水窪にある。大山を囲むドリーネのひとつで、標高は100mである。森林に覆われた径70m程のくぼ地であり、地下には水脈があり所々に珊瑚礁が露呈している。南東側と北西側の2か所に地下の鍾乳洞へ通じる洞穴が開口しており、南東側に比べて規模の大きい北西側の洞穴が中甫洞穴である。洞穴の天井には多くの鍾乳石が垂下しており、床面には巨大な石灰岩が横たわっている。

## 第4節 追加資料

### 1 遺構（第3図）

第二次調査で、第IVトレンチ4区から土壌墓1基を検出している。過去の報告には人骨の検出状況が示されていないことから、本田が調査時に測量した実測図を掲載する。土坑は隅丸三角形で、頭位を南東方向に向けた横臥屈葬の人骨1体が埋葬されている。人骨を挟むようにサンゴ礁が確認されており、意図的に配置した可能性もある。遺構が検出された第IVトレンチは、第1a層・第

1b層・第2層・第3a層・第3b層・第4層・第5層・第6層に分層されるが、土壌墓の時期については「第1b層よりは古い、他層（第2・3a・3b層）との関係は明瞭でない」としている（河口ほか1984）。

調査当時の河口・本田・瀬戸口の日誌によると、第一次調査でも第1トレンチ4区第2層から頭蓋骨片・肩甲骨・大腿骨などの人骨が出土しているが、小片で散乱している状態であり、遺構として報告はしていない。

### 2 土器（第4図～第8図）

今回は、一次調査の土器を掲載する。報告済の土器であっても埋文センターが保管しているものは再実測し、加えて写真のみで紹介されているものも実測した。また、上下逆で報告されたり新たに接合することが確認されたりしたものは今回訂正したうえで再実測している。土器の観察表は第1表～第2表に示すが、第7図の土器については遺物を実見していないため、観察表には入っていない。

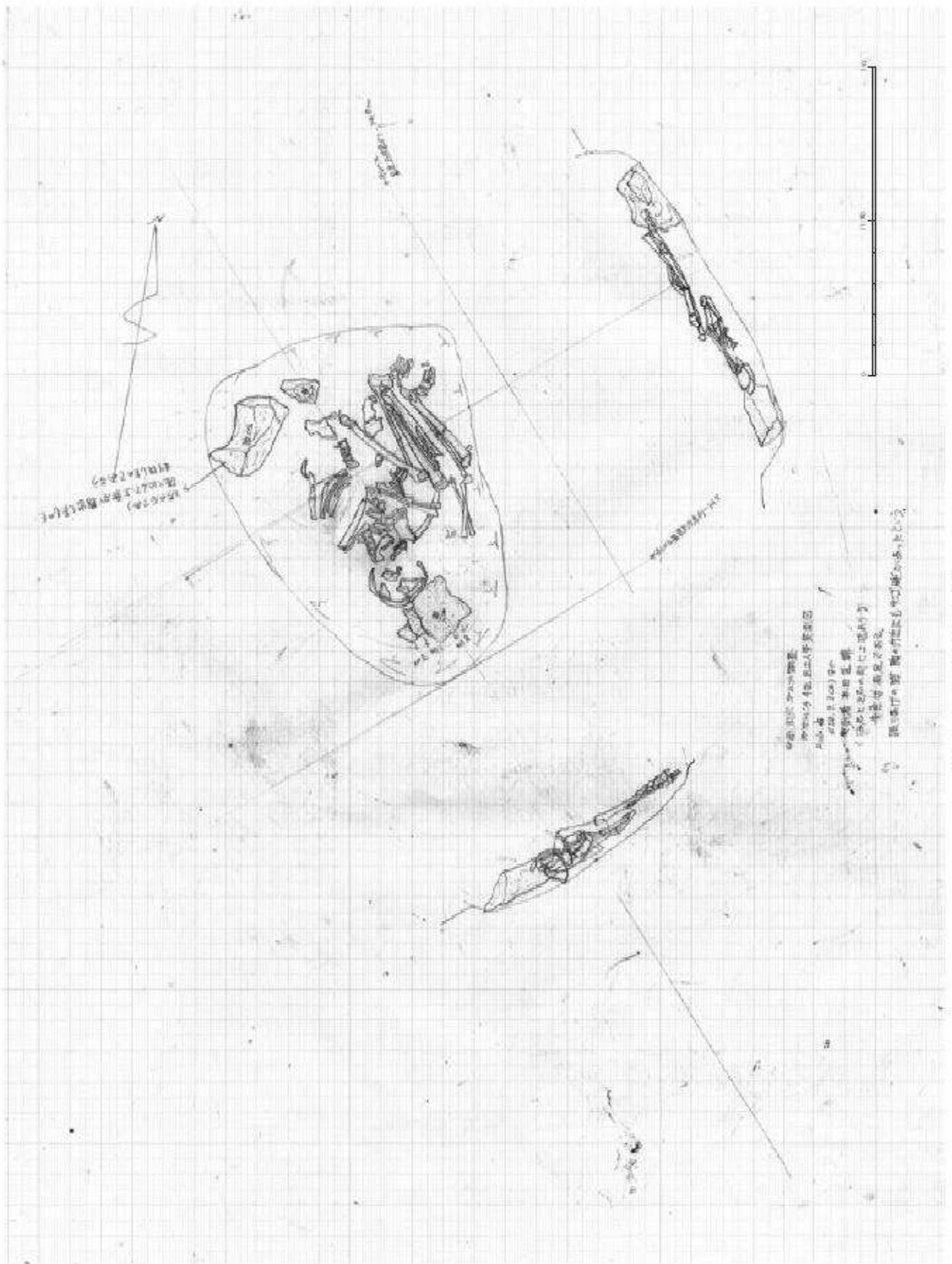
なお、第二次調査および第三次調査出土土器に関しては、遺物の紹介のみに留める。第二次調査以降の土器は『鹿児島考古』第18号での報告及び1985年の知名町発掘調査報告書を参考にされたい（河口ほか1984、河口・本田1985）。

#### （1）第2層・第3層出土土器（第4図1～21）

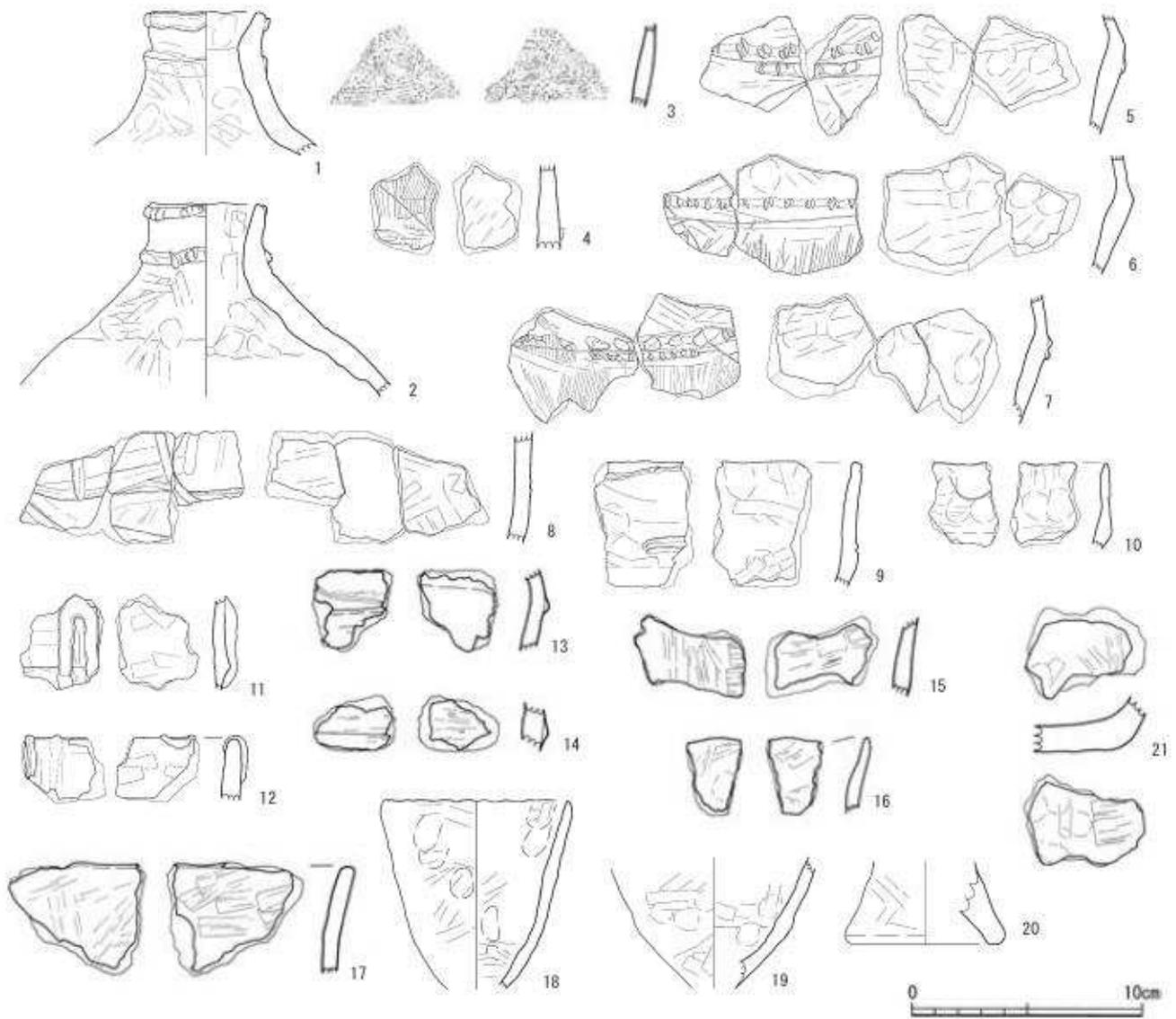
第一次調査での第2層・第3層出土遺物を再実測し第4図に示す。第二次調査・第三次調査の上層出土土器も当該層出土土器に並行すると考えられるため、合わせて紹介する。

1・2は壺形土器である。頸部から口縁部にかけて筒状に立ち上がり、頸部からなだらかに胴部が張り出す。器壁がおよそ1～1.5cmと厚く、器面調整が粗雑で指頭押圧痕を多く残す。1は口唇部外端と頸部に幅広の粘土帯を貼り付け、頸部の粘土帯は下から上に押圧している。口唇部外端の粘土帯は、1本で口縁部を廻るのか数本に分かれて廻るのかは不明である。2は口唇部外端と頸部それぞれに粘土帯を貼り付け、刻目もしくは押圧により粘土帯に凹凸をつけている。

3～15・20は、甕形土器である。3～7は、報告書では凸帯細線文土器に分類されている。5・6・7は『鹿児島考古』第17号および1985年の知名町教育委員会の発掘調査報告書に実測図が掲載されているが、破片同士が接合できるものがあることが判明し、かつ文様の施文方向や器壁の厚さ等から上下が逆であると考えられることから訂正して実測した。口縁部から胴部へ移行する境目と思われる所で「く」字状に屈曲し、屈曲部に粘土帯を薄く貼り付け刻目を施す。7のように、刻目を一つずつ施す場合と、5・6のように隣接して2つずつ施す場合がある。また、屈曲部の下には細く短い刻目凸帯



第3图 中洞穴土坑墓·人骨



第4図 中甫洞穴出土土器（1）

を部分的に貼り付けている。器面調整はナデと刷毛目調整である。3は薄く刷毛目調整を施している。4は刷毛目調整を施し、細い粘土帯を部分的に貼り付けているが、全体の様相は確認できない。前述の土器と同様の文様形態になると思われる。8・9は、沈線文土器に分類されている。8について『鹿兒島考古』第17号および知名町発掘調査報告書では3点の土器片として掲載していたが、今回接合することが判明した。基本的には、1本を単位とした幅で浅い沈線文を交差するように施している。胎土は橙色で、河口は「弥生質」と記述している（河口ほか1983b）。9は頸部から胴部の境目が緩く屈曲し、口縁部および屈曲部に細い沈線を施しているが、小片のため全体的な文様形態は不明である。胎土は赤褐色で焼成は良好である。8・9とも先端に繊維が露呈して

いる施文具を使用していると思われる、ナデにより器面調整している。10は弧文土器に分類されている。口縁部に半円状の沈線のようなものがみられるが、小片のため全体的な口縁部の形状・文様形態は不明である。器壁は5～8mmと薄く、口縁部と胴部との境目が屈曲し、屈曲部は肥厚している。ナデにより器面を調整し、焼成は良好である。11・12は凸帯文土器に分類されている。11は口縁部から胴部にかけて屈曲しており、屈曲部は稜線を形成している。両者とも丸みを帯びた粘土帯を、11は屈曲部に重なりながら逆U字状に、12は口縁部から口唇部にかけて逆U字状に貼り付けている。12の粘土帯は一部剥落している。いずれも焼成は良好である。13は口縁肥厚沈線と報告されている。細い沈線を施すが、小片かつ口縁部が残存していないため口縁が肥厚す

るのかどうかは定かではない。14は一部稜線が形成される屈曲部かと思われるが、胎土が脆く小片のため詳細は不明である。15は弥生片として報告されている。文様は確認できないが、ナデにより器面調整しており、焼成は良好である。20は甕形土器の底部と報告されている。中空の脚部であり、部分的に石灰分が付着しているが、煤の痕が確認できる。河口は「南九州の松木菌遺跡出土の、弥生後期甕形土器の底部に類するもの」としている（河口ほか1983b）。

16～19は鉢形土器である。河口は「南九州弥生後期頃にみられる、小形鉢形土器に類する器形である」としている（河口ほか1983b）。16は直行する口縁部であり、波状口縁かと思われるが、破片のため詳細は不明である。17は口縁部がやや外反する。18は指頭押圧痕および輪積み痕を残しており、器面調整は粗雑である。丸底であると考えられる。19は18と同様に指頭押圧痕と輪積み痕を残し、口縁部が直行する。

21は平底の底部である。『鹿児島考古』第17号の一覧表では表採と記されているが、本文では第2層出土土器として写真のみ報告されている。器面調整が粗雑で指頭押圧文を多く残す。胴部から緩く屈曲し底部に至る。

以上、河口の分類に従って記述したが、第4図10・16・18・19は大堂原式土器に近いもの、1・2・15・17は兼久式土器、3～7・13・14は兼久式土器に近い要素を持つセン當式土器、8・9・11・12・20はスセン當式土器、21はグスク系土器と思われる。

第二次調査では、「短い粘土紐を格子状に貼り付けて凸帯とする土器片」や「横位の凸帯に押圧して刻目を施した土器片」2点、木葉庄痕のある甕形土器の底部1点、平底の底部が3点報告されている（河口ほか1984）。本田道輝は、木葉庄痕のある底部は兼久式土器、大きな平底はグスク系土器の可能性が高いとしている（本田2018）。第三次調査では、口縁部と胴部の境目で「く」字状に屈曲し口唇部外端と屈曲部に刻目凸帯を貼り付ける土器片1点、同様の器形で口唇部外端と屈曲部に沈線を施す土器片1点、外反する波状口縁の破片1点、「南九州の弥生後期末の松木菌式か、中津野式の甕形土器底部」と思われるもの1点が報告されている（河口・本田1985）。

## （2）第4層出土土器（第5図～第7図22～53・55・56）

第4層出土土器は、1983年の第一次調査の報告で4層上部層・中部層・下部層出土土器にそれぞれ分けられている（河口ほか1983b）。前述のとおり、第二次調査および第三次調査では、第一次調査の第4層出土遺物に該当するものを下層出土土器としてまとめている（河口ほか1984、河口・本田1985）。第二次調査出土土器については、河口が第一次調査出土土器の分類に当てはめている分のみの紹介に留める。第三次調査では上部層・中

部層・下部層出土の分類ができず文様による分類を行っているため、分けて記述する。

まず、第4層出土土器の相対的な基準となる土器について述べる。第5図22は第一次調査で第4層中部層から出土した土器で、完形に復元されている。口縁部は直行し、器壁は0.9cm～1.2cm、底部はおよそ3.5cmと厚い。乳房状に近い尖底の深鉢形土器であり、補修孔を二つ有する。貝殻腹縁を用いて、外面は横位と斜位を交えながら、内面はおもに横位に条痕文を施すが、はっきりとした文様構造はみられない。胎土に石灰岩粒を含み、焼成は良好である。埋文センター保管分では、この土器と同類と思われる土器片を16点確認している。また、第二次調査でも第Ⅱトレンチより、この土器の第一次調査取り残し分と思われる破片、第Ⅴトレンチからは同一個体と思われる破片が出土しており、7点の実測図が報告されている。河口は「九州本土における縄文前期の土器型式で、時期が明瞭で、他の土器の時期判定の基準となるもの」とし、轟式土器の最も古い型式であるとしている（河口ほか1983b）。河口はこの「轟式」土器を基準に、第4層上部層・中部層・下部層出土土器の時期を相対的に決定づけている。

### ア. 第4層上部層出土土器

23は波状文土器である。篋状工具を施文具としていられると思われ、細く浅い波状文を、並行するように数条施している。断続的な波状文もみられる。

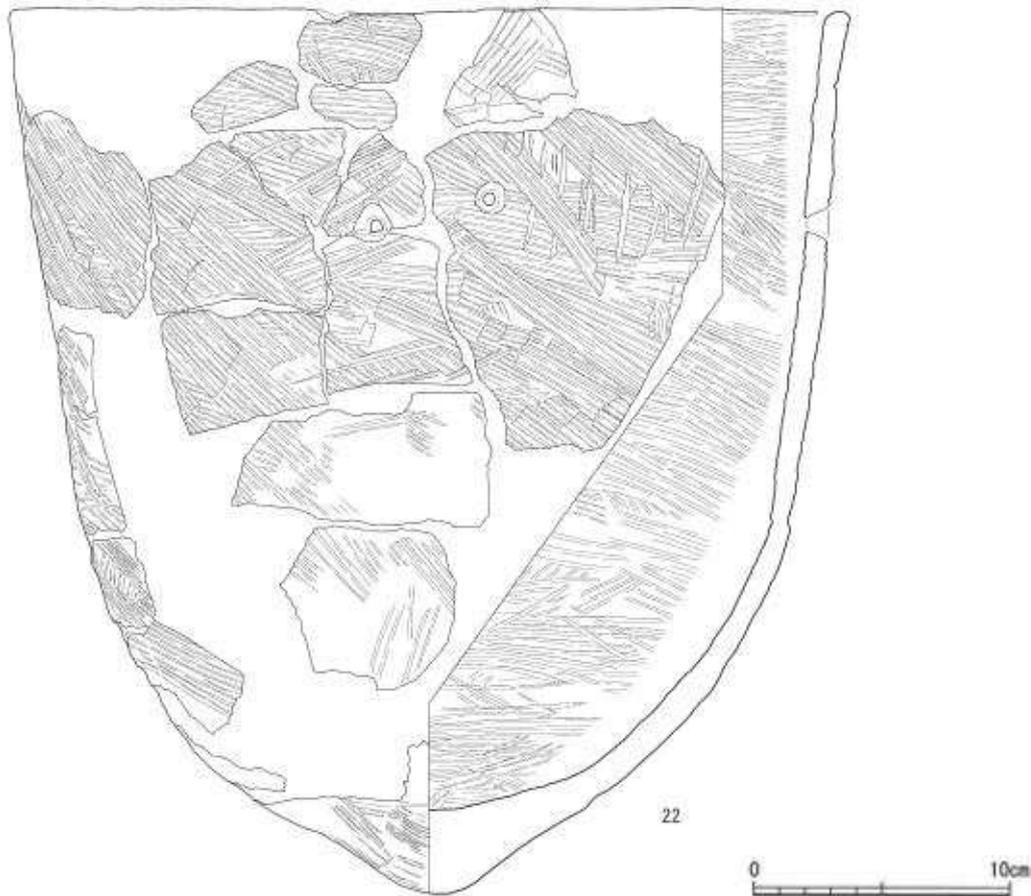
24～28は連点文土器である。24は口唇部を一部復元しているが、山形に張り出すことから波状口縁と思われる。先端に3～4つの突起をもつ施文具を用いて、一定間隔で上から下に押圧している。25は口縁部がわずかに外反し、口唇部が平坦面をもつものである。胴部は頸部から緩やかに張り出す。24よりも狭い間隔で細く浅い連点を施しており、細い篋状工具を使用していると思われる。26は24と同様と思われる工具を用いて強く押圧している。27・28は施文具も施文方法も24と類似しており、28の口縁部はわずかに外反する。いずれも、連点文が土器全体に及ぶのか、部分的な施文なのかは不明である。河口は、この文様は第4層上部層の代表的なものであると報告している。

29は貝殻腹縁刺突文土器である。貝殻腹縁を施文具とし、縦位に部分的な条痕を施した後に、連続して斜位に刺突する。

30は凸帯文土器である。幅広の粘土紐を貼り付けている。胎土が脆く小片であるため、傾きや上下、全体の様相は不明である。

### イ. 第4層中部層出土土器

31～36は連点文土器である。31は断面の摩滅と連点文の施文位置から口縁部かどうか断定できないが、過去の報告で口縁部として実測されているためそれに従う。



第5図 中甫洞穴出土土器(2)

先端が細い工具を用いて上から下へ押圧するように施文している。この破片における施文範囲は一部のみで、上部層の連点文ほど規則性がないように思われる。32は口縁部が外反し口唇部が平坦面をもつ。口縁から1.5cmほど間を空け、筒状工具を用いて上から下へ押圧している。刻点は連続して二つ施したものを一つの単位として、胴部へ向かって1cmほどの間隔で施文している。33・34も筒状工具を用いて、上から下に浅く押圧し連点文を施しているが、点の大きさや並びに規則性はみられない。35は、上から下にやや引きずるようにして連点文を施す。36はやや外反する口縁部で、大きめの連点文を施す。他の中層部連点文土器と比べてやや大きめの筒状工具を使用していると思われる。中部層の連点文土器と上部層の連点文土器との差異について、河口は「4層上部の連点文では、一点の単位が大きく、中に線刻が見られたが、この層から出土する連点文は、これに比べて小さく、線刻は見られない」と記述している(河口ほか1983b)。

37・38は波状文土器である。37は筒状工具を施文具として考えられ、断続的な波状文のほか連点文も施す。38は貝殻腹縁もしくは櫛状工具を用いて多重の

波状文を施す。

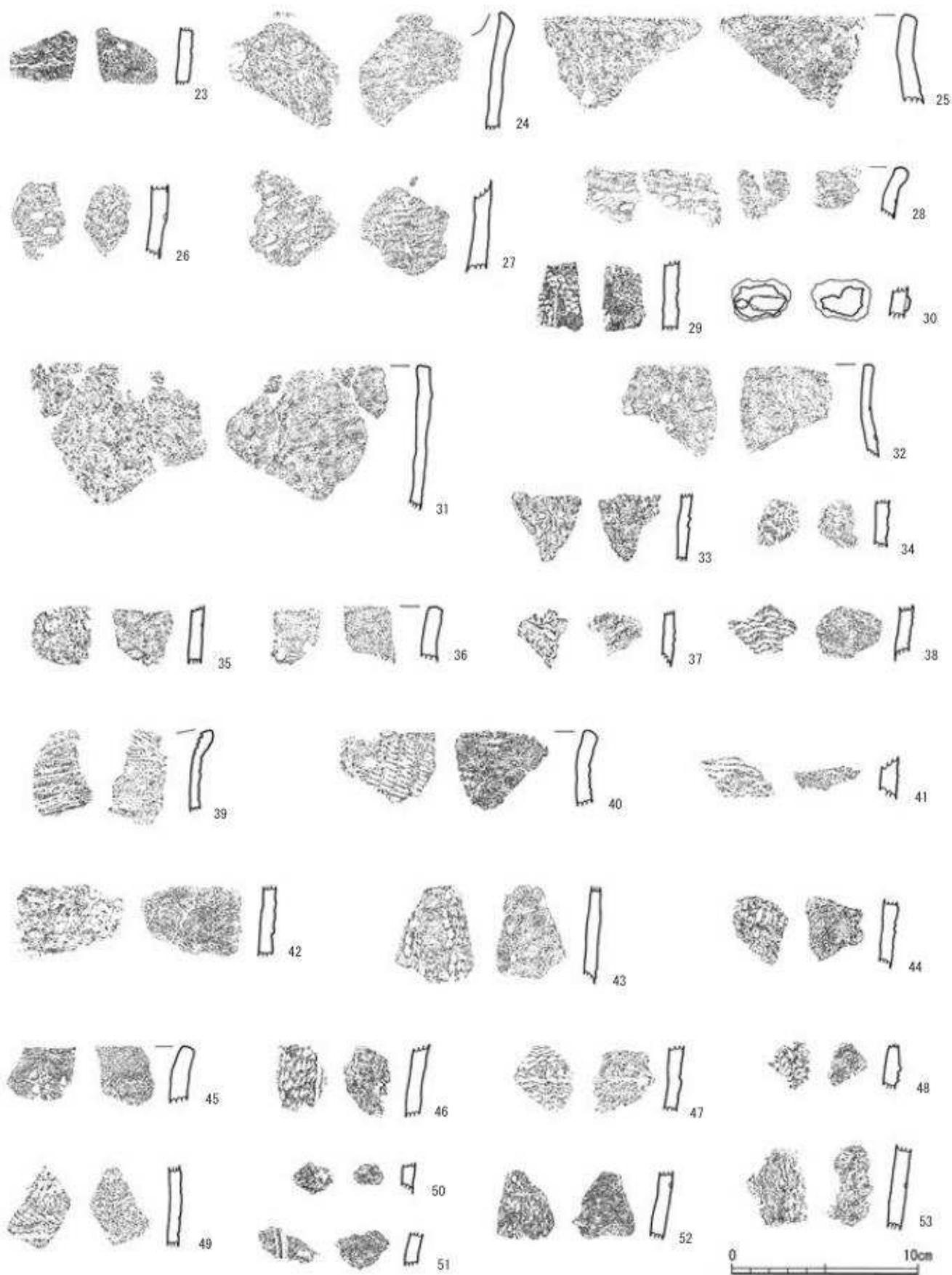
39は沈線文土器である。口縁部が外反し、肥厚している。破片であるため断定はできないが、波状口縁である可能性が高い。口縁部から胴部にかけて、横位に深い沈線文を施す。また、裏面の口唇部から口縁部にかけても沈線文を施す。焼成は良好である。河口は「南島では極めて珍しい例で、九州の前期縄文土器と対比されるもの」と述べている(河口ほか1983b)。

40は櫛描き文土器である。やや外反する口縁部で、筒状工具もしくは貝殻腹縁を施文具として横位に連続して押し引くように施文している。裏面には部分的に連点文を施しており、同様の施文具を使用していると思われる。

41は条痕文土器である。貝殻腹縁を施文具とし、浅めの条痕を施す。破片のため上下が断定できず、条痕の施文方向が横位なのか縦位なのかは不明である。

#### ウ. 第4層下部層出土土器

42～46は連点文土器である。42は上から下に押圧して縦位に施文している。43・44は、連点文の形態から同一の貝殻腹縁を施文具に使用していると思われる。4～5つの点が一単位となり、縦列を成すように施文して



第6图 中甫洞穴出土土器 (3)

いる。45 はやや外反する口縁部で、口唇部が平坦面をなし、器壁は1 cm 前後と厚みである。口唇部外端から1.5cm ほど間を空け、2つの点で一単位として縦列を成すように施文している。46 の文様は上部層連点文土器の24によく類似しており、先端に3つ程の突起を持つ施文具を使用していると考えられる。また、連点文に平行するように条痕文も施している。これらの連点文土器は、点の規則性が欠けている中部層出土の連点文土器と比較して、点が縦列に単位を成している。河口は中部層と下部層におけるこの施文の違いを施文具の違いと捉え、「前者が細い篋を使用しているのに対し、後者は、幅が広く、先端に数個の突起を有する施文具（例えばハイガイ属の貝殻腹縁部）を用いている」としている（河口ほか1983b）。

47・48 は波状文土器である。貝殻腹縁もしくは櫛状工具を施文具として使用していると考えられる。いずれも断続的な波状文を密に施しており、主に押し引くようにして施文していると思われる。河口は「4層中部の波状文と同類であるが、施文法が一層複雑になっている」としている（河口ほか1983b）。

49 は篋削り連続文土器である。篋を施文具として、斜位に連なる爪形文、押し引き文を施す。

50 は篋削り文土器である。小片であり、傾きや上下、全体の様相は不明である。篋を施文具として、鋸歯状に施文していると考えられる。

51 は沈線文土器である。浅く幅広い沈線文を施すが、小片のため、上下の向きや全体の文様形態は不明である。中部層の深い沈線文を施す沈線文土器とは大きく異なる。

52・53 は羽状連点文土器である。下部洞穴出土の完形に復元された土器（第8図81）と同類の土器である。いずれも貝殻腹縁を施文具にしていると考えられ、3～4つの点を一単位として、連点を羽状に施している。4層下部層出土土器の中でも古いタイプと考えられている。

#### エ. 第4層最下部出土土器

第一次調査にて、第1トレンチから爪形文土器が2点出土している（第7図55・56）。埋文センター保管の遺物の中では確認できなかったため、既報告の図面を掲載する。河口が爪形文の施文方法を考える上で紹介している採集土器（第7図54）については、採集土器の項で述べる。

55・56 は、「押圧によって成形され、押圧痕・隆起帯が生じた後に、二次的に横位に施文されており、「一次的に指頭の押圧と同時に、爪跡が印されたものでない」としている。採集された爪形文土器についても、「表面に施された爪形文は、弧の凸面を左にして、横位に帯状をなし、指頭押圧による土器成形後の施文である」としていることから、中浦洞穴の爪形文土器の製作過程は「指頭押圧による成形→ナデ仕上げによる器面調

整→爪形の施文」で行われたと述べている（河口ほか1983b）。また、第二次調査でも爪形文土器の微細片が1点確認されている（河口ほか1984）。

#### オ. 第三次調査の出土土器

第三次調査の出土土器は第二次調査と同様に、第一次調査の第4層出土土器に該当する土器は下部層出土土器としてまとめられている。実物を確認できていないため、今回は知名町発掘調査報告書（河口・本田1985）の報告に従い遺物を紹介する。

貝縁刺突連点文土器を3点報告している。第4層上部層出土の連点文土器と同類の土器としている。

篋描き点刻文土器を11点報告している。第4層中部層出土の連点文土器としたものの一部としており、河口は「一見、爪形に近い文様となっており、爪形文土器からの系列にあるものと考えられる」と述べている（河口・本田1985）。採集土器にも同様のものが確認されている。

貝縁ひっ掻き文土器15点を報告している。第4層中部層出土土器の連点文土器の一部とされ、篋描き点刻文を除いた残りの土器をこの土器に分類している。

斜行連点文土器が1点報告されている。第4層下部層の羽状連点文土器と同種であるとしている。

その他、貝縁条痕文土器が6点、貝縁波状文土器が13点報告されている。

#### （3）下部洞穴入口出土土器（第8図66～82）

第一次調査での下部洞穴の試掘範囲から出土した土器を再実測し第8図に示した。

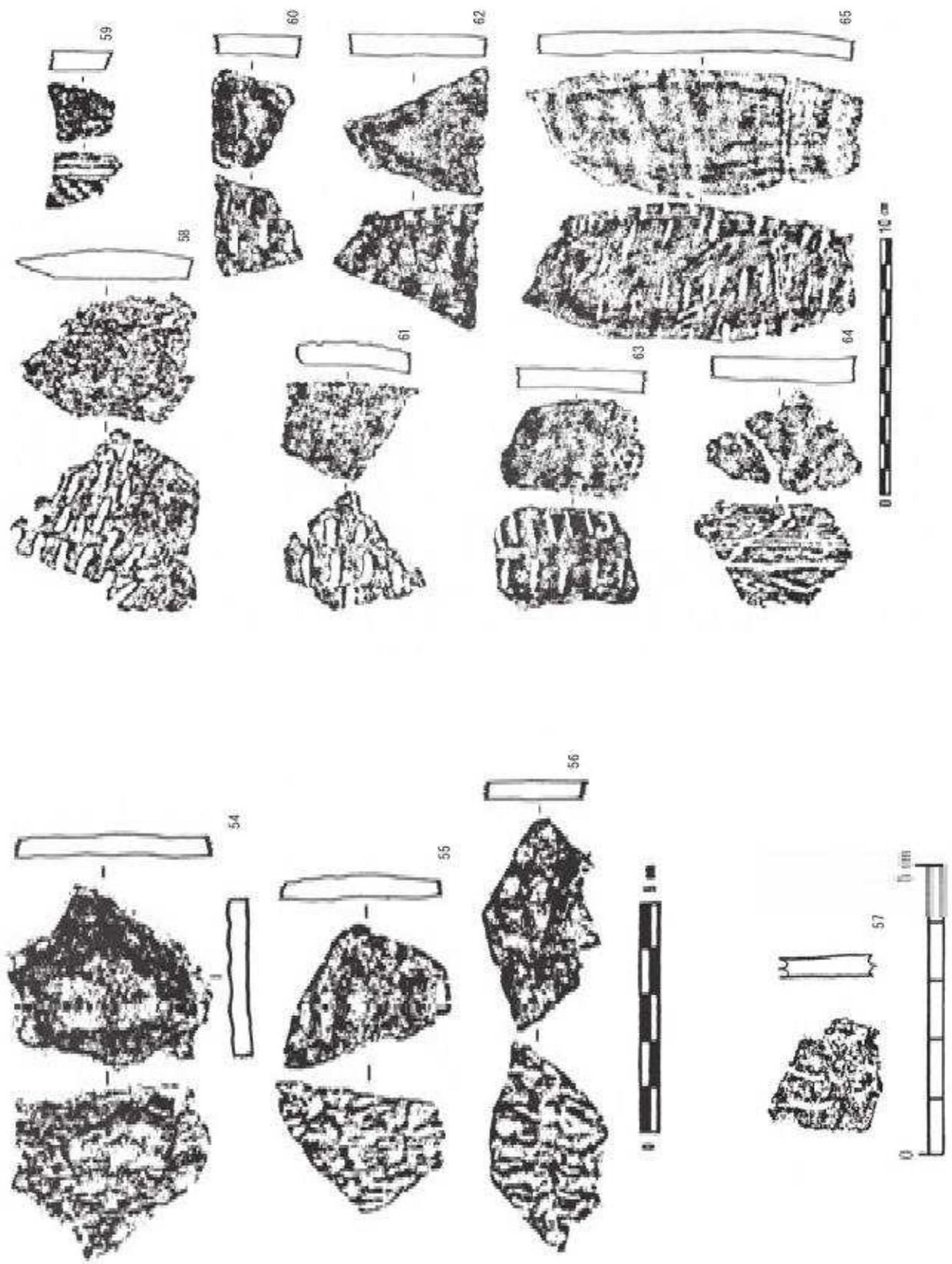
66・67 は篋削り波状文土器と報告されている。これらは接合することができず同一個体か定かでないが、過去の報告では同一個体として写真で報告されているため、今回の実測図も並べて紹介する。長く張る胴部に、浅く幅広い波状文を三重に廻らせるとと思われる。67 は丸底の底部で、文様がなくナデ調整がされているのみである。篋状工具を用いていると思われる。第4層上部層出土土器に並行するとされる。

68 は篋削り鋸歯文土器と報告されている。細い篋状工具で横位に鋸歯状に施文したもので、前述した篋削り波状文土器と文様は類似する。第4層上部層出土土器に並行するとされる。

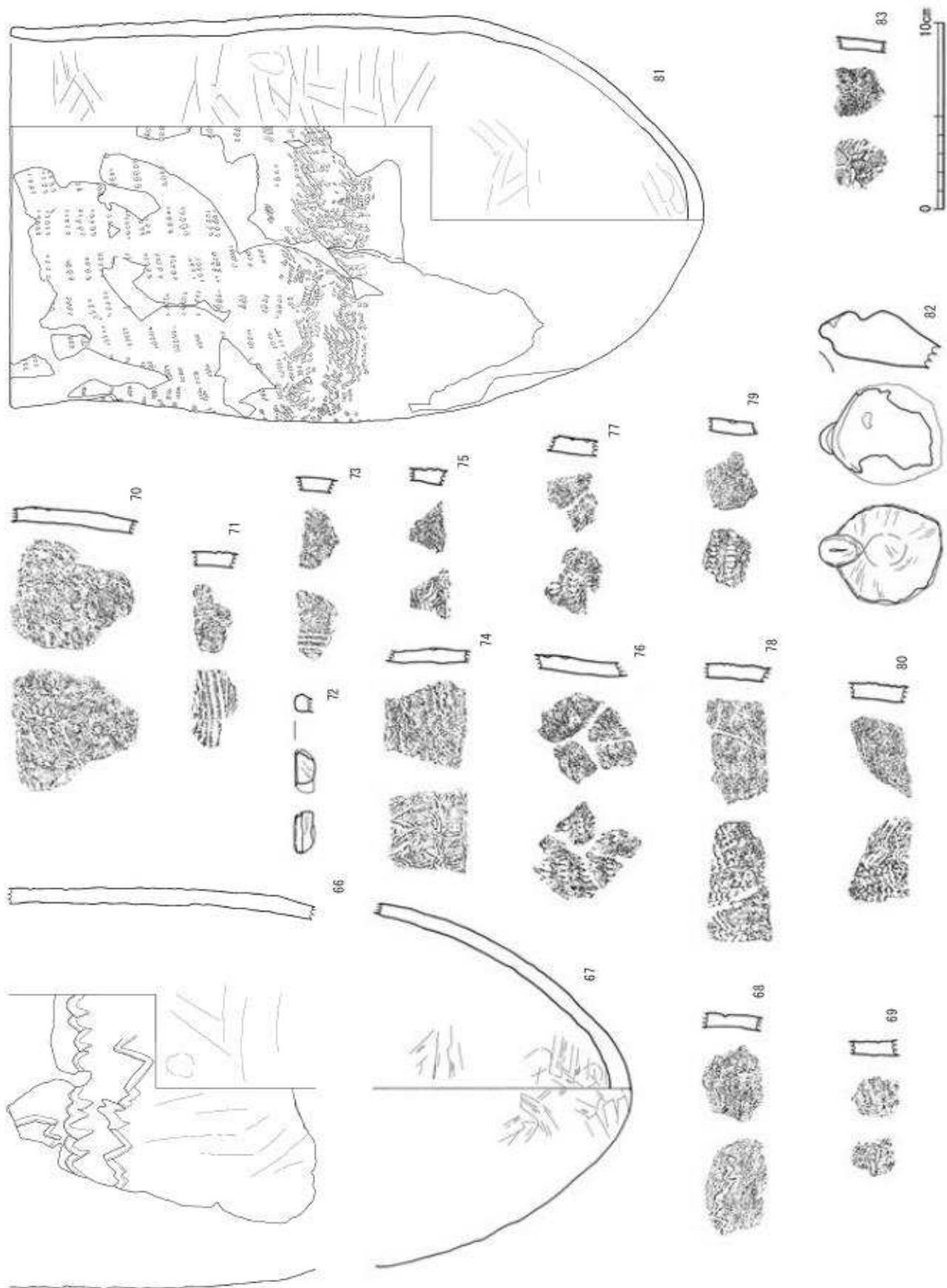
69 は篋削り文土器と報告されている。細い篋状工具を施文具として使用していると思われ、短い沈線を波状に重ねるように施文している。第4層上部層出土土器に並行するとされる。

70 は連点文土器と報告されている。2つの点で一単位を成し、その単位を2～4つずつ縦列するように施文している。第4層中部層出土土器に並行するとされるが、1985年の知名町発掘調査報告書では第4層上部層出土の連点文土器として報告されている。

71・72 は条痕文土器と報告されている。いずれも貝



第7図 中甫洞穴出土器(4)・採集土器(河口ほか1984, 河口・本田1985より転載)



第8图 中甫洞穴出土土器(5)

殻腹縁を施文具としていると思われる。71はやや肥厚する口縁部で、浅く条痕を施していると思われるが、小片のため器形や全体の文様の様相は不明である。72は口唇部に平坦面をもつ口縁である。非常に浅い条痕が見られるが、小片のため詳細は不明である。第4層中部層出土土器に並行するとされる。

73は条痕連点文土器と報告されている。浅い条痕文のほか、貝殻腹縁を施文具とした連点文を施す。第4層中部層出土土器に並行するとされる。

74～80は、波状連点文土器と報告されている。貝殻腹縁が施文具と考えられる。74は波状文のほか、筥状工具を使用したと思われる押し引き文も確認でき、75～80の波状連点文とは文様形態が異なるように思える。75・78・80は貝殻腹縁を刺突したり、緩い波状またはまっすぐに押し引いたりして多様な方法で施文している。76・77・79は4～5つの点を一単位として縦列するように施文しており波状文はみられないが、完形に復元されている81の「連点波状文土器」と連点文の形態はほぼ同じである。74は1983年の報告では第4層中部層出土土器とされているが、1985年の知名町発掘調査報告書では第4層上部出土土器として報告されている。その他は第4層下部層出土土器に並行するとされる。

81は連点波状文土器と報告されている。完形に復元されている。器高がおよそ36.6cmと高く、胴部の下方がやや張り出し、丸底に近い尖底の底部に至る。文様が施されているのは胴部上半分までであり、胴部下半分および底部はナゲ調整のみである。第4層下部層出土土器に並行するとされる。河口は、『鹿兒島考古』第17号では「轟式より古いが、羽状連点文土器より新しいものではなかろうか」と述べているが（河口ほか1983b）、1985年の知名町発掘調査報告書では「南島の土器では、爪形文土器を除くと、最も古い部類に属するものである」としている（河口・本田1985）。

82の土器は、河口が「亀が頭を上げた形の把手」としている特殊な土器である（河口ほか1983b）。器壁は1.4cm～3cmと非常に厚く、波状口縁であると思われる。口唇部外端に楕円形の粘土塊を縦に貼り付け、粘土塊の中心には細長い未貫通孔が観察できる。粘土塊の直下は山状に張り出している。焼成は普通であり、胎土が脆い。時期は不明だが、第4層の土器より後の時期に属すると思われる。

以上、下部洞穴入口出土の土器を紹介したが、下部洞穴入口の堆積は「西壁下トレンチ（第1トレンチと命名）の第4層以下の土が流れ込んで堆積したもの」であり、二次堆積であることが報告されている（河口・本田1985）。そのため、第4層の出土層に当てはめる分類には注意が必要である。また、第二次調査の第Vトレンチ出土遺物も第一次調査の下部洞穴入口出土遺物に該当す

ると思われる。河口は1985年の知名町発掘調査報告書で、第二次調査下層出土土器の一部を第一次調査の第4層上部層・中部層・下部層の分類に当てはめており、下部層出土土器に並行するとされる連点波状文土器、上部層出土土器に並行するとされる連点文土器、中部層出土土器に並行するとされる波状文土器などを報告している。また、第Vトレンチから丸底の土器4点が出土しており、うち1点は小型である。いずれもどの土器群につくかは不明であるが、第4層出土土器の時期に属するものとして報告されている。しかし、下層出土土器はほとんどが第Vトレンチ出土であること、また第4層の出土層の分類に当てはめた根拠が記されていないことから、こちらも注意が必要である。

#### （4）その他の土器・陶磁器（第8図83）

第一次調査分で未報告の土器片を1点実測した。また、第二次調査で出土した無文土器、第三次調査で出土した陶磁器1点および「その他の土器」とされていたものを紹介する。

第8図83は爪形文・貝殻刺突文・条痕文が施された土器片である。埋文センター保管分の土器片の中から発見し、無文の土器小片数点とともに「NK 1.3.5」と注記されたビニール袋に入れられていた。第1トレンチ3区の第5層出土と思われる。爪形文は、人の指で施文したような形状だが断定はできない。未報告の土器片であり、貝殻刺突文・条痕文・爪形文が同一個体に施文されている例および分類は管見の限り中甫洞穴の調査では報告が無いため、この項で紹介しておく。

第二次調査では、第IVトレンチ第4層から出土した完形に復元できる無文土器が下層出土土器として報告されている。長胴丸底で、口縁部は外反する。内部に磨製石斧2点（うち1点は第10図98、もう1点は写真のみ報告されていたが実物を確認できず）を内蔵した状態で出土しており、「この完形土器の器形自体から判断して一応第4層の土器群に入れておくことにしたい」と述べているが（河口・本田1985）、上部層・中部層・下部層などの出土位置は不明なため、この項で紹介しておく。

第三次調査では、青磁の碗が第XIVトレンチ4区の石灰岩落盤下の空隙の表面から1点出土している。「胎は灰白味を呈し、削出し高台である」と、「灰味のある透明感の強い釉が薄くかかり、体部の回転ヘラ削痕が見える」と報告されている（河口・本田1985）。また、「その他の土器」として、土器小片が1点、セット関係不明の乳房状の底部が1点報告されている。土器小片は「貝殻腹縁と思われる施文具で施文し、波状文と刺突文との組み合わせ文様で、押し引き文との類似点が見られる」と述べており、第二次調査での第4層中部層の波状文土器の中に同一個体と思われる土器片が確認されている（河口・本田1985）。

### (5) 採集土器 (第7図54・57~65)

第7図54・57~65は、住民が採集した第4層出土土器に並行すると思われる土器および爪形文土器である。現物は確認できなかったため、既報告の図面および遺物の紹介にとどめる。

54は指頭押圧により土器表面および裏面に溝と隆起帯が生じ、土器成形後に横位に帯状をなす爪形文を施すことが報告されている(河口・本田1985)。

57は、『鹿兒島考古』第18号で爪形文土器の参考として紹介された採集土器である。小片であり、「指頭痕は明瞭でないが、爪形文はくつきりと残されている」と報告されている(河口ほか1984)。

59・62・64は、第4層上部層出土土器の時期に属するとされる。いずれも貝殻腹縁を施文具としており、59・64は条痕文および連点文、62は連点文を描いていると報告されている。

58・60・61・63・65は爪形文の部類に属するものとしており、篋状の施文具を使用していると考えられる。「土器内面には指頭による押圧痕を残すなど、成形の上でも爪形文的な要素を備えている」が、「器壁が厚く、文様が縦に配列するなどの、最下層出土の爪形文土器との差異もあって、爪形文土器との距離も感じさせる。」と述べている(河口・本田1985)。いずれにしても、爪形文土器の系列の土器である可能性が考えられ、注意すべきものである。

このほか、埋文センターには、第一次調査出土土器がバンケース10箱分保管されている。表採土器、各層出土土器、流れ込み出土土器が多くみられるが、無文土器がほとんどである。無文土器は焼成が良好なものが多く、縄文土器のほか兼久式~スセン當式土器と思われるものも多く散見される。

### 3 石器・貝製品・牙製品 (第9図~第13図)

石器・貝製品・牙製品はこれまで写真のみの報告しかされていなかったため、埋文センター保管分から抽出した第一次調査分の石器及び知名町教育委員会から借用した第二次調査・第三次調査分の石器・貝製品・牙製品を図化した。観察表は第3表~第6表に示す。

#### (1) 石器

##### ア. 第一次調査出土石器 (第9図84~92)

84~87は敲石と報告されているが、両面を磨いているものが多く磨石としても利用されていたと思われるため、磨・敲石とする方がよいと思われる。いずれも側縁部または両面に敲打痕が見られ、断面は緩いレンズ状を呈す。84は花崗岩製と報告されているが、安山岩製と思われる。85~87は砂岩製と報告されているが、いずれも安山岩製と思われる。

88は打製石斧である。片刃であり、周縁部を打ち欠

いて整形している。砂岩製と報告されていたが、頁岩製と思われる。

89~91は剥片石器である。いずれも大きく剥離したのち、部分的に二次加工をして刃部を作り出している。89は頁岩製で、大型の剥片に部分的に二次加工して刃部を作り出していると思われる。全面に石灰分が付着している。90は砂岩製である。91は花崗岩製と報告されていたが、安山岩製と思われる。90・91は、磨石を転用した可能性がある。

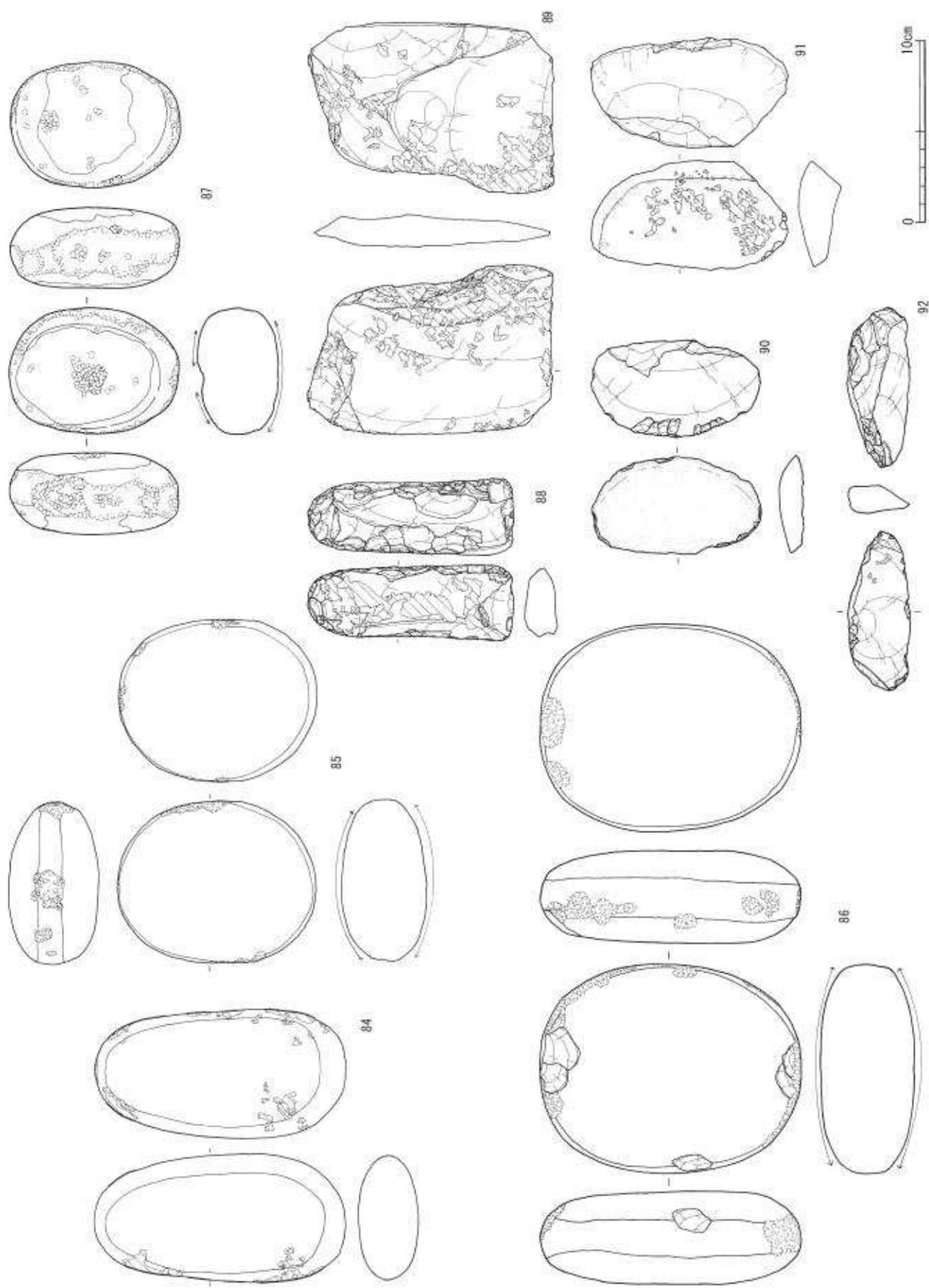
92はスクレイパーと報告されていたが、刃部や使用痕が観察できなかったため、剥片に分類した。石材は頁岩と思われる。

以上の石器のほか、埋文センターには第一次調査での表採・流れ込みからの出土・2~4層出土の石器がバンケース1箱分保管されており、磨石や石斧の破片と思われるものが含まれている。第一次調査で「砂岩製砥石が、下洞入口堆積より出土した」と報告されているが(河口ほか1983b)、埋文センター保管分では磨面のある破片は確認できたものの、砥石と断定できる石器は確認できなかった。

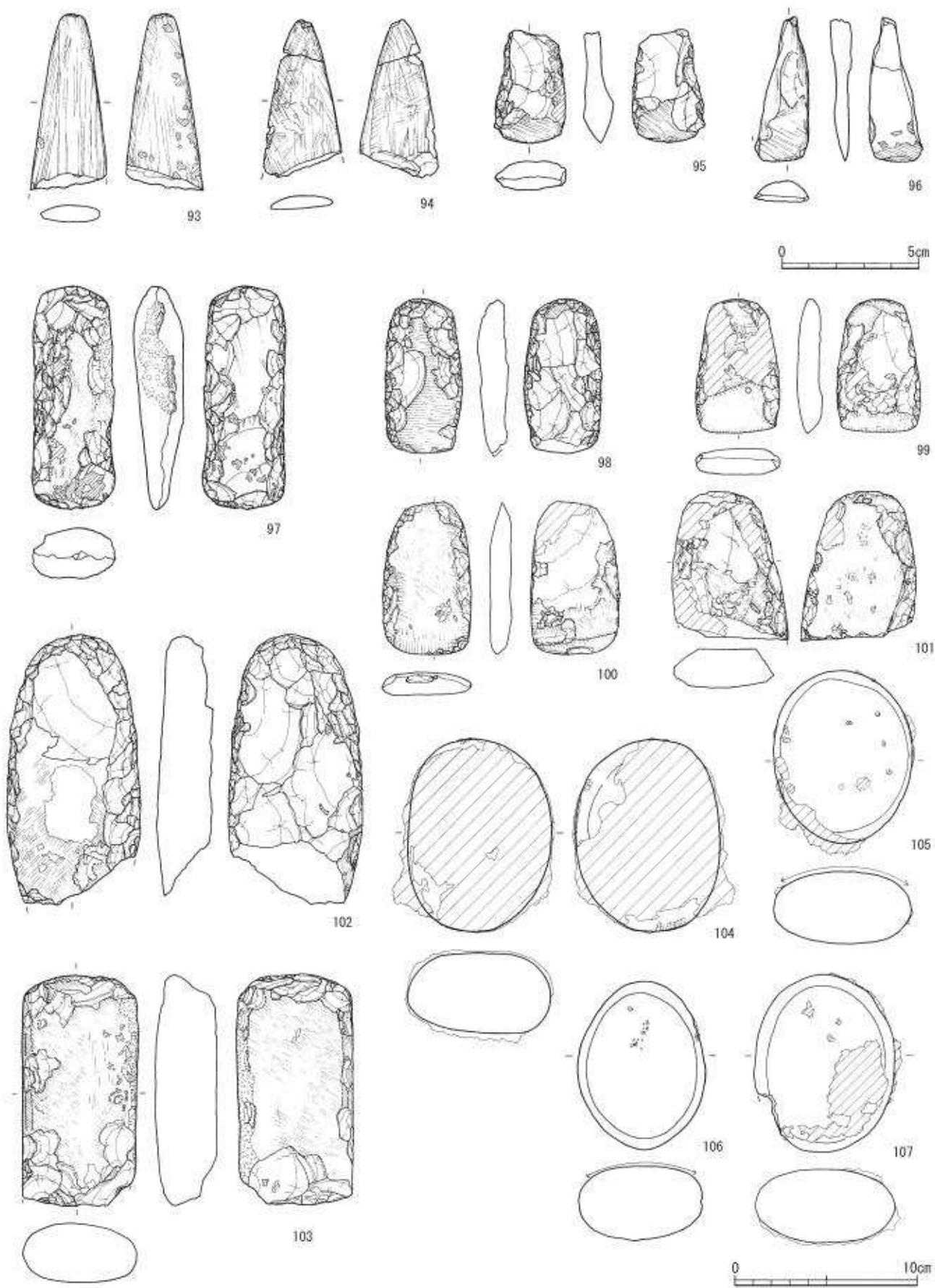
##### イ. 第二次調査・第三次調査出土石器 (第10図~第12図93~111)

第二次調査・第三次調査出土の石器を第10図~第12図に示す。また、埋文センター保管分の図面の中に、本田が記録した第IVトレンチ4区第2層上部の遺物出土状況図が確認できたため、併せて掲載する(第14図)。

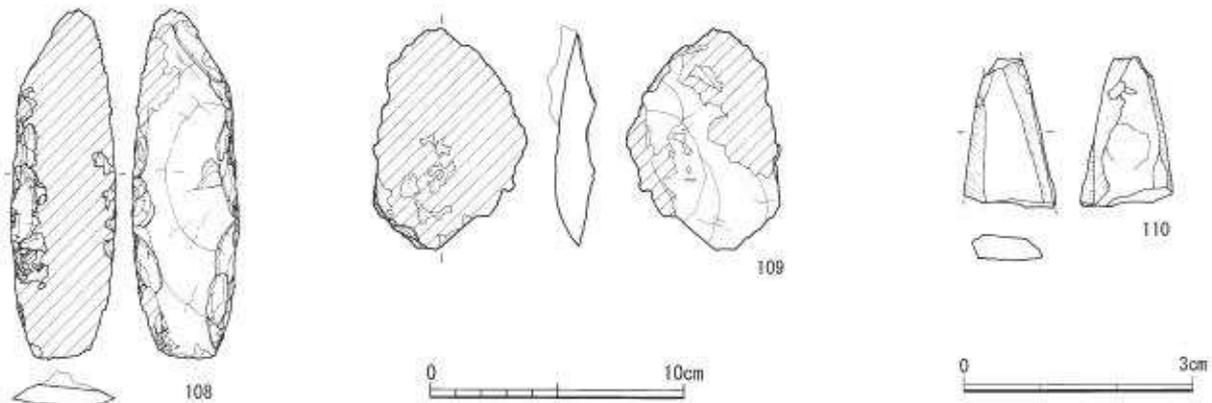
95~103は、局部磨製石斧と報告されている。中甫洞穴では普遍的にみられる石斧である。95は打ち欠いて整形したのちに刃部付近を磨いたと思われるが、研磨後の剥離も観察できる。砂岩製である。96は打ち欠いて整形したのちに刃部および片面を磨いたと思われる。粘板岩製である。97は砂岩製の磨製石斧で、両刃の刃部を打ち欠いており、敲打痕が見られることから敲打具として転用した可能性がある。98は砂岩製で、一部磨面が残存しているが、片面および刃部が打ち欠かれている。同封のラベルには「No. 2」と記されており、第14図の石器に付けられた番号と対応させていると思われるが、形状から第14図の「No. 3」の石斧であると思われる。99は片刃であり、片面を打ち欠いたのち刃部ともう片面を磨いていると思われる。砂岩製である。100も砂岩製であり、99と同様の製作技法であると思われる。101は砂岩製で、刃部が欠損しているが、周縁部を打ち欠いて整形し両面を磨いている。102はホルンフェルス製で、刃部が欠損しており、片面はほぼ全面打ち欠いている。同封のラベルに「No. 5」と記されているが、形状からみて「No. 1」の石斧であると思われる。103は砂岩製で、刃部を荒く打ち欠いて簡単な整形を施し、敲打痕がみられることから敲打具として転用した可能性



第9图 中甫洞穴出土石器(1)



第 10 图 中甫洞穴出土石器 (2)



第11図 中甫洞穴出土石器(3)

がある。同封のラベルには「No. 1」と記されているが、形状から第14図の「No. 5」の石斧であると思われる。

104～107は磨石と報告されているが、敲打痕が確認できるものは、磨・敲石に分類した。104は安山岩製であり、両面に石灰分が多く付着しているが、側縁部にわずかに敲打痕がみられる。105は安山岩製であり、106・107は凝灰岩製である。104は全面に、105・107には部分的に石灰分が付着している。

93・94・108～110は、用途不明石器である。93は磨製石斧と報告されていたが、全体の様相が不明で石斧と断定できなかったこと、非常に薄いことなどから用途不明石器に加えた。砂岩製であり、大半が欠損していると思われるが、全面が丁寧に研磨されている。94は頁岩製で、93と同様に欠損しているが、扁平で全面がよく研磨されている。108は粘板岩製で、石灰分の付着のため刃部が十分に観察できないが、石斧の可能性があり、扁平であり、周縁部を打ち欠いて笹の葉状に整形している。109は砂岩製で、石灰分が厚く付着しており観察できない部分が多いが、剥片石器の可能性があり、未報告の資料である。110は頁岩製で、両端が欠損しており、全形が把握できないが、側面を研磨している。

第12図111は特殊石器と報告されているが、磨製石斧と考えられる。長さ26.6cm、幅4.9cm、厚さ2.0cmであり、扁平で非常に細長い形状である。周縁部を打ち欠いて整形し、両面を磨いている。片刃と思われるが、刃部の欠損と石灰分の付着から、刃部付近の調整は観察できない。頁岩製である。

#### (2) 貝製品・牙製品(第13図112～124)

第一次調査・第三次調査で出土した貝製品・牙製品を第13図に示す。112～116は第三次調査、117～124は第一次調査での出土である。

112・113は貝玉である。イモガイの螺塔を用い、殻頂に1～2mmの孔を穿ったものである。部分的に石灰

分が付着しているが、全面研磨されている。

114・115・116は三角形状有孔貝製品である。真珠光沢がみられ、夜光貝を素材とするものと思われる。

117は穿孔貝である。ゴホウラ製と報告されていたが、アツソデガイであると思われる。螺塔上部・上唇・外唇・螺腹を除去し、螺背の中央に縦約1.6cm、横約1cmの楕円形の孔を穿ったものである。第1トレンチの人骨に沿って出土している。

118～122は貝製品の未製品、もしくは粗加工品と思われるものである。118はイモガイ、119・120・122はタカラガイ、121は夜光貝である。いずれも貝殻を部分的に打ち欠いたものもしくは打ち欠かれた破片であり、調整はされていない。120は第1トレンチ4区第3層出土の背面破片と3区2層出土の体部が接合したものである。

123はゴホウラ製加工品の破片である。全形は不明であるが、背面を利用した貝輪であると思われる。

124は牙製垂飾である。イノシシの牙を素材としている。両端が欠損しており、片方の端部に直径2mmの孔を穿つものである。

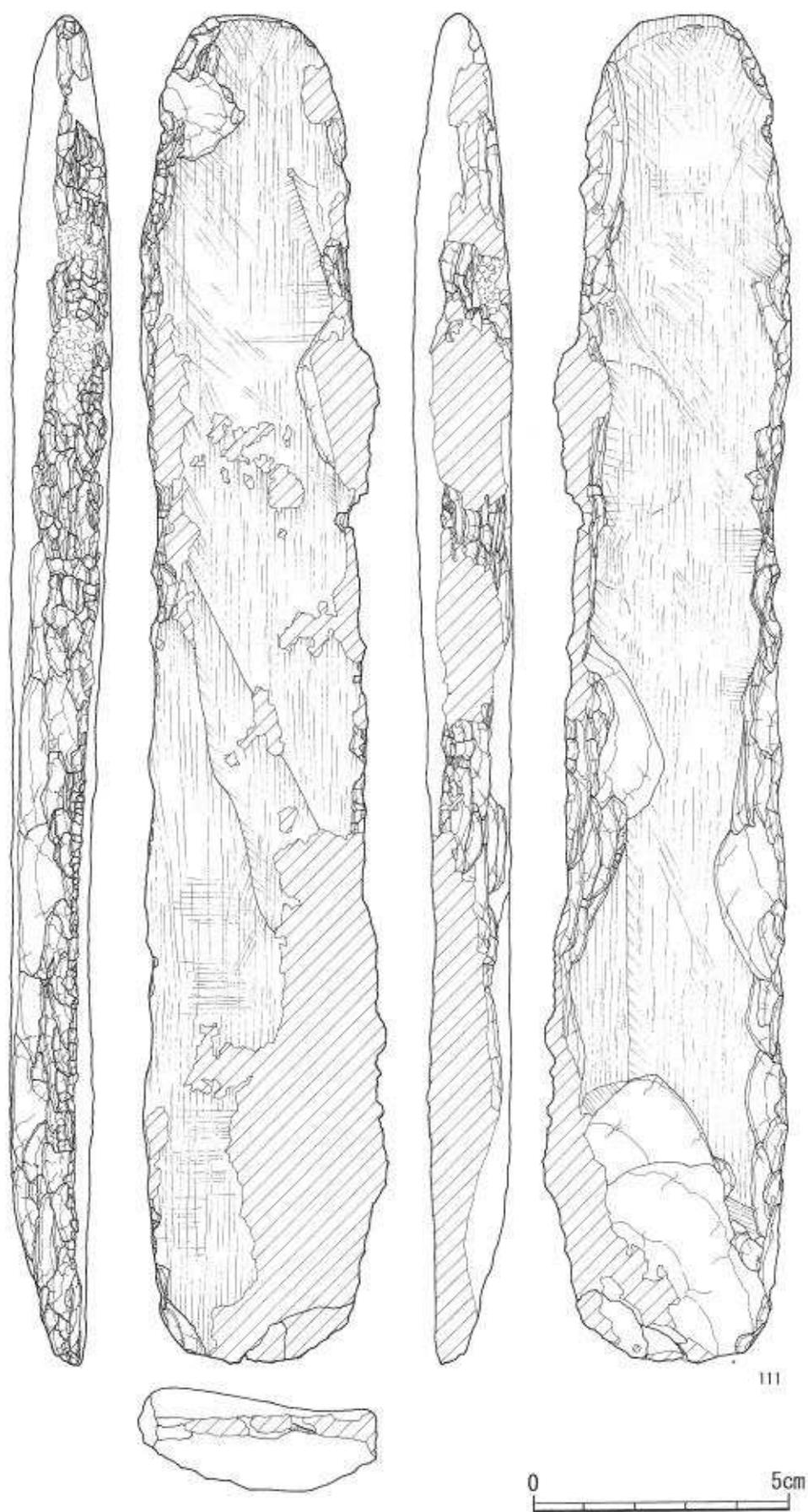
このほか、埋文センターではバンケース2箱分の貝類が保管されている。穿孔された可能性のあるヒトエガイと思われる貝が1点確認されているほか、シラクモガイ、リュウキュウマスオ等が確認できた<sup>21)</sup>。

## 4 人骨・動物骨

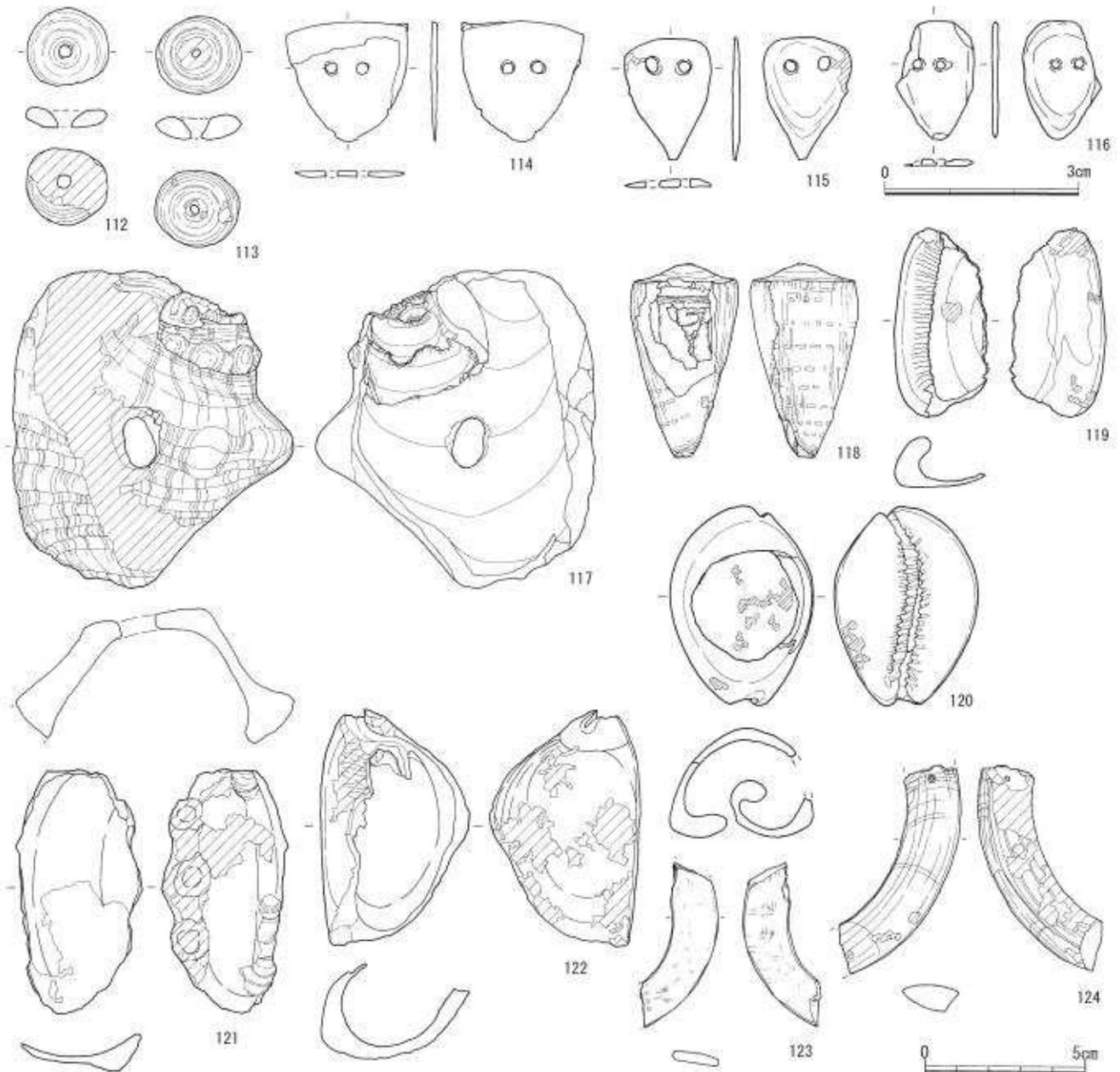
### (1) 人骨

第一次調査・第二次調査で人骨が出土している。松下孝幸の分析の結果(松下1984)、第一次調査は弥生時代の人骨が大腿骨の数から4体、弥生時代以降と思われるものが1体確認されている。また、第二次調査の埋葬人骨は縄文時代の女性であり、上面から縄文時代以降の男性と思われる散乱骨が確認されたことが報告されている。

また、埋文センターで保管していた骨片のなかには、



第 12 图 中甫洞穴出土石器 (4)



第13図 中甫洞穴出土貝製品・牙製品

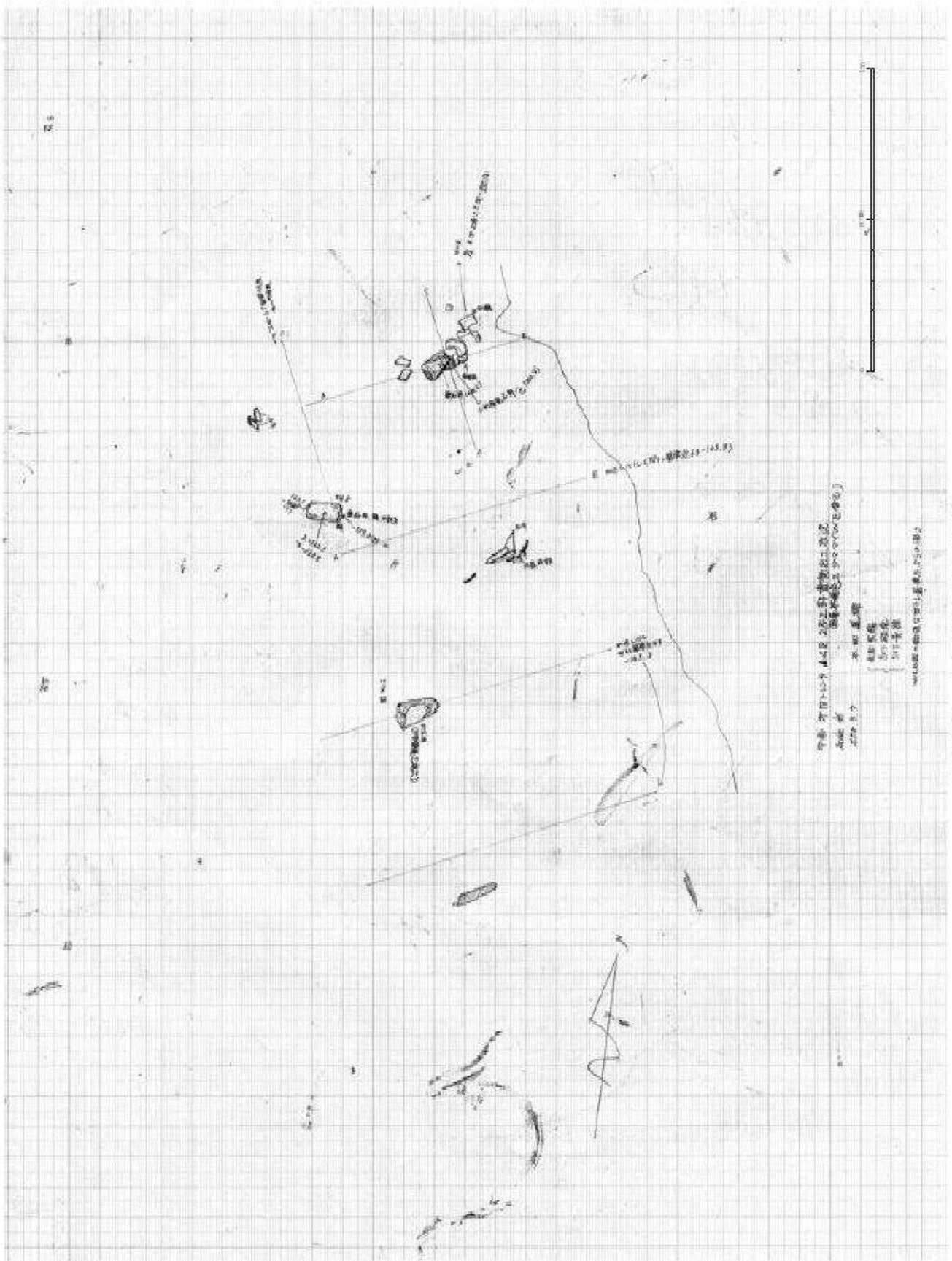
ヒトの指骨と思われる骨片が1点確認された。

#### (2) 動物骨

第一次調査での自然遺物の総重量は貝類を除くと1897.6gであり、哺乳類が全体の95%を占めている。特にイノシシが大半を占めており、主にイノシシを狩猟し食料にしていたことがうかがわれる(西中川ほか1983)。第三次調査でも7901.1gと多量の動物骨が出土し、同定の結果、哺乳類4504.9g、鳥類85.0g、爬虫類2.1g、甲殻類31.1g、貝類3132.6gであった。こちらもイノシシが大半を占めているが、種類が非常に少ないなかで「貧弱な動物相を補うように鳥類の骨が多量に出土しており、

このことも本遺跡の特色の1つになっている」と報告されている(松元1985)。また、シカの出土が報告されていないこと、魚骨がほとんどないことも中甫洞穴の特徴である。

埋文センターで保管されていた第一次調査出土の動物骨は、微小片を含め20点ほどであり、今回は7点を同定した<sup>11)</sup>。その結果、6点はイノシシであり、メスのイノシシの右下顎骨が1点、オスのイノシシの下顎犬歯に孔を開けたものが1点、性別不明のイノシシの胸椎が1点、腰椎が2点、椎骨が1点である。残り1点は、前述したようにヒトの指骨である可能性がある。



第14図 中埔洞穴遺物出土状況

## 5 調査記録

埋文センターで保管している中甫洞穴に関する記録を一部紹介する。第一次調査の記録は河口のメモや申請書類および本田・瀬戸口も含めた日誌を綴じたA4ファイル1冊と、調査後に遺物の整理のメモに使用したと思われる野帳1冊であった。第二次調査は河口・本田・瀬戸口の日誌がA4ノート1冊ずつと河口の野帳2冊、第三次調査は方眼ノート冊子1冊分の日誌と河口の野帳2冊であった。河口らが記録した書類、日誌、メモの一部を資料1～4に掲載する。

資料1・資料2は、第一次調査の第4層の出土層による分類の考察に使用したと思われる。土器をメモスケッチしたり、スケッチを出土層・出土地点ごとに分けて切り貼りしている。

資料3は河口が知名町教育委員会宛に提出した発掘調査の協力要請の文書である。日付は「昭和57年9月25日」となっており、発掘調査開始日のおよそ10日前で

ある。沖永良部島および南島における先史時代の調査研究、特に爪形文土器文化の研究において、河口が中甫洞穴を非常に重要視していたことと発掘調査に対する強い意欲が分かる資料である。

資料4は、河口の調査日誌の一部である。昭和57年10月11日（月）と昭和57年10月12日（火）の日誌で、作業の様子や爪形文土器の出土状況、遺物のメモスケッチ等が記されている。爪形文系土器に関連する記録として、資料4の日誌には、東原式4・5類に該当するものが出土したことが記されており、第6図31・32と思われる土器のスケッチが描かれている。この4・5類というのは、おそらく渡具知東原遺跡の報告において渡具知東原式土器としたなかの第四種・第五種を指していると思われる（読谷村教育委員会1977）。しかし、河口は最終的に第4層中部層出土土器として報告している。中部層は河口のいう「轟式」と同時期の層であり、当時の記録と報告書では年代的な矛盾がみられることがわかる。

第1表 中甫洞穴出土土器観察表(1)

挿図番号	掲載番号	出土区等	層位	器種	部位	法量 (cm)			文様・調整		胎土					色調		備考
						口径	底径	器高	外面	内面	石英	長石	珪石	鉄石	砂礫	外面	内面	
第4図	1	4	2-下	壺	口縁	4.6	-	-	縦線文、斜線文、ナデ	指頭押圧痕、ナデ	○				○	明赤褐	明赤褐	
	2	4	2-下	壺	口縁	4.6	-	-	縦線文、斜線文、ナデ	指頭押圧痕、ナデ	○		○		○	明赤褐	明赤褐	
	3	2	2	甕	胴部	-	-	-	刷毛目	ナデ	○			○	○	灰褐	にぶい赤褐	
	4	2	2	甕	胴部	-	-	-	凸帯文、刷毛目	ナデ	○	○		○	○	灰褐	褐	
	5	2	2	甕	胴部	-	-	-	凸帯文、刻目、ナデ	ナデ、指頭押圧痕	○	○		○	○	黄灰	褐	
	6	2	2	甕	胴部	-	-	-	縦線文、斜線文、ナデ	ナデ、指頭押圧痕	○	○		○	○	灰黄褐	灰黄褐	
	7	2	2	甕	胴部	-	-	-	凸帯文、刻目、刷毛目、ナデ	ナデ、指頭押圧痕	○	○		○	○	黒褐	褐	
	8	4	2	甕	胴部	-	-	-	沈線文、ナデ	ナデ	○	○		○	○	橙	浅黄	
	9	4	2-下	甕	口縁	-	-	-	縦線文、斜線文、ナデ	指頭押圧痕、工具ナデ	○				○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
	10	3	2-下	甕	口縁	-	-	-	凸帯文、ナデ、指頭押圧痕	ナデ、指頭押圧痕	○				○	橙	にぶい橙	
	11	2	2-下	甕	胴部	-	-	-	凸帯文、ナデ	工具ナデ	○				○	橙	にぶい赤褐	
	12	2	2-下	甕	口縁	-	-	-	凸帯文、ナデ	工具ナデ	○	○			○	灰黄褐	にぶい黄褐	
	13	2	2	甕	胴部	-	-	-	沈線文、ナデ	ナデ	○				○	明赤褐	明赤褐	
	14	2	2	甕	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	○				○	にぶい赤褐	にぶい褐	
	15	2	2	甕	胴部	-	-	-	工具ナデ	ナデ	○	○			○	にぶい橙	にぶい黄橙	
	16	4	2-下	鉢	口縁	-	-	-	指頭押圧痕、ナデ	工具ナデ	○				○	灰褐	褐	
	17	3	2	鉢	口縁	-	-	-	ナデ	工具ナデ	○	○			○	浅黄	にぶい橙	
	18	4	2-下	鉢	口縁	8	-	-	指頭押圧痕、ナデ	指頭押圧痕、刷毛目、ナデ	○				○	暗灰褐	にぶい赤褐	
	19	4	2-下	鉢	口縁	-	-	-	縦線文、斜線文、ナデ	指頭押圧痕、ナデ	○				○	にぶい赤褐	赤褐	
	20	-	2-下	甕	底部	-	6.4	-	ナデ	ナデ	○				○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	破片、刷毛目
	21	2	表採	-	底部	-	-	-	指頭押圧痕、ナデ	工具ナデ、ナデ、指頭押圧痕	○				○	灰黄褐	いぶい黄褐	
第6図	22	2	4-中	短鉢	完形	33	-	35	縦線文、ナデ、工具ナデ	縦線文、ナデ、工具ナデ	○				○	暗赤褐	にぶい黄橙	破片、刷毛目
	23	2	4-上	-	胴部	-	-	-	波状文、ナデ	ナデ	○	○			○	明赤褐	明赤褐	
	24	2	3	-	口縁	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ	○				○	橙	にぶい黄褐	
	25	2	4-上	-	口縁	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ	○	○			○	橙	にぶい橙	
	26	2	4-上	-	胴部	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ	○				○	褐	にぶい褐	

第2表 中甫洞穴出土土器観察表(2)

神岡 番号	掲載 番号	出土 区等	層位	器種	部位	法量 (cm)			文様・調整		胎土					色調		備考	
						口径	底径	器高	外面	内面	石英	長石	燧石	緑泥	砂礫	外面	内面		
第6区	27	2	4-上	-	胴部	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ	○				○	にぶい黄褐	褐		
	28	2	4-上	-	口縁	-	-	-	連点文	ナデ	○				○	にぶい褐	にぶい褐		
	29	2	4-上	-	胴部	-	-	-	屈折線文、屈折線	ナデ		○	○		○	赤褐	明赤褐		
	30	2	4-上	-	胴部	-	-	-	凸帯文、ナデ	ナデ	○				○	にぶい赤褐	にぶい赤褐		
	31	3	4-中	-	口縁	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ、指頭押圧痕	○				○	にぶい赤褐	明赤褐		
	32	3	4-中	-	口縁	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ	○				○	明赤褐	明赤褐		
	33	3	4-中	-	胴部	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ、指頭押圧痕	○				○	黒褐	明赤褐		
	34	3	4-中	-	胴部	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ	○				○	暗褐	明赤褐		
	35	3	4-中	-	胴部	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ	○				○	赤褐	明赤褐		
	36	3	4-中	-	口縁	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ	○				○	橙	明赤褐		
	37	3	4-中	-	胴部	-	-	-	波状文、ナデ	ナデ	○				○	赤褐	橙		
	38	3	4-中	-	胴部	-	-	-	波状文	ナデ	○	○			○	明赤褐	明赤褐		
	39	3	4-中	-	口縁	-	-	-	沈線文、ナデ	沈線文、ナデ	○				○	赤褐	明赤褐		
	40	3	4-中	-	口縁	-	-	-	櫛掻き文	連点文、ナデ	○	○			○	明赤褐	明赤褐		
	41	3	4-中	-	胴部	-	-	-	条痕文	ナデ					○	明赤褐	明赤褐		
	42	2	4-下	-	胴部	-	-	-	連点文	ナデ	○				○	灰褐	黒褐		
	43	2	4-下	-	胴部	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ	○				○	赤褐	暗褐		
	44	2	4-下	-	胴部	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ	○				○	灰褐	黒褐		
	45	2	4-下	-	口縁	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ	○				○	明赤褐	明赤褐		
	46	3	4-下	-	胴部	-	-	-	条痕文、連点文	ナデ	○				○	黒褐	にぶい黄褐		
	47	3	4-下	-	胴部	-	-	-	波状文	ナデ	○	○			○	橙	明赤褐		
	48	5	4-下	-	胴部	-	-	-	波状文	ナデ	○	○		○	○	にぶい赤褐	赤褐		
	49	2	4-下	-	胴部	-	-	-	押引文、爪形文	ナデ	○				○	暗褐	赤褐		
	50	2	4-下	-	胴部	-	-	-	鋸歯状文	ナデ	○				○	明赤褐	明赤褐		
	51	3	4-下	-	胴部	-	-	-	沈線文	ナデ					○	明赤褐	明赤褐		
	52	2	4-下	-	胴部	-	-	-	羽状連点文、ナデ	ナデ、指頭押圧痕					○	にぶい赤褐	明赤褐		
	53	2	4-下	-	胴部	-	-	-	羽状連点文、ナデ	ナデ					○	明赤褐	明赤褐		
	第8区	66	F8A0	堆積	深鉢	胴部	-	-	-	波状文、ナデ	指ナデ、ナデ	○	○			○	明赤褐	にぶい黄橙	
		67	F8A0	堆積	浅鉢	胴-縁	-	-	-	波状文、ナデ	指ナデ、ナデ	○	○			○	明赤褐	にぶい黄橙	
		68	F8A0	堆積	-	胴部	-	-	-	鋸歯状文、ナデ	指ナデ、ナデ	○	○		○	○	赤褐	赤褐	
		69	F8A0	堆積	-	胴部	-	-	-	籠形文、ナデ	ナデ	○	○			○	明赤褐	褐	
		70	F8A0	堆積	-	胴部	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ、指頭押圧痕					○	橙	明褐	
		71	F8A0	堆積	-	胴部	-	-	-	条痕文	ナデ	○				○	明赤褐	明赤褐	
72		F8A0	堆積	-	口縁	-	-	-	条痕文	ナデ	○				○	褐	褐		
73		F8A0	堆積	-	胴部	-	-	-	条痕文、刺突連点文	ナデ	○				○	赤褐	赤褐		
74		F8A0	堆積	-	胴部	-	-	-	波状連点文、押引文	指頭押圧痕、ナデ	○	○			○	明赤褐	黒褐		
75		F8A0	堆積	-	胴部	-	-	-	波状連点文、ナデ	ナデ		○			○	明赤褐	明赤褐		
76		F8A0	堆積	-	胴部	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ、指頭押圧痕	○	○			○	にぶい赤褐	赤褐		
77		F8A0	堆積	-	胴部	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ	○				○	にぶい赤褐	赤褐		
78		F8A0	堆積	-	胴部	-	-	-	波状連点文、ナデ	ナデ	○				○	褐	明赤褐		
79		F8A0	堆積	-	胴部	-	-	-	連点文、ナデ	ナデ	○				○	にぶい赤褐	赤褐		
80		F8A0	堆積	-	胴部	-	-	-	波状連点文、ナデ	ナデ	○				○	灰黄褐	にぶい黄褐		
81		F8A0	堆積	浅鉢	完形	20.4	-	36.8	連点波状文、ナデ	ナデ、指頭押圧痕	○	○			○	明赤褐	にぶい赤褐		
82		F8A0	堆積	-	口縁	-	-	-	ナデ	ナデ	○	○	○		○	明赤褐	明赤褐	未貫通孔	
83		3	5	-	胴部	-	-	-	屈折線文、屈折線	ナデ	○				○	明赤褐	明赤褐		

第3表 中甫洞穴出土石器観察表(1)

挿図 番号	掲載 番号	器 種	出土層	法量 (cm)			重量 (g)	石 材	備 考
				長さ	幅	厚さ			
第9図	84	戴石	I, 3, 4	13.75	7.10	3.30	559.00	安山岩	
	85	磨・戴石	下部洞穴入口	10.85	9.00	4.70	714.00	安山岩	
	86	磨・戴石	表採	14.20	11.50	5.20	1391.50	安山岩	
	87	磨・戴石	下部洞穴入口	9.35	7.00	4.50	446.50	安山岩	
	88	打製石斧	I, 3, 4 中部	11.35	4.25	1.80	123.33	頁岩	刃部欠損
	89	剥片	I, 2, 2 下部	13.50	9.40	1.80	323.50	頁岩	
	90	剥片	I, 2, 4 下部	9.30	5.40	1.30	77.46	砂岩	磨石欠損?
	91	剥片	I, 3, 4 下部	10.80	6.05	2.30	132.86	安山岩	磨石欠損?
	92	剥片	I, 2, 4	3.45	8.80	1.55	47.90	頁岩	

第4表 中甫洞穴出土石器観察表(2)

挿図 番号	掲載 番号	器 種	出土層	法量 (cm)			重量 (g)	石 材	備 考
				長さ	幅	厚さ			
第10図	93	磨製石製品	XIV, 1, 4 層	(6.50)	2.85	0.70	14.93	砂岩	知名町所蔵
	94	磨製石製品	X, 2 層	(5.90)	2.90	0.60	10.89	頁岩	知名町所蔵
	95	石斧	II-3	4.20	2.65	1.10	13.92	砂岩	小型 知名町所蔵
	96	石斧	II-3	5.40	(2.00)	0.80	8.99	粘板岩	小型 知名町所蔵
	97	石斧	XIV, 7, 表層	12.25	4.55	3.00	229.00	砂岩	背面欠損 知名町所蔵
	98	石斧	IV, 4, 2 (No.2)	8.50	4.30	1.70	89.29	砂岩	刃部欠損 知名町所蔵
	99	石斧	XIV, 6, 4 層下部該当	7.40	4.55	1.45	78.14	砂岩	知名町所蔵
	100	石斧	XIV, 7, 表層	8.40	4.90	1.30	81.64	砂岩	知名町所蔵
	101	石斧	XIV, 2, 4	(8.10)	6.35	3.15	189.62	砂岩	知名町所蔵
	102	石斧	IV, 4, 2	(14.70)	7.30	3.05	461.00	ホルンフェルス	刃部欠損 知名町所蔵
	103	石斧	IV, 4, 2 (No.1)	(12.70)	6.40	3.30	502.50	砂岩	刃部欠損 知名町所蔵
	104	磨・戴石	XIV, 1, 1 層	10.65	8.80	5.05	670.00	安山岩	知名町所蔵
	105	磨石	XI, 1, 3 層	10.10	7.70	4.00	423.50	安山岩	知名町所蔵
	106	磨石	XIV, 2, 5, 4 層	9.30	7.00	4.10	367.00	凝灰岩	知名町所蔵
107	磨石	XIV, 4, 4 層	9.90	7.65	4.00	452.00	凝灰岩	知名町所蔵	
第11図	108	打製石斧	XIV, 2, 4	13.80	4.25	1.35	82.00	粘板岩	石斧? 知名町所蔵
	109	剥片	XIV, 4, 3 (岩の中)	8.70	6.15	1.90	96.04	砂岩	知名町所蔵
	110	石製品	II, 1, 4 下	(2.00)	1.25	0.35	0.95	頁岩	知名町所蔵
12	111	磨製石斧	XIV, 1, 4 最上	26.60	4.90	2.00	319.50	頁岩	知名町所蔵

第5表 中甫洞穴出土貝製品観察表

挿図 番号	掲載 番号	器 種	出土層	法量 (cm)			重量 (g)	備 考	
				長さ	幅	厚さ			
第13図	112	貝製小玉	XIV, 3, 4 層	1.20	1.40	0.30	0.70	イモガイ	知名町所蔵
	113	貝製小玉	XIV, 6, 4 層	1.20	1.30	0.40	0.90	イモガイ	知名町所蔵
	114	貝製垂飾品	XIV, 1, 4 (?) 層	1.90	1.90	0.10	0.45	夜光貝	知名町所蔵
	115	貝製垂飾品	XIV, 1, 3 層	1.90	1.35	0.14	0.42	夜光貝	知名町所蔵
	116	貝製垂飾品	XIV, 1, 4 層	1.80	1.20	0.10	0.25	夜光貝	知名町所蔵
	117	穿孔貝	I, 4, 2	10.00	8.70	4.35	153.55	アツソデガイ?	
	118	貝製加工品	I, 2, 2 下	6.10	3.40	-	45.98	イモガイ	
	119	貝製加工品	I, 3, 4 下	5.90	2.95	1.55	17.23	タカラガイ	
	120	貝製加工品	I, 4, 3	6.25	4.50	3.40	47.19	タカラガイ	
	121	貝製加工品	I, 3, 4 下	7.65	3.90	1.20	15.60	夜光貝 貝匙?	

第6表 中甫洞穴出土貝製品・牙製品観察表

神図 番号	掲載 番号	器種	出土層	法量 (cm)			重量 (g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
第 13 図	122	貝製加工品	I, 2, 2	7.40	4.70	4.00	45.83	タカラガイ
	123	貝製品	I, 4, 2	(5.20)	2.40	0.40	5.36	ゴホウラ貝 貝輪?
	124	獣牙製品	I, 2, 4	(6.50)	3.80	0.80	8.28	猪の牙・穿孔

## 第5節 再評価

### 1 第4層中部出土の「蠹式」土器

蠹式土器は熊本県轟貝塚を標式遺跡とし、縄文時代早期末から前期前半に位置づけられる土器群である(柴畑 2008)。蠹式との類似を指摘されていた琉球縄文土器として、伊藤慎二の編年による「条痕文系土器」が挙げられるが、「曾畑式に先行する蠹B式とは全く接点がなく、曾畑式以後の蠹D・C式は南九州でも実態が不明確なため、現在接点を見いだし難い」としている(伊藤慎二 2008)。

河口は蠹式土器を古い時期から蠹I式、蠹II式、蠹III式、蠹IV式に分類しており、その上で22の土器について、「移入品と考えられ、前述の蠹I式に該当するものである」と報告している(河口・本田 1985)。中甫洞穴の場合はアカホヤ火山灰層を基準とした層位的な検討は不可能であるが、出土した「蠹式」土器の特徴として「乳房状の尖底」、「胎土に石灰岩粒を含む」ことが挙げられる。「乳房状の尖底に河口もやや違和感を持ちながらの結論」(本田 2018)であり、河口自身も「九州本土の蠹式には未発見の器形」と述べている(河口ほか 1983b)。このことから、伊藤慎二は中甫洞穴出土の「蠹式」土器について「問題が残るものとして保留できる」としている(伊藤慎二 2000)。また、本田道輝は「内外面を貝殻で調整するだけの尖底土器は南九州の縄文時代中期前半頃にも存在」することを視野に入れる必要性を指摘しており、中甫洞穴の「蠹式」土器の条痕を調整の範疇で捉えている。本田はこの土器について再検討すべきであるとし、「尖底条痕文土器」として紹介している(本田 2018)。

以上のように、河口がいう「蠹式」土器である第4層中部層出土土器は本土の移入品であるという見解には異論もあり、加えて評価が定まっていない状況である。そのため、この土器を相対的な年代決定の基準としていた第4層出土土器については、今後再検討が必要と思われる。

### 2 爪形文土器

爪形文土器はヒトの爪もしくは工具を用いた刺突により施文する土器様式で、本土では草創期中葉に編年される(萩谷 2008)。沖縄・奄美諸島の爪形文土器は縄文時代草創期の爪形文土器と区別して「南島爪形文土器」と

呼称されている(新東 1997)。南島爪形文土器は当初草創期の爪形文土器との関係が指摘されており、河口も中甫洞穴の報告の中で「一方本土の土器との比較によると、同類と見る外はなく、(中略)南島の爪形文土器も、その流れの中に組みこまれているなど、二元的な発生と見ることは困難である」(河口・本田 1985)と述べている。しかし、奄美市喜子川遺跡で爪形文土器がアカホヤ火山灰層より上層から検出されたことから縄文時代前期前葉に定まることが示された(伊藤圭 2014)。南島爪形文土器は、形式的な特徴から連続する指頭痕を基調とする野国タイプ、独立した指頭痕を基調とするヤブチ式、爪形文を基調とし指頭痕や沈線文を併施するものもある東原式の3つに大別される(伊藤圭 2017)。伊藤慎二は貝塚時代前1期の土器編年において、古段階：単一種文様型(ヤブチ遺跡のヤブチ式)→新1段階：異種文様併用型(大部分のヤブチ式)→新2段階：異種文様併用型(東原式)という変遷過程を提示し、これらを爪形文系土器様式としている(伊藤慎二 2008・2017)。

中甫洞穴で出土した土器の中で、河口が「爪形文土器」として報告したものは、第一次調査で出土した土器片2点、第二次調査で出土した微細片1点、住民による採集土器2点である。河口は、「爪形文土器は、中甫洞穴では最下層出土の土器で、本遺跡で最も古い時期に位置することは明らかである」としている(河口・本田 1985)。また、「土器を成形するために行なう、指頭押圧によって生じた、押圧痕」としての爪形文と「土器成形には関係なく、文様として施された爪形」とを同列に取り扱うべきではないとし、「爪形文」の意味するものを、土器の成形にもとづく「指頭押圧痕」と意識的に施文した「爪形文」とに分類している。また、「指頭押圧痕」は、

1. 指頭押圧痕
  2. 指頭押圧痕と爪形痕とが一次的に印されたもの
  3. 指頭押圧痕に二次的に爪形文が付加されたものの3つに細分類しており、「爪形文」は
  4. 爪形文が一方向に横位帯状に施されたもの
  5. 爪形文が斜行帯状または縦列帯状に施されたもの
  6. 爪形文の向きに変化のあるもの
  7. 爪形文が不規則に施されたもの
- の4つに細分類している(河口ほか 1983 a, 1983 b)。中甫洞穴出土の爪形文土器は、「指頭押圧痕に二次的に爪形文が付加されたもの」に分類されており、土浜ヤー

ヤ遺跡の一部の土器や福岡県門田遺跡出土土器を同じ分類に入れている。河口は、これまでの報告でも、中甫洞穴出土の爪形文土器に指頭押圧痕が顕著に残り二次的に爪形文を施文していることを強調している。

爪形文土器を最古とする考えがある一方で、第三次調査では、爪形文土器を包含する第一次調査4層該当層より下部に無文土器が数点出土していることが報告され(本田2018)、沖縄県那覇市の野国貝塚でも同様に爪形文土器包含層の下層から60点余りの無文土器が確認されている(沖縄県教育庁文化課1984)。この無文土器は層位的には爪形文土器よりも古いことになり、出自や年代的位置づけも含め、検討していく必要がある。

また、河口が「連点波状文土器」や「匏削り波状文土器」などと分類した土器群は「貝殻を施文具とする数形式の早期・前期に該当すると思われる土器群」であり、「地元独自のものである」と報告している(河口1984)。伊藤慎二は爪形文系土器に最も関連する土器として上記の土器群を挙げ条痕文系土器の古段階に位置づけており(伊藤慎二2008)、爪形文土器との層位的な出土状況がわかる良好な資料として、中甫洞穴の資料の重要性を指摘している(伊藤慎二2017)。

爪形文土器をはじめとする南島の土器起源とその系譜については多くの議論が交わされているが、いまだ明らかにされておらず、今後も議論されるべき課題である。その問題に一石を投じるものとして、本遺跡の資料は非常に重要なものである。

#### 一注釈一

注1 千葉県立中央博物館黒住耐二氏のご教示による。

注2 早稲田大学樋原岳二講師のご教示による。

#### 一参考・引用文献一

伊藤圭 2014「ヤブチ式前後の土器相について」新里貴之・高宮広土編『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』琉球列島先史・歴史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第1集 六一書房

伊藤圭 2017「南島爪形文土器の位置付け」上原静ほか編『沖縄の土器文化の起源を探る』沖縄考古学会2017年度研究発表会資料集 沖縄考古学会

伊藤慎二 2000「第3章 土器分布の二様相 第一節 分布域拡大型土器群の研究 III 琉球系縄文土器をめぐる諸問題」『琉球縄文文化の基礎的研究』株式会社ミューゼ

伊藤慎二 2008「琉球縄文土器(前期)」小林達雄編『総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会

伊藤慎二 2017「貝塚時代前1期最古段階の土器編年研究の論点と課題」上原静ほか編『沖縄の土器文化の起源を探る』沖縄考古学会2017年度研究発表会資料集

沖縄考古学会

沖縄県教育庁文化課 1984『野国-野国貝塚群B地点発掘調査報告-』沖縄県文化財発掘調査報告書第57集 沖縄県教育委員会

河口貞徳 1983「II-3. 南島式土器文化の発生」宮城栄昌・高宮廣衛編『沖縄歴史地図』柏書房株式会社

河口貞徳 1984「南島式土器」『月刊考古学ジャーナル』No.228 ニュー・サイエンス社

河口貞徳 1988「中甫洞穴」『日本の古代遺跡 38 鹿児島』株式会社保育社

河口貞徳 2005「中甫洞穴」『先史・古代の鹿児島(資料編)』鹿児島県教育委員会

河口貞徳・本田道輝 1985『「中甫洞穴」知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』

河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望 1983a「沖永良部島中甫洞穴発掘概報」『月刊考古学ジャーナル2』No.214 ニュー・サイエンス社

河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望 1983b「中甫洞穴」『鹿児島考古』第17号 鹿児島県考古学会

河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望 1984「中甫洞穴」『鹿児島考古』第18号 鹿児島県考古学会

喜子川遺跡調査団 1995「喜子川遺跡 第3次・第4次発掘調査報告」『青山史学』第十四号 青山学院大学文学部史学科研究室

木下尚子 1996『南島貝文化の研究・貝の道の考古学』財団法人法政大学出版局

柴畑光博 2008「縄式土器」小林達雄編『総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会

新里貴之 2000「スセン當式土器」『琉球・東アジアの人と文化』上巻 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会

新東晃一 1997『南島の人と文化の起源』公開学習会実行委員会

知名町教育委員会 1984『「中甫洞穴」鹿児島県知名町埋蔵文化財発掘調査報告書』

西中川駿・河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望 1983「中甫洞穴出土の動物骨」『鹿児島考古』第17号 鹿児島県考古学会

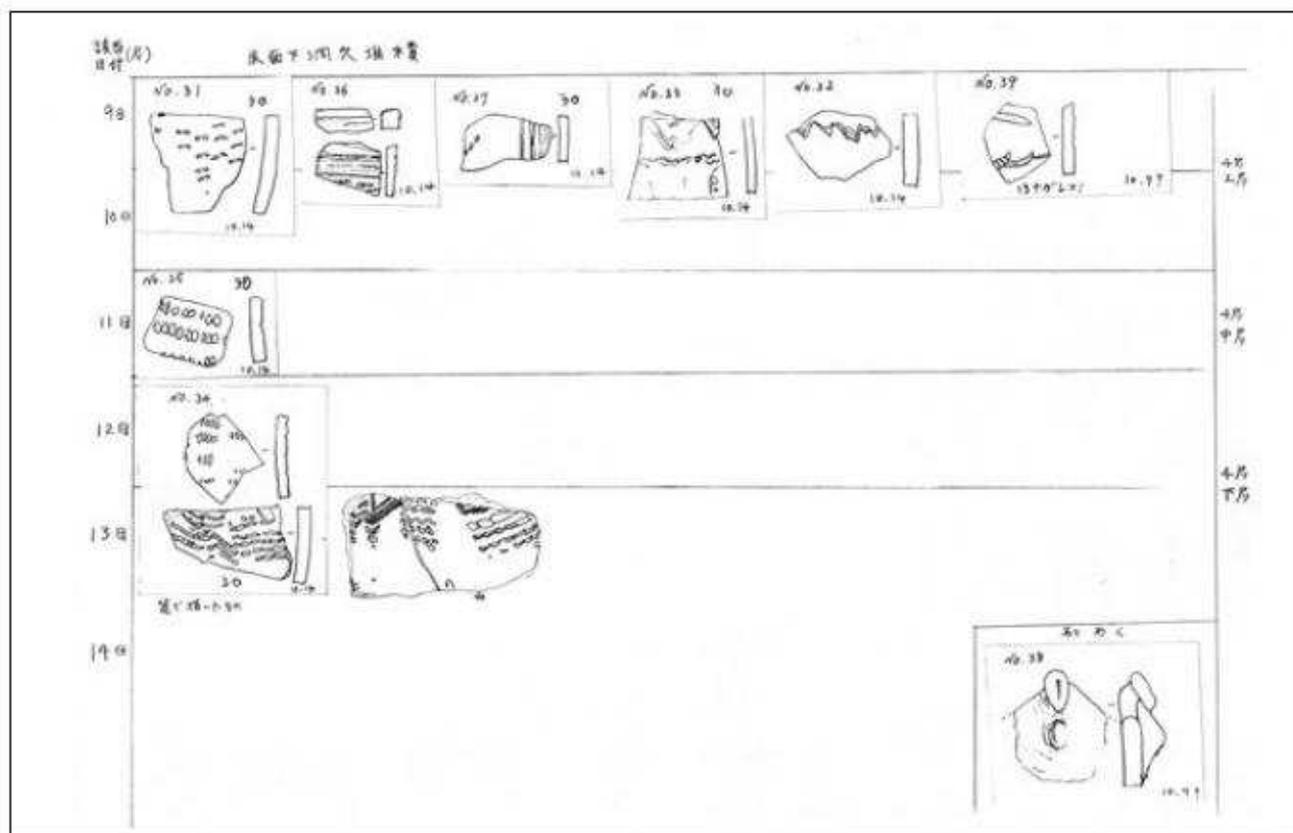
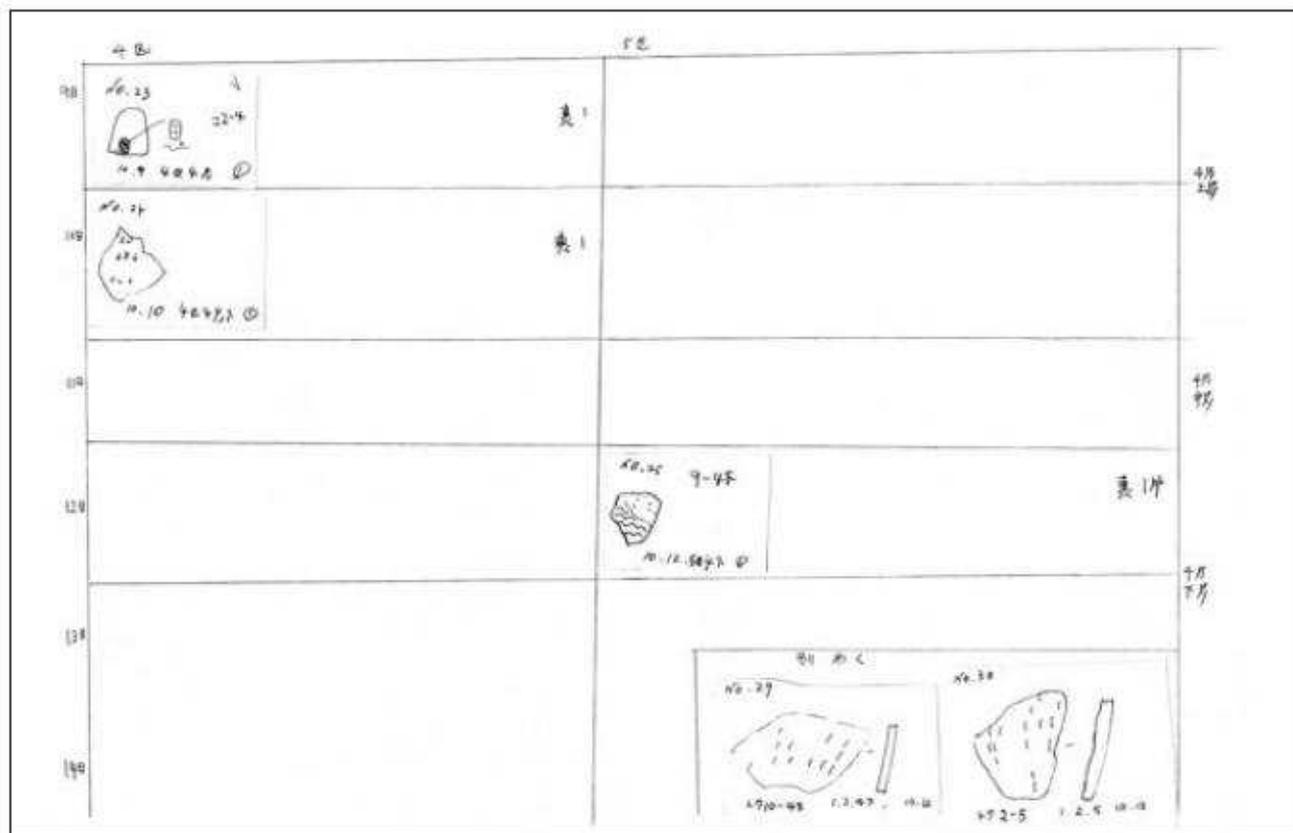
萩谷千明 2008「爪形文土器」小林達雄編『総覧縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会

本田道輝 2018「中甫洞穴」『鹿児島県文化財調査報告書』第64集 鹿児島県教育委員会

松下孝幸 1984「鹿児島県知名町(沖永良部島)中甫洞穴出土の人骨」『鹿児島考古』第18号 鹿児島県考古学会

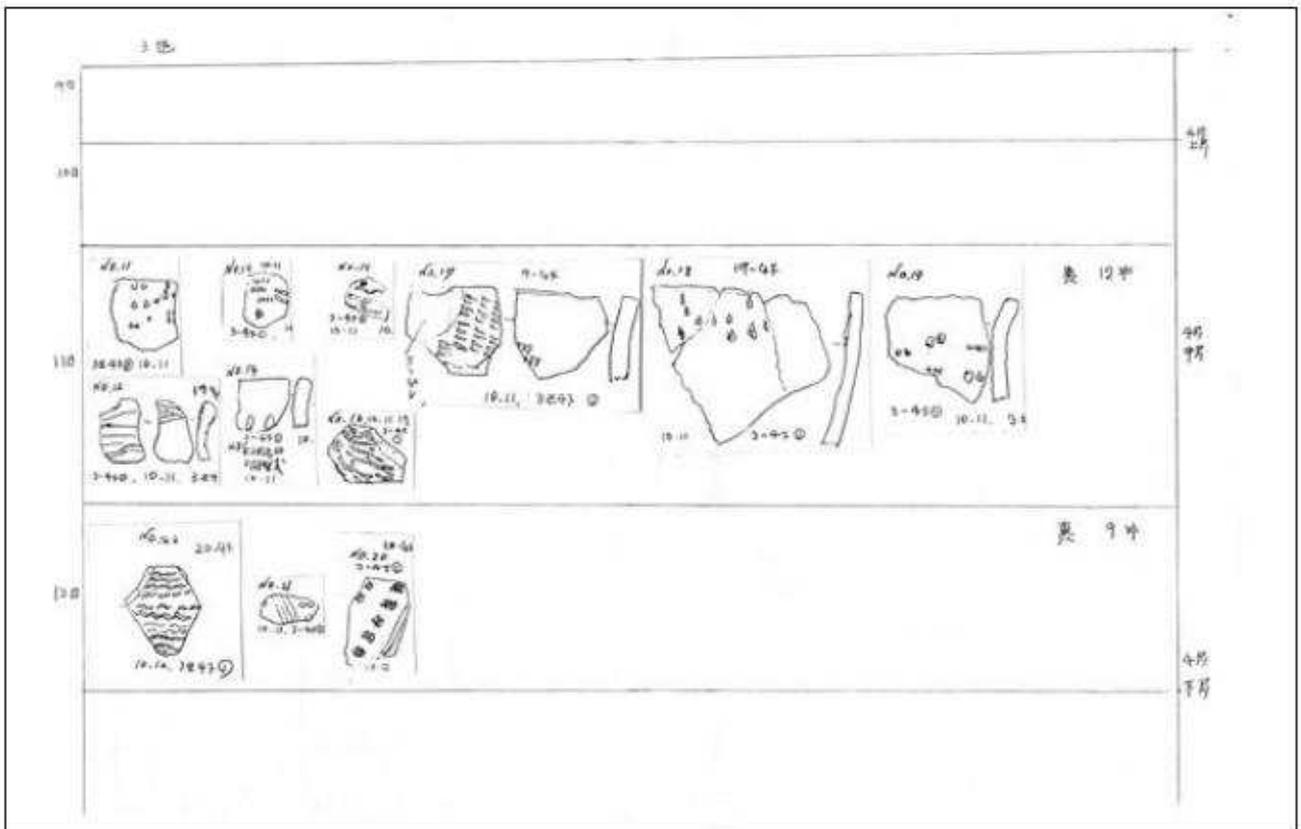
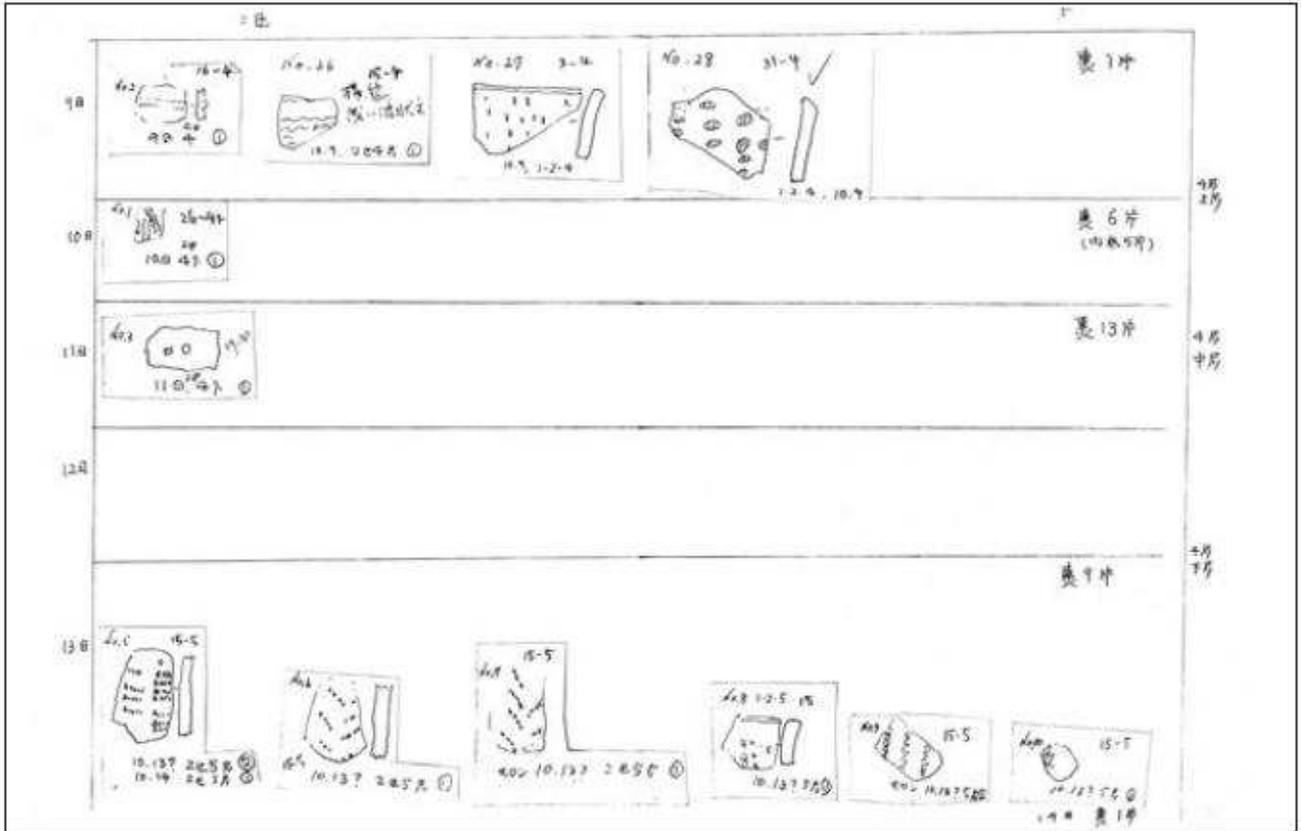
松元光春 1985「中甫洞穴出土の動物骨-第三次発掘調査-」『「中甫洞穴」知名町教育委員会』

読谷村教育委員会 1977『渡具知東原 第1次・第2次調査報告』読谷村文化財調査報告第3集



報告書作成基礎資料 1

資料 2



報告書作成基礎資料 2

埋蔵文化財の発掘調査についての協力要請

昭和五七年九月二十五日

鹿児島県文化財保護審議員 河口貞徳

先頃沖永良部島の先史時代の調査を実施中、知名町久志検水久宮窪に所在する中前洞穴より縄文土器・弥生土器並びに須恵器の出土を知り、当該遺物を発見したところ、従来沖永良部島に於ては未だ発見のもの、日本の縄文時代単創期の瓜形文土器を含む重要なものであった。同類は本州・四国・九州に約四十ヶ所の遺跡で発見されておるが、南島では沖繩本島と奄美大島本島のみに見えられており、今回沖永良部島で発見されたことは歴史的な意義があり、ひとり沖永良部島の歴史をあらため、一万年以前に本土文化の波及の事実を証明するだけでなく、学術研究上も重大な意義をもつものである。

ただ遺物十年前以前に一二年によって捨得されたもので、学術的調査によるものでないために、出土地点・出土土層などはいささか不明である。したがって現状では、その重要な意義も学界には認められておらぬことかたじけなくない。

こゝろがえって南島における先史時代の調査状況をみるに、他の日本列島の諸地域と比較して調査数が著しく少なく、研究が遅れ、不明確な点が多いこととは否むことはできない。しかし乍ら近時ようやく南島研究の機運が起り、既に奄美大島本島においては数々の発掘調査が実施され、その先史時代の様相も次第に解明が進みつつあり、また徳之島に於ては、五七年十月冒より面職員塚の発掘調査が実施の運びとなつておる。このような南島先史時代の研究が試行され、究明の兆が現われたことは真に喜ぶべきことである。この新しく興つてきた研究調査の動向は、大事に保護育成して、従来不明のまま放置されておいた南島先史時代の貴重な史実を解明し、自らその歴史を知ることは、現下の急務といふべきである。

現在沖永良部島に於ては、園場の整備事業が盛んに行なわれ、産物等の増産に寄與していることは喜ばしいことであるが、反面、そのために貴重な遺跡が破壊され、歴史を解くかどが失われつつあることも事実

である。重要文化財と認められた中前洞穴が、解明されないまま、調査の機運とならぬという保証は、いまのところどこにもなく、周知の遺跡としての保護を要するに受けつれないのが中前洞穴の現下の状況である。

中前洞穴に最初に出会った研究者として、同遺跡を現状のまま放置するにしのびず、またその解明は自分にとり、使命としてこれを調査研究し、遺跡の真価を明らかにし、沖永良部島の歴史の一端を明らかにしたい。

以上によつて中前洞穴の発掘調査を左記の如く実施致しますので、貴教育委員会のご協力を要請致します。

記

一 発掘予定地 大島郡知名町久志検水久宮窪 六六二・六六三 中前洞穴

二 発掘の目的 奄美諸島・沖繩諸島における縄文・弥生文化の伝播の状況と地域文化との関係とくに瓜形文化の様相と、その瓜形文土器文化における位置の研究

三 発掘の主体者

鹿児島県文化財保護審議員 河口貞徳

四 発掘担当者の氏名

県文化財保護審議員 河口貞徳  
鹿児島大学 本田道輝  
日本考古学協会員 瀬戸口 望

五 発掘の期日

昭和五七年十月五日より全十月十六日まで

以上



## 第Ⅶ章 宇宿貝塚

### 第1節 調査の経過

宇宿貝塚は、戦前の1933（昭和8）年12月17日、京都大学の三宅宗悦が発見した。三宅は「当時、県道の開削によって、貝塚の中央部が約3mの深さで切られ、貝層が露出していた。」と報告している。さらに、12月20日にも調査を行い、「表土より60cmが砂層で、以下黒土層となり、7個の焼石が不規則に並んで発見された。貝量は少なく、遺物の包含も少ないが、獣骨、魚骨等が出た」と報告している。（三宅1941）

戦後、1954（昭和29）年5月に、南日本新聞社と鹿児島大学の主催による奄美大島学術調査団によって奄美諸島全域の調査が実施された。その際に河口は宇宿貝塚の試掘を行った。この時の調査では、二種類の土器が層的に差異があることがうかがわれた。（河口1956）

その後、1955（昭和30）年7月20日から8月10日にかけて九学会連合奄美学術調査団により発掘調査が実施された。調査は国分直一、河口貞徳、曾野寿彦、野口義麿により行われた。（国分ほか1959）

調査の結果、第二トレンチのE区、F区において石組列が検出されたため西側に拡張したところ石組遺構は住居跡であることが判明した。石組遺構は、略方形をなし、北東隅には、礫が多く積まれ、礫に囲まれた部分には木炭が多く検出された。中央から南よりに炉跡が検出された。炉跡のある面は、一面に焼けており、宇宿上層式を主体とする大型の土器片が出土し、床面と考えられた。土器は、第6層、第7層、第8層から多く出土した。上層から無文土器、下層から有文土器が出土し、それぞれ宇宿上層式土器、宇宿下層式土器と名づけられた。宇宿下層式土器が出土した層からは市来式土器、一湊式土器が出土した。石器は、磨製石斧、打製石斧、石皿等が出土した。骨器の出土はきわめて少量であった。

1978（昭和53）年8月、笠利町教育委員会は、宇宿貝塚の性格と範囲を確認するために調査を行った。河口は調査主任として調査の全般を統括した。調査では、九学会連合の調査時に検出された住居と同時期、同規模の石組住居跡、貯蔵穴と思われる落ち込み、また母子の埋葬跡が確認された。土器は、市来式、面縄東洞式、嘉徳ⅠA式、嘉徳ⅠB式、凹線文、嘉徳Ⅱ式、面縄西洞式、面縄前庭式、喜念Ⅰ式、宇宿上層式a、宇宿上層式b、黒川式、弥生式土器等が出土した。石器は、打製石斧、磨製石斧、敲石、磨石、石皿、砥石、石製垂飾品、石棒、ノミ形石器等が出土した。貝製品、骨製品は、穿孔貝、貝匙状加工品、貝斧、貝製装飾品、貝輪、骨製装飾品等が出土した。（笠利町教育委員会1979）

これらの調査成果に基づいて、1986（昭和61）年10

月7日に国指定の史跡になった。1990（平成2）年から1992（平成4）年にかけて指定地の公有化を行い、1993（平成5）年から1997（平成9）年にかけて宇宿貝塚の整備に伴う発掘調査を実施した。この調査では、12～13世紀のV字溝やピット状遺構が検出された。また、埋葬小児骨が一体カムイヤキを副葬品として出土した。1997（平成9）年から2000（平成12）年まで宇宿貝塚保護覆屋整備事業が実施され、2001（平成13）年には保護覆屋の中を町が整備した。そして、2004（平成16）年に国指定宇宿貝塚史跡公園としてオープンした。

### 第2節 再整理の方法

宇宿貝塚は既に遺跡の評価も定まり、国指定史跡となり、史跡整備も終了している。ここでは、本遺跡が標式遺跡となっている宇宿上層式・下層式土器の研究史を簡潔にまとめることとした。その他、河口が関わった調査時の野帳・図面等の整理を行い、既報告分の遺物等について文献との照合作業を行った。遺物の資料化については、河口が「奄美における土器文化の編年について」で紹介した本遺跡出土の喜念Ⅰ式土器22点を実測し、「第Ⅴ章喜念貝塚」に参考として掲載した。さらに、1955（昭和30）年当時に撮影された調査風景を図版26に掲載した。

### 第3節 遺跡の位置と環境

宇宿貝塚は、大島郡奄美市笠利町宇宿大龍に所在する。笠利半島の東海岸のほぼ中央に位置している。笠利半島の東側は全体として急峻なほかの地域と比べて平坦部が多く、海岸は弧を描いて太平洋に張り出し、砂丘と珊瑚礁が発達している。笠利町は南西諸島有数の遺跡分布地であり、その多くは東海岸に形成されている。周辺の主な遺跡として長浜金久遺跡、宇宿高又遺跡、宇宿港遺跡、サウチ遺跡、土浜ヤヤ遺跡などがある。旧石器時代の遺跡は、山手の赤土層、縄文時代は、山手に近い古砂丘、弥生時代は海に近い新期砂丘に位置する傾向にある。

宇宿貝塚の立地する砂丘は北側端に標高約19mの小山に接し、西南は標高約4mの低地をなしている。貝塚部分は約500㎡の小丘陵をなし北東、南西方向に長い。

### 第4節 宇宿上層式土器に関する研究史

河口は1954（昭和29）年の調査成果を1956（昭和31）年に「南島先史時代」として報告している。宇宿貝塚に関しては70cmの表層下に黒土層があり、上部には主に無文の尖底土器、下部には深鉢形平底の有文土器が出土したとある。そして、無文の尖底土器を縄文

時代後期、深鉢形平底の有文土器を縄文時代中期に想定している。

さらに、河口は、九学会連合奄美大島調査委員会の一員として多くの遺跡の調査に参加した。その成果は1959（昭和34）年に「奄美大島の先史時代」としてまとめられている。この中に宇宿貝塚の調査成果をまとめた「奄美大島宇宿貝塚発掘調査報告書」があり、曾野寿彦が執筆している。これによると層位毎の土器の出土状況はⅡ層からⅤ層は須恵・滑石製容器、Ⅵ層からⅧ層は無文丸底の土器、より下層位には有文の土器が主体をなすとある。また、出土した土器を1～3類に分け、類毎にさらに細分している。口縁部が肥厚して断面が三角形もしくは蒲鉾状になるものを1類・2類とした。1類aは無文土器で宇宿上層式とした。1類bは1類aの口縁部に簡易な沈線を数本施したもの、2類の口縁部は1類aと同じで頸部以下に文様を施すものとした。3類は宇宿下層式で7つに細分してある。ここで、宇宿上層式、宇宿下層式の型式設定が行われた。（国分ほか1959）

1974（昭和49）年1月、河口は、瀬戸内町教育委員会の依頼で嘉徳遺跡・皆津遺跡の調査を行った。この調査の成果と従来の資料の再検討を行い、「奄美における土器文化の編年について」を発表する。この中で、河口は、奄美における土器の分類と編年、とりわけ宇宿下層式の細分を目的としていることを述べている。そして、嘉徳Ⅰ式・嘉徳Ⅱ式・兼久式・面縄東洞式・面縄西洞式・面縄前庭式・宇宿上層式a・喜念Ⅰ式・宇宿上層式bの9型式を設定し、兼久式を除いた8型式の編年を次のように示した。

面縄東洞式→嘉徳Ⅰ式→嘉徳Ⅱ式→面縄西洞式→  
面縄前庭式→喜念Ⅰ式→宇宿上層式b→宇宿上層式a

宇宿上層式a・bについては、河口も述べているように前述の曾野寿彦の分類に従ったものである。つまり、曾野が分類した1類aが宇宿上層式a、1類bが宇宿上層式bと考えられる。また、宇宿下層式については、河口により細分されたこととなった。時期については、宇宿上層式a・bとも弥生中期に位置づけた。なお、河口の編年表中では「宇宿上層式a→宇宿上層式b」となっている。しかし、本文中「4 宇宿貝塚」で宇宿上層式aは宇宿上層式bに後続し、宇宿上層式bは喜念Ⅰ式に後続するとの表記があることから「宇宿上層式b→宇宿上層式a」と考えられる。（河口1974）

1978（昭和53）年、河口はサウチ遺跡の調査成果の中で「宇宿上層式は、兼久式などの弥生後期該当の奄美系土器に継起する土器文化」とした。（笠利町教育委員会1978）

1979（昭和54）年、前年に実施された宇宿貝塚の発掘調査の成果をまとめた報告書で「弥生後期の土器と宇

宿上層式土器の共伴関係が明らかにされた。」とし、宇宿上層式を弥生時代後期に位置づけた。（笠利町教育委員会1979）

1983（昭和58）年、河口は奄美諸島の編年を示した。その中で、宇宿上層式a・b共に弥生時代後期に位置づけた。特に宇宿上層式aについては、中津野式・兼久式併行とした。（河口1983）

1984（昭和59）年、河口は面縄前庭式を型式組列から外した従来の編年表を示すと同時に新たな編年表も示した。その中でも宇宿上層式aは中津野式・兼久式併行とし、宇宿上層式bと共に弥生時代後期に位置づけた。（河口1984）

1993（平成5）年、堂込は宇宿上層式の一部と喜念Ⅰ式とセットをなすとして、縄文晩期相当期と位置づけた。（堂込1993）

同年、西谷は縄文晩期併行期をⅠ～Ⅲ期に分け、宇宿上層式a・bをⅡ期に位置づけた。（西谷1993）

2000（平成12）年、伊藤慎二は「喜念Ⅰ式から宇宿上層式（宇佐浜式）にかけての時期は、九州編年の弥生中期から後期に対比されていたが、近年の研究ではおおむね縄文晩期頃に位置づけることで大方の見解が一致しているといえる。」とした。（伊藤2000）

さらに伊藤は2008（平成20）年、宇宿上層式を肥厚口縁系土器（前Ⅳ期後葉～前Ⅴ期後葉）とし、3段階のうち新段階に位置づけた。（伊藤2008）

#### —引用・参考文献—

- 三宅宗悦 1941 「南島の先史時代」『人類学先史講座』  
河口貞徳 1956 「南島先史時代」『南方産業科学研究所報告』  
国分直一 河口貞徳 曾野寿彦 野口義麿 原口正三  
1959 「奄美大島の先史時代」『奄美 自然と文化 論文編』九学会連合奄美大島調査委員会  
河口貞徳 1974 「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』第9号  
笠利町教育委員会 1979 「宇宿貝塚」  
河口貞徳 1983 「南島式土器文化の発生」『沖縄歴史地図 考古編』  
河口貞徳 1984 「南島の先史文化」『鹿大考古』第2号  
堂込秀人 1993 「奄美諸島の縄文時代晩期から弥生時代相当期の土器編年」『潮見浩先生退官記念論文集』  
西谷 大 1993 『縄文晩期併行期の奄美』国立歴史民俗博物館研究報告48集  
伊藤慎二 2000 『琉球縄文文化の基礎的研究』  
伊藤慎二 2008 「琉球縄文時代（前期）」  
『総覧 縄文土器』  
笠利町教育委員会 2001 『宇宿貝塚 宇宿貝塚ふるさと歴史の広場 整備事業報告書』

## 第Ⅷ章 面縄貝塚

### 第1節 調査の経過

面縄貝塚は、1928（昭和3）年大村行信によって発見された。1930（昭和5）年に廣瀬祐良が当時鹿児島県史蹟調査委員の山崎五十麿に面縄に石器時代遺跡が存在することを伝え、山崎の指示により発掘調査を行った（山崎1930）。1930（昭和5）年と翌年に徳之島を訪れた小原一夫が面縄尋常高等小学校の裏手畑地に新たな貝塚を発見し、廣瀬によって調査された貝塚を「面縄第一貝塚」、新たに発見した貝塚を「面縄第二貝塚」と名付けて両遺跡の発掘調査を行った（小原1932）。

河口は復帰後の1954（昭和29）年に面縄第一貝塚と面縄第二貝塚の調査を行った。その際に面縄小学校校庭遺跡と面縄第二貝塚東方200mの雑木林内に兼久貝塚を発見した。同年8月に三友国五郎と国分直一は面縄第二貝塚の調査を行い面縄貝塚の北方に2つの小貝塚を発見し、河口による兼久貝塚は、面縄第三貝塚、国分が発見した2つの小貝塚は第四貝塚、第五貝塚と命名されることとなった。

1955（昭和30）年から1957（昭和32）年の3年にわたり九学会連合奄美大島共同調査委員会による共同調査が実施された。考古班は1955（昭和30）年に宇宿貝塚、1956（昭和31）年には徳之島を対象地域として主に面縄第二貝塚、面縄第四貝塚の発掘調査、他に兼久貝塚、本川貝塚、喜念貝塚の調査を行った。1957（昭和32）年には沖永良部島の住吉貝塚及びその周辺遺跡と喜界島での調査を行った。（国分ほか1959）

九学会連合の調査後は、1982（昭和57）年より面縄貝塚の概要把握を目的として、伊仙町教育委員会を主体とする再調査が行われることになった。この確認調査によって遺跡の範囲が拡大し、包蔵状態が良好であることがわかった。（伊仙町教育委員会1986 本報告書から貝塚名にアラビア数字が用いられた。）

2000（平成12）年には、面縄小学校改築に伴って面縄第二貝塚の緊急調査が実施された。（伊仙町教育委員会2014）

本稿では、河口が調査に参加した1957（昭和32）年の九学会連合による面縄第二貝塚と面縄第四貝塚の調査について中心に述べる。この面縄第二貝塚と第四貝塚の調査で企図されたのは、前年の宇宿貝塚の発掘調査で確認された宇宿上層式と宇宿下層式の時間的前後関係が徳之島においても認められるか否かということ、宇宿下層式と縄文後期に九州南部に分布する市来式土器との関係を明らかにすること、奄美大島で発見された弥生式土器の南への広がりを確認するためであった。

面縄第二貝塚の調査は、1956（昭和31）年8月8日

から13日まで実施された。トレンチを2か所設定して調査を行いそれぞれC・Dとしている。Cトレンチを面縄小学校の石垣と平行に2m×10mを設定して調査を行った。トレンチ内の耕土を除去すると地層が乱れていたため調査を中止し、貝塚の中心部と思われる箇所にて2m×10mのDトレンチを設定し調査を行った。Dトレンチは表土を除去し、西から2mごとに1～5区を設定して調査を行った。

3～5区に比較的多く貝類が出土した。遺物は2区3区に多い傾向にあった。土層は2層からなりどちらの層からも遺物が出土した。

面縄第四貝塚の調査は、1956（昭和31）年8月13日から24日まで実施された。面縄第四貝塚は、隆起珊瑚礁崖の洞窟とその前方に続く棚状の前庭部からなり、洞窟は東西の二つに分かれている。発掘は前庭部から始め、東側洞窟を発掘し、西側洞窟の一部まで及んだ。

前庭部は、中央部に遺物包含層の黒褐色土が見られた。東側洞窟は、珊瑚礁が乗りかかってできた小洞窟である。土層は5層からなり、すべての層から遺物が出土した。西側洞窟は、東側洞窟よりやや大きい。発掘調査の成果については、「奄美大島の先史時代」に掲載されている（国分ほか1959）。

### 第2節 再整理の方法

河口が関わった調査時の野帳・図面等の整理を行った。また、既報告分の遺物等について文献との照合作業を行った。

### 第3節 遺跡の位置と環境

面縄貝塚は、大島郡伊仙町面縄に所在する。伊仙町は徳之島の南部に位置する。徳之島は島周約84km、面積約248km<sup>2</sup>である。地形上は山地や河川が多い。井之川岳が標高644mであり最も高い。標高200m付近を境として、山地と隆起珊瑚礁に大別される。この山地を取巻くように、海岸に向かってゆるやかに傾斜した段丘が広がり島の東南から南部西南にかけて、隆起珊瑚礁が発達し、広大な海岸段丘を形成している。島の南部に位置する伊仙町は、段丘が発達している。町の東側は、山地から海側にかけてなだらかな段丘が続き、海岸部は砂丘が発達している。西側は標高200m前後の台地が広がり、海沿いに断崖が形成されている。

面縄貝塚は、面縄貝塚が兼久浦の小湾に注ぐ、袋状地形の隆起珊瑚礁の崖下に形成された貝塚である。面縄第二貝塚は、面縄川によって開析された隆起珊瑚礁上に堆積する標高6m程の砂丘上にある。この砂丘は、遺跡の

北側、東側を流れる面縄川によって切り離されている。面縄第四貝塚は、面縄小学校の北約 120 m の伊仙町西兼久に所在し、隆起珊瑚礁崖の洞穴とその前方に続く棚状の前庭部からなっている。

#### 第 4 節 面縄第二貝塚と面縄第四貝塚の土器編年

1957（昭和 32）年の九学会連合による面縄第二貝塚と面縄第四貝塚の調査において面縄第二貝塚の土器は、以下のように分類された。第一類無文土器（擦痕文土器）、第二類沈線文土器、第三類爪形文・突刺文土器、第四類突刺沈線文土器である。また、面縄第四貝塚の土器は以下のように分類された。1 爪形文土器、2 沈線文土器、3 爪形と沈線を施した土器、4 凸帯文と鋸歯状の沈線文を施した尖底又は丸底の土器、5 無文の丸底又は尖底土器（宇宿上層式）である。

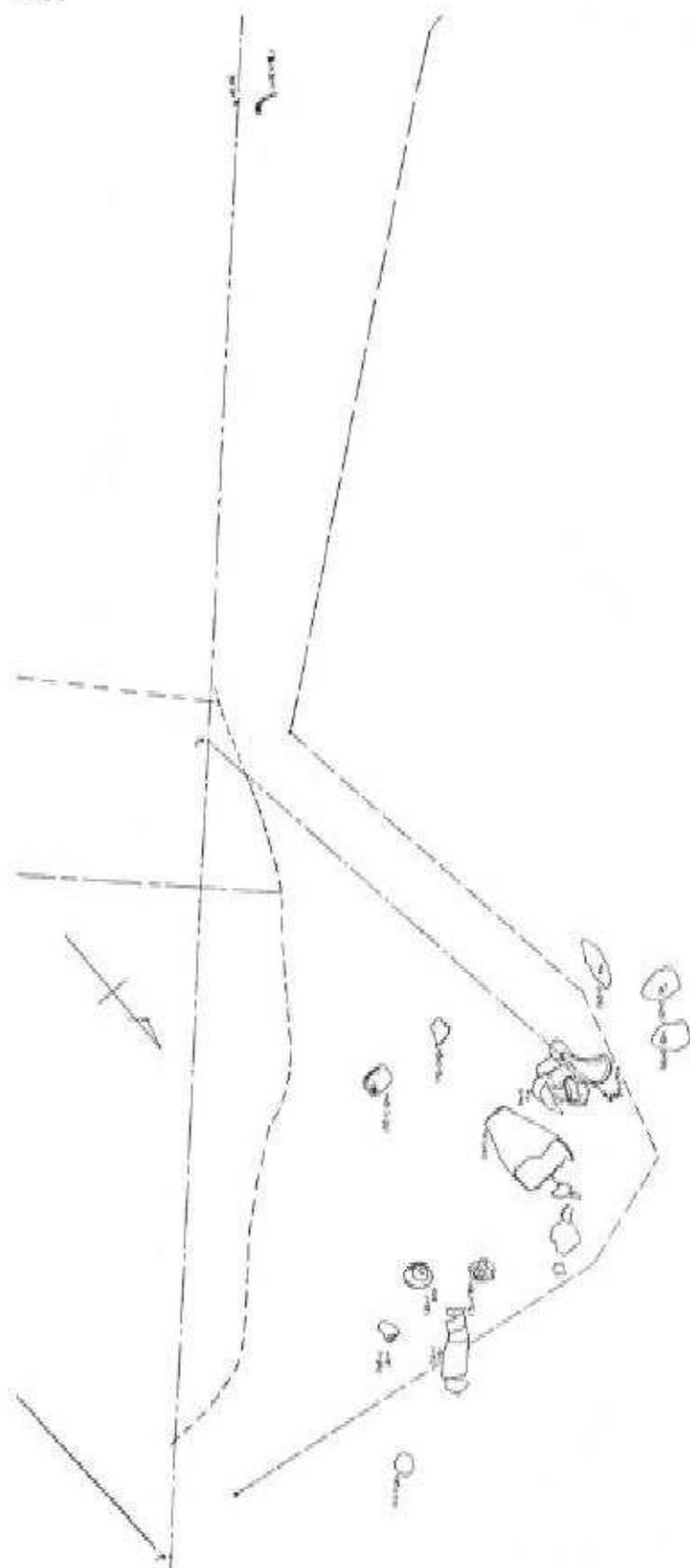
九学会連合は宇宿貝塚の土器の出土状況から宇宿上層式、宇宿下層式を設定したがさらに面縄第二貝塚、第四貝塚の出土状況によって宇宿下層式を爪形文、沈線文、爪形沈線文、凸帯沈線文に細分した。そして、東側洞窟や西側洞窟の層位関係から爪形文→爪形沈線文→沈線文→凸帯沈線文→宇宿上層の編年を示した。（国分ほか 1959）

1974（昭和 49）年、河口は嘉徳遺跡の調査を実施し、嘉徳遺跡の土器の出土状況と宇宿貝塚や面縄第二貝塚と面縄第四貝塚の土器の出土状況を検討し、新たな土器編年を提唱した。それは、面縄東洞式（爪形文）→嘉徳 I 式（爪形沈線文）→嘉徳 II 式（沈線文）→面縄西洞式（平底の凸帯沈線文）→面縄前庭式（丸底の凸帯沈線文）→嘉念 I 式→宇宿上層式 a→宇宿上層式 b というものであった。その後、沖永良部島神野貝塚の発掘調査によって面縄前庭式は面縄東洞式に先行することが確認され、修正が加えられた。（河口 1996）

河口が参加した九学会連合による面縄第二貝塚と面縄第四貝塚の発掘調査は、宇宿下層式の細分編年案を提示する上で貴重な基礎的な資料を提供した。

#### —引用・参考文献—

- 伊仙町教育委員会 1985 『面縄貝塚群』  
 伊仙町教育委員会 2014 『面縄貝塚群Ⅱ』  
 小原一夫 1932 「奄美大島群島徳之島貝塚に就て」  
 『史前学雑誌』第 4 卷 第 10 号  
 河口貞徳 1996 「面縄前庭式土器」『日本土器辞典』  
 雄山閣出版株式会社  
 国分直一 河口貞徳 曾野寿彦 野口義麿 原口正三  
 1959 「奄美大島の先史時代」『奄美 自然と文化 論文編』九学会連合奄美大島調査委員会  
 山崎五十麿 1930 「鹿児島県大島郡徳之島町面縄貝塚に就て」『考古学雑誌』第 20 卷 第 10 号



面縄第四貝塚遺物出土状況

## 第Ⅸ章 住吉貝塚

### 第1節 調査の経過

住吉貝塚は、1955（昭和30）年から1957（昭和32）年にいたる九学会連合奄美大島共同調査の一環として考古班が調査を実施した。1955（昭和30）年の宇宿貝塚、1956（昭和31）年の面縄貝塚を中心とした徳之島の遺跡調査に引き続き、1957（昭和32）年8月12日から8月22日までの11日間実施した。河口が調査担当者である。

当初A区、B区の2か所のトレンチを設定して調査を実施した。その後B区に石組みを検出したため北東方向にトレンチを拡張してC区とし、さらにB・C区を南東方向に拡張してこれをD区とした。

調査の結果、竪穴住居跡が検出された。住居跡の東側3分の1は自然の珊瑚礁面を調整して住居の壁とし、残りの西側3分の2は琉球石灰岩の礫を並べて石組みして仕上げている。

土器は、宇宿上層式と下層式が混ざって出土するが宇宿上層式が大部分を占める。下層式と呼ばれる面縄東洞式、嘉徳Ⅱ式、大田布式、喜念Ⅰ式もわずかに出土している。

石器は、定角式石斧、局部磨製石斧、小型磨製石斧などが出土し、装飾品ではイノシシの牙製垂飾、ヤコウガイ製貝匙、貝輪などが出土している。（国分ほか1959）

その後、2000（平成12）年は知名町指定史跡となった。その範囲、遺跡の残存状況等不明な部分が多くまた、土地改良事業の対象地区となることが予想されたため知名町教育委員会が遺跡の保存・活用を目的に2001（平成13）年から2004（平成16）年にかけて遺跡の範囲確認調査を実施した。（知名町教育委員会 2006）

2007（平成19）年7月29日に国史跡に指定された。

### 第2節 再整理の方法

河口が関わった調査時の野帳・図面等の整理を行った。また、既報告分の遺物等について文献との照合作業を行った。土器17、石器8点、貝製加工品2点、骨角器2点について実測・掲載した。

### 第3節 遺跡の位置と環境

住吉貝塚は、大島郡知名町住吉に所在する。知名町は沖永良部島にあり、和泊町と隣接している。島の南部海岸には珊瑚礁が発達し北部海岸側には海食崖が発達している。島の地質は、古生層を基盤とした、隆起珊瑚礁からなる低平な島である。島の最高地点をなす大山を取り囲むようにカルスト地形が発達し、ドリーネが数多く分布している。全島が石灰岩に覆われているため雨水が地下に浸透して海岸付近などに湧水・暗川（クラゴウ）となって現出している。また、地下には、石灰岩洞穴が数

多く形成されている。

住吉貝塚は北側に谷を控えた海岸崖上の標高12mの緩やかな南西向き斜面地に立地している。遺跡直下の海岸には、泉の湧出があった。貝塚が生成された当時は、この泉を利用していたと考えられる。

### 第4節 追加資料

#### 1 遺物（第1図～第2図）

河口コレクションとして埋文センターが管理している住吉貝塚出土の遺物は、パンケースで23箱である。

##### （1）土器（第1図1～17）

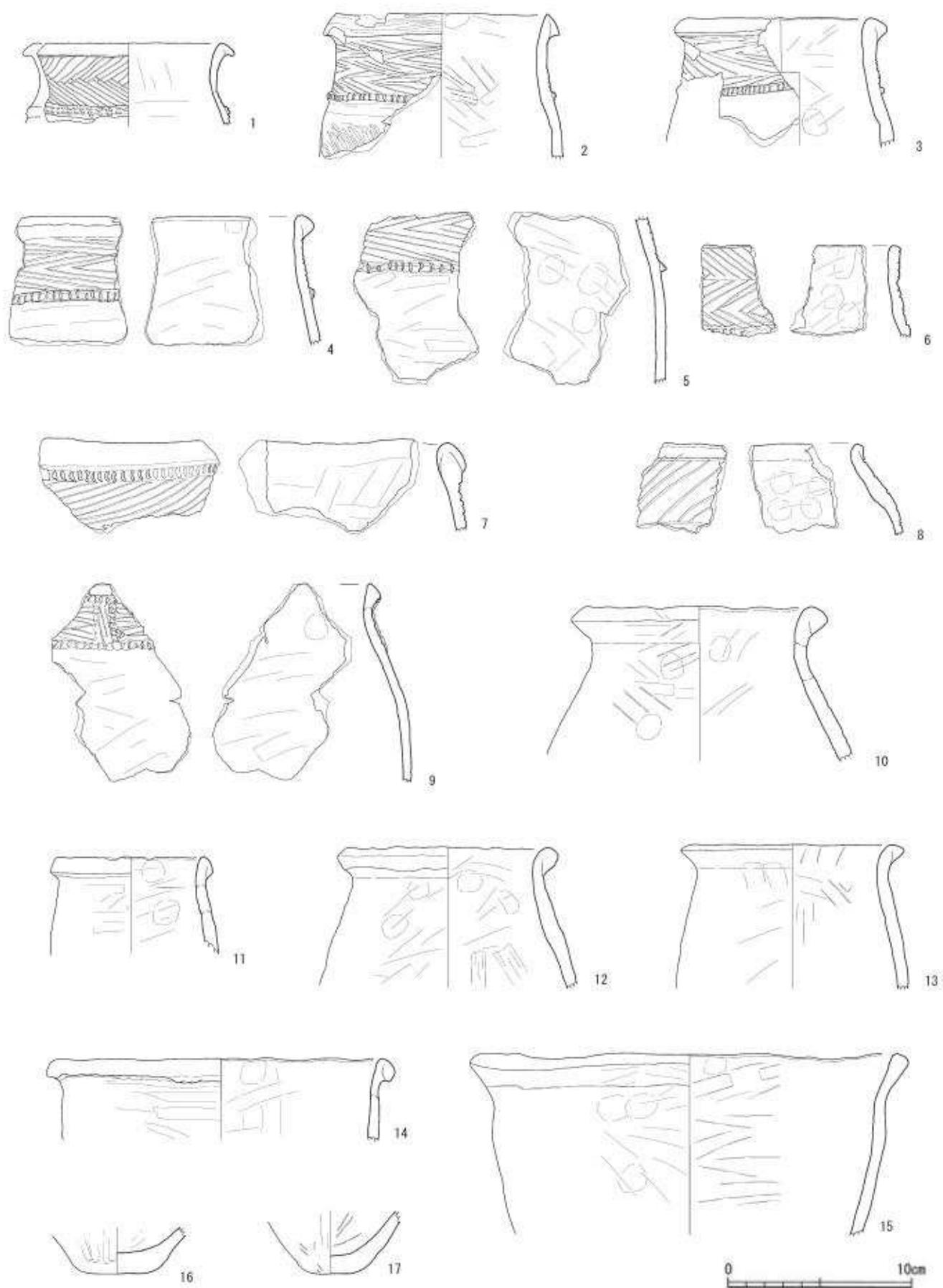
1～4は口縁部を肥厚させ突帯状にし、口縁部下位には鋸歯状もしくは綾杉状の沈線が施される。胴部上部には刻目突帯がめぐり、5は胴部上部である。上部に綾杉状に沈線が施されその下に刻目突帯がめぐり、6は帯状の口縁に沈線が施されている。7は口縁部が肥厚し、直下に弧状の刻目が横位にめぐり、8は口唇部が少し外反し、その下に斜位の沈線が施される。9は口縁部を肥厚させ口縁部下位に鋸歯状の沈線が施される。沈線の下には刻目のある微隆帯が横位にめぐり、縦位にも二条微隆帯が施される。10～13は無文の壺型土器で口縁部が肥厚し、断面が蒲鉾状を呈する。14、15は無文の鉢型土器である。14は口縁部が蒲鉾状に肥厚する。16、17は底部片で、器形は不明である。いずれも平底で胴部は内湾気味に立ち上がる。1～9は河口が「奄美大島の先史時代」で「肩部に細い隆起帯をもち、口縁部と隆起帯との間に沈線綾杉文を施したもの」、10～17は「無文で口縁部が断面蒲鉾状に肥厚し、胴部の張った、あるいは尖底の土器」に相当する。

##### （2）石器（第2図18～25）

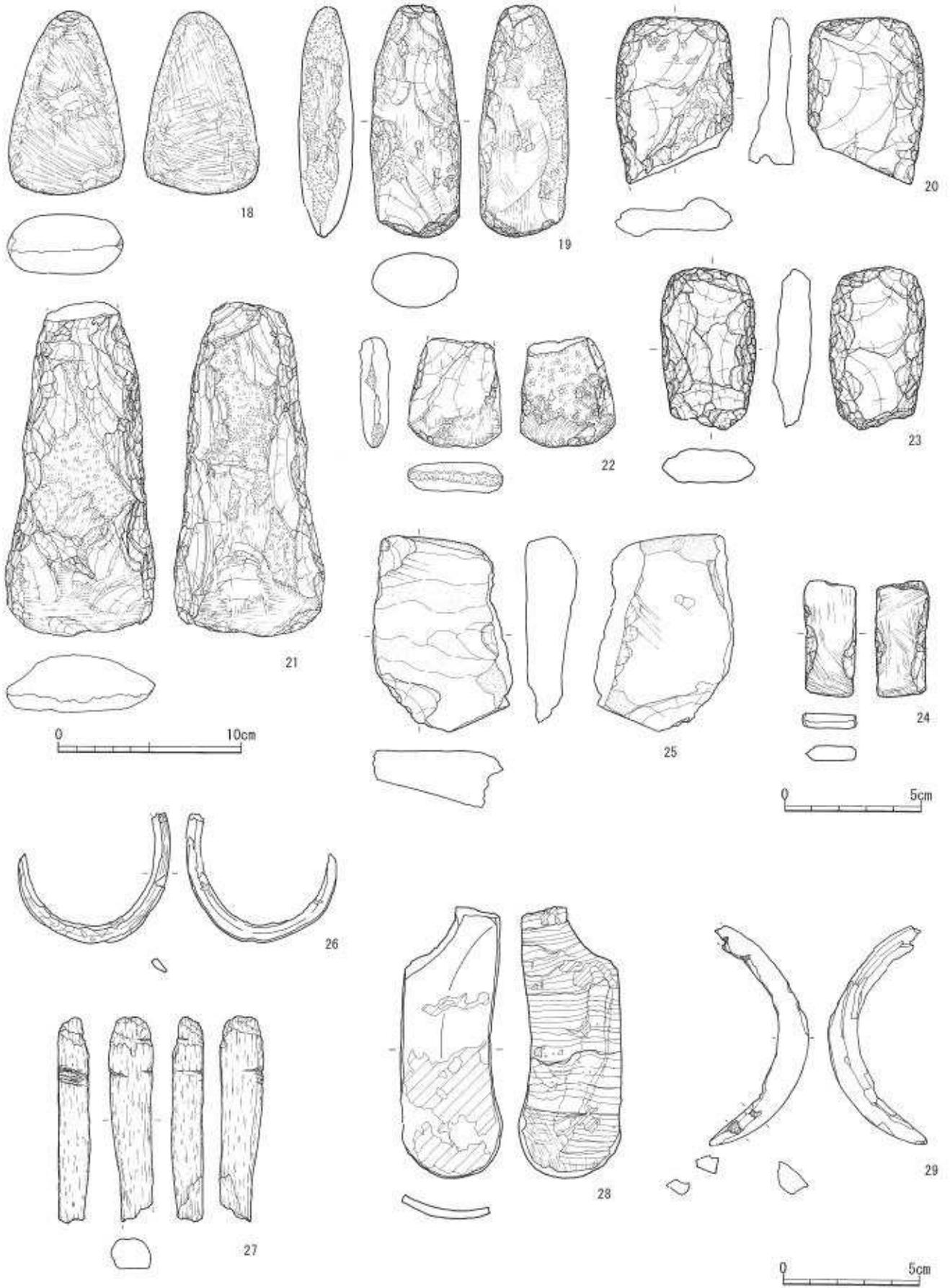
18は砂岩製の磨製石斧である。表裏面ともに丁寧に研磨されている。19は砂岩製の磨製石斧である。敲打後全面に研磨が施されている。20は緑色片岩製の打製石斧である。刃部が欠損している。21は片岩製の磨製石斧である。基部が欠損している。刃部両面に丁寧な研磨が施されている。22は片岩製の磨製石斧である。基部が欠損している。23は片岩製の磨製石斧である。両面に敲打痕が残る。刃部両面に研磨が施されている。24は頁岩製の磨製石斧である。剥離調整後表裏面上に敲打が及び刃部に研磨が施されている。25は石皿の破片もしくは砥石である。表面に磨面が認められる。

##### （3）貝製品・骨製品・牙製品（第2図26～29）

26はオオツタノハ製の貝輪である。27はほ乳類の骨の加工品である。先端部は欠損している。28は夜光貝製の加工品である。上下左右の断面は擦って仕上げられ



第1図 住吉貝塚出土土器



第2図 住吉貝塚出土石器・貝製品・骨製品・牙製品

第1表 住吉貝塚出土土器観察表

挿入 番号	掲載 番号	出土 区等	層位	器種	部位	文様・調整		胎土					色調		備考
						外面	内面	石英	長石	蛭石	雲母	砂礫	外面	内面	
第1図	1	B	-	壺	口縁	ナデ, 研突突文, 沈線の刻文	ナデ	○			○	○	にぶい赤褐	明赤褐	口径 10.1 cm
	2	D	-	壺	口縁	ナデ, 研突突文, 沈線の刻文	ナデ, 指押さえ				○	○	橙	橙	口径 11.5 cm
	3	-	-	壺	口縁へ胴部	ナデ, 研突突文, 沈線の刻文	ナデ, 指押さえ	○			○	○	にぶい橙	にぶい赤褐	口径 10.0 cm
	4	-	-	壺	口縁	ナデ, 研突突文, 沈線の刻文	ナデ, 指押さえ	○	○			○	にぶい黄	褐	-
	5	D	-	壺	胴部	ナデ, 研突突文, 沈線の刻文	ナデ, 指押さえ				○	○	明赤褐	明赤褐	-
	6	-	-	壺	口縁	研突突文, 沈線の刻文	ナデ, 指押さえ	○				○	にぶい黄橙	明赤褐	-
	7	-	-	壺	口縁	ナデ, 刺突文, 沈線文	ナデ	○				○	灰黄褐	灰黄褐	口径 12.0 cm
	8	-	-	壺	口縁	沈線文, ナデ	ナデ, 指押さえ	○	○			○	暗灰黄	明赤褐	-
	9	-	-	壺	口縁へ胴部	ナデ, 研突突文, 沈線の刻文	ナデ, 指押さえ	○	○				暗灰黄	灰黄褐	-
	10	-	-	壺	口縁	ナデ, 指押さえ	ナデ, 指押さえ	○				○	灰黄褐	灰黄褐	口径 12.2 cm
	11	C	4	壺	口縁へ胴部	ナデ	ナデ, 指押さえ	○				○	灰黄褐	灰黄褐	口径 8.0 cm
	12	-	-	壺	口縁	ナデ, 指押さえ	ナデ, 指押さえ	○				○	赤褐	赤褐	口径 11.0 cm
	13	B	2下	壺	口縁へ胴部	ナデ	ナデ	○				○	暗灰黄	灰黄褐	口径 10.8 cm 石灰分付着
	14	D	-	鉢	口縁	ナデ	ナデ, 指押さえ	○	○			○	明赤褐	明赤褐	口径 17.8 cm
	15	-	-	鉢	口縁へ胴部	ナデ, 指押さえ	ナデ, 指押さえ	○				○	にぶい黄褐	灰黄褐	口径 23.0 cm
	16	-	-	-	底部	ナデ	ナデ	○				○	にぶい黄	橙	底径 2.9 cm
	17	-	-	-	底部	ナデ	ナデ	○				○	黄褐	明赤褐	底径 1.6 cm

第2表 住吉貝塚出土土器観察表

挿入 番号	掲載 番号	器種	出土深度等		法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考
			出土区	出土層	長さ	幅	厚さ			
第2図	18	磨製石斧	-	-	10.05	6.30	3.45	327.00	砂岩	
	19	磨製石斧	-	-	12.65	4.90	3.00	290.00	砂岩	
	20	打製石斧	-	-	(9.15)	6.45	2.45	173.30	緑色片岩	
	21	磨製石斧	-	-	(18.40)	8.10	3.10	541.00	片岩	
	22	磨製石斧	-	-	(6.00)	5.20	1.70	82.00	片岩	
	23	磨製石斧	-	-	9.00	5.15	2.00	160.40	片岩	
	24	磨製石斧	C-3	I	4.30	1.95	0.60	8.20	頁岩	
	25	砥石か石皿	-	-	10.90	(7.65)	3.55	370.00	頁岩	

第3表 住吉貝塚出土貝製品・骨製品・牙製品観察表

挿入 番号	掲載 番号	器種	出土深度等		法量 (cm)			重量 (g)	備考
			出土区	出土層	長さ	幅	厚さ		
第2図	26	貝輪	C 4	-	4.70	0.55	0.20	3.80	オオツタノハ
	27	骨製加工品	-	-	(7.55)	1.60	1.15	11.20	哺乳類の骨
	28	貝匙	B 2	F	9.95	3.75	0.40	28.70	夜光貝
	29	垂飾品	C 3	-	8.05	0.85	0.75	8.60	猪牙

ている。上部に2か所刻目がある。裏面及び両側面は平坦に成形されている。29は猪牙製の加工品である。全体が研磨され上部に2か所の刻目、下部に2か所の穿孔がある。

第5節 住吉貝塚の竪穴住居跡について

九学会連合の発掘調査で検出された竪穴住居跡は、琉球石灰岩の礫を壁面に組み上げて構築し、琉球列島中部文化圏独特のものであった。また、南西諸島先史時代の住居跡としては、宇宿貝塚について二例目であった。そのため住吉貝塚の竪穴住居跡は、宇宿貝塚のそれと共に南西諸島の竪穴住居跡研究の端緒となった。

2001（平成13）年からの知名町教育委員会による遺跡範囲確認調査では、さらに14基の住居跡が検出された。住居跡の形態は、①地山を掘り込み、そのまま壁と

するタイプ（1基）、②周囲の一部に礫を配するタイプ（5基）、③石組みを形成するタイプ（7基）に分類された。また、住居跡の切り合い関係や遺構内の遺物出土傾向から、縄文時代後期には地面を掘り込むだけの構造であったものが、縄文時代晩期～弥生時代併行期には掘り込んだ壁面に琉球石灰岩を組み上げる構造へと変遷する過程を確認できた。（知名町教育委員会 2006）

住吉貝塚は、南西諸島の竪穴住居跡の構造の変遷を解明する上で重要な資料を提示する遺跡である。

—引用・参考文献—

国分直一 河口貞徳 曾野寿彦 野口義麿 原口正三  
1959 『奄美大島の先史時代』『奄美 自然と文化 論文編』九学会連合奄美大島調査委員会  
知名町教育委員会 2006 『住吉貝塚』

# 圖 版





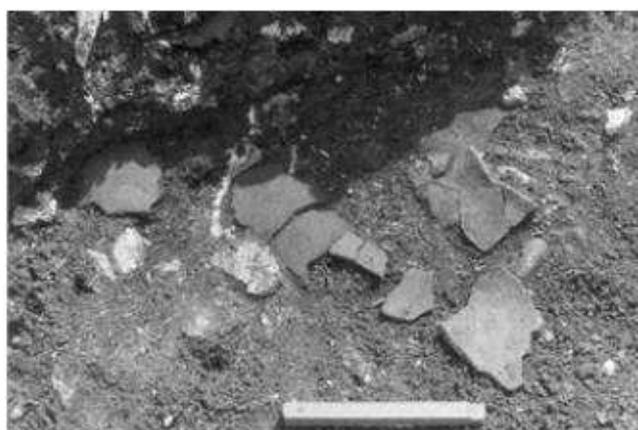
遺跡近景 1 (1961年)  
 ・左手の標柱がトカラ馬の記念碑と思われる。



遺跡近景 2 (2018年)  
 ・正面の看板が浜坂貝塚の案内板



第2類b土器  
 ・浜坂調査概要には実測図が掲載されているが、理文センターが管理している河口コレクションの中には確認できなかった。



遺物出土状況 (1961年)



貝層 (1961年)  
 ・浜坂調査概要に示されている地層断面図に相当する箇所と考えられる。

浜坂貝塚調査記録



浜坂貝塚出土遺物（1）



浜坂貝塚出土遺物（2）



浜坂貝塚出土遺物（3）



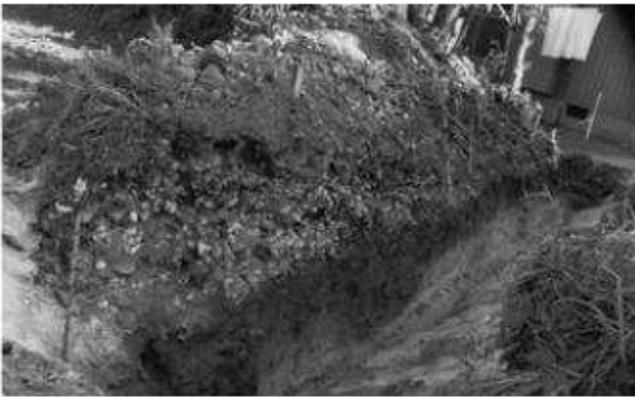
浜坂貝塚出土遺物（4）



A貝塚近景 (1969年)



A貝塚近景 (2018年)



A貝塚貝層 (推定) (1969年)



B貝塚近景 (1969年)



B貝塚貝層 (推定) (1969年)



B貝塚南側トレンチ (1969年)



C貝塚近景 (推定) (1969年)



C貝塚貝層 (推定) (1969年)

朝仁貝塚調査記録



朝仁貝塚出土遺物（1）



朝仁貝塚出土遺物（2）



発掘調査前



遺跡遠景 1



遺跡遠景 2



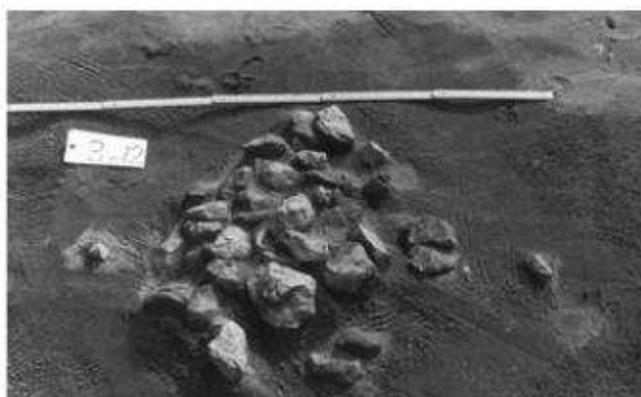
発掘調査風景 1



発掘調査風景 2



遺構検出状況 1



遺構検出状況 2

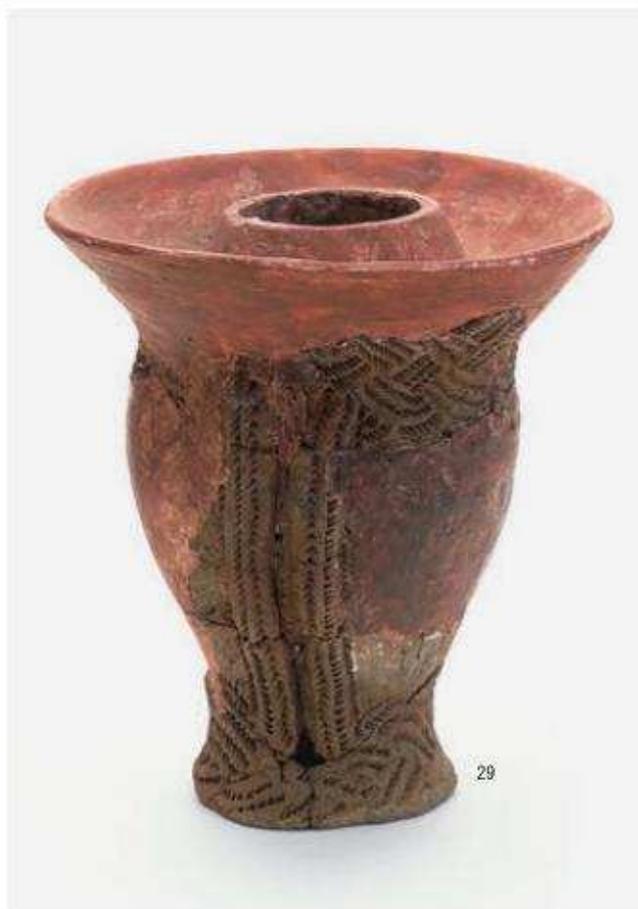


遺構検出状況 3

嘉徳遺跡調査記録 (1974年)



嘉德遺跡出土遺物（1）



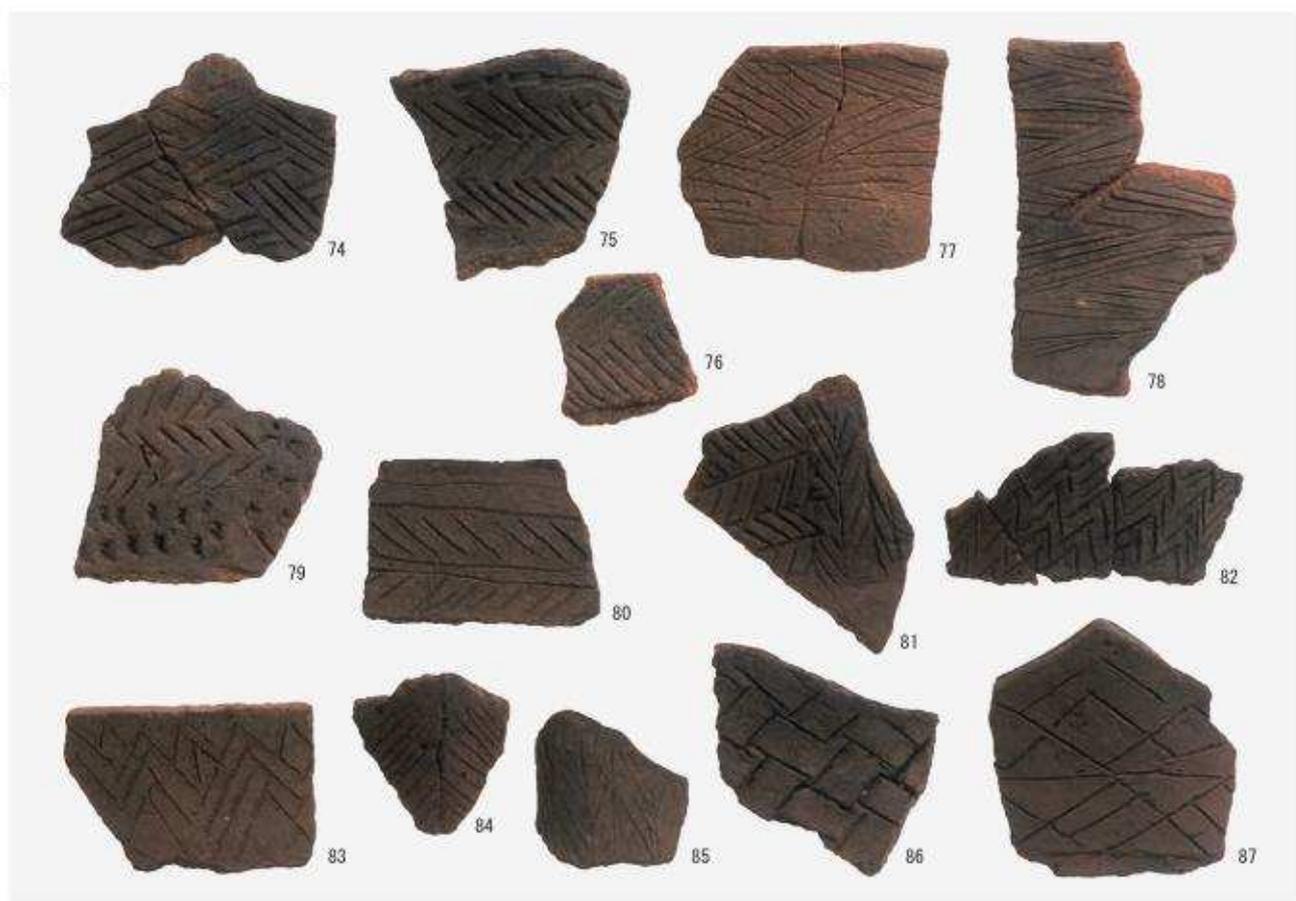
嘉德遺跡出土遺物 (2)



嘉德遺跡出土遺物（3）



嘉德遺跡出土遺物（4）



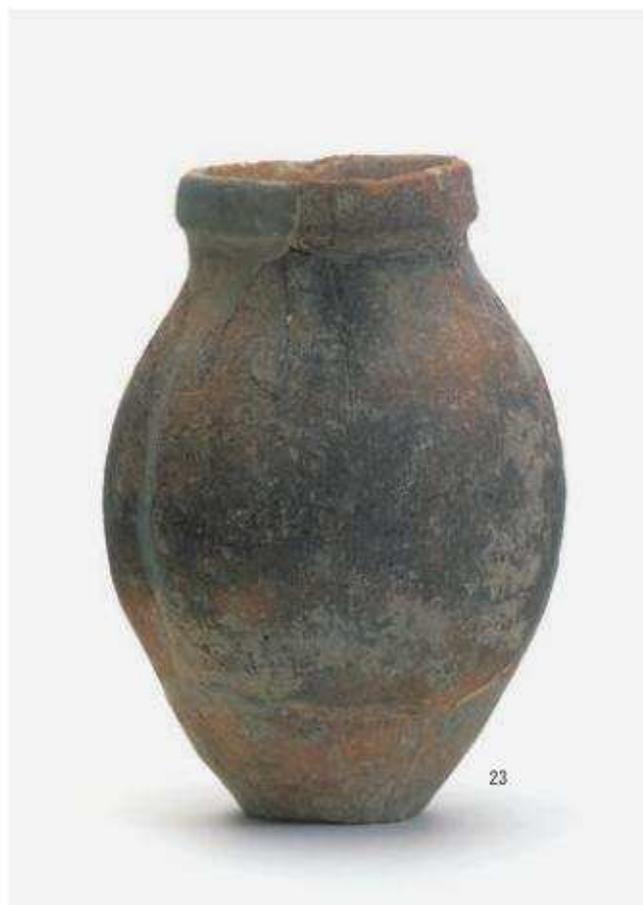
嘉德遺跡出土遺物（5）



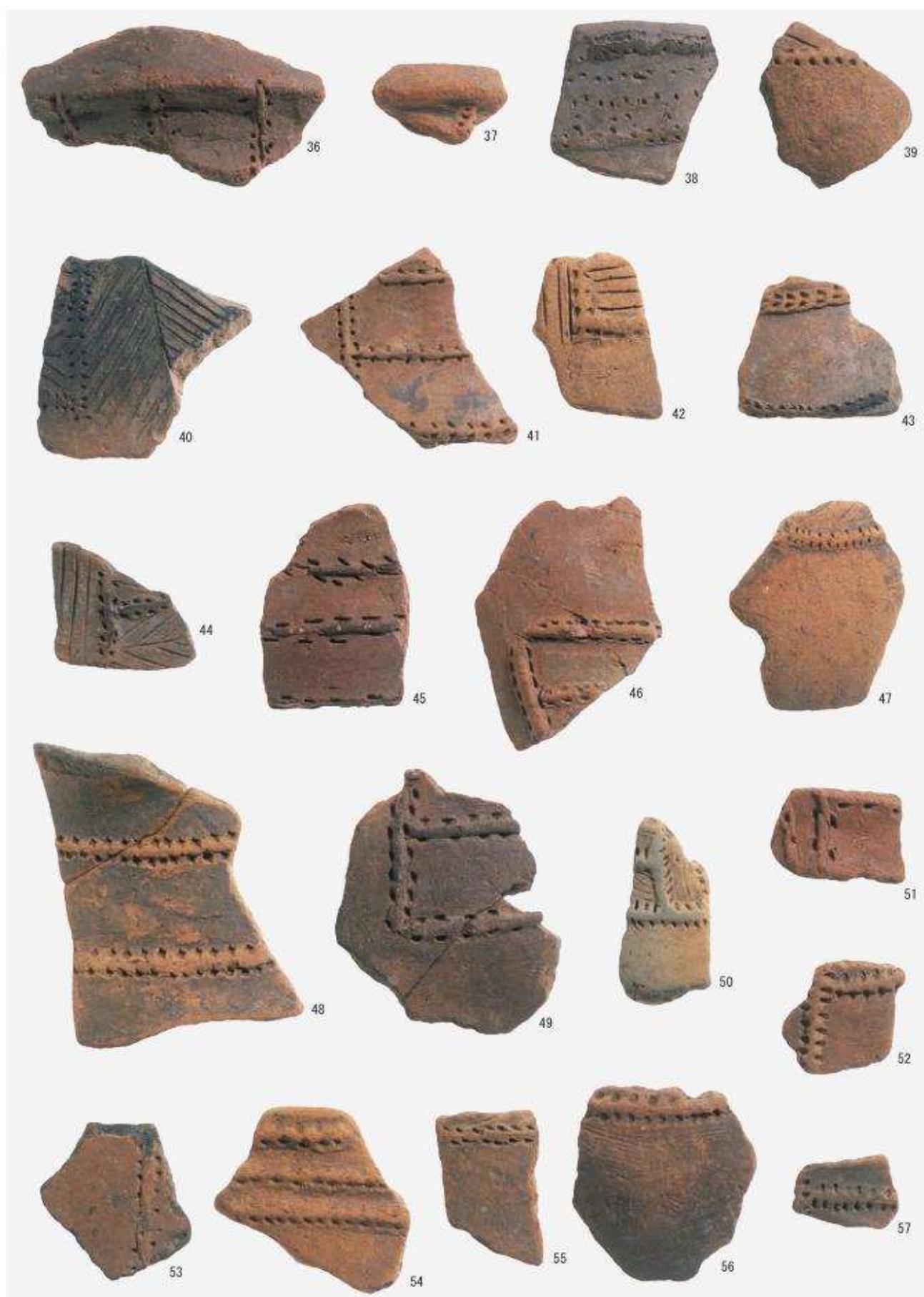
嘉德遺跡出土遺物（6）



喜念貝塚出土遺物（1）



喜念貝塚出土遺物（2）



喜念貝塚出土遺物（3）



調査風景 1



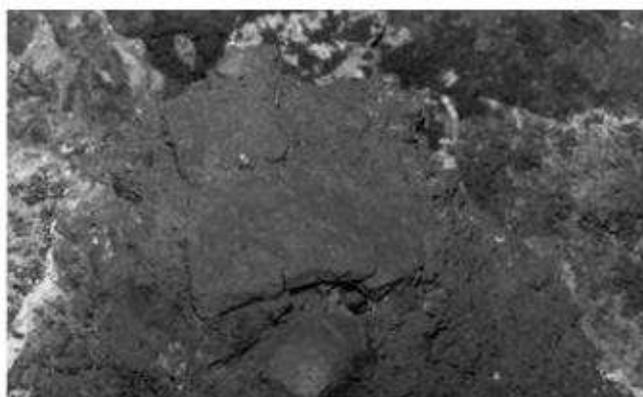
調査風景 2



調査風景 3



調査風景 4



遺物出土状況 1



遺物出土状況 2



遺物出土状況 3



遺物出土状況 4

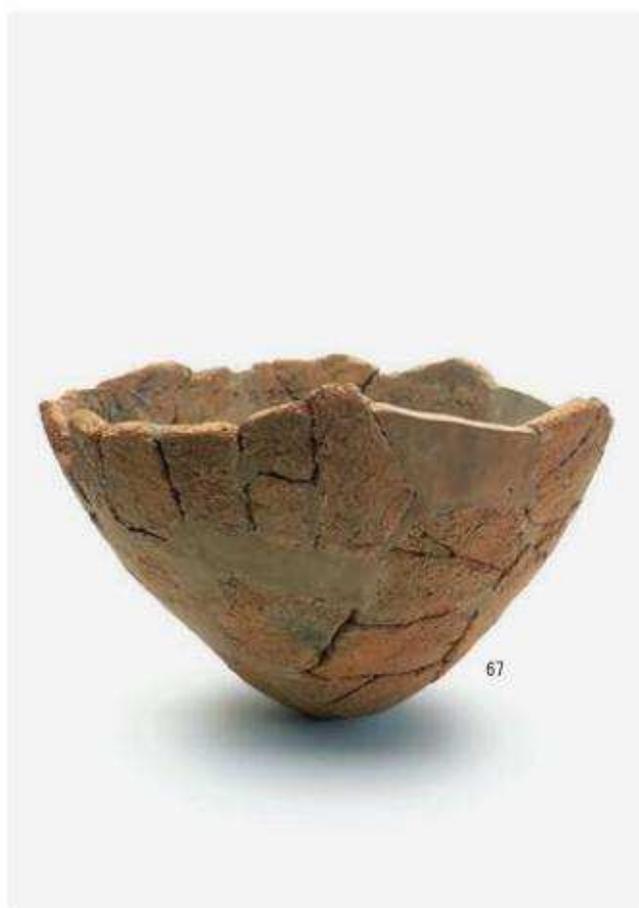
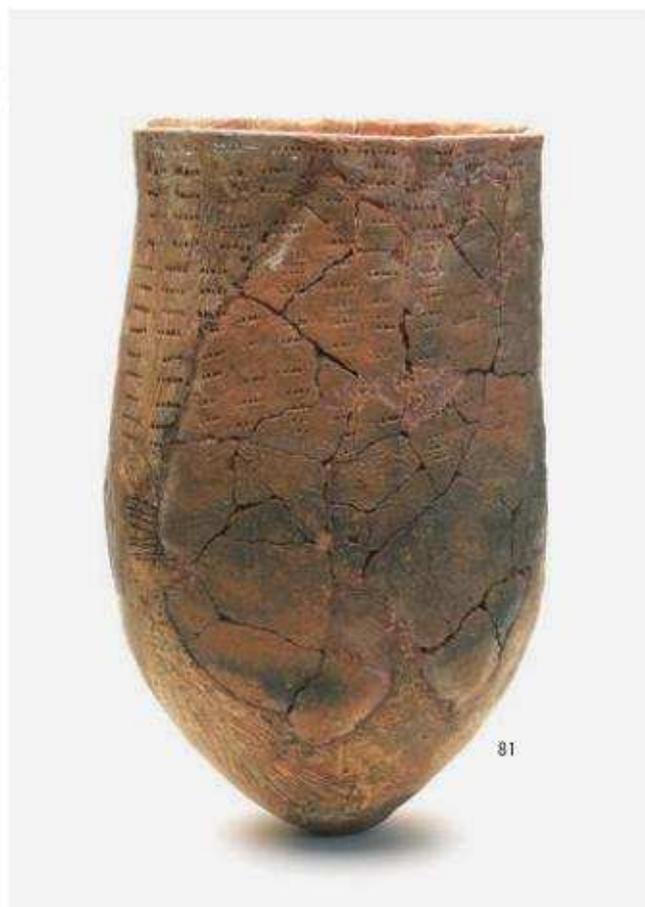
中甫洞穴調査記録



中甫洞穴出土遺物（1）



中甫洞穴出土遺物（2）



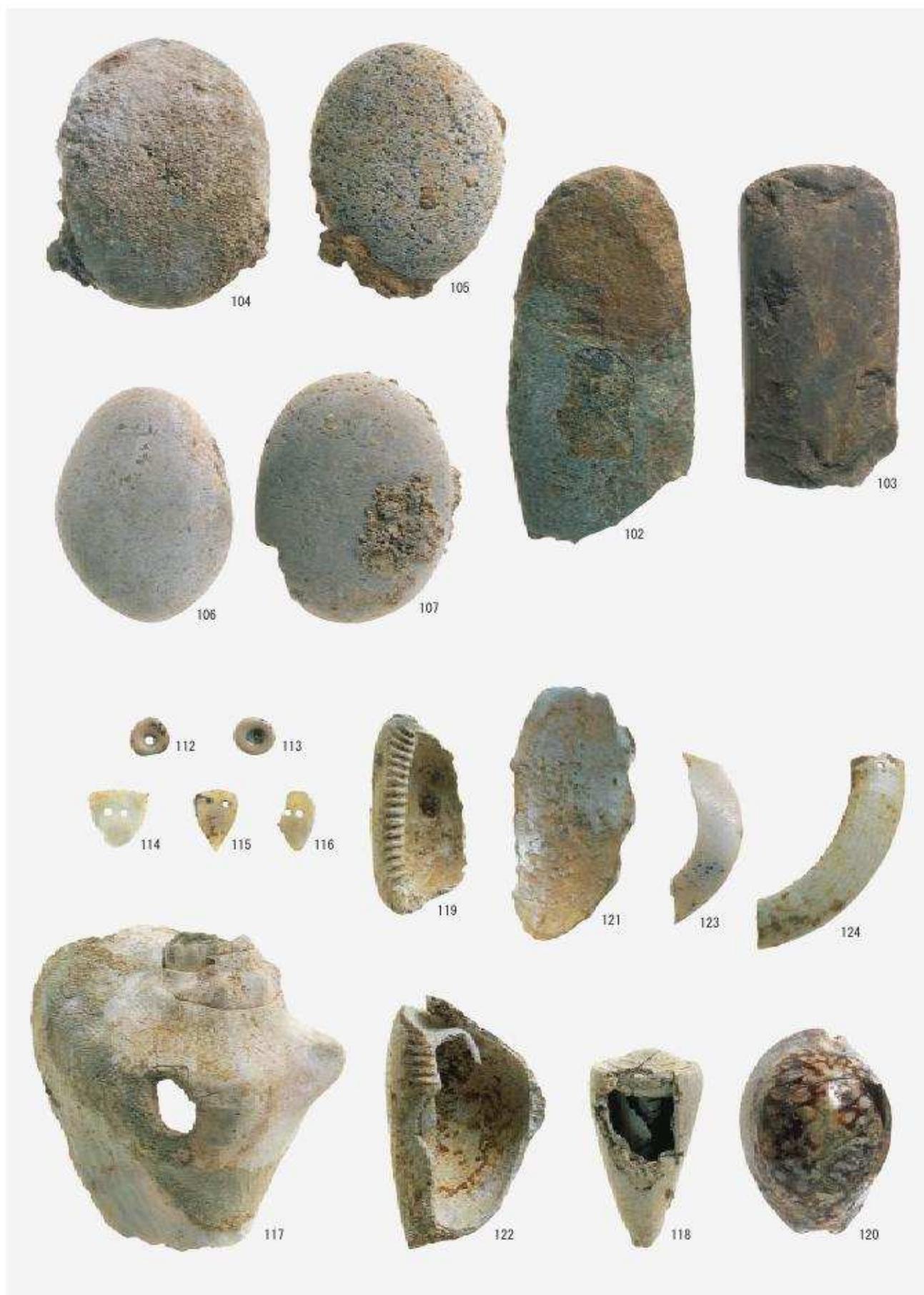
中甫洞穴出土遺物（3）



中甫洞穴出土遺物（4）



中甫洞穴出土遺物（5）



中甫洞穴出土遺物（6）



九学会考古班鹿児島港出港



調査風景 1



調査風景 2



調査風景 3



調査風景 4



遺構検出状況 1



遺構検出状況 2

宇宿貝塚調査記録 (1955年)



住吉貝塚出土遺物（1）



住吉貝塚出土遺物（2）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (200)

## 吐噶喇・奄美の遺跡

－ 県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書 (2) －

発行年月 2019年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-4318  
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号  
TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821

印刷 株式会社 国分新生社印刷  
〒899-4301  
鹿児島県霧島市国分重久620-1  
TEL 0995-45-4880 FAX 0995-45-6979

